地産を含めた産地不明陶器が認められる。土器は３割を超える。第６面で最も新しい様相のSKb229・SKb178と比較すると、相対的に肥前系磁器の増加と、土器の減少という傾向が見て取れる。供膳具は肥前系陶磁器が圧倒的であり、京・信楽系陶器がこれに次ぐが量的にはかなり少ない。調理具では、備前陶器が圧倒的だが、ごく少量堺産擂鉢が認められる。煮炊具では、煮炊きを主目的とした器種が、土器・陶器ともに乏しい。煎ることを主目的とする焙烙は、在地産の御厩系が圧倒的である。なお極めて少量であるが、外型成形の関西系焙烙・羽釜が存在することが注目される。灯明具では、在地産土器に次いで備前陶器が一定量みられる。

肥前系磁器の小杯類には、丸碗形の紅皿(647～649)、丸碗形の紅猪口（650～658)、端反り形の小杯（661～664）がある。紅皿・紅猪口ともに、深手の器体と細く高い高台をもつものが主体であるが、浅手の器体をもつ658のようなものも僅かに存在する。紅猪口の文様には、雨降り文やコンニャク印判が目立つ。 肥前系磁器碗は、丸碗形が主体である。器壁が薄手の一群には、高台が高いU字状を呈する672･674･677～679と、低いU字状高台をもつ668・670・671・673がある。半球形の碗は認められない。唐草・注連縄・牡丹・菊唐草など細かい筆致の文様があるが、草花文などの粗雑な施文も認められる。一方665･680～687は、器壁の厚手な「くらわんか手」であり、定型化した粗雑な草花・梅樹主体の施文である。688は「ハ」の字形高台を伴うもので、混入品である。また676は、内面に金彩の色絵を伴う「うがい茶碗」である。689・690は、高いU字状高台を伴う白磁碗である。692は、青磁釉を施す朝顔形の碗の蓋であり、混入の可能性が高い。

肥前系陶器碗には、呉器手碗（693～696）・刷毛目碗（697～702）・京焼系の平碗（703～714）がある。陶胎染付碗は、当該整地層出土資料には認められない。刷毛目碗は、直線的な刷毛目を施すもの(697～701)主体で、波状の刷毛目施文（702）は少ない。京焼系の平碗は、見込みに崩れた錆絵の楼閣山水が描かれる703～710が主体で、草文状の簡素な施文でハリ支え状の目跡が認められる714が極少量存在する。前者は、高台内側に刻印が捺されており、「清水」・「柴」などがある。

京・信楽系陶器碗は、口縁が直立して若干端反り気味の丸碗（715～720）と、小杉碗（721・722)、切り高台の碗（723)、連弁状の型打ち成形の碗（724）がある。719は、腰部の器壁が薄い特徴があり、やや灰色を帯びた硬質な素地をもつ。理平焼か。720～722は混入とみられる。724はＣ地区にも類例が見出せ、理平焼の可能性がある。

725は楽焼系の軟質施釉陶器である。726は漳州窯系磁器皿である。いずれも第６面からの混入であろう。

肥前系磁器皿（727～744）は、断面U字状の高台をもち腰部が強く湾曲するもの（727～736・738）や、弱く内弯して外傾し粗雑な高い高台をもつもの（740～744）が多い。前者には輪花形の型打ち成形（734）も少量みられ、施文手法に墨弾き・コンニャク判が多用される。外面の文様は唐草文が多い。また中・大型品には、高台内側にハリ支え痕がみられる。後者は見込みに粗雑な松葉が描かれ、蛇ノ目釉剥ぎされ、高台無釉である。737は第２面に多くみられる粗製品で、混入と思われる。739は屈曲する腰部と外反して端部をツマミ上げる口縁部をもつ薄手の小型品で、赤・金彩の色絵製品である。

肥前系陶器皿（745～748）は、極めて少量である。745は、見込みに楼閣山水が描かれる京焼風製品で、高く立ち上がる高台が特徴的である。746は内面施釉の青緑釉製品である。747・748は、第６面からの混入であろう。

肥前系磁器蓋付鉢（749～753）には、丸碗形の749や筒形の751がある。腰張形の752は第２面段階であり、混入である。753は、色絵（赤彩）の蓋である。

備前系陶器灯明皿には、受部を伴う761～767、受部のない768･769がある。受部をもつ一群では、①受部が口縁部よりも上方に長く突出する761、②受部の基部が分厚く端部が僅かに口縁部よりも突出する762～764、③受部が口縁部よりも下方で収まる765～767の３者がある。いずれも器面に塗り土が施される。③は第２面SXb06やSKb63出土例に近い形態だが、口径に占める受部径が第２面出土例よりも大きいという差異があり、時期差を示すと考えられる。受部を伴わない一群は、第２面よりも口縁部の外傾度が弱く、やや直立気味である。

土師質土器皿は、形態・胎土から２つの系統に大別可能である。一つは、短く内弯する口縁部をもち、底部外縁まで糸切りが及ばないものである（770～774)。胎土は褐色ないし橙色に発色する。底部中央まで遺存する個体が少ないが、771は見込みが窪む特徴があり、第２面SXb06の547～548へ連なる系譜と考えられる。770は、底部中央が焼成後穿孔される。

もう一つは、内弯気味だが770～774よりも外傾する短い口縁部をもつ。口縁部外面はよく回転ナデされ、２～３段の稜がみられる。また見込みに回転ナデ後に不定方向にナデ調整するため、内面の底体部境が狭く窪む特徴がある。底部外面には、これに対応する板目状圧痕が認められる。胎土はやや白味がかった淡褐色を呈する（776～798)。後者が８Ａ区Ⅱ層で主体を占

め、やや漸移的ながら口径10.0～11.5cm、12.0～13.0cm前後の2法量みられる。

この他、799～801のような大法量の製品もある。胎土や見込みのナデ調整は776～798と同様であるが、口縁部長が相対的に長く深手の器体をもち、口縁端部に外傾する平坦面をもつことが異なる。799・801は、墨書土器である。801は、見込みに梵字2文字が、外面4方向に「来無東西」「□有」「迷故」「悟故十方」と書かれる。799も同様な墨書が書かれていたと考えられる。出土状況が不明だが、799・801はⅡ層の整地に伴い埋納された地鎮具と考えられる。

802は、土師質土器の脚台付灯明皿である。同時期の類例として、丸亀市郡家田代遺跡に出土例がある。

肥前系陶器鉢（803～805）は、白泥による刷毛目を施す。肥前系磁器瓶（806）は、体部がよく膨らんだ丸味のある体部をもつ。肥前系陶器瓶（807・808）は、外面に鉢同様に刷毛目を施す。

土師質土器焼塩壺（814～818）は、渡辺氏のH類（815）・B類（816・817）・I類（818）がある。817は、外面に「泉州麻生」刻印が捺される。815～817は板作成形、818はロクロ成形である。

備前系陶器擂鉢は、大半が備前産（819～827）で、堺産（828）は極めて少ない。備前産擂鉢は、乗岡編年の近世4a・b期主体である。有機物状の黒色・褐色粒を含み、よくこなれていないマーブル状の胎土をもつものが多く、特徴的な田土と考えられる。器壁全体には塗り土が施される。口縁部形態は、口縁端部に明瞭な内傾面をもつ822～825と、内傾面がやや不明瞭な819～821・826・827があり、両者ともに縁帯の下端は体部からやや緩いカーブを描いて張り出す。また底部形態には、平底の821・822と高台付の823～825がある。

堺産擂鉢の828は、縁帯の張り出しが備前産よりも弱く、口縁部内面上端に突帯を伴う。また卸し目上端は回転ナデで消去される。

土師質土器火消し壺蓋（829）は、内面全体と口縁部外面に回転ナデが施され、天井部（製作時には底部）外面に離れ砂の痕跡が認められる。瓦質土器風炉（830）は、内面に回転を利用したカキ目がみられ、外面に型押しの波状文が認められることから、外型成形＋回転台調整と考えられる。瓦質土器火鉢（831）は、平面長方形を呈し底部以外の外面はヘラ磨き調整される。四隅に脚台を伴い、口縁部外面に「山キ」刻印が捺される。829～831（特に829・830）は、上位層からの混入の可能性もあろう。

土師質土器羽釜（832）は、体部外面と鍔部下面に離れ砂痕があり、鍔端面・口縁部外面と内面全体に回転ナデが認められることから、外型成形＋回転台調整と考えられる。胎土は比較的精良で金雲母を含み、関西系焙烙同様の色調を呈する。このことから、非在地の関西系土器とみられる。土師質土器焙烙には、関西系難波D類（833）・在地産御厩系（834・835）がある。関西系焙烙は、SXb06出土の614・615よりも口縁部が長く立ち上がる。御厩系焙烙には、先行する亀山系鍋以来の器面を掻き取るような粗いハケ目が施されるAⅠ－1類の835と、木目の浮き出ない板ナデ調整のAⅠ－2類の834が共伴している。内耳は穿孔部付近のみ幅広であり、やや退化傾向が認められるものの、円孔は大きく明瞭に貫通する。また、SXb06でみられた口縁部直下（頸部）が直立気味に内弯する傾向はなく、頸部から体部への器壁は連続的に立ち上がる。

土師質土器甕（839～842）は、やや直立気味に外反して端部が丸く肥厚する口縁部をもつ。底部には三脚が貼付されており、接合部には粗いカキ目が施される。

8C区Ⅱ層（図版142・143）　8A区Ⅱ層から連続的に把握し、取り上げた遺物である。844・846は、肥前系陶器の呉器手碗である。847～850は肥前系磁器碗で、849・850は草花を丁寧に描いた色絵碗である。851は、端反り形の京・信楽系陶器碗である。外面には、主に赤彩で描かれ金彩で縁取られた三葵紋が認められる。理兵衛焼と考えられる。852も京・信楽系陶器で、外面には上絵付けで葵文が描かれる。家紋としての葵文とは異なるため、高松松平家と結び付けて理解できるか検討の要はあるが、理平焼の可能性も考慮しておきたい。856は、蛇ノ目高台の青磁皿であり、見込みには花文が型打ちされる。Ⅱ期の肥前系磁器か。

土師質土器皿（858～861）は、8A区Ⅱ層出土の779～798と同一系統である。瓦質土器火鉢（863）は、上位層からの混入か。軟質陶器羽釜（864）は、在地産の土師質（瓦質）土器を素地として、口縁部外面から鍔部上面にかけて赤色系の釉薬を掛けるものである。鍔部形態や内面の粗いハケ目などの特徴は、この層位の共伴資料としても違和感ない。しかし、赤色系の軟質陶器は第2面で少量認められ、第1面で普遍化するようであり、混入の可能性も否定できない。866は堺産擂鉢である。

8B区Ⅱ層（図版142・143）　8B区では、第1～4面に及ぶ攪乱が多かったこともあり、良好な状態では遺物の取り上げに至らなかった。このため、まとまった内容としての資料提示は困難であり、混入品も含めていくつか図示する。

843は、京・信楽系陶器瓶である。体部下半が膨らみ、

碁笥底状を呈している。高台内側には破風「高」刻印が捺されており、理兵衛焼と考えられる。867は、軟質陶器土瓶である。体部中位のやや下がった部位に最大径をもち、上半部外面には型押しの格子文がみられる。第2面SXb06出土の601に近似するが、釉薬は緑色で一部銀化している。上位層からの混入と考えられる。

4. 第3面出土土器・陶磁器

SBb20（図版144） 礎石掘り方の出土遺物である。肥前系磁器小杯（873）・碗（874）は大橋Ⅳ期前半の所産で、建物の構築時期を示すと考えられる。一方、中国産磁器碗（875～877）は景徳鎮窯系であり、遺存状況が細片であることから、第6面からの混入品であろう。

SBb17（図版144） 礎石掘り方の出土遺物である。肥前系磁器碗（878）・同陶器鉢（879）は、大橋Ⅳ期前半の所産であり、やはり建物の時期を示す資料であろう。

SDb28（図版144・145） 第3章で記述したが、SDb28は検出された中央部（8D区）で屈曲しており、屈曲部以北は第3・4面、以南は第3面での存続が推測された。しかし発掘時には層位的把握が一定していなかったため、8D区での取り上げ区分が屈曲部を境に設定していないという問題があった。このため、①SDb28屈曲部以北の7区（第3・4面）、②屈曲部以北・以南の混在する8D区（第3・4面、第3面）、③屈曲部以南（第3面）の8B区の3ブロックに分け、以下この区分で図示・記述を行う。

7区部分（880～896） 891～896は、掘り方内の石積み裏込め土の出土遺物であり、資料毎の区分は困難だが、構築当初（第4面）と修築時（第3面）の遺物が混在する可能性がある。京・信楽系陶器碗(891)は、青色系の上絵付けによる円形輪郭が認められ、三葵文の可能性がある。理兵衛焼か。892は景徳鎮窯系磁器碗である。893は備前系陶器灯明皿で、塗り土が施される。896は乗岡編年近世4a期の備前擂鉢で、8A区Ⅱ層出土に似る。

880～890は、石積み内埋土出土遺物である。肥前系磁器紅猪口（880）・碗（881～884）・鉢蓋（885）は、いずれも大橋Ⅳ期前半の所産であり、出土点数が少ない点を考慮する必要はあるが8A区Ⅱ層出土資料との間に顕著な様相差は見出せない。886は京・信楽系陶器の上絵碗である。887は肥前系陶器鉢で、見込みに砂・胎土目がみられる。やはり大橋Ⅳ期前半であろう。888は瓦質土器土瓶の注口部である。18世紀段階での類例に乏しいが、19世紀代の外型成形品とは明らかに異なる。889・890は御厩系AⅠ－2型式焙烙である。889は、やや口縁部が分厚く短いという、やや特異な形態的特徴をもつ。

8D区部分（897～903） 897・898は、掘り方内の石積み裏込め土の出土遺物である。897は瀬戸・美濃系陶器植木鉢、898は京・信楽系陶器の小杉碗であり、いずれもSDb28ならびに第3・4面の想定時期よりもやや下る時期の所産のようにみえる。8D区部分では屈曲部・南半部付近に近代以降の攪乱が認められたため、混入品の可能性があろう。

899～903は、石積み内埋土出土遺物である。肥前系磁器碗（899）は大橋Ⅳ期前半、同皿（901）は大橋Ⅱ－2期ないしⅢ期の所産であろう。京・信楽系陶器の小杉碗（900）はやや下る時期か。

8B区部分（904～907） 904は肥前系磁器碗で、外面にコンニャク判がある大橋Ⅳ期のものである。他は第6面からの混入と考えられる資料で、905は景徳鎮窯系磁器碗、906は楽焼系の軟質陶器碗、907は鼠志野向付である。

SDb36（図版145・146） 908は乗岡近世1b期の備前擂鉢であり、第6面からの混入と考えられる。939は、石積み裏込め土出土の土師質土器甕である。口縁部は逆三角形に肥厚するが、第2面SKb63出土の440やSXb06出土の633と比較すると、口縁内端部の拡張傾向がさほど顕著ではないので、この点に先行的要素が指摘し得る。

SDb29（図版145） 肥前系磁器碗（909・910）は、大橋Ⅱ－2期からⅢ期にかけての所産であり、直接に遺構の時期を示すものではない。志野向付（911）は細片であり、混入であろう。

SDb38（図版145） 石組み裏込め出土だが、遺構掘削時に構築面である整地土Ⅲ・Ⅳ層の区分が不十分だったため、遺構に伴わない可能性もある。肥前系磁器碗（912）は大橋Ⅲ期、同陶器碗（913）は大橋Ⅱ期であり、いずれも第3面よりも遡る時期の所産である。備前陶器擂鉢（914）は、乗岡近世4a期。土師質土器甕（915）は、断面逆台形に肥厚する口縁部をもち、体部に右下がり後横位の平行叩きが施される。形態・技法ともに非在地系の要素が強く、近似例として関西（和泉）地方の土師質土器がある。時期は、第6面に相当するとみられる。

SKb87（図版145）　石積み内埋土の出土資料で多量の瓦と共伴したが、土器・陶磁器の量は非常に少ない。肥前系磁器紅猪口（916・917）・小杯（918）・碗（919・920）は、いずれも大橋Ⅳ期前半の所産であり、８Ａ区Ⅱ層出土遺物と同様である。

SKb65（図版145）　土坑形態の瓦溜まりで、多量の瓦と共伴した。肥前系磁器紅猪口(921)・小杯(922)・碗（923～925）・皿（936）・鉢蓋（934）、肥前系陶器碗（926～928）・鉢（937）は、大橋Ⅳ期前半に位置付けられよう。陶胎染付（926）の存在は、同時期の農村部資料（郡家田代遺跡など）では珍しくないが、当該調査区ではかなり稀な存在である。

土師質土器皿（929～932）のうち、929は比較的精良な胎土で底部外面を回転ヘラ削りするもので、少数ながら第２面SXb06出土の554に連なる系譜と考えられる。

京・信楽系陶器鉢（935）は、内面に４方向程度の仕切りを伴う。備前陶器擂鉢(938)は乗岡近世２ｂ期であり、内傾面が明瞭で長いことや、口縁端部が丸いが尖り込みに収まる特徴は、８Ａ区Ⅱ層出土例よりも古い要素である。

5. 第４面出土土器・陶磁器

SBb25（図版146）　掘り方（抜き取り穴か）からの出土遺物である。940は備前陶器擂鉢で、乗岡近世３期～４ａ期の所産である。８Ａ区Ⅱ層出土例に近似する。

SBb26（図版146）　掘り方（抜き取り穴か）からの出土遺物である。肥前系磁器碗（941）・備前系陶器灯明皿（942）・肥前系磁器鉢（943）などの他、中国産磁器碗（944）がある。941・942は、８Ａ区Ⅱ層出土例に近似する。

SBb24（図版146）　掘り方（抜き取り穴か）からの出土遺物である。945は上絵付けを施した京・信楽系陶器碗である。

SDb49（図版146）　土師質土器焙烙（946）は、短く外反・垂下する口縁部形態をもつ。笠岡市鍛冶屋遺跡など岡山県南部でしばしば認められる特徴であり、ＡⅠ－２型式のバリエーションと捉えられる。

SDb30（図版146）　肥前系磁器紅猪口（947）・碗（948）・皿（950）は、大橋Ⅳ期前半の所産である。肥前系陶器碗（949）は大橋Ⅰ－２期～Ⅱ期であり、遺構の時期を示すものではない。

SDb51（図版146）　景徳鎮窯系磁器碗（953）、肥前系陶器呉器手碗（954）、肥前系磁器皿（955）がある。遺構に時期を反映するのは、954である。955はあるいは混入か。

SKb95（図版146）　相当量の瓦に共伴した資料である。肥前系磁器紅猪口（956）・小杯（957）・碗（958～960）・皿（963）、肥前系陶器碗（961）は、大橋Ⅳ期前半の所産である。962は型押し成形の軟質陶器で、花弁状の皿か。964は軟質陶器で、層塔ないし堂などの建物屋根を象る。棟の先端には、青色に塗られた三巴文（瓦）が表現される。下面は粗い調整ながら施釉されることから、別個体の身舎部に組み合わせられていたものと考えられる。陶器製の建物は、理兵衛の伝世品にもみられることから、946も理兵衛焼の可能性がある。

6. 整地土Ⅳ層出土土器・陶磁器

８Ｃ区Ⅳ層（図版147）　８Ｃ区で発掘時に「第１整地面～第２整地面」として取り上げた遺物を、Ⅳ層として提示した。ただし、整地土中での集中傾向は認められず、出土量も少量であることから、整地に際しての一括廃棄とは考え難い。肥前系陶器碗（966）や肥前系磁器碗（967）は、８Ａ区Ⅱ層と共通する様相であり、整地年代を示す資料と捉えておく。

他はより遡る時期の資料であり、第５面段階で使用されていたものや、第５面検出作業中に同面遺構から混入したものも含まれていると考えられる。肥前系陶器碗（965）・皿（974）、漳州窯系磁器碗（968～970）、中国産青磁碗（971）、土師質土器皿（972）、肥前系磁器皿（鉢か：973）が該当する。また羽口（975・976）の出土は、第５面段階ないしⅣ層整地時に付近で鍛冶ないし鋳造が行われた可能性を示唆する。

7. 第５面出土土器・陶磁器

第５面（図版147・148）　遺構検出作業に伴い取り上げた資料である。したがって本来、整地土Ⅳ層に包含されていた遺物と、第５面遺構に伴っていた遺物の両者が含まれているとみられる。977～986は８Ｄ区、987～990・992～994は７区、991は８Ｃ区、995は８Ａ区出土。

977・987・991は、肥前系陶器碗である。977は大きく内弯する体部下半（腰部）と、外反する口縁部をもち、幅広に削り残された高台が特徴的で、大橋Ⅰ期の所産である。987は、白泥による象嵌が施され、整った高い高台をもつ。991は精良な黄白色の胎土をもつ玉子手の碗である。いずれも大橋Ⅱ期であろう。990は肥前系陶器鉢で、玉縁状に肥厚して内傾する口縁部をもつ。大橋Ⅱ～Ⅲ期の小型片口鉢であろう。995は肥前系陶器皿で、溝縁皿としては口縁端部の外反が弱いことや、底体部の屈曲が不明瞭など、第6面段階とは異なる形態的特徴をもつ。また鉄釉と灰釉が掛け分けられる。大橋Ⅱ期でも後出的な白木原1号窯跡出土例に近似する。

978・988は肥前系磁器碗である。978は丸碗形だが腰部の内弯が緩く深手の器体をもつ。高台も高く畳付は無釉である。大橋Ⅱ－2期である。988は筒形碗で、やはり大橋Ⅱ－2期であろう。979は紅猪口で、高台径が小さく分厚い器壁をもつことから、大橋Ⅴ期と考えられ混入品であろう。

980は景徳鎮窯系磁器皿、981は漳州窯系磁器皿、982・983は朝鮮白磁皿、989は景徳鎮窯系磁器碗である。993は丹波陶器擂鉢である。994は関西系の土師質土器焙烙で、難波氏A類である。いずれも本来は第6面を帰属面とするもので、第6面からの混入品か。

この他、須恵器平瓶（986）の存在が注目される。内弯気味の口縁端部をもち、7世紀代と考えられる。

SXb09（図版151）　1072は肥前系磁器の筒形碗である。体部に鎬が入り、口縁部外面の文様帯には渦文が描かれる。大橋Ⅱ－1期の所産であるが、第6面でもⅡ－1期の肥前系磁器は僅少であり、直接遺構の年代を示すものではない。

SDb59・60（図版151）　1073は、織部向付である。全体に釉の厚さが薄く、特に底部外面付近は摩滅しており、長期間の使用が考えられる。

SKb119（図版151）　1074は、土師質土器皿である。内弯する比較的長い口縁部をもつ。

SDb68（図版151）　1075は、肥前系陶器皿である。見込みに3方向の砂目を伴い、遺存しないものの口縁部は溝縁形態ではなく、より先行する形態と考えられる。1076は土師質土器皿で、小振りで静止糸切りされた底部をもつ。第6面出土例に類例が見出せ、東ノ丸跡第4遺構面上層にも類例が多く指摘できる。

SDb66（図版151）　1077は、瀬戸美濃系陶器の内禿皿である。

SKb113（図版151）　1078は肥前系陶器の溝縁皿である。1079～1081は土師質土器皿である。1079は底部から明瞭に屈折して直線的に延びる口縁部をもつ。1080は、内弯気味に立ち上がり、端部が尖り気味に収まる口縁部をもつ。見込みは不定方向にナデ調整されるため、底部と体部の境が明瞭に窪んでいる。第6面でも認められるが、むしろ整地土Ⅱ層などのより上位層で主体をなす系統である。1082は、肥前系磁器碗である。細片であるが、高台径が大きく体部下半の外傾度が弱いこと、また外面の界線の位置がかなり高い、などの特徴から大橋Ⅲ期の所産と考えられる。大半の遺物が17世紀前半にまで遡り、第6面の最新年代よりも遡るという「逆転現象」が認められるが、1082は第5面の継続年代の一点を示す資料といえよう。

SKb129（図版151）　1083は土師質土器皿である。短く外反し、先端が尖り気味に収まる口縁部をもち、底部外面には糸切り痕を消去する指頭圧痕が認められる。ただし、底部は丸底化されていない。

SKb133（図版151）　1084は肥前系陶器碗である。口縁部が直立・外反する天目形を呈しており、鉄釉が施される。1085・1086は肥前系陶器の溝縁皿で、995同様の後出的な形態をもつ。なお1085は、灯明皿に転用されている。1087は、瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。1088～1091は土師質土器皿で、1088は突出気味の底部（静止糸切り）をもち、1076と同系譜と考えられる。1089・1090は、口縁部の長い杯形を呈するもので、底部は回転糸切りされることから1088とは別系譜に位置付けられる。1091は、1080と同系譜とも考えられるが、灰白色に発色する胎土をもつことから、別系譜と捉えておきたい。1093は土師質土器深鉢である。体部上端から内側に屈折する口縁部をもつ。

8. 整地土Ⅴ層出土土器・陶磁器

第5面を除去し、第6面を検出中に出土した遺物である。ただし、特定箇所からの集中的な出土傾向は認められず、一括廃棄されたような状況は認められなかった。大半は第6面の最新年代を示すSKb170・171や、SKb178、SKb229よりも古い年代に属するものであり、本来第6面遺構に包含されていた遺物もかなり含むことが想定される。

注目される遺物としては、楽焼系の軟質施釉陶器碗

(1000)、見込みに砂目を伴う肥前系磁器皿（1005)、肥前系磁器瓶（1009)、肥前系陶器の玉子手碗（1011～1014)、志野向付（1007・1008)、畿内系の土師質土器甕（1033）がある。また、1030・1031は御厩系の土師質土器焙烙ＡⅠ形式であるが、この時期まで遡るか混入かは、出土状況が不安定であり明確にし得ない。1030は第３・４面のSDb36・51の間に設定された土層観察用トレンチを第６面まで掘り下げる過程で出土しており、第３・４面の遺物を混同して取り上げている可能性がある。1031もやはり第３・４面の石組溝の精査・掘削途上での出土であり、第３・４面の所産とみた方がよいかもしれない。

この他、常滑産陶器捏鉢（1010）は、中世であるが稀有な搬入された東海系陶器として、特筆される。

9. 第６面出土土器・陶磁器

SBb37（図版151）　柱穴掘り方より出土した。1094は碁笥底の中国産磁器皿であり、見込みにはやや濁った色調の呉須で草文が描かれる。1095は瓦質土器香炉で、口縁部外面には幅太でやや粗雑なヘラ磨きが施される。また口縁部と体部下半には、２条の沈線で画された文様帯に押印が施される。中世後期後半から近世初頭にかけて認められる、在地系譜と捉えられる。

SBb41（図版151）　礎石裏込めから出土したため、一応、SBb41の建築時期を示す資料といい得る。1096は肥前系磁器碗である。高台径が大きく、高台高も高い。また体部の界線が、高台基部よりも上がった位置にあることから、大橋Ⅲ期に位置付けられる可能性がある。ただし、Ⅱ期まで遡らせるのは難しい。SKb225との切り合い関係から、SBb41が1630年代よりも後出することは明瞭だが、1096の示す年代観(1650～1670年代）は、第６面の継続年代からみてもやや下降し過ぎのようにみえる。このため、何らかの事情による混入の可能性を排除できないであろう。

SAb28（図版151）　1097は瀬戸・美濃系陶器の丸皿である。藤沢編年大窯第３段階の所産であり、第６面でも遡るという遺構の所見とは矛盾しない。

SAb26（図版151）　備前産陶器甕（1098)・擂鉢（1099）が出土している。乗岡近世１ｂ期に位置付けられ、出土遺物の点では先行するSAb28との間に顕著な時期差を見出すことは難しい。

SPb944（図版151）　1100は亀山系土器擂鉢である。上下に拡張した口縁部をもち、内面は板ナデ調整される。亀山系土器は鍋が比較的多く認められるが、擂鉢は極めて稀な存在である。

SDb71（図版152）　SAb26に先行する第６面で最も遡ることが想定される区画遺構である。肥前系陶器碗には、高台が高く体部下半との境も明瞭な1105と、兜巾とみられる高台が低い1104の２者がある。瀬戸・美濃系陶器の天目碗（1106）や、角形の志野向付（1107）もある。備前産陶器擂鉢には、明らかに中世まで遡る1109があるが、1110も乗岡近世１ａ・ｂ期であり、比較的古い時期のものが認められる。1111は、体部下半の卸し目が摩滅しており、長期間の使用を窺わせる。資料的なまとまりに欠けるものの、以上の内容と初期伊万里を含まないことから、SKb192と共通した様相１といえる。

SEb12（図版152）　図化可能な遺物が少なく、瀬戸・美濃系陶器皿（1118）や白磁Ｖ－４ｃ類碗（1119)、加工円盤（1120）などを提示できる程度である。1119は、当遺構と重複した位置関係にある第７面SXb16からの混入と考えられる。

SEb14（図版152）　肥前系陶器皿（1121)、須恵器杯（1122)、瓦質土器香炉（1123)、陶器鉢（1124）などがある。1121は見込みに胎土目を伴い、大橋Ⅰ－２期の所産である。1123もこれと並行する時期とみてよく、様相１並行であろう。1122は、７世紀中葉～後葉のものであり、さほど摩滅していないことから、第７面形成期に直近から移動してきたと考えられる。

SEb15（図版152）　土師質土器擂鉢（1125）を図示できる程度である。体部の小片であり、時期（様相）の特定は困難である。

SEb17（図版152）　丹波産陶器擂鉢（1126)、瀬戸・美濃系陶器皿（1127)、備前産陶器徳利（1128）がある。いずれも細片で直接遺構の時期を示さない可能性もあるが、様相１の幅で捉えても矛盾はない。

SEb13（図版152）　肥前系陶器碗（1129)、瀬戸・美濃系陶器天目碗（1130)、白磁Ⅳ類碗（1131・1132)、弥生土器甕（1133）がある。1129・1130は様相１の幅で捉え得るもので、いずれも残存状況が良好なことから本遺構の時期を反映するものであろう。1131・1132は近接する第７面SXb16からの混入であろう。1133は器面が若干摩滅する程度であり、第７面形成時に直近からもたらされたと考えられる。

SKb142（図版153）　中～下層出土と、下層出土に分けて図示した。1134～1150は、中～下層出土である。肥前系陶器碗（1134・1135）・皿（1136）、青磁碗（1137）・皿（1138）、白磁皿（1139）、漳州窯系磁器皿（1140）、土師質土器皿（1141）、円盤状土製品（1142～1146）、瓦質土器羽釜（1147）、軟質陶器焙烙（1148）、土師質土器深鉢（1149）、肥前系陶器瓶（1150）などがある。1136は、見込みに鉄絵による草文が施される。1137・1138は中世に遡る混入品である。1142～1146には、亀山窯産須恵器甕（1143・1146）のような中世遺物の加工品もあるが、肥前系陶器（1142）・瓶（1144）、備前産陶器甕（1145）など近世初頭の製品を加工したものも多い。当遺構からの円盤状土製品の出土量は多く、28ﾘｯﾄﾙ入りコンテナ1/3箱程度みられる。1148は、関西系焙烙（難波氏分類A類）に橙色系の釉薬を施したものであり、関西地方でも類例に乏しい（十河稔郁氏の御教示による）。

1151～1154は、下層出土。肥前系陶器碗（1151）・皿（1152）、備前産陶器擂鉢（1153）、瓦質土器茶釜（1154）がある。1154は、在地産か搬入品か判断は難しいが、18世紀代以降に普遍化する在地製品の先駆的な位置付けが可能である。肩部の把手は欠損して、径1.5cmのやや不整形な円孔が認められる。人為的に打ち欠かれた可能性があるが、これは在地産の土師質土器把手付鍋や把手付茶釜形（1253など）にみられる穿孔形態と共通しており、本来的な使用法を在地の伝統的使用法に転用させた事例とみることも可能である。

以上の構成と個々の特徴から、SKb142出土遺物は様相1で捉えられる。

SKb137（図版153）　土師質土器皿がまとまって出土した。法量的には7.5～8.5cm（1155～1171）と10.5cm（1172）の2者に分けられ、前者が圧倒的に多い。また形態的には、①底部から直立気味に立ち上がり、中位で屈曲して外反する口縁部をもつもの（1155・1157・1158・1160～1169・1172）、②口縁部中位の屈曲が弱く、直線的に立ち上がるもの（1156・1159・1170・1171）の2者に大別でき、さらに前者は口縁部長の長い一群と短い一群に細別できるようにみえる。しかし一方で、これら全てに共通する特徴の存在も指摘し得る。それは、口縁端部外面に認められる稜状の回転ナデの境（「口縁部→体部ナデ手法」の存在：佐藤2000）と、右方向の回転糸切りである。胎土はいずれも褐色粒（クサリ礫ないしシャモット）を含み、淡橙色系に発色する。これらの共通性に重点を置くと、前記①・②の群別を系統差とみるよりも、同一系統内での微細な差異と捉えるのが妥当であろう。

SKb152（図版154）　上層（図版77第1～7層）と下層（第8～13層）に分けて図示した。1173～1188は上層出土遺物である。肥前系陶器碗（1173・1174）、瀬戸・美濃系陶器天目碗（1175）、肥前系磁器皿（1176）、肥前系陶器皿（1177・1178）、漳州窯系磁器皿（1179）、青白磁合子（1180）、土師質土器皿（1181～1185）・杯（1186）、円盤状土製品（1187）、管状土錘（1188）などがある。1176は型打成形品であり、細片であるが大橋Ⅱ－2期ないしⅢ期に位置付けられよう。1180は中世前期遺物の混入品である。1181・1182は、SKb137出土例に近似する。1186は、深手で猪口形の形態をもち、底部は静止糸切りされる。

1189～1193は、下層出土遺物である。肥前系陶器碗（1189）・鉢（1190）・皿（1191・1192）、漳州窯系磁器皿（1193）がある。

以上の組成をみると、少量ながら肥前系磁器の認められることは注目できるが、1183・1186などの土師質土器皿・杯の存在がみられるなど、やや遡る可能性があり、様相2～3と捉えておく。

SXb14（図版154・155）　第3章第7節で報告したように、当遺構は複数の土坑の集積で形成された遺構であるが、調査途上ではそのような認識になかったため、一括して遺物の取り上げを行う結果となった。したがって、個々の土坑の形成年代を示すようなかたちでは遺物の提示を行えない憾みがある。1194～1205はSXb14－①、1206～1219はSXb14－a、1220～1228はSXb14－bとして取り上げた遺物であり、SXb14－①のみSXb14を構成する単体の土坑の伴出遺物である。

SXb14－①出土遺物には、軟質陶器碗（1194）、志野向付（1195）、肥前系陶器皿（1196）、瀬戸・美濃系陶器灰釉内禿皿（1197）、土師質土器皿（1198）、白磁皿（1199）、景徳鎮窯系磁器小杯（1200）、備前産陶器擂鉢（1201）、土師質土器鉢（1202）・擂鉢（1203）・把手付鍋（1204）・鉢形鍋（1205）がある。これらの組成から、様相1に位置付けられると捉えてよいであろう。1205は、縁帯が退化して外傾面をなす口縁部外面に、2cm前後の間隔で穿孔されている。穿孔は、口縁端部から縁帯下部へ斜めに施されるが、明瞭には貫通していない。焼成はやや硬質な土師質で、胎土中に金雲母を含んでおり、在地産の擂鉢・把手付鍋と近似した胎土である。

SXb14－a出土遺物には、肥前系陶器碗（1206・1207）、肥前系磁器皿（1208）、肥前系陶器皿（1209～1211）、漳州窯系磁器皿（1212）、景徳鎮窯系磁器皿（1213）、土師質土器皿（1214）、備前産陶器擂鉢（1215・1216）、

土師質土器擂鉢（1217・1218）、肥前系陶器鉢（1219）がある。

SXb14 － b 出土遺物には、肥前系磁器碗（1220）、漳州窯系磁器碗（1221）、肥前系陶器皿（1222・1223）、土師質土器皿（1224）、円盤状土製品（1225・1226）、陶器壺（1227）、土師質土器鉢形鍋（1228）がある。1220・1224・1226・1227・1228は、取り上げ状況からみてSDb71に伴う可能性もある。

SKb161（図版155）　肥前系磁器鉢（1229）・景徳鎮窯系磁器皿（1230）がある。1229は内面に波形の文様を型押しする白磁で、上位層ながらSXb06出土遺物（535）に類例がある。大橋Ⅲ期に位置付けられることから、第６面で最も後出的な時期に位置付けられる。

SKb167（図版155）　肥前系陶器皿（1231・1232）がある。1231は口縁端部を上方内側にツマミ出し、溝縁皿近似の形態をもつ。溝縁皿は様相３に認められるので、やはり第６面で後出的な時期に位置付けられる。

SKb170（図版156）　肥前系陶器碗（1234）、肥前系陶器皿（1235）、瀬戸・美濃系陶器皿（1236）、白磁皿（1237）、土師質土器皿（1238 ～ 1251）、亀山系土器鍋（1252）、土師質土器茶釜形（1253）がある。1235は、見込みに砂目があり、口縁部内面に松葉状の簡易な線描きが施されており、大橋Ⅲ期の所産とみられる。

土師質土器皿は単一の系統に収まらない、多様なバリエーションが認められる。1238は、内弯気味に長く立ち上がる口縁部をもち、端部は尖り気味に収まる。1239は、口縁部中位で強く屈曲・外反しており、薄手な器壁である点も特徴的である。1240 ～ 1242は、口径10cm前後と12cm前後の２法量が認められるが、見込みを不定方向にナデ調整するため、底部と体部の内面の境が凹線状に窪む特徴がある。1243は口縁端部に明瞭な外傾面をもつ。1244・1245は直線的に外傾する口縁部をもち、深手な器体である。1246は突出気味の底部と長く内弯する口縁部をもつもので、底部は静止糸切りされる。SKb255で主体をなす系統（1769 ～ 1774・1790 ～ 1804・1834 ～ 1841・1873 ～ 1876）に連なるものであろう。1247は、底部外面に口縁部のナデに後出する指頭圧痕が顕著に認められる手捏ね製品である。胎土は灰白色に発色しており、他のロクロ製品とは異質である。1248は、内弯する分厚い口縁部と突出する底部が特徴的である。1249 ～ 1251は、1240 ～ 1242に似るが、内面の底部・体部境は連続的で、凹線状をなさない。

1253は２個一対の把手をもつが、把手部には穿孔されず、その内側基部から肩部内面に穿孔される。把手部そのものに「吊す」機能がなく、把手付鍋と同様な穿孔方法である点で、極めて在地色の強い土器といえる。また胎土に金雲母を含み、やや硬質な焼成であり、把手付鍋・擂鉢と共通した胎土である。

1235の存在から様相３に位置付けるのが妥当であるが、土師質土器皿のバリエーションはSKb178と異なる点に注意する必要があろう。

SKb171（図版156）　肥前系陶器碗（1254・1255）、景徳鎮窯系磁器碗（1256）、肥前系磁器皿（1257・1268）、土師質土器皿（1258 ～ 1261）・焼塩壺（1263）・擂鉢（1267）、備前産陶器徳利（1262）・建水（1264）・大平鉢（1265）・擂鉢（1266）がある。1257・1268は輪花状の口縁部をもち、口縁部内面には掻き取り技法による施文がみられる。大橋Ⅱ－２期の所産であろう。土師質土器皿のうち、1259・1260はSKb137出土例と同一系統である。また1261はSKb255で主体をなす系統であるが、SKb171出土遺物と併せても、その存在は少数にとどまる。1263は筒状の器体をもち、器壁は分厚い。口縁部は強く横ナデ調整されるが、外反せず直立する。SKb178出土例（1351・1352）と共通した形態であり、SKb255出土例とは異なる。1266は、口縁部縁帯上端が細く尖り気味に収まるが、卸し目上端が斜行せず、垂直方向に延びる点に新しい要素が指摘できる。乗岡近世２ａ期の所産であろう。1267は口縁部の内弯傾向が極めて弱く、むしろ直立傾向にある。

以上の特徴から、様相３に位置付け得る。

SKb170・171（図版157）　1269 ～ 1271は、遺構間接合した遺物である。土師質土器皿（1269）は、SKb137出土例の大法量（1172）に近似する。土師質土器擂鉢（1270）は、口縁部の内弯傾向が明瞭であり、内面に３本１単位の卸し目がみられる。遺存状況が比較的良好（口径1/4）なため、混入や長期間の使用は想定し難いが、このことは口縁部の内弯が弱い1267と共伴関係を首肯的に捉えざるを得ないことになろう。なお、口縁部内面には煤が付着する。亀山系土器鍋（1271）は、通常の亀山系土器鍋に比して器体が浅手な点が特徴的である。体部外面の縦ハケ、内面の横ハケに後出して、内外面とも底部に横方向の板ナデ調整が施される。底部の板ナデは、器面をなで付けて潰すように認められ、一部光沢がある。このことは、板ナデが器体の乾燥が一定度進行した段階で施されたことを想定させる。以上の形態・技法の特徴は、18世紀代の在地産（御厩系）焙烙にも共通しており、類例は少ないが本例を亀山系「焙烙」として捉えることも可能である。

なお、本例を含めて亀山系土器の焼成は、「瓦質」が主体であるが、断面の中心部は橙ないし褐色（つまり土師質）であり、通常の瓦質土器とは異なることに注意する必要がある。

SKb174（図版157）　景徳鎮窯系磁器碗（1272・1273）、瀬戸・美濃系陶器丸皿（1274）・折縁ソギ皿（1275）、肥前系陶器皿（1276）、白磁皿（1277）、土師質土器皿（1278～1280）・鍋（1282）・擂鉢（1284・1285）、管状土錘（1281）、備前産陶器建水（1283）がある。1282は口縁部の外反が弱く、僅かに内面で口縁部と体部の境が確認できる程度である。類例は、中世後期の在地土器に見出すことができる。

以上の内容は、様相1ないし2に位置付けられよう。

SKb186（図版157）　土師質土器皿（1291）、肥前系磁器皿（1292）、備前産陶器建水（1293）を図示した。1291は中世前期の京都系土師器であり、混入品である。1293は底部外面に分銅形の刻印が施される。

SKb178（図版158・159）　様相3の基準資料である。大まかな組成を生産地別にみると、肥前系陶磁器が2.5割（うち磁器約6割・陶器約4割）、備前産陶器が1割、土器が4.5割で、その他少量の京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、丹波産陶器が0.4%、中国産磁器、朝鮮産磁器などがある。供膳具としての碗・皿類は肥前系が圧倒的だが、磁器（伊万里）と陶器（唐津）はほぼ同量存在する。擂鉢は備前産と在地産、灯火具・鍋類は在地産で占められる。

肥前系磁器碗（1295～1300）には、2形態認められる。1295～1297・1299は、直線的な体部と強く屈曲して高い位置にくる腰部、大振りで外側に踏ん張る高台をもつ。体部の界線の位置が高いのは、上記形態に関連しよう。1298は、外面に縦方向の線彫りを施し，その間に文様（草文か）を描く。これらは、大橋Ⅱ－2期に位置付けられよう。1300は、1295～1299とは異なり薄い器壁をもつ。腰部の位置が低い丸碗形を呈しており、高台も薄手で垂直方向に延びるなど、大橋Ⅲ期の特徴を備える。以上から肥前系磁器碗は、Ⅱ－2期を主体とし少量のⅢ期も含むと理解できよう。

肥前系陶器碗には、灰釉の天目碗（1301）と、同じく灰釉製品で高台内側の削り込みが浅い碗（1302）がある。

瀬戸・美濃系陶器碗は、体部に丸ノミによる沈線を伴う灰釉丸碗（1304）と、天目碗（1303）がある。1304は藤澤編年本業焼丸碗A類にあたり、肥前系磁器の年代観に近い。

輸入磁器碗には、漳州窯系磁器（1307～1309）と朝鮮産白磁（1310）がある。これらを本来は組成に含まれない「混入」と捉えるか、初期伊万里とともになお使用されていたとみるかは、微妙なところであろう。

肥前系磁器皿には、端反り形態の青磁製品（1311）と、丸皿形態の染付製品（1312～1314）がある。いずれも大橋Ⅱ－2期と思われる。なお1331・1332は、上位遺構面（第2面）で重複関係にあるSXb06に伴う遺物であろう。

肥前系陶器皿には、溝縁皿（1315～1317）と、おそらく溝縁形にならないもの（1318～1324）の2者に大別できる。前者は大橋Ⅱ期の所産であり、先行する様相2の資料中には見出せず、様相3の他の資料には普遍的である。後者は大橋Ⅰ－2期に属し、様相2に認められる。

瀬戸・美濃系陶器皿は、灰釉丸皿である（1325・1326）。出土量は少なく、より遡る時期の所産である。

中国産磁器皿には、白磁皿（1327・1328）、景徳鎮窯系磁器皿（1329・1330）がある。いずれも細片であることから、土坑に伴う廃棄物ではなく、より古い時期の廃棄物が混入した可能性があろう。

土師質土器皿（1333～1343）はバリエーションが顕著であるが、その中で1336・1337はSKb137出土例と同系統に分類されるものであろう。他者も口縁部中位で屈曲・外反傾向の見受けられるものが多く（1333・1334・1338・1340・1342）、近似した系統とも考えられる。また1343は、胎土からSKb170出土の1240～1242と同系統の可能性がある。

丹波産陶器水指（1346）は、外反する口縁部に縦方向の環状把手を貼付する。

肥前系陶器火入（1347）は、内外両側に拡張する口縁端部をもつ碗形形態である。体部上半外面には白泥による刷毛目が施される。大橋Ⅱ期あるいはⅢ期の早い頃の所産である。

土師質土器焼塩壺（1351・1352）は、筒形の器体をもち、口縁部に強い横ナデが認められる。胎土はチャートを含み、ややこなれていない流紋構造をもつもので、在地土器とは異質なものである。搬入品と捉える方が妥当であろう。

須恵器高杯（1353）は、TK23型式に相当するものであろう。脚端部には上方に突出する明瞭な突帯が巡り、脚部外面にはカキ目が施される。ローリングを被るものの、さほど顕著でない。

備前産陶器擂鉢は、口縁部の縁帯がやや短く、内面の卸し目上端が垂直方向に延びるもの（1354。1355もおそらく同形態）と、縁帯が長く卸し目が斜め方向のもの（1356）がある。前者は乗岡近世2aと新しく、

後者はより古い近世１ｂ・ｃ期に位置付けられる。1356 口縁部には「日」状のヘラ書きが認められる。

土師質土器擂鉢（1357 ～ 1360）のうち 1357・1358 は、口縁部の内弯が明瞭である。ただし、口縁部外面の横ナデ調整が弱いため、器面が外側に膨らむ傾向を指摘できる。また 1357 は、口縁部内面のカーブが緩く、明瞭な屈曲点がない。

瓦質土器香炉（1361）は、筒形の器体をもち、口縁部に水滴形の透かし孔が開けられる。外面には、瓦同様の幅広のヘラ磨き（ヘラナデ）調整が施される。

土師質土器鍋には、把手（外耳）の付く茶釜形のもの（1362）、口縁部の外反する形態のもの（1363・1364）、羽釜形の口縁部に把手（外耳）を貼付するもの（1365 ～ 1367）の３者がみられる。いずれも中世後期在地土器の系譜を引くものである。口縁部外反形態は、内耳を伴わないのが一般的だが、1363 のように亀山系土器的な内耳を貼付するものがある。ただし胎土は他の口縁部外反形態と共通しており、在地産とみられる。1365 ～ 1367 は、鍔部と口縁部の一体化が顕著で、特に 1365 では痕跡的な瘤状をなす。

土師質土器深鉢（1368）も、中世からの系譜を引く器種である。

土師質土器甕（1369）は、口縁端部が拡張・肥厚して上面に平坦面をもつ。中世在地土器の甕とは異なる形態であり、近世に新たに出現する系譜と考えられる。

以上のように当遺構出土遺物は、①陶磁器における肥前系磁器の急増、②在地土器における中世的器種の残存と新たな系譜（1336・1337、1361、1369 など）、という特徴をもつ。

SKb192（図版 160 ～ 162）　様相１の基準資料である。出土量はさほど多くないが、大まかな傾向としては肥前系陶器が多く、瀬戸・美濃系は僅かである。

肥前系陶器碗には、端反形（1372・1373）、丸碗に近いが口縁部が内傾しないもの（1374・1376）、天目形（1375）がある。1373 は鉄釉が掛けられており、他は灰釉製品である。大橋Ⅰ－１・２期の所産である。

中国産磁器碗には、景徳鎮窯系（1377・1378）と漳州窯系（1379・1380）があり、他に中世にまで遡る青磁碗（1381）・白磁碗（1382・1383）がある。1377 は饅頭心形であり、中世後期（16 世紀）に遡る可能性がある。

肥前系陶器皿（1384 ～ 1394・1402 ～ 1406）は、確認できるものは全て胎土目積みである（1384 ～ 1386・1388 ～ 1392）。形態的には①丸皿形が少数ある（1385・1387）が、主体は②見込み外縁に段を伴い外反気味の口縁部をもつもの（1384・1386・1389 ～ 1392）であり、③同様な形態だが口縁端部を上方にツマミ上げ、一部を片口状にするもの（1388）もある。②には口縁部を輪花状にし、見込み中央に「×」、口縁部内面に輪花に合わせて６方向の二重線の鉄絵を描くもの（1389 ～ 1392）が最低４脚認められ、セットとして保有されていた可能性が考えられる。大型の皿には口縁部を外反させ、端部をさらに屈曲・外反させる 1393 や、端部をツマミ上げる 1394 がある。見込みには鉄絵による草文が描かれるものがある（1402・1403）。これらは、大橋Ⅰ－２期に帰属させ得るものであろう。

土師質土器皿（1398・1399）の出土量は少ない。1398 は、口縁端部が尖り気味に外反する形態をもつ。1399 は底部ヘラ切り後に板目状圧痕が認められ、中世前期の皿が混入したものとみられる。

中国産磁器皿（1401）は漳州窯系とみられ、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、高台部には籾殻状痕が認められる。

志野向付（1408・1409）は、角形で四隅に縦方向の抉りがある。外面には、格子文＋亀甲文（1408）、格子文＋笹文（1409）が鉄絵で描かれ、その上に分厚く長石釉が施される。1409 の内面には、銅緑釉状の付着が認められるが、これは焼成時に 1409 を匣鉢代わりとして別個体を詰めたことを示唆する。

肥前系陶器鉢（1410）は、内弯する体部と緩やかに外反する口縁部をもつ。体部外面には、幅の太い鉄絵が描かれる。形態・施文から大橋Ⅰ期と考えられる。

備前産陶器擂鉢（1412 ～ 1415）は、２形態に大別できる。1412 は、口縁部の縁帯が細長く立ち上がり、口縁端部を強く摘まないため、端部の内傾面が弱く膨らむ。乗岡近世１ａ期より遡る時期の所産である。1413・1414 は、口縁端部が強く摘まれ、明瞭に内傾する凹面をもつ。縁帯はやや短く、乗岡近世１ｂ期新相と考えられる。

土師質土器擂鉢（1416 ～ 1418）は、口縁部の屈曲が明瞭で口縁部外面は強く横ナデされて凹面気味になる。

土師質土器鍋は、口縁部内面の屈曲・内弯が明瞭な 1419 と、不明瞭で体部上半と連続的な 1420 の２者がある。いずれも鍔部の形骸化した瘤状の縁帯をもつ。

肥前系陶器瓶（1421）は、内面に青海波状の当て具痕を留める、比較的薄手の中型品である。体部外面にはくすんだ色調の灰釉が施され、底部は露胎である。大橋Ⅰ期ないしⅡ－１期の所産である。

以上、当遺構出土の遺物は、搬入品では 1610 年代以前の製品で占められるようであるが、在地土器については点数も少なく、様相を明確化できないという制約が存在する。在地土器の様相は、東ノ丸跡歴博地点第４遺構面上層出土資料（北山 1999、佐藤・松本 2001）を参考にする必要があろう。

SKb189（図版162） 肥前系陶器碗（1422）、瀬戸・美濃系陶器折縁皿（1423）、景徳鎮窯系磁器皿（1424）、土錘（1425）、土師質土器把手付鍋（1426）を図示した。1426は口縁部と体部の一体化が進んだような形態を呈するが、内面の屈曲は調整の境として比較的明瞭である。様相1に位置付けられる。

SKb196（図版162） 肥前系陶器碗（1428）・皿（1427）、丹波産陶器擂鉢（1429）の他、京都系土師器皿（1430）、楠葉型瓦器椀（1431）のような中世土器も含まれる。1427は端反形の口縁をもつ溝縁皿で、見込みには3方向の砂目が認められる。様相3に該当する。

SKb199（図版162） 瀬戸・美濃系陶器天目碗（1432）・志野向付（1433）、土師質土器焼塩壺（1434）がある。様相1・2に位置付けられる。

SKb197（図版162） 土師質土器擂鉢（1435）を図示した。口縁部外面は横ナデ調整され、明瞭な凹面状の外傾面をなす。卸し目が切り合う箇所があるが、右側の方が後出するため、上側からみて時計回りの方向で施された可能性がある。様相1・2か。

SKb195（図版162） 漳州窯系磁器皿（1436）を図示した。端反形の口縁部をもつ。細片のため、口径復元は誤差を含む。

SKb206（図版162） 青磁皿（1437）、土師質土器皿（1438）・杯（1439）がある。1437・1439は中世前期の遺物である。1438は静止糸切りされた円盤状の底部をもつ。SKb255（様相2）で主体をなす系統であるが、口径8.3cmでありSKb255出土例よりもかなり小振りである。同様な法量・形態は、東ノ丸跡第4遺構面上層（様相1）で認められるため、様相1として捉えておきたい。

SKb210（図版162） 肥前系磁器碗（1440）、備前産陶器徳利（1441）・擂鉢（1443）、土師質土器擂鉢（1442）がある。1440は青磁製品であり、大橋Ⅱ－2期に位置付けられる。1442は口縁部の屈曲が明瞭である。1443は乗岡近世1b期古相に位置付けられよう。1442・1443は古い様相をもつが、1440の存在は様相3にまで下降させる必要のあることを示す。

SKb211（図版162） 瀬戸・美濃系陶器皿（1444）、土師質土器擂鉢（1445）・把手付鍋（1446）がある。1444は鉄釉内禿皿であり、口縁部を輪花状に作出する。1445は口縁部の屈曲が明瞭で、外面は強く横ナデ調整される。1446は口縁部が鍔部から長く立ち上がっており、把手部は面取り状のナデ調整により台形の上面観を呈する。様相1に位置付けられよう。

SKb202（図版163） 景徳鎮窯系磁器碗（1447・1448）、肥前系陶器碗（1449）・皿（1450）、瀬戸・美濃系陶器内禿皿（1451）、土師質土器皿（1452）・杯（1453）・擂鉢（1454～1456）・深鉢（1459）、瓦質土器茶釜（1457・1458）がある。1449は、内弯する体部と直立する口縁部をもち、外面に鉄絵が描かれる。1452は直線的に長く外傾する口縁部をもち、見込みは若干窪んでいる。底部は静止糸切りであるが、類品に乏しい。1453の底部には回転ヘラ切りに後出する板目状圧痕が認められるため、中世の所産と考えられる。1454は口縁部がやや緩いが長く明瞭に内弯しており、口縁部外面の外傾面は強く横ナデされる。1457・1458は中世亀山系土器に祖型があり、18世紀以降に在地土器として普遍化するものである。1457の口縁部外面は、縦ハケ後に横方向に板ナデ調整される。1458の体部下半から底部にかけての外面は、縦ハケ後に横ハケ調整される。これらから1457・1458外面は、全体がまず縦ハケ調整され、その後に口縁部～体部が横方向の板ナデ、底部が横ハケ調整されたと推測される。1459の短く内弯させた口縁部は断面方形を呈しており、18世紀以降の後出的な形態である。混入の可能性も考慮に入れる必要があろう。

以上の内容は、1459の位置付けに課題を残すが、一応様相1の範疇で捉えられよう。

SKb208（図版163） 瀬戸・美濃系陶器碗（1460）、漳州窯系磁器碗（1461）、景徳鎮窯系磁器皿（1462～1465）、中国産磁器皿（1466）、備前産陶器皿（1467）・壺（1475）・擂鉢（1476・1477）・鉢（1478）、土師質土器皿（1468）・杯（1469～1473）、円盤状土製品（1474）がある。1469は、内外面に油煙が付着するため、灯明皿としての使用形態が想定される。体部外面には「寿」と墨書されているが、これが灯明皿としての使用の場を反映するのかどうかは明確にし得ない。1476は、乗岡近世1c期の所産であろう。これらは様相1に位置付けられる。

SKb209（図版164） 肥前系陶器碗（1479）、瀬戸・美濃系陶器天目碗（1480）・陶器碗（1482）、折縁ソギ皿（1483）・折縁皿（1484）・丸皿（1485）、朝鮮白磁碗

(1481)、漳州窯系磁器皿（1486・1487)、景徳鎮窯系磁器皿（1488)、土師質土器皿（1489～1493)、備前産陶器擂鉢（1494・1495)、亀山系土器鍋（1496）がある。1479は高台脇の削り込みが緩い丸碗である。1482は、黒色の鉄釉に褐色の灰釉を流し掛けるもので、肥前系か。1489～1491は、東ノ丸跡第４遺構面上層で主体をなす系統である。1494は乗岡近世１ｂ期古相に位置付けられる。1496は、断面が酸化気味の軟質な瓦質焼成である。口縁部は、やや肥厚気味だが外傾面をもつ。器面調整は、外面が体部縦ハケ→底部横ハケ、内面が体部横ハケ→底部横ハケであり、体部調整後に底部調整が行われていることが明瞭である。底体部の境は、内外面ともに器面の屈曲として認められるが、特に底部内面の横ハケは調整面に光沢があり、一定度器体の乾燥が進行して施されていることが窺える。

これらは様相１に該当する内容であろう。

SKb214（図版164）　京・信楽系陶器碗（1497)、肥前系陶器碗（1498)・皿（1502)、瀬戸・美濃系陶器碗（1499)・灯明皿（1503)、肥前系磁器碗（1500)、景徳鎮窯系磁器皿（1501)、土師質土器擂鉢（1504)・鍋（1506)、亀山系土器鍋（1505）がある。1497は端反形で腰が丸く、高台畳付のみ無釉の色絵製品である。混入品か。1504は、直立気味で外面を強く横ナデする口縁部をもつ。1506は口径が50cm 前後にも及ぶ浅手の大型品で、1205・1228に近似した口縁部をもつが、口縁部外面への穿孔は認められない。

1500・1502の存在から、様相３に位置付け得る。

SKb212（図版165）　肥前系磁器碗（1507)、肥前系陶器皿（1509)、景徳鎮窯系磁器皿（1508)、土師質土器皿（1510)・鍋（1514)、織部向付（1511)、陶器壺（1512)、備前産陶器鉢（1513）がある。1509は高台に切り込みが１方向、見込みに胎土目が認められる。1511は環状の脚部を伴う。1514は、1506同様の形態である。1507・1514の存在から、様相３の資料と見なし得る。

SKb227（図版165）　肥前系陶器碗（1518)・皿（1520・1525)・火入（1523・1524)、景徳鎮窯系磁器碗（1519)、土師質土器皿（1521)・杯（1522)・擂鉢（1527)・鍋（1528・1529)、備前産陶器擂鉢（1526）などがある。1520は溝縁皿と考えられる。1523・1524は、内側に鋭く突出・拡張する口縁部と、体部上半・下半の境に明瞭な段を伴う。1523は白泥で刷毛目を施文する。いずれも大橋Ⅱ期ないしⅢ期の早い頃と考えられる。1525は体部中位が屈折して口縁部が外反する形態で、大橋Ⅰ－２期の所産である。1526は乗岡近世１ｃ期の所産であろう。1527は口縁部内面に内傾する面をもち、斜め方向に交差する卸し目をもつもので、口縁部が内弯する在地産擂鉢とは別系譜である。口縁部外面が縁帯状に肥厚し、沈線状のアクセントが認められることから、上記特徴とも併せ備前産擂鉢の模倣形態と捉えることも可能だが、交差する卸し目と内傾する口縁部は、先行する中世後期の土師質土器擂鉢にも認められる。1529は、大口径で浅手の鍋であるが、把手（外耳）が認められるため、通常の把手付鍋の大法量形態と捉えられる。

1520・1523・1524の存在から、様相３に位置付けられる。

SKb229（図版166・167）　様相３の基準資料である。生産地別の大まかな組成としては、肥前系陶磁器が５割（うち陶器3.5割、磁器6.5割)、土器が４割で、他に瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、が少量認められる。供膳具とみられる碗・皿は肥前系の陶磁器が圧倒的に多く，ことに磁器が目立つ。擂鉢は備前産と在地産土器で占められ，灯火具は在地産土器のみである。鍋類も在地産土器のみみられる。

肥前系磁器碗（1533～1538）には，腰が張りやや筒形に近い1535・1538と、腰が張らず緩やかに内弯して立ち上がる1536・1537の２者がある。後者は相対的に高台が高くみえる。外面には口縁部直下と体部下半に１・２条の界線を施し、菊花文（1533・1534)、草文（1537）を描く。1538は見込みに菊花文を描く。1533～1537は透明釉であるが，1538は外面鉄釉、内面透明釉に掛け分けられる。1535は高台畳付が露胎で、1536～1538は高台畳付から内側にかけてが露胎である。また1535の高台畳付には砂が付着する。

肥前系陶器碗（1539～1542）は，いずれも灰釉製品である。1539は短いが明瞭に外反する口縁をもち、1540はやや端反気味だが直線的に外傾する口縁部をもつ。1541は太く丸い口縁部をもち、ロクロ目が顕著である。1542は高台畳付に砂目が認められる。

肥前系磁器小杯（1543）は端反り口縁であり、外面に草文を描く。瀬戸・美濃系陶器碗（1545）は小型の天目碗であり、底部外縁付近を打ち欠いて円盤状土製品に転用される。

肥前系磁器皿（1546～1553）には、青磁釉製品（1546～1548）と染付（1549～1553）がある。1546・1548は口縁部を折縁状にする。1547は見込みに片彫りの草文が施される。高台内端付近に砂目が認められる。染付は見込みに草花文を描く1549・1551～1553と、鹿を描く1550がある。1550は型打ち成形である。ま

た1553は体部内面に片彫りが施される。1549・1550・1552・1553の高台内端には砂が付着する。

肥前系陶器皿（1554～1557）には、溝縁皿（1554・1556）と、内弯する口縁部をもつもの（1557）がある。1555は、見込みに段をもち口縁部が外傾する形態（例えば1787）であり、溝縁皿よりも先行的なものである。1557は、見込み外縁付近が摩滅しており、比較的長期の使用を窺わせる。

瀬戸・美濃系陶器皿（1558・1559）は、灰釉折縁ソギ皿（1558）と鉄釉丸皿（1559）である。

土師質土器皿（1560～1565）には、SKb255で主体をなす淡橙色系の杯形の皿（1790～1804など）はみられず、器高の低い形態のみが存在する。1560・1561は肌色がかった灰白色を呈しており，口縁部外面に強い回転ナデ調整がみられる。不純物や砂粒の混入の少ない精良な胎土であり、あるいは淡橙色系の杯形皿の系譜を引くものか。口径9～10cm台である。1562～1565は、褐色がかった灰白色を呈する皿で、回転ナデ後に見込みを強くナデ調整するため、底部と体部の境が窪むのが特徴である。また外面の回転ナデは、特に体部に強く施される。これらは、SKb170出土の1240～1242と同系統である。1562・1565には油煙が付着する。

土師質土器焼塩壺（1566）は、体部外面に縦方向のナデが施され、多角形状を呈する。SKb255出土例と同様の形態・手法をもち、先行的な遺物である。

有溝土錘（1567）・管状土錘（1568）も出土した。1568外面には「×」形のヘラ書きが認められる。

土師質土器深鉢（1569）は、体部外面に印花文を押捺する。内傾する口縁部の形態は、SKb255出土例（1819）と同様である。土師質土器擂鉢（1570～1572）のうち、1570はSKb255同様に明瞭に内傾し、外端面が横ナデで凹面状を呈する口縁部をもつ。1571内面は使用による摩滅が、1572内面には煤状の付着物が認められる。

瓦質土器火鉢（1573）は内弯する体部と、肥厚して水平方向の平坦面をもつ口縁部からなる。底部には3方向の脚部が貼付される。内面下半は横方向の板ナデ調整が施され、外面は口縁部から体部下端までヘラ磨き調整が行われる。ヘラ磨きはロクロ回転を利用しており（回転ヘラ磨き）、幅5～8㎜とかなり太く、瓦にみられるヘラナデ状の調整面をもつ。また焼成は、断面が灰色で器表が漆黒色を呈しており、通常の燻し瓦と同じである。

備前産陶器擂鉢（1574・1575）は、内面の卸し目が斜め方向の1575と垂直方向の1574がある。ともに内面下半は使用による摩滅が認められる。1575は口縁部縁帯の下端と内端面が丸味を帯びており、乗岡近世2a期である。

土師器甕（1576）は、古代末～中世初頭のものであるが、器面の摩滅は顕著でない。おそらく位置的に重複する第7面SXb16からの混入であろう。

これらの年代について、整理しておく。肥前系磁器碗・小杯・皿は、いずれもⅡ－2期に該当し、その中でも概ね1630年代～1650年代に収まるものである。肥前系陶器碗・皿は大半がⅡ期（1610年代～1650年代）の幅で捉えられ、1557のみⅠ－2期の可能性があるが、既述したような使用痕の存在から長期の使用が想定される。瀬戸・美濃系陶器碗・皿は、大窯第3段階～第4段階の所産とみられ、肥前系磁器・陶器よりもやや先行する年代が付与できる。ただし瀬戸・美濃系陶器はいずれも小片であり、1545のように円盤状土製品への再加工もみられることから、「ゴミ」としての混入ないし転用品としての使用の可能性が高い。備前産陶器擂鉢は、乗岡近世1期（1574）と近世2a期（1575）がみられる。

以上のように、陶磁器からは1630～1650年代の幅で捉えられる。在地土器においても土師質土器皿の中心的な系統・形態・法量にSKb255との明瞭な違いがみられることから，上記した年代観は妥当であろう。

SKb233（図版168・169）　肥前系磁器碗（1586～1591）・皿（1597・1598）、肥前系陶器碗（1592～1594）・皿（1599・1600）・向付（1603）・小杯（1604・1605）、景徳鎮窯系磁器碗（1595）、漳州窯系磁器碗（1596）、白磁皿（1601）、瀬戸・美濃系陶器皿（1602）・茶入（1616）、土師質土器皿（1606～1614）、陶器壺（1615）、備前産陶器徳利（1617）・擂鉢（1618～1620）がある。

1586・1591は筒形碗である。1586の体部外面には縦方向の鎬が入れられる。1587～1590は丸碗である。1588は腰部が弱く内弯する深手な器体をもつ。1597・1598は見込みに4方向の砂目が認められる。ともに体部中位で弱く屈曲しており、施文は界線のみである。1599は、直線的に外傾する口縁部の内面に弱い沈線をもつ溝縁皿である。1601は、口縁部を輪花状に成形する。1603は、平面方形に型打ちされた器体をもち、内外面に鉄絵による草文が描かれる。1606は、底部外面に指頭圧痕が認められる。1610～1612は、SKb255で主体をなす系統である。1615は、やや軟質な素地に緑色の釉が掛けられる。三耳ないし四耳壺である。1618・1619は、乗岡近世1c期の所産である。

以上の内容は、肥前系磁器の1586・1597・1598が大橋Ⅱ－1期の所産と考えられ、やや遡る可能性があるが、肥前系磁器1587～1591や肥前系陶器1599はより

後出する要素であろう。様相３と捉えておく。

SKb235（図版 170） 瀬戸・美濃系陶器天目碗（1623）、漳州窯系磁器碗（1624）、土師質土器皿（1625）・擂鉢（1629）・深鉢（1630）、管状土錘（1626）、備前産陶器壺（1627）、肥前系陶器鉢（1628）、亀山系土器鍋（1631）・甕（1632）を図示した。1625 底部は静止糸切りであるが、系統関係は明瞭ではない。1630 は土坑内で倒立させた状態で据えられていた。内弯する体部と、ほぼ水平方向に屈折して長く延びる口縁部からなる。底部は丸味をもって突出するが、叩き目等、成形の痕跡は確認できない。脚部は底部外縁に貼付され、垂直方向にまっすぐ延びる。1632 はやや軟質な瓦質焼成であり、体部下半には右下がりの格子叩き目、底部にはこれより後出する不定方向の叩き目が認められる。

SKb236（図版 170） 肥前系陶器皿（1633）、青磁皿（1634）、備前産陶器擂鉢（1635）、土師質土器擂鉢（1636・1637）・鉢もしくは鍋（1638）、須恵器甕（1639）などがある。1634 は中世後半の所産か。1635 は乗岡近世１ｃ期の所産である。1638 は合子状の形態を呈しており、立ち上がり状の口縁部は貼り付け成形である。底部内外面に煤が付着しており、煮沸（加熱）機能を有していた可能性があろう。法量を無視すれば 1506・1514 に近似するようにも見受けられるが、口縁部の歪みの少ない丁寧な作巧である点が異なる要素である。1639 は、体部外面にカキ目を施しており、７世紀頃の所産と考えられる。

SKb239（図版 170） 土師質土器皿（1640）、土師器高杯（1641）がある。1641 は、東ノ丸跡歴博地区第４遺構面上層に類例がある。1641 はかなり摩滅しているが、脚柱部外面が多角形に面取りされ、内面は横方向に削られる。時期は８世紀頃と考えられ、本調査区では唯一の古代前半に属する土師器である。

SKb241（図版 170・171） 瀬戸・美濃系陶器天目碗（1643）・志野碗（1644）・皿（1645）、土師質土器皿（1646）・杯（1647）・擂鉢（1649）・深鉢（1652）、瓦質土器火鉢（1650）、有溝土錘（1648）、備前産陶器大平鉢（1651）などがある。1650 は、1690 と対応する底部形態をもつと考えられる。

SKb245（図版 171） 肥前系陶器碗（1653・1654）、・皿（1657 ～ 1660・1669・1670）・鉢（1667・1668）、景徳鎮窯系磁器小杯（1655）・皿（1661）、志野向付（1656）、備前産陶器壺（1671）・大平鉢（1673）、土師質土器皿（1662 ～ 1666）、瓦質土器把手付焙烙（1672）がある。1658・1659 は溝縁皿で、1657・1660 もその可能性が高い。1662 は、口縁端部に内外面の回転ナデに先行するとみられる明瞭な外傾面をもつ。1665・1666 は SKb255 で主体をなす一群に類例が見出せる。1669・1670 は三島手である。1672 は断面円筒形を呈する把手を付しており、垂直方向に穿孔される。岡山県南部の中世後期～近世初頭の土器に類例が見出せる。以上は肥前系磁器を欠き、土師質土器皿 1665・1666 が SKb255 例に近似することから様相２にもみえるが、肥前系陶器に 1658・1659 のような溝縁皿が認められることから、様相３の範疇で捉えておきたい。

SKb249（図版 172・173） 肥前系磁器小杯（1683）・碗（1684・1685）・皿（1686）、朝鮮白磁鉢（1687）、土師質土器杯（1688）・皿（1689）・深鉢（1704）、瓦質土器火鉢（1690・1705）、亀山系土器鍋（1691）、亀山産須恵器甕（1706）などがある。1683 ～ 1686 は大橋Ⅱ－２期の所産であろう。1690 は合子状の口縁部をもち、体部外面中位は縦方向に、同上端は横方向にヘラ磨き調整される。磨きは瓦のヘラナデ（磨き）状で幅広いのが特徴的である。1705 は同一形態の底部であり、輪高台をもち外面は横方向のヘラ磨きが認められる。1706 は瓦質焼成に転じた亀山産須恵器で、短いが強く外反する口頸部をもつ。第７面 SXb16 よりも後出する時期のものである。以上は 1706 を除き、肥前系磁器から様相３に位置付けられる。

SKb250（図版 172） 肥前系磁器碗（1692）・皿（1695）、瀬戸・美濃系陶器天目碗（1693）、肥前系陶器皿（1694）、白磁皿（1696）、土師質土器皿（1697 ～ 1701）・擂鉢（1702・1703）などがある。1692・1695 は大橋Ⅱ－２期の所産である。1697 は大振りな口径で胎土が灰白色を呈するが、口縁端部は丸く収められており、口縁端部に平坦で明瞭な外傾面をもつ 1846 などとは異なる。1698・1699 は SKb255 で主体をなす系統である。1702・1703 は口縁部内面は体部から緩やかに内弯するが、外面は強く横ナデされているため端面下端が明瞭に屈曲する。これらは 1692・1694・1695 の存在から様相３と捉えられる。

SKb256（図版 173） 肥前系磁器碗（1707）・小杯（1708）、景徳鎮窯系磁器小杯（1709）、肥前系陶器碗（1710）・皿（1711・1712）、土師質土器皿（1713）、備前産陶器鉢（1714）がある。1708 は、畳付が釉剥ぎされた蛇ノ目高台をもつ白磁である。これらは様相３に位置付けられる。

SKb258（図版173・174）　肥前系磁器碗（1727・1728）、肥前系陶器碗（1729・1730）・小杯（1731）・皿（1732～1737・1742）、土師質土器皿（1738～1741）、備前産陶器擂鉢（1743）がある。1727・1728は大橋Ⅱ－2期の所産である。肥前系陶器皿に溝縁皿が含まれていないが、肥前系磁器碗の存在から様相3に位置付けておくのが妥当であろう。

SKb255（図版175～178）　様相2の基準資料である。組成を大きく生産地別にみると、肥前系陶磁器が1割強（うち大半が陶器で磁器は1点のみ）、土器が7.5割で、その他、瀬戸・美濃系陶器、備前産陶器、中国産磁器、朝鮮産磁器が少量認められる。供膳具とみられる碗・皿類は肥前系や瀬戸・美濃，輸入磁器が多く、擂鉢・甕は備前と在地産土器で占められる。鍋類は在地産が基本である。なお、肥前系では磁器（伊万里）が僅少であり、大半が陶器（唐津）である。以下、取り上げ層位別に図示し、若干の説明を加える。

1755～1777は上層出土遺物である。肥前系陶器碗（1755～1757）には、灰釉を施した1755・1756と鉄釉を施した1757がある。前者は丸く収まる口縁端部をもち、後者は比較的シャープにすぼまる口縁端部を伴う。肥前系陶器皿（1758）は、内外面の口縁部直下に弱い段をもち、口縁端部は上内方に巻き込まれる。中国産磁器碗（1759・1760）は、いずれも景徳鎮窯系とみられ、1759は高台部内側には「□明成□□造」銘がある。1760は肉厚な器体と細身で長い高台をもつ。1761は景徳鎮窯系の小杯である。

土師質土器皿（1766～1774）は、形態・手法・胎土・色調などから複数の系統に分けることが可能である。最も多いのは、長く外傾する体部をもつ杯的な形態をもつ1769～1774である。色調は淡橙系を呈する。糸切り痕の条線が顕著には収束しないことから、静止糸切りないし低速の回転糸切りとみられる。また体部外面には、糸の当たった痕跡が認められる。口径は9～10cm台に集中する。1773は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿としての使用が明確である。1762は1769～1774に近い形態をもつが、色調が褐色系で異なる。また、口縁端部に平坦面が形成されており、回転ナデの手順も異なっている。1763は浅黄橙色系の色調で、体部下半が丸味をもつ。1764は橙色系だが1769～1774よりも褐色がかった色調を呈する。下方から上方へナデ上げられるような強い回転ナデにより、内面にはロクロ目が明瞭に形成される。1765は黄灰色を呈し、内弯する短い口縁部が特徴的である。1766・1767は灰白色を呈するが、1766は体部中位にナデによる凹面をもち、1767は上方へ強くナデ付けられて外面に顕著なロクロ目が形成されるなど、回転ナデの施し方に違いが認められる。1768は橙色系を呈し、比較的厚手の器壁をもつ。底部に指頭痕が認められ、手捏ね成形の可能性が指摘できる少ない事例である。

瀬戸・美濃系陶器茶入（1775・1776）は、やや軟質な焼成の素地に鉄釉がかけられるもので、同一個体の可能性がある。1775は直立する口縁部と明瞭に屈曲する肩部をもち、肩衝形を呈する。瀬戸・瓶子窯跡（大窯期）出土資料に類例を見出すことができる。

土師質土器擂鉢（1777）は、同種の事例としては小振りなものである。緩やかに内弯・肥厚する口縁部をもち、卸し目は弱く施される。

1778～1823は中層出土遺物である。肥前系陶器碗（1778・1779）は灰釉を施した1778と、鉄釉を施した1779がある。1779は高台内の削り込みが浅く、体部に比して厚手の底部をもつ。瀬戸・美濃産陶器碗（1780・1781）には、天目茶碗（1780）と鉄釉丸碗（1781）がある。1780は口縁部のかなり下方で体部から緩やかに屈曲し、外反気味に直立する口縁部をもつ。1781は直線的に外傾する口縁部と体部をもち、筒形に近い形態である。鉄釉は赤褐色に発色する。

景徳鎮窯系磁器碗（1782）は、外面に人物を描く。景徳鎮窯系磁器皿（1783）は、所謂「芙蓉手」である。口縁部は波形に起伏しており、内面に花・唐草文が描かれる。白磁皿（1784）は、高台に4箇所の抉りを入れるもので、森田勉氏分類の白磁皿D群にあたる。当該期のセットと捉えるにはやや古相の事例である。

肥前系陶器皿（1785～1789）は、いずれも灰釉製品である。1785は口縁部を輪花状に成形する。1787は見込みに砂目積みが認められる。1788・1789は大型の皿である。1788は口縁部を外反させ、端部をツマミ上げる。1789は短く直立する口縁部をもち、見込みに胎土目が認められる。

土師質土器皿（1790～1808）は、上層同様に複数の系統を見出すことができる。1790～1804は、上層でも主体をなしていた淡橙色を呈する系統である。口径は9～11cm台であり、10cm台後半～11cm台前半に集中する。器高が浅手のものと深手のものがあるようにもみえるが、両者はかなり漸移的であり、明確に区分することは難しい。これらには、かなりの頻度で口縁部ないし内面には付着した油煙が確認でき、灯明皿としての使用が想定できる。1805は体部の外傾度が弱く深手な、杯的な形態をもつものである。1806は回転ナデにより口縁部内面に凹面が形成されることや、色がかった黄灰色を呈することから、上層出土の1764と同系統と考えられる。形態的には1764よりも深手である。1807は灰白色に発色し、口縁端部に明瞭な平坦

面をもつ。口縁部付近の回転ナデをみると、端部の平坦面を作出したナデが先行し、口縁部外面直下のナデが後出する。このため、口縁部外面のナデで生じた粘土のはみ出しが、わずかに端部平坦面に被さる状況が観察できる。中世後半に高松平野の土師質土器杯で普遍的な「口縁部→体部ナデ」手法と同一の手順である。器面には油煙が分厚く付着する。1808は灰白色を呈する浅手の皿である。見込み外縁が弱く窪む。

土師質土器焼塩壺（1809～1811）は、石英・長石と大粒のチャートを含み、他の在地産土器とは異なる胎土をもつ。蓋（1809）は天井部外面に指頭痕が顕著であり、手捏ね成形されたとみられる。1810・1811は、体部外面に縦方向のナデによる境界の不明瞭な面が形成されており、頸部外面には横ナデで消去された指頭痕がみられる。また体部内面上半には、布目が認められる。

1812・1813は中世前半の遺物である。1812は同安窯系青磁碗であり、横田・森田分類の青磁碗Ⅰ１ｂ類にあたる。1813は山茶碗で、見込みと高台畳付は著しく摩滅しており、長期間の使用が想定される。均質な胎土をもっており、「北部系山茶碗」とみられる。これらの中世遺物は、直近で検出された第７面SXb16からの二次的移動による混入と思われる。

備前産陶器大平鉢（1814）は、強く内弯する口縁部をもつ。大粒の砂粒や不純物の混入のみられない均質な胎土であり、緋襷が赤く発色する良好な焼成である。備前産陶器擂鉢（1815・1816）は、体部から明瞭にくびれて直立する比較的長い縁帯をもつ。内面の卸し目上端は水平方向にカーブする。1815は口縁部内面の段が幅広いが、1816は段の幅が狭く、縁帯下端が丸味を帯びる。1816内面は摩滅が顕著であり、長期間の使用が想定される。1815は乗岡近世１ｂ期新相、1816は近世１ｃ期である。

土師質土器擂鉢（1817・1818）は、中世後半以来の在地系統の製品である。1817は口縁部が明瞭に内弯するが、1818は口縁部の内弯が弱い。1818内面は使用による摩滅が顕著であり、水平方向の擦痕が認められる。また、口縁部付近に煤が付着しており、火にかけての使用形態も窺える。土師質土器深鉢（1819）は、内弯する体部からさらに内側に屈曲する口縁部をもつ。口縁部を横ナデ調整した後、体部内面に横方向の板ナデを施す。体部外面上半には、８弁の菊花状の印花文が捺される。

土師質土器把手付鍋（1820・1821）は、口径13cm前後の小振りな個体である1820と、通常の口径（20cm台）の1821がある。1821は鍔部より上側の口縁部が長く立ち上がっており、先行的な特徴をもつ。亀山系土器鍋（1822）は、頸部よりも分厚く収まり外傾面を作る端部をもつ。

備前産陶器徳利（1823）は、体部中位に最大径を伴う、縦長の算盤玉状の形態である。頸部内面に絞り目が認められる。

1824～1863は下層出土遺物である。肥前系陶器碗（1824）は、高台の削り込みの浅い灰釉製品である。中国産磁器碗（1825）は、粗質な胎土をもつ漳州窯系製品である。瀬戸・美濃系陶器碗（1826）は、口縁端部の屈曲が明瞭な天目茶碗である。

肥前系陶器皿（1827・1828・1832）のうち、鉄絵による草文を描く1828は見込みに３箇所の胎土目積みが認められる。見込み中央付近と高台畳付は著しく摩滅しており、長期間の使用が想定される。瀬戸・美濃系陶器皿（1829～1831）には、灰釉内禿皿（1829・1830）、灰釉内禿ソギ皿（1831）がある。前者の高台内側にはワドチ跡が認められる。漳州窯系磁器皿(1833)は、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行う。

土師質土器皿（1834～1847）は、上・中層で主体を占める淡橙色系の系統（1834～1840）が多い。口径10～11cm台であるが、11cm台前半が主体を占める。1841は体部が直線的であり、胎土の特徴も1834～1840の系統とは異なる。1845はロクロ目が顕著に認められ、1764・1806と同系統である。1846は「口縁部→体部ナデ」手法を施しており、胎土・焼成から1807と同系統と思われるが、1807よりも大振りで比較的長い体部をもつ。1847は全体の形態は不明であるが、やや突出気味の底部に静止糸切りが施される。

肥前系磁器瓶（1848）は碁笥底であり、大橋Ⅱ期（1630～1640年代）の所産である。本遺構出土遺物中、唯一の肥前系磁器である。

十瓶山窯産須恵器椀(1849)・白磁壺(1850)は、SXb16からの混入であろう。

備前産陶器擂鉢（1852～1854）は、長く直線的に立ち上がる縁帯をもつ1852と、短く丸味を帯びる縁帯をもつ1853の２者がある。内面の卸し目は、垂直方向と左上がりの斜位のものが重複しており、古い様相をもつ。1852・1854は、内面下半と底部外面の接地部が著しく摩滅している。1853の片口側面には、ヘラ書きが認められる。1852は乗岡近世１ｂ期古相、1853は近世１ｃ期に位置付けられる。

土師質土器擂鉢（1855～1859）は、口縁部の内弯が緩やかな1855・1856と、明瞭な1857・1859がある。1858の内面は使用による摩滅が著しく、また外面には二次的な被熱痕が認められる。1859も口縁部外面から内面にかけて煤状の付着物が認められる。

土師質土器鉢（1860）は、強く外傾して平底状を呈

する体部と、直立する口縁部からなる。他遺跡での類例に乏しい形態である。口縁部横ナデの後、体部内面から口縁部にかけて横ハケ調整を施しており、在地産の土師質土器擂鉢・深鉢・把手付鍋と同様の手法が認められる。胎土もこれら在地土器と共通する。口縁部内面には煤状の付着物、口縁部外面には吹きこぼれ状の痕跡がみられ、煮炊具の一形態であることを想定させる。土師質土器把手付鍋（1861～1863）の口縁部外面には、強い横ナデ調整で生じた瘤状の低い縁帯がめぐる。中世後半（16世紀代）の事例と比較すると，縁帯の矮小化と口縁部との一体化傾向が顕在化している。土師質土器手焙烙（1864）は、把手の断面が管状になって体部内面に繋がっている。岡山県沖の店遺跡などで類例を見出すことができる。

1865～1886は、最下層出土遺物である。肥前系陶器碗（1865・1866）は灰釉製品であり、1866は体部下半が明瞭に屈曲する。漳州窯系磁器皿（1867）は、粗質な胎土をもち、内面に幾何学的な文様を施す。

肥前系陶器皿（1868～1871）には、胎土目積み（1868）と砂目積み（1870・1871）がある。口縁部を輪花状にする1868は、高台畳付が摩滅している。

朝鮮白磁皿（1872）は端反口縁をもち、見込み外周には突帯状に段が作出される。

土師質土器皿（1873～1876・1878）は、上・中・下層で主体をなす淡橙色の系統（1873～1876）がやはり多い。口径10cm台が多く、底部径が相対的に大きく浅手な1876のような形態もみられる。1876は内外面に油煙が付着する。土師質土器杯（1877）は淡橙色系の皿と同じ胎土で、やや厚手な体部をもつ。

陶器鉢（1880）は土師質土器に近い胎土をもち、褐色系の釉に青灰色系の釉を斑点状にかけ流す。新しい時期の混入遺物とみられる。丹波産陶器大皿（1881）は、外反する口縁部の端部が上方にツマミ出される。胎土は比較的精選されており、明赤褐色に発色する。

土師質土器擂鉢（1882）は明瞭に内弯する口縁部をもち、内面下半は摩滅し、煤状の付着物が認められる。

1887・1888は出土層位不明の遺物である。土師質土器杯（1888）は、1877と同系統であろう。底部は静止糸切りされる。

以上記述してきた取り上げ層位別の様相を整理する。在地産の土師質土器皿で主体をなす淡橙色系皿の法量は、口径10cm台後半～11cm台前半に大半が収まり、上層では9～10cm台と重複部分をもちながら若干小型化の傾向を指摘できる。また褐色がかった橙色系の皿（1764・1806）も中層の1806では深手の杯形に近いが，上層の1764では浅手である。このように、上層と中層以下で若干の差異を指摘できる。これに対して肥前系陶器・輸入磁器には、特に目立った差異を見出すことは難しい。肥前系陶器は、いずれの取り上げ層位においても大橋Ⅰ－2期とⅡ期の製品が混在している。Ⅰ－2期とみられる個体には、1828や1868のように見込みや高台畳付の摩滅しているものがあり、完存ではないが比較的良好な遺存状態であることから単なる混入ではなく、比較的長期の使用を経て廃棄されたことが窺える。中国産磁器も16世紀末葉～17世紀初頭頃の景徳鎮窯系・漳州窯系があり、上層と中・下・最下層との間に差異はない。なお、中国産磁器には小さな破片が多く、遺構の埋没過程に「ゴミ」として混入した可能性も否定できない。

まとめると、在地産の土師質土器皿では上層と中層以下に若干の差異があるが、肥前系陶器などでは顕著な差異を見出せないようである。第3章でも記述したように、上層がSKb255埋没後の整地土的な意味をもつとすれば、上層は本来の埋め戻し土とは異なり、そこに若干の時間差を認めることも可能であろう。ただし、それは土師質土器皿に僅かに認められる微細な時間差ということになる。また、中層出土の元和拾年銘木簡の出土状況からすれば、これらの土器・陶磁器群は元和10年（寛永元年:1624）とさほど隔たらない、1620年代ないし下っても1630年代までの時間幅で捉えるのが妥当であろう。

SKb259（図版178）　肥前系陶器碗（1889・1890）・皿（1895～1897）、肥前系磁器碗（1891・1892）・小杯（1893）・皿（1894）、土師質土器皿（1898・1899）・焼塩壺（1900・1901）・焙烙（1902・1903）がある。1889は、胎土がきめ細かで器壁の薄い玉子手の製品で、大橋Ⅱ期の所産である。1891～1894は、大橋Ⅱ－2期であろう。1902・1903は、18世紀代（第4面以降）の焙烙に近似しており、上位層からの混入の可能性も考えた。ただし、以下の諸点にやや異なる特徴が指摘できる。①器体がやや深手で、体部長が長く底部との境の屈曲は明瞭である。②内耳は幅広で円孔も大きい。③口縁端部は垂下気味であるが、それに伴う外傾面が明瞭である。以上3点である。SKb170・171出土の1271のような亀山系土器鍋からの派生が考慮できる事例とは異なり、より御厩系焙烙（焙烙ＡⅠ形式）に近いが亀山系焙烙の特徴も残す個体と位置付けられ、焙烙ＡⅠ形式の初現を示す可能性もあろう。いずれにしても、今後の事例の増加を踏まえて評価される必要がある。

10. 第７面出土土器・陶磁器

SXb16（図版179～191）　第２表に出土破片点数を示した。第６面精査時に第７面との境界付近で出土したとみられる土器・陶磁器は、一括して図示したものの、破片数のカウントには含めていない。全点数2,584点中、供膳具は76.38％、煮炊具は19.61％、調理具は1.82％、貯蔵具は1.42％であり、供膳具の比率がかなり高いことが窺える。

主な供膳具の内訳で特徴的なのは、和泉型瓦器椀が1,057点と供膳具の53.09％を占めることである。これに和泉型瓦器皿（2.01％）・楠葉型瓦器椀（0.95％）・京都系土師器皿(1.26％)・東播系須恵器小皿(0.35％)・東播系須恵器椀（1.16％）・吉備系土師質土器椀（4.02％）・白磁（1.51％）・青磁（0.1％）といった、非在地産の搬入品を加えると1,285点となり、供膳具の64.54％が搬入品で占められていることになる。

在地産供膳具の組成も特徴的である。在地産供膳具705点中、最も目に付くのが土師質土器小皿であり、在地産供膳具の42.84％を占める。土師質土器杯は12.01％で小皿よりもかなり少ない。また十瓶山窯系の椀は、大半が黒色土器であり、須恵器椀はごく僅かである。土師質土器における小皿の卓越と、十瓶山窯系椀における黒色土器の卓越という現象が指摘できるが、これは輸入磁器における白磁の優勢とともに、時期的な傾向を示す事象と考えられる。以下、在地土器の器種分類は、『空港跡地遺跡Ⅳ』での試案（佐藤2000ａ）に依拠する。

土師質土器小皿(1904～1982)は、皿ＢⅢ形式(1904～1976･1982)が大半であり、僅かに皿ＢⅡ形式(1977～1981)が認められる。底部切り離し技法はほとんど回転ヘラ切りであるが、僅かに回転糸切りのものが１点（1982）存在する。また回転ヘラ切りの方向は、右方向（Ｒ）が圧倒的に多い。左方向（Ｌ）は極めて少なく、僅か数点を数える程度である。1904～1982は一応、皿ＢⅢ形式として一括されるが、口縁部形態や口縁部から底部にかけての屈曲形態によって、①口縁部が外傾し、内面での屈曲が弱いもの（1904～1936)、②口縁部が直立し、内面での屈曲が明瞭なもの（1937～1946・1982)、③口縁部が外反気味に外傾、端部が丸く肥厚し、内面の屈曲が比較的明瞭なもの（1947～1950)、④口縁部が内弯気味に外傾、端部が丸く肥厚し、内面の屈曲が比較的明瞭なもの（1951～1966)、⑤口縁部が強く外反して端部が丸く、内面の屈曲が明瞭なもの（1967～1971)、⑥口縁部が短く直立、端部が丸く、内面の屈曲が明瞭なもの（1972～1976)、の６種に細別できる。細別形態の法量（口径）は、①7.6～9.1cm、②7.0～8.8cm、③8.2～8.8cm、④6.7～9.0cm、⑤8.0～8.9cm、⑥7.0～8.2cmである。主体となる法量のまとまりも考慮すると、①～⑤はほぼ８cm台を主体とする共通した口径分布をもつといえ、⑥はこれらよりひとまわり小さな７ cm 台を中心とした口径である。②と⑥には系譜関係が想定できるため、⑥は時期的に後出する可能性がある。

1977～1981は口縁部が短く立ち上がり、口縁部直下の内面には明瞭な屈曲部が窪み状に形成されることからＢⅡ形式とした。ただし、十瓶山窯（西村遺跡）でみられる皿ＢⅡとはやや異質な形態であり、非十瓶山系統の可能性もある。

十瓶山窯産須恵器小皿（1983・1984）は、瓦質に近い軟質焼成品である。1983は、口縁部が内弯気味に立ち上がるものであり、類例に乏しいため非十瓶山窯製品の可能性もある。

1985は、須恵器ないし瓦器の小皿である。口縁部内外面には、連続的な水平方向のナデの痕跡が認められ、回転ナデ調整の可能性がある。見込み中央付近には、平行線状のヘラ磨きが施される。特徴的なのは、口縁端部と底部外面にヘラ削り調整が行われている点である。底部ヘラ削りは、底部外面の中央を削った後に、外縁側をほぼ横方向に分割して削り落としている。口縁端部の削りは、端部外面側を２段に分けて面取りするように施されている。類例に乏しいが、法量的には瓦器皿よりもひとまわり大きいことや、回転ナデとみられる調整痕が観察できることから、須恵器（十瓶山窯産か）小皿としておきたい。

東播系須恵器小皿（1986～1991）は、内弯する口縁部と、やや突出気味の糸切り底をもつ。神出窯Ⅰ期（兵庫県教委199)、森田稔氏分類（森田1995）のⅠ－２段階に相当する。1992は東播系須恵器である可能性も考えられるが、底部から直線的に外傾する口縁部の形態がやや異質であり、他の生産地製品である可能性もあろう。

京都系土師器皿（1993～2004）には、口径7.8～8.8cmを測る小法量のもの(1993～2002)と、口径15.4～16.4cmを測る大法量のもの（2003･2004）の２者がある。所謂「て」の字状口縁の皿は出土していない。1993～2002は、口縁部外面に横ナデが１段施され、端部が明瞭に外反する。1993の外面には、底部から口縁部に至る縦方向の接合痕がみられる。京都（平安京）では形態・法量ともに近似したものを見出すのは難しく、乙訓・摂津など京都近郊の淀川流域で類例をみることができる。2003は底部から屈曲して直線的に外傾する口縁部をもち、端部には外傾する平坦面（弱い凹面）がある。2004は、丸く先細りに収まる口縁端部

産地	産地・種別	器種	破片数（点）	比率（%）
在地産	土師質土器	皿ＢⅠ	5	0.19
		皿ＢⅡ	5	0.19
		皿ＢⅢ	283	10.95
		皿Ｃ	2	0.08
		皿（型式不明）	7	0.27
		杯ＤⅡ	84	3.25
		杯Ｅ	1	0.04
		皿or杯	97	3.75
		椀（西村型）	11	0.42
		椀（非西村型）	61	2.36
		杯or椀	28	1.08
		足釜Ａ	1	0.04
		鍋Ａ	5	0.19
		鍋釜脚部	3	0.11
		器種不明	17	0.65
	土師器	甕Ｅ	91	3.52
		甕（型式不明）	303	11.73
		羽釜Ｃ	2	0.08
		竈	67	2.60
		器種不明	1	0.04
	黒色土器	椀（西村型）	105	4.10
		椀（非西村型）	1	0.04
	須恵器	椀ＡⅡ（西村型）	14	0.54
		杯Ｂ	1	0.04
		鉢Ｅ	36	1.40
		壺Ｃ（広口瓶）	8	0.30
		甕Ｃ	27	1.04
		土錘	1	0.04
		平瓦	1	0.04
搬入	和泉型瓦器	皿	40	1.54
		椀	1,057	40.91
	楠葉型瓦器	椀	19	0.73
	楠葉型黒色土器	椀	1	0.04
	東播系須恵器	皿	7	0.27
		椀	23	0.89
		捏鉢	11	0.42
		甕	2	0.08
	東海系無釉陶器	椀（山茶碗）	1	0.04
	京都系土師器	皿（大）	7	0.27
		皿（小）	18	0.70
	吉備系土師質土器	椀	80	3.10
		鍋	17	0.65
	陶器（備前？）	壺	1	0.04
	白磁	Ⅱ類碗	1	0.04
		Ⅳ類碗	25	0.97
		Ⅴ類碗	3	0.11
		型式不明	1	0.04
	青磁（同安窯系）	Ⅰ類碗	1	0.04
	青磁（龍泉窯系）	Ⅰ4a類碗	1	0.04
合　計			2,584	100

第２表　SXb16 出土遺物一覧

をもつ。

瓦器皿（2005 ～ 2030）は、やや深手の一群（2005 ～ 2019）と浅手の一群（2020 ～ 2030）の２者に大別できる。深手の一群は、口縁部外面の横ナデ調整がさほど強く施されないため、口縁部・底部が内弯して連続的に延びる。見込みのヘラ磨きは、平行線状のものが多い（2005・2006・2011・2014・2015・2017・2018）が、斜格子状のもの（2009）もみられる。2009 は、底部から明瞭に屈曲する薄手の口縁部をもつ、やや特異な形態である。浅手の一群は、口縁部外面の横ナデ調整が概して強く施されるため、底部・口縁部の境が明瞭に屈曲し、口縁部は外反するものが多い。底部の良好な遺存例に乏しいが、口縁部内面と底部内面のヘラ磨きは連続しているものが大半であると考えられる。深手の瓦器皿は尾上編年（尾上 1983）Ⅰ－３～Ⅱ－１期に、浅手の瓦器皿は同Ⅱ－２～Ⅲ－２期の瓦器椀に各々対応するものと考えられる。

土師質土器杯（2031 ～ 2041）の底部切り離し技法は、大半が回転ヘラ切り（Ｒ）であり、回転糸切りのものはごく僅かである。2031 は杯ＤⅡ－４型式である。直線的に延びる体部～口縁部をもち、口縁端部が肥厚気味に丸く収まる。2032 は口縁部付近が歪んでいるが、深手な形態から杯ＤⅡ－３型式と考えられる。底部ヘラ切り方向はＬ。2034 ～ 2038 は杯ＤⅡ－１型式である。底部から明瞭に屈曲し直線的に延びる体部と、外反気味の口縁部をもつ。2033・2039 は杯ＤⅡ－２型式である。底部から内弯気味に立ち上がる体部が特徴である。2041 は底部糸切りの杯ＥⅠ形式（ＥⅠ－２型式か）である。比較的硬質な焼成であり、糸切り底の小皿 1982 と共通する。

東播系須恵器椀（2042 ～ 2046）には、痕跡的に弱く下方に突出する平高台状の底部をもつもの（2042・2046）と、下方に全く突出しない完全な平底のもの（2045）の２者が存在する。森田編年Ⅰ－２期・神出窯Ⅰ期の所産であろう。

在地産と考えられる土師質土器椀（2047 ～ 2065）は、複数の系統から構成される。2047 ～ 2051 は、胎土・形態・技法から十瓶山窯（西村遺跡）産の可能性をもつものである。2047 ～ 2049 は比較的精良な胎土であり、黒色土器Ａ類椀の焼成不良品の可能性もある。2047 は内面にハケ目（コテ当て痕）が施され、外面にはロクロ目を潰すように回転ヘラ磨き調整がみられる。2048・2049 の見込みは平行線状にヘラ磨きされる。2050・2051 は、砂粒を若干含んだやや粗質な胎土をもつ。いずれも内面には、ハケ目（コテ当て）が認められる。2050 は外面にヘラ磨きがなく、ロクロ目が顕著なものであり、中世Ⅲ期（西村遺跡５期）の須恵器椀

ＡⅡの焼成不良品の可能性もある。2051は、高台外側の体部外面下半に回転ヘラ削りが施される。

2052～2065は、非十瓶山窯（西村遺跡）産と考えられる土師質土器椀である。2052・2053は、器面が灰白色に発色する均質で精良な胎土をもつ。吉備系土師質土器椀の可能性もあるが、2053の高台基部には高台貼り付けに伴う圏線（沈線）が認められ、製作工程におけるロクロの使用が窺えることから、在地系譜として捉えた方がよいと思われる。2053の外面には分割磨き（４方向か）が施される。

2054・2055は、橙色系に発色する硬質な焼成が特徴的なものである。器体の浅い2054は外面のみにヘラ磨きがみられ、深手の2055には内外面に比較的細かなヘラ磨きがみられる。2055の外面の磨きは回転ヘラ磨きの可能性がある。

2056は、浅橙色系の精良な胎土をもち、内外面のほぼ全面をヘラ磨き調整するものである。

2057・2058は、褐色粒（シャーモットか）を多く含む粗質な胎土をもつ。2058の高台は断面逆台形に太く踏ん張るのが特徴である。

2059～2064は、石英粒などを多く含み淡褐色系に発色する粗質な胎土をもつものである。形態・技法ともに必ずしもまとまった一群とはいい難いが、2061・2063・2064のように口縁端部が肥厚して外反するものが多い。外面には４分割磨きが施され、2063・2064は内面も密に磨き調整される。しかし、器面の各所に大粒の砂粒が露出し、その周辺が小亀裂となっているため、一見するとさほど丁寧な仕上がりの印象を受けない。

2065は、砂粒を極めて多く含む、煮炊具的な胎土をもつ。器体も全体に歪であり、高台の貼付位置は外面中央よりもずれた箇所にある。内面には、コテ当てというよりも煮炊具内面調整に近似した、粗雑な板ナデ調整がみられる。

西村型黒色土器椀（2066～2093）は、椀ＡⅡ－４型式に分類できるものが大半を占める。全体の形状がわかるのは少ないが、2080は径高指数33.1、2081は径高指数36.5と若干の幅がある。しかしいずれの個体も、口縁部は体部から連続的に内弯して延びており、特に直立傾向が強いものではなく、ＡⅡ－１～３型式とは異なる。外面には、口縁部から高台直近の体部下半まで、回転ヘラ磨き調整が密に施されている。内面は体部に４分割磨き、見込みに平行線状磨きが施される。器面の遺存状況は良好なものが多いが、内面のヘラ磨きや高台畳付が摩滅したような形跡を認めることはできない。2084は高台が貼り付け部分で剥離しており、器面の遺存状況は良好なものが多いが、内面のヘラ磨きや高台畳付が摩滅したような形跡を認めることはできない。2084は高台が貼り付け部分で剥離しており、剥離部分にロクロ回転を利用した圏線（沈線）がみられる。また高台は外側に踏ん張った形状のものが多いが、これは貼り付け後の回転ナデ調整が外面は強く、内面は弱いことに起因するためであろう。2085・2088・2089・2092は、見込みのヘラ磨きが複数方向に施される。

2094は、非西村型の黒色土器Ａ類椀である。西村型椀よりも器壁が薄く、外面には分割磨き（４方向か）が施される。

西村型須恵器椀（十瓶山窯産須恵器椀：2095～2101）は、黒色土器椀よりも後出的なＡⅡ－６・７型式が多く、ＡⅡ－４類ないし５類とみられる個体（2096）は少ない。

吉備系土師質土器椀（2102～2114）は、山本分類（山本1992）Ａ１類（2102～2105・2108・2110・2111）とＢ１類（2106・2107・2109・2112～2114）がある。形態に若干のばらつきがあるが、口縁端部が丸く肥厚・外反して玉縁状を呈するものが多い。2107は、内面に板ナデ（コテ当て）を施しているが、通常のコテ当てよりも乾燥が進んだ段階で施されたものとみられ、器面は幅広のヘラ磨きに近い質感になっている。

土師質土器椀（2115）は、吉備系土師質土器椀に似た淡黄白色の精良な胎土をもつ。口縁部は小さいが明瞭に玉縁状に肥厚し、内面は板ナデ（コテ当て）、外面はヘラ磨きが施される。白磁Ⅱ類椀の模倣形態を意識している可能性が強い。吉備系土師質土器椀の可能性もあるが、類例に乏しい。

山茶碗（2116）は、断面三角形の低い高台をもつ。体部は外傾度が強く、底部から漸移的に立ち上がる。高台貼り付け位置付近の器壁が最も分厚いことが特徴である。やや粗質の胎土であり、南部系山茶碗５型式に相当するものと思われる。見込み付近は摩滅している。

楠葉型瓦器椀（2117～2134）には、口縁部直下の器壁が厚い橋本編年（橋本1980）Ⅰ－３期～Ⅱ－１期に相当するもの（2119・2121～2124・2127～2129）と、器壁の厚さに大きな変化がみられないⅡ－２期に相当するもの（2117・2118・2120・2125・2126・2130）がある。幅１㎜前後の細いヘラ磨きが内面はほとんど隙間なく、外面は若干の間隔をあけて施されている。口縁端部よりやや下がった内面には沈線がみられるが、沈線の輪郭はヘラ磨きに潰されているため、器面の最終調整に先行していることがわかる。

楠葉型黒色土器Ｂ類椀（2135）は、体部の細片である。内外面に極めて密なヘラ磨きが施される。

和泉型瓦器椀（2136～2229）は、器体が深手で内外

面のヘラ磨きが密な尾上編年Ⅰ－３期～Ⅱ－１期に相当するもの（2136～2190）と、やや浅手でヘラ磨きの間隔が粗いⅡ－２期～Ⅲ－１期に相当するもの（2191～2229）がある。後者でもⅢ－１期にまで下る個体は僅かであり、全体としてはⅡ－３期以前といえる。2136～2190には、体部外面の分割磨き調整が明瞭な2138・2148・2149・2160・2188があるが、多くは連続的で分割が不明瞭な磨きである。体部外面の指頭圧痕の輪郭は、これらの磨きによって潰されるが、全面にわたって密に調整されるものではないため、磨き調整にもかかわらず器面の凹凸は平滑化されていない。なおヘラ磨きに先立ち体部外面下半をヘラ削りしたものはない。2138外面には、籾圧痕が認められる。2146は直線的に外傾する口縁部～体部をもつが、内外面のヘラ磨きが細く密なため、Ⅱ－１期以前の所産と考えられる。2149は連続的に折り返すようなヘラ磨きを外面に施す。2160は、体部外面に分割磨き（４分割か）を施した後、口縁部外面に横方向のヘラ磨きを行う。内面は、体部に重複部分の広い分割磨き（４分割か）を施し、その後に口縁端部付近に横方向の磨きを施す。ヘラ磨きはいずれも細く比較的密である。また、縁部内端面は内傾するが、沈線は認められない。2164内面のヘラ磨きは、大きく弯曲して折り返す痕跡的な分割磨きである。2178の底部外面（高台内側）には、「×」形の刻線がみられる。2186は、体部内面と見込みのヘラ磨きが連続的であり、外面の磨きも分割性に乏しい。2187は、見込みに平行線の折り返しが顕在化したとみられる連弧状のヘラ磨きが施される。

2191～2229には、やや深手な形態もみられるが、ヘラ磨きの間隔は粗く、分割性は完全に失われている。特に外面では省略傾向にあるため、2136～2190とは明瞭に一線を画するものである。2194は外面にヘラ磨きがなく、内面も体部磨きは極めて粗い。見込みには螺旋状磨きがあり、暗文化している。2208～2210はかなり浅手の形態であり、内面のヘラ磨きは体部と底部で連続的に一体化している。2215の内面は、折り返しによる連弧状のヘラ磨きが直交して格子状を呈する。2217は平坦な底部から大きく弯曲して直線的に立ち上がる体部をもつ。やや深手な形態であるが、ヘラ磨きは粗雑である。2221も同様な形態であろう。見込みの磨きには，隙間のあいた平行線状（2222・2226）や、斜格子状（2225・2229）など、明らかに暗文化したものが存在する。

白磁皿（2230）は外反する口縁部と、断面台形に踏ん張る高台をもつ。釉はやや褐色がかった灰白色を呈しており、見込み部分は輪状に掻き取られる。白磁皿Ⅲ１類（横田・森田1978・山本2000）にあたる。 白磁碗（2231～2250）には、薄手の玉縁状口縁をもつⅡ類碗（2231）と、厚手で幅広の玉縁状口縁をもつⅣ類碗（2232～2246）、外反して先細りに収まる口縁端部をもつⅤ－１・２類碗（2247～2250）がある。Ⅳ類碗の口縁部には、①玉縁状の縁帯下端が厚く肥厚し，上端部が細身で断面三角形を呈する2232～2234・2239、②縁帯中央付近が厚く肥厚して外面側が丸く膨らむ2235～2238・2240・2241・2243、③縁帯下端が体部から連続的に肥厚し、やや直線的で細長い縁帯にみえる2242・2244などのバリエーションが認められる。底部は高台内側の削り込みが浅く、内面に沈線を伴うことからⅣ－１ａ類に分類できるものである。

青磁碗（2251・2252）には、同安窯系のⅠ－１ｂ類碗（2251）と、龍泉窯系のⅠ－４ｂ類碗（2252）がある。青磁は白磁に比して極めて少量である。

十瓶山窯産須恵器捏鉢（2253～2267）には、口縁部が外反する鉢Ｄ－４型式がごく僅かに認められる（2253）が、大半は体部から口縁部まで直線的に連続し、端部は肥厚しない鉢Ｅ－１類（2254・2255・2258～2262・2264～2267）で、少量の鉢Ｅ－２類（2256・2257・2263）もみられる。焼成が硬質な須恵質を呈するものはなく、いずれもやや軟質な瓦質焼成である。2258・2265～2267外面には、回転ナデによって消去された格子叩き目が認められる。2258・2259・2266底部外縁には、ヘラ削りないし強いナデが施される。2258～2263・2267内面には、回転ナデに後出する横方向の板ナデ調整がみられる。以上から想定される製作工程は、叩き成形→回転ナデ→内面板ナデ→底部外縁削りという順になろう。また2254・2257内面には横方向のヘラ磨きが認められるが、須恵器に磨き調整を施すのは、中世十瓶山窯で散見される技法である。

十瓶山窯産須恵器鉢（2268・2269）は、器面のほぼ全体にわたってヘラ磨きが認められる。2268は盤形の浅い器体をもち、口縁端部には水平方向の平坦面がある。内外面は、口縁部～体部が分割磨きされており、底部外面も平行線状（分割か）に磨かれて離れ砂痕を消去している。焼成は堅緻で須恵質に近い瓦質であり、磨かれた器面には光沢がある。類例を西村１号窯跡灰原出土須恵器に見出すことができる。2269は、焼成不良で土師質を呈する。体部の外傾度が弱いが内外面が回転ナデ調整され、内面下半に板ナデ、底部外縁に削りが施されることから、形態的には鉢Ｅ形式と同一と考えられる。これらの調整技法後に内外面をヘラ磨きするが、磨きの幅が狭く、平滑な磨き面とともに擦痕が明瞭であることが観察される。このことから、通常よりも器面の乾燥が進行した段階でヘラ磨きが施されたことが想定でき、2268とは異なるイレギュラーな磨

きと考えられる。

東播系須恵器捏鉢（2270～2276）は、口径20cm未満の小型品(2270)と、通常の法量の個体(2271～2276)がある。2270は大法量の椀の可能性もあるが、口縁端部が内弯気味に丸く肥厚し、通常の椀とは異なる。2271～2276は、森田編年Ⅰ－1段階に相当する2271、Ⅰ－2段階に相当する2272～2276がある。

十瓶山窯産須恵器広口瓶（2277～2282）は、壺Ｃ－2型式にあたるものである。口縁端部が短く上方にツマミ上げられてシャープに収まる。2281をみると肩部の張りは弱く、体部最大径が体部中位のやや上側に求められる。2280は小型の壺Ｂである可能性もある。

十瓶山窯産須恵器甕（2283～2288）は、口縁部が短く外反し外傾する平坦面をもつ甕Ｃ－3型式（2283)、直立気味に細長く立ち上がる口縁部をもつ甕Ｃ－1型式（2284）がある。2285は器面が鱗状に細かく剥離しており、口縁端部の形状は明確でない。なお、2285・2286はレイアウト後の整理作業で埋甕遺構SPb807出土であることが確認されたため、訂正しておく。

東播系須恵器甕（2289・2290）は、短いが強く外反する口頸部をもつ。2290は体部中位のやや上に最大径があり、丸底である。口頸部外面には、右上がりの平行叩き目、体部外面には横位で綾杉状を呈する平行叩き目、底部外面には不定方向の平行叩き目が認められる。内面は板ナデ調整によって当て具痕を消去する。

土師器羽釜（2291・2292）は口縁部が短く、鍔部が横方向に長く延びるＣⅠ－2型式である。

土師器甕（2293～2315）には、口縁端部が器壁に直交したやや窪んだ平坦面をもつ甕ＥⅡ－1型式(2293・2295～2302・2304～2306・2308・2309・2311～2315)、丸味をもった端部をもつ甕ＥⅡ－2型式（2294・2300・2303)、口縁部端面が垂直方向に直立する甕ＥⅠ型式（2307・2310）がある。いずれの個体も口頸部外面から体部外面にかけて縦ハケ、口縁部外面に横ナデないし横ハケ、頸部外面に指頭圧痕、内面に横方向の板ナデ調整がみられる。外面調整の切り合い関係は、縦ハケ（体部・口縁部）→指頭圧痕（頸部）→横ナデ・横ハケ（口縁部）の順である。また内面の板ナデは、体部→口縁部の順に施されているようである。胎土は石英・長石・雲母粒を多く含んでおり、土師器竈に近似した特徴をもつ。

2316・2317は、体部が外傾しており土師質土器鍋と考えられる。2316は鍋としては普遍的な形態であるが、2317は分厚い器壁や粗質な胎土から土師器甕に共通した要素をもつ。

吉備系土師質土器鍋（2318～2320）は、口縁外端部が横方向にツマミ出されて若干肥厚する。全体の形状は不明だが，2320はやや浅手であり、山本編年Ⅲ－2期頃の所産と考えられる。

土師器竈（2325～2330）は、焚口に庇を伴う伝統的な形態の2325・2326・2330が主体であるが、土師器甕ＥⅡ－2型式の体部に開口部を穿孔して焚口とした特異な形態がある（2327)。煤の付着状況から、甕口縁部にあたる部位に煮炊具をかけたことが推測される。

須恵質平瓦（2323・2324）は、凸面に粗い縄目叩き目、凹面に布目がみられる。2323の縄目叩きは「叩き締めの円弧」を描く。これらは、讃岐産瓦の系統である。

以上、各器種について報告してきたが、年代について整理しておく。まず搬入品であるが、圧倒的に多い和泉型瓦器椀は尾上編年Ⅰ－3期～Ⅱ－3期の幅に収まるものが多く、少量Ⅲ－1期まで下るものがある。したがって大勢としては、11世紀末葉～12世紀第3四半期にあたるといえよう。楠葉型瓦器椀は、橋本編年Ⅰ－3期～Ⅱ－1期であり、和泉型瓦器椀の示す年代幅のほぼ前半にあたる。東播系須恵器椀・捏鉢は、森田編年Ⅰ－2期が主体である。輸入磁器は、山本氏のＣ期（11世紀後半～12世紀前半）とＤ期（12世紀中葉～後半）の標準磁器が認められるが、前者が多い。在地土器では、西村型黒色土器椀が西村遺跡3期、西村型須恵器椀が西村遺跡3期～5期にあたる。土師質土器杯・小皿は、西村遺跡3期が主体で4期も少量存在する。以上を総合すると、SXb16出土土器は高松平野の中世Ⅰ－3期（12世紀前半）を主体として、一部Ⅱ－1期（12世紀後半）まで及ぶと考えられる。

11. 攪乱出土遺物

7区攪乱（図版192）　2331～2346は、7区Ａ13グリッドの攪乱(調査時SXK01)出土遺物である。2331～2345は、陶器坩堝である。内弯して立ち上がる口縁・体部をもつ、深手なコップ形の器体をもつ。法量は、極小型（2331・2334・2335・2337)、小型（2332・2336・2338)、中型（2333・2339・2340・2342～2344)、大型（2341・2345）の4規格あるが、大型でも器高5cmを僅かに超える程度である。胎土は砂粒をさほど含まず灰白色に発色するが、色調については二次的な被熱の結果である可能性もある。2339・2341・2345の底部外面には、回転糸切り痕が認められ、器面の顕著なロクロ目と相俟って、ロクロ成形であることがわかる。2333・2335・2341・2343には、内面下半を中心に鉱滓状の付着物が顕著に認められる。また2332外面には、底部から口縁部に向かって流れた鉱滓が認められる。鉱滓には茶褐色の錆がみられるものがあるため、

おそらく鉄が含有されていると考えられる。なお、大半の個体には鉱滓とは異なる、自然釉状の物質が薄く付着している。高温で器面が融解した可能性があろう。2344は、体部下半の一部が融解して、穴が開いている。

2346は、肥前系磁器鉢蓋である。口縁部は露胎であり、外面には型紙刷りによる微細な唐草文が施される。

これら坩堝を主体とした遺物は、第1面遺構を切り込むことから、明治期以降の所産と考えられ、あるいは監獄署に伴うものであるかもしれない。

7区攪乱（図版192）　7区A13グリッドの攪乱（調査時SXK02）出土遺物である。2347は青磁鉢である。釉が分厚く掛けられ、高台畳付は釉剥ぎされる。2348は京・信楽系陶器花生である。直方体の器体をもち、底部四隅に脚部が削り出される。外面には白・青・緑により著しく盛り上がる上絵付けが施されている。出土箇所から時期を特定するのは困難であるが、理兵衛焼の可能性もあろう。

8A区攪乱（図版192・193）　2349・2350は陶器汽車土瓶である。口径が大きく体部の張りが弱い器体をもち、注口部は斜め上方へ直線的に延びる。京・信楽系陶器に似た胎土・釉調である。2349側面には鉄釉で「多度津」「たどつ」と書かれ、2350側面には「廣島」「ひろしま」と書かれる。

2351は土師質土器焜炉である。胎土中に目立った砂粒は含まれないが、空隙の多い胎土をもっており、他の在地土器とは異なる。底部外面には離れ砂の痕跡がみられ、外型成形と考えられる。焚口の側面には「青又」刻印が認められる。2354は漳州窯系磁器の赤絵皿である。

8D区撹乱（図版193）　2356・2357は高台内に墨書を伴う京・信楽系陶器碗で、2360も同様に墨書を伴う瀬戸・美濃系陶器碗である。いずれもSKb62ないし63に伴う可能性がある。2359は高台内に「粟田」刻印をもつ京・信楽系陶器碗。2361・2362は源内系の陶器皿である。2368は瓢箪形の軟質陶器瓶（花生）で、頸部に結び目を伴う紐の意匠をあしらう。

第2節　瓦

瓦は各遺構・整地層から多量に出土した。ただし平・丸瓦に関しては、既述のとおり遺存状況や刻印の有無などによって発掘現場で選別を行ったため、本来の数量ではない。また、資料提示の方法としては、各遺構単位での組成を提示した上で、全体の傾向を把握することが望ましい。しかし瓦は、陶磁器以上に使用年代が長期に及ぶことは稀でなく、製作段階・使用段階・廃棄段階の3つの段階で異なった組成をもつことを念頭に置く必要がある。また、攪乱出土の個体も多く、遺構単位のみでは拾えない型式が存在する。そこで以下では、文様を主体としたバリエーションの提示を行い、各々の出土層位について記述することにした。このような記述体裁のため、同笵関係の確定した種別と報告番号を併記することとした（例えば「軒丸瓦1（2376）」など）。

なお、各遺構・整地土・撹乱での出土状況については、CDに収載した一覧表を参照されたい。

1. 軒丸瓦（図版194～235）

1. 1. 概要

837点を分類対象とした。これらの瓦当面の文様を、同笵関係を念頭に置いて277種に分類した。巴文の変形した草文状の意匠をもつものが1種存在するが、他の276種は全て三巴文（右巻き76種・左巻き201種）で構成される。巴文の右巻き・左巻きは、巴頭から巴尾部へと延びる方向で記述している。三巴文には、周辺に珠文を伴うものが265種、珠文を伴わないものが11種ある。

上記作業を踏まえて277種を諸属性から分類することを試みた。資料整理の当初では、巴の巻き方向（右巻き：R、左巻き：L）と珠文の数（8～24）を組み合わせ、暫定的な分類案を作成した。しかし全点の分類が終了した時点で、珠文数は全ての層位・遺構面を通じて12個を主体とすることが明確になり（佐藤2001a）、それのみでは形式設定の有効な属性とはなり得ないことがわかった。

そこで、珠文・圏線の有無と巴部の頭部・尾部形状を大区分（形式）の指標として、改めて分類作業を行った。まずは三巴文の周囲に珠文を伴う一群と、珠文を伴わない一群に大別した。さらに前者を、圏線の有無と巴尾部の連続状況から区分し、その上でそれらを巴頭部の形状（鉤形・丸く小さい・丸く大きい）と、巴尾部の長さ（長い・短い）という2つの属性の組み合わせで細分し、それらをより近似した一群で細別した。巴頭部の大小はあくまで相対的な区分である。また巴尾部の長短は、巴尾部長（巴頭部の括れから巴尾先端までの円周上の長さ）が1周の25％を基準として、それ未満を「短い」とした。ただし、巴の巻き方によっては、巴尾部長25％未満のものも「長い」とした。

①瓦当と丸瓦の接合方法と、②瓦当裏面の調整の記述は、佐川正敏氏の分類（佐川1989）に拠る。略述し

ておくと、①はA：「瓦当成形粘土・接合粘土が厚く、丸瓦の先端が瓦当に近い位置にあるもの」、B：「瓦当裏面の丸瓦接合位置は軽く指ナデするだけのもの」、C：「Bの後、広端にキザミかカキメをつけるもの」、D：「Cに加えて瓦当裏面にもキザミかカキメをつけるもの」の４者である。②はA：「ナデが雑で丸瓦凹面寄りの瓦当接合粘土を平坦にせず、瓦当裏面の顎の縁辺が丸みをもつもの、B：「横方向主体のナデで裏面全体を平坦にし、顎も角張るもの」、C：「調整の最後に顎の円周に沿うナデを加えるもの」の３者である。今回報告資料はCのみであるが、細分可能である。すなわち、C１：斜め～横方向の強いナデ調整を施した後に顎周辺の円周をナデるもの、C２：弱いナデ調整後に顎周辺の円周をナデるもの、C３：指オサエ後に調整を経ずに顎周辺の円周をナデるもの、の３者である。

また、今回報告する軒丸瓦の丸瓦部素材の切断方法は、軒丸瓦１に糸切り法（コビキA）の可能性がある他は、全てコビキ法（コビキB）である。瓦当面の剥離材は、森田克行氏分類（森田1984）を参照した。ａ１は砂、ａ２は粘土粉、ｂはキラコ（雲母粉）である。ただしａの区分は困難な場合もあった。ｂは雲母粉とは異なる鉱物（石英か）の使用が大半であるが、これもｂとした。この他、笵傷や各法量、出土層位・遺構については、特記した以外は観察表を参照されたい。

1. 2. 軒丸瓦Ⅰ類（軒丸瓦１：2376）

内区と外区との間に圏線があり、さらにその内側の巴尾部が相互に繋がり圏線状をなすものである。軒丸瓦１（2376）は、巴頭部が鉤形を呈しており、そこから漸移的に細くなった巴尾部が延びる。巴尾部断面は三角形で高く隆起する。瓦当面径はかなり大振りである反面、内区指数（内区径／外区径）は0.77前後に及び、狭い周縁幅と相俟って内区が相対的に大きくみえる。珠文が小振りで14個と多いのも、これと関連しよう。瓦当面の剥離材は、砂粒の目立つａ１である。胎土は砂質気味である。接合粘土上縁には、丸瓦凹面のカキ目が転写された突線が認められ、突線は瓦当成形粘土までは連続していない。また同笵品でも、丸瓦前端凹面にカキ目が認められる（ＣＤ版写真参照）。これらから、瓦当接合法Aと考えられる。また瓦当面裏面には、回転糸切り痕が認められる。瓦当裏面調整はＣ２である。出土最古層位は第３・４面であるが、本来は第６面の中でも最古に位置付けられる個体であろう。

1. 3. 軒丸瓦Ⅱ類（軒丸瓦２～25：2377～2400）

内区と外区を画する圏線はないが、巴尾部が繋がり全体としては圏線状をなすものである。巴頭部・尾部の形状で３種に細分される。

軒丸瓦２～６（2377～2381） 巴頭部が鉤形で巴尾部の長いものである。巴頭部は近接して相対する。頭部側の巴尾部の巻きが強いが、隣接する巴尾部と接する付近から巻きが緩やかになる。内区指数（内区径／外区径）は0.63～0.73であり、Ⅰ類同様に内区が大きくみえる。珠文数は軒丸瓦１よりも多く、16～24個に及ぶ。

軒丸瓦2･3は、巴頭部が小振りで細身であるが、軒丸瓦5･6は頭部の肥大化が顕著である。特に軒丸瓦６は、大きさや形状が各巴頭部で異なる。珠文の配置も、軒丸瓦２～５ではほぼ一定間隔であるが、軒丸瓦６では不均等な間隔である。以上から、①巴頭部が細身で珠文の配置も一定間隔の軒丸瓦２・３（軒丸瓦４もか）、②巴頭部が均等に肥大化して珠文配置も一定間隔の軒丸瓦５、③巴頭部が不均等に肥大化し珠文配置の一定しない軒丸瓦６の３者に括ることができる。

技法的には、瓦当面の剥離材はａ１が多く、胎土は砂質気味である。また周縁は、剥離材の顕著な痕跡が認められ、外側での成形・調整も粗いため、歪みの大きい粗雑な作りにみえる。瓦当接合法は、軒丸瓦3･6がAで、軒丸瓦５がBである。ただし、軒丸瓦５での接合粘土は極めて薄く、丸瓦接合後にさらに補充粘土を入れて瓦当裏面を形成するため、Aに近いといえる。また、軒丸瓦３の瓦当裏面には、回転糸切り状の痕跡が認められる。丸瓦の接合位置は、瓦当の低い位置にあり、軒丸瓦2･3では上縁が反り返る。なお、瓦当裏面調整は全てＣ１である。

出土最古層位は、軒丸瓦２が第６面である以外は、より上位層でばらつきがある。しかしこれは、軒丸瓦３～６が各１点しか出土していない資料的制約によるものと考えられる。本来は第６面に伴うものであろう。

軒丸瓦７～９（2382～2384） 巴頭部が丸く小さく、巴尾部が幅狭で細長いものである。内区指数は0.56～0.60であり、軒丸瓦１～６よりも内区が小さくみえる。珠文径が1.0㎝を超え、珠文数が11ないし12個であるのも、内区の相対的な狭小さと関連しよう。これに反して巴長が長い（50％以上）のは、巴頭が小振りなことと、巴尾部の基部と先端の差異が少なく細長いことによる。いずれも近似した文様意匠であるが、軒丸瓦８は巴尾部同士が不整合に接続しており、歪んだ圏線状を呈する。軒丸瓦7･9は、均整のとれた圏線状の尾部を形成する。こうした２者の差異は、瓦笵の割付方法の違いを反映するかもしれない。

技法的には、瓦当面の剥離材は、剥離材の付着が少

なく比較的平滑なａ２であり、胎土は砂気の少ない粘質を呈する。周縁外側付近の調整はさほど丁寧ではないが、歪みは少ない。軒丸瓦7･8は瓦当成形法はＡとみられるが、軒丸瓦８は接合粘土が薄い。また軒丸瓦７は瓦当裏面調整がＣ２で、先行する指頭圧痕が顕著に遺存している。軒丸瓦８の瓦当裏面調整はＣ１である。

出土最古層位は軒丸瓦９が第６面で、他はより上位からの出土である。軒丸瓦９はSKb229出土であり、伴出した土器・陶磁器の内容からは混入は想定し難い。このため、これらは本来は第６面に伴うものと、一応見なしておきたい。

軒丸瓦 10（2385） 巴頭部が丸く小さく、巴尾部の基部がやや太いが長いものである。内区指数は0.63であり、軒丸瓦７～９よりもやや大きい内区をもつ。珠文径・数は軒丸瓦７～９と同様である。文様区の構成は軒丸瓦７～９に共通するようであるが、瓦当面の剥離材がｂ（キラコ）であること、また周縁幅が2.5cm と幅広であることが明確に異なる要素といえる。珠文の間隔は微妙に異なり、３＋３＋２＋２＋２というまとまりをもつ。

技法的には、瓦当成形法はＤである。瓦当裏面調整はＣ３である。

出土最古層位は第３面であるが、主体は第２面である。

軒丸瓦 11～22（2386～2397） 巴頭部が丸く比較的大きく、巴尾部が長いものである。内区指数は0.54～0.69であるが、大半は0.62以上であり軒丸瓦７～９よりも内区が広くみえる。珠文径は0.8～1.4cm を測り、珠文数は９～18（～20）個である。

軒丸瓦11は、幅広の巴尾基部をもち、圏線状の巴先端部へとやや不整合に連続している。軒丸瓦２～６に近い意匠といえよう。軒丸瓦13･17･19も同様である。軒丸瓦12は、巴尾基部から圏線状部分までが長いため、巴尾部が連続的に繋がる。巴頭部はやや大振りで先端が尖り気味である。軒丸瓦14～16･18･20～22は、彫りが浅くやや扁平な観のある巴文をもつ。軒丸瓦７～９に近い意匠といえよう。

技法的には、瓦当面の剥離材がａ１ないしａ２である。瓦当成形は、軒丸瓦11･12･16～19がＡである。また瓦当裏面調整は、軒丸瓦15･16がＣ１で、他はＣ２が多い。

出土最古層位は、軒丸瓦15･16が第６面で軒丸瓦11がⅤ層とみられる。軒丸瓦15･16は第６面の他に第５面からも出土していることから、第６面を上限として第５面にも使用されたことが窺える。他は第２面～第３面が多いが、軒丸瓦15･16と文様構成に大差が認められないため、やはり第６面（ないし第５面）に伴うものと捉えておきたい。

軒丸瓦 23～25（2398～2400） 巴頭部が丸く大振りで、巴尾基部が幅広だが尾部先端はやや不整合に細長く延びる。内区指数は0.64～0.66であり、比較的広い内区径をもつ。珠文径は0.9～1.1cm を測り、珠文数は11ないし12個である。巴頭部が大きいことや、尾部の基部側が幅広である点は、全体に新しい様相のようにもみえる。しかし、内区径が広く珠文が小振りであることは、比較的古い特徴といえよう。同笵を前提とした型式は３種存在するが、文様意匠は非常に近似している。

技法的には、瓦当面の剥離材はａ１ないしａ２である。瓦当成形法は、軒丸瓦23･24がＤで、軒丸瓦25がＡである。瓦当裏面中央のナデは弱く粗雑で、指頭圧痕がみえる。また軒丸瓦24では、対向する巴頭部の中央に陽刻の点が認められる。この陽刻点は、瓦笵に存在したことは明確であり、文様として表現されたとみるよりも、圏線状を呈する巴尾部先端の割付作業に伴うコンパスの支点と考えられる。

出土最古層位は、軒丸瓦23･24が第３面、軒丸瓦25が第１面である。第３面が本来の上限と考えられる。

1. 4. 軒丸瓦Ⅲ類（軒丸瓦 26～33：2401～2408）

内区と外区を画する圏線があるが、隣接する巴尾部は繋がらず、圏線に突き当たって終わるものである。軒丸瓦２～25との区分が難しい個体も存在するが、一応、圏線と巴尾部との接続が不整合であり、かつ圏線が優先するようにみえるものと規定した。巴頭部の形状で２つに分けられる。

軒丸瓦 26～32（2401～2407） 巴頭部が丸く小さく、巴尾部が細長く延びるものである。巴頭部は近接して対向する。内区指数は0.62～0.71であり、比較的広い内区を伴う。珠文径は0.8～1.1cm と小振りであるが、珠文数は12～14個にとどまる。このため、珠文の間隔が開いたようにみえる個体もある。いずれもよく似た意匠であるが、軒丸瓦26～30は巴尾部長が40～50％と長く、軒丸瓦31･32は33～36％とやや短い。瓦当面径は、14.5cm 前後（軒丸瓦26～29）と13.5cm 前後（軒丸瓦30～32）の２者に分けられるが、前者の中では軒丸瓦26が最も文様区径が小さい（すなわち周縁幅が広い）にもかかわらず、内区径は

他者と同様である。このため軒丸瓦26は、外区幅は最も狭いこととなり、必然的に珠文径も最も小振りになる。以上の諸点が、軒丸瓦26を最も古相にみせている要因であろう。

技法的には、瓦当面剥離材がａ１ないしａ２である。瓦当成形法は、軒丸瓦26がＡの可能性があるが、他者は明確でない。瓦当裏面調整は概ねＣ２であるが、軒丸瓦29･32ではナデられない箇所があり指頭圧痕がみえる。また軒丸瓦27では、瓦笵から外された後に瓦当面が強くナデられ、文様が潰れている箇所がある。しかし文様の鋳上がりは全体に良好で、圏線・巴尾部などの細い陽刻線も明瞭に表現されている。

出土最古層位は、軒丸瓦26が第６面で、他はⅡ層～第４面を上限とする。第６面に伴うのが明確な軒丸瓦26と他者では、文様構成に若干の差異が存在することは既述したが、このことからすると軒丸瓦27～32を第６面まで無理に引き上げる必要はないかもしれない。

軒丸瓦33（2408）　巴頭部が大きく、内側での頭部の括れが明瞭なため、やや鉤形に近い形状を呈する。巴尾部は細長い。内区指数は0.76に復元でき、最も内区の広い部類に属する。珠文数は18～20個と考えられ、珠文径が0.8cmと小振りなのは、狭い外区と珠文数の多さによるものであろう。瓦当面の剥離材はａ１である。瓦当成形法はＤだが、丸瓦接合後に薄く粘土を補充して瓦当裏面としている。また胎土中に大粒の砂粒を多く含んでおり、他者とは明らかに異質である。

出土最古層位は第６面である。

1. 5. 軒丸瓦Ⅳ類（軒丸瓦34～265：2409～2640）

内区と外区を画する圏線はなく、巴尾部同士も繋がらない一群であり、出土軒丸瓦の大半を占める。巴頭部の形状と巴尾部の長短で、５種に分けた。軒丸瓦34～233は、巴尾部が長く（巴尾長25％以上のものを基本）、軒丸瓦234～265は巴尾部が短いものである。また巴頭部の形状は、軒丸瓦34～46が鉤形を呈するもの、軒丸瓦47～144は小さく丸いもの、軒丸瓦145～265はやや大きく丸いものである。さらに巴文の細かな形状によって細別した。

軒丸瓦34～41（2409～2416）　かなり大振りな巴頭部をもち、内側の頭部の括れは強く内弯したＣ字形を呈する。巴頭部は、近接して対向する。巴尾部は、頭部に近い基部が強く巻き込み、外区に近くなると緩くカーブするようになる。内区指数は0.62～0.81であり、大半が0.7を超える広い内区を伴う。珠文径は0.8～1.2cmであり、径1.0cm以下のものが多い。また珠文数は14～20個であり、比較的小振りな珠文径に対応する。軒丸瓦34は内区指数が81と最も内区が大きく、珠文径は最小である。巴尾部の断面形態は三角形を呈する。文様の鋳上がりも明瞭である。一方、軒丸瓦35～41は、巴尾部断面が平坦に近い。軒丸瓦38は、珠文が大振りなものと小振りなものが交互に配される特徴的な意匠をもつ。軒丸瓦39の巴尾部は１箇所のみ、隣接する巴尾部に接している。また軒丸瓦40は鳥衾瓦であるが、文様の分類に主眼を置いたため、軒丸瓦に含めて提示した。

技法的には、瓦当面の剥離材はａ１もしくはａ２である。瓦当成形法は軒丸瓦34・37がＡ、軒丸瓦35・36がＤであり、軒丸瓦41はＢか。瓦当裏面調整は、いずれもＣ１である。

出土最古層位は、軒丸瓦38・39・41が第６面である。他はより上位層から出土しているが、これは出土点数が各１点という資料的制約に起因すると考えられる。文様構成・技法からは、本来は第６面に伴うと捉えて大過ないであろう。

軒丸瓦42～45（2417～2420）　やや大振りの巴頭部が内側へと明瞭に屈折するものである。このため巴頭部同士は、背面側が対向する。巴尾部は細長くみえるが、巴頭部が大きいため、より古相にみえる軒丸瓦42・43では巴長は28～31％に過ぎない。内区指数は0.6～0.68であり、軒丸瓦34～41よりも小さい。珠文径は0.9～1.6cmであり、12～14個を数える。軒丸瓦44の大粒の珠文は特徴的であるが、巴長は長い。あるいは復古調の個体であろうか。

技法的には、瓦当面剥離材はａ１ないしａ２であり、瓦当成形法は不明である。瓦当裏面調整は、軒丸瓦42・44はＣ３、軒丸瓦43・45はＣ１である。

出土最古層位は、軒丸瓦42･45が第６面で、軒丸瓦43が第５面である。軒丸瓦44は第１～３面であり、他者よりも上位層であるが、復古調ともとれる文様構成と関連があるのかもしれない。

軒丸瓦46（2421）　小振りで先端の尖った巴頭部が内側へ明瞭に屈折するものである。巴頭部が小さいので、巴尾部がやや幅広にみえる。

技法的には、瓦当面剥離材はｂ（キラコ）であり、瓦当成形はＤと思われる。瓦当部には厚味がない。瓦当裏面調整はＣ３で、指頭圧痕がみえる。

出土最古層位は、第２面である。

軒丸瓦47～58（2422～2433）　巴頭部が小さく丸いもので、基部と先端の幅が大差ない細長い巴尾部を

もつ。巴頭部は、腹面側が明瞭に括れる。内区指数は0.53～0.64で、やや狭い。珠文径は0.8～1.2cmであり、12個を主体として最大17個、最小8個と幅がある。軒丸瓦47は周縁幅が狭く、相対的に内区が広いが、珠文径がさほど小さくないため、内区指数は0.62にとどまる。軒丸瓦48は巴同士が平行して巻き込んでおり、相互の重複部分が多い。ただし三巴文は全体として均整のとれた円形をなさず歪んでいる。軒丸瓦49・50は、対向する巴頭部の間隔が広く、巴尾部も大きく巻き込む特徴をもつ。軒丸瓦51は軒丸瓦48に近い意匠だが、巴頭部の大きさや形状、巴尾部の巻き方、珠文の配置などが軒丸瓦48よりも均整がとれている。軒丸瓦53･56は特に巴尾部の彫りが浅く、文様の輪郭が不明瞭である。軒丸瓦57･58は珠文が8個と少なく、巴尾長も短い。

剥離材は、軒丸瓦47～50がａ1で、軒丸瓦51～58がａ2である。瓦当成形法は、軒丸瓦47・50・58がAとみられ、軒丸瓦48・49・54・56・57がDである。瓦当裏面調整は、Ｃ2である。

出土最古層位は、軒丸瓦48が第6面と最も遡り、軒丸瓦57が第5面でこれに次ぐが、他の多くはⅡ層ないし第3面である。軒丸瓦57は少ない珠文という特徴を考慮すると、第5面では遡り過ぎるように見受けられる。軒丸瓦57では第5面出土は9点中1点のみであり、逆にⅡ層出土が2点存在することを踏まえると、Ⅱ層すなわち第3面を本来の伴出面と捉える方がよいかもしれない。逆に軒丸瓦47は、本来は第6面まで遡る可能性があろう。軒丸瓦49･50は撹乱出土であるが、第3面よりも遡る可能性があろう。

軒丸瓦59～61(2434～2436)　丸く小さい巴頭部が内側に屈曲して、全体としては巴の巻きが急であるようにみえるものである。巴尾長は38～39％と比較的長く、幅狭の細身の尾部である。内区指数は0.58～0.7、珠文径1.1～1.2cm、珠文数12～14個である。

軒丸瓦59は、巴頭部が特に強く屈曲しており、巴尾基部の背面側同士が対向する。基部側の巴尾部の巻きは極めて強い。軒丸瓦60･61は、巴頭部の屈曲、基部側の巴尾部の巻き方が、軒丸瓦59よりも弱い。また内区も、より狭い。

技法的には、瓦当面剥離材はａ2と考えられる。瓦当成形は、軒丸瓦59にAの可能性を指摘できるが、他者は不明である。瓦当裏面調整はＣ2である。

出土最古層位は、軒丸瓦59が第3～6面、軒丸瓦60が第6面、軒丸瓦61が第5面である。軒丸瓦60は軒丸瓦51に近似した文様をもつことから、本来はより上位層に伴う可能性がある。同笵15点中、第6面出土は1点のみであり、それ以外では第3面を上限としており、軒丸瓦51の出土層位と一致する。

軒丸瓦62～67(2437～2442)　巴尾部先端が外側に向かって放射状に延び、基部から先端に向かって次第に細くなる巴尾部をもつものである。軒丸瓦2～9の圏線状の尾部を除いたような意匠でもある。内区指数は0.5～0.64であるが、大半は0.58以上で0.6前半台に集中する。珠文径は1.0～1.1cm、珠文数は12個主体で13個もある。また右巻きの多いことは、特に注目される事象といえる。軒丸瓦67は、内区指数･巴尾長ともに最小であり、巴は左巻きとなっている。

技法的には、瓦当面剥離材はａ2である。瓦当成形は軒丸瓦64･66がDで、他者は不明である。瓦当裏面調整は軒丸瓦65がＣ2である以外はＣ3である。

出土最古層位は、軒丸瓦64・67が第6面、軒丸瓦63がⅣ層の他は第2面～第3・4面を上限とする。軒丸瓦67は全13点中1点が第6面で、他は第3面を主体としてそれより上位層である。文様構成からみても、軒丸瓦67を第3面に位置付ける方が妥当であり、第6面出土は混入と思われる。軒丸瓦63･64についても大半が各々1点を除いて第4面から上位であることから、上限については検討を要する。

軒丸瓦68～70(2443～2445)　鉤形に近く腹面側が括れる小さな丸い巴頭部をもつ。全体に軒丸瓦62～67に近似するが、巴尾同士がかなり長く重複(平行)して延びる点が異なる。巴尾長は50～61％とかなり長く、巴頭部から漸移的に細く連続している。巴の巻き方向はいずれも右であり、頭部側の巴尾部の巻き込みが強い。内区指数は0.54～0.65であり、また周縁幅が狭い。珠文径は1.0～1.2cmとやや大きく、珠文数が9ないし11個と少ないのも特徴である。

技法的には、瓦当面剥離材は軒丸瓦68がａ1、他がａ2である。瓦当成形はDである。瓦当裏面調整は、軒丸瓦70がＣ2で、他はＣ3である。

出土最古層位は、軒丸瓦69が第4面、軒丸瓦70が第2面である。軒丸瓦68は撹乱出土だが、剥離材がａ1であることから最も遡ると考えられる。

軒丸瓦71～85(2446～2460)　丸く小さな巴頭部と、細く延びる巴尾部からなる。巴部は頭部・尾部ともに断面が低い台形であり、立体観に乏しい扁平な意匠である。巴長は26～44％で軒丸瓦68～70よりも短いが、尾部は細身であり、後述する軒丸瓦86～97よりも巴尾基部と先端との幅の差が少ないようにみえる。内区指数は0.47～0.63であり、0.55以上が主体であ

る。珠文径は0.8～1.0cm主体の小振りなものであり、珠文数は12個主体である。

技法的には瓦当面剥離材はａ２であり、瓦当成形法は軒丸瓦72～77・81・83はＤである。瓦当裏面調整は大半がＣ３である。

出土最古層位は、軒丸瓦78が第６面、軒丸瓦79が第５面である他は、大半が第４面より上位層から出土している。軒丸瓦78の第６面（SKb249）出土瓦は、巴尾部と珠文を繋ぐ笵傷がないため、図示した個体（第１面SKb52出土）よりも先行して製作されたことは明確である。しかし笵傷を伴わない個体は、第３面やⅡ層などでも認められ、特に第３面のSKb65では笵傷があるものとないものの２者が共伴している。このことから、笵傷の有無に時期差を見出すことは難しく、同笵18点中15点までが第３面以上の出土であることから、下位層での出土は混入と捉えておきたい。軒丸瓦79についても同笵３点中２点が第３面であるため、第３面を本来の帰属面と考えたい。

軒丸瓦86～97（2461～2472）　軒丸瓦71～85とほぼ同じ文様であるが、①巴頭部がやや大振りにみえ、②巴尾基部がやや幅広で先端に向かって先細りにみえ、③かつ珠文数が８～10個と少ないもの、を一括した。巴尾長は28～38％で、軒丸瓦71～85の巴尾長のやや短い領域と重複する。内区指数は0.48～0.60で、0.55以上が主体である。軒丸瓦95は、笵傷によって巴頭部同士が繋がったようになっている。

技法的には、瓦当面剥離材は軒丸瓦92・95がａ１、軒丸瓦87･90がｂであり、他はａ２である。瓦当成形法は、観察できるものは全てＤである。また瓦当裏面調整は、Ｃ３である。

出土最古層位は、第４面より上位に集中するが、軒丸瓦94・96は第５面（SKb130下層）からの出土である。後述（第２節９）するように、SKb130のまとまった瓦組成からすると、今のところこの出土状況を否定することは難しいが、なお検討の余地を残すといえよう。

軒丸瓦98～105（2473～2480）　内区指数0.41～0.50を測り、巴文径がかなり小振りにみえる一群である。巴文径が小振りなため、尾部長も短くみえるが、相対的な長さ（巴尾長）としては23～37％で、軒丸瓦86～97とさほど変わらない。ただし実長では巴尾部は短いため、巴頭部は相対的に大きくみえる。珠文数は８～10個と少なく、これに関連してか珠文径は1.1～1.4cmとやや大振りである。軒丸瓦98は瓦当径が若干大きい。軒丸瓦24と同様に、巴頭部の間（内区の中心部）に小さな陽刻点が認められる。

技法的には、瓦当面剥離材は判別できるものはａ２が主体である。瓦当成形法は、確認できるものはＤである。また、瓦当裏面調整はＣ３である。

出土最古層位は、軒丸瓦98がⅣ層であるが、他者で層位不明以外はⅡ層ないし第２面が多い。軒丸瓦98については、Ⅳ層すなわち第５面を本来の帰属面と見なせるかどうかは、微妙なところである。

軒丸瓦106～117（2481～2492）　巴頭部がやや大振りで、巴基部は太く巴尾部に向かって明瞭に先細りとなるもので、そのうち文様区に占める内区の割合が大きくみえる（内区指数0.55～0.66。復元値以外は0.58以上）一群である。珠文数は12個、珠文径は0.7～1.2cmを測り、特に1.0～1.2cmのものが多い。巴頭部の形状は正円形ではなく、尾部方向にやや間延びしたような楕円形を呈するものが多い。

技法的には、瓦当面剥離材は106～109・112・116・117がａ２、110・111・113～115がｂないしその可能性のあるものである。瓦当成形が観察できるものは、軒丸瓦113でＡの可能性が指摘できるものの、他はＤである。瓦当裏面調整はＣ３である。

出土最古層位は大半が第３面以上である。

軒丸瓦118～130（2493～2505）　上記した軒丸瓦106～117に近い文様構成であるが、内区指数が0.50～0.61（主体は0.55以下）で、三巴文径が相対的に小さくみえる一群である。また、瓦当面径が11.6～13.0cm（12.5cm以下が主体。復元値除く）であり、かなり小振りなものが多い。剥離材は、軒丸瓦125・130がａ２もしくはその可能性があるものだが、他は全てｂである。また瓦当成形法は、Ｄである。

出土最古層位は、大半が第２面よりも上位層であり、軒丸瓦121のみⅡ層（すなわち第３面）まで遡る可能性がある。明らかに軒丸瓦106～117よりも新しい様相をもつといえよう。

軒丸瓦131・132（2506・2507）　巴尾基部の括れがないか不明瞭なため、巴頭部と尾部が連続的に延びるものである。軒丸瓦131は巴長64％とかなり長く、巴尾部の重なりも多い。技法的には、瓦当面剥離材が軒丸瓦131でａ１、軒丸瓦132でａ２である。瓦当成形法は、いずれもＤである。瓦当裏面調整は、Ｃ３である。

出土最古層位は、軒丸瓦131が第５面で、軒丸瓦132が第２面である。軒丸瓦131は文様構成・瓦当面剥離材からみて、第５面を上限とすると捉えても大過ない

であろう。

軒丸瓦 133 ～ 137 (2508 ～ 2512)　やや大きく丸い巴頭部と、幅広の基部から細長い先端へ長く延びる巴尾部をもち、巴の断面が肉厚で高く明瞭に隆起するものである。内区指数は 0.56 ～ 0.65 前後と大きく、瓦当面径もやや大振りである。珠文径は 1.0 ～ 1.1cm 前後であり、巴文と同様に高く隆起する。

技法的には、瓦当面剥離材は軒丸瓦 133 がａ１、他がａ２である。瓦当成形法は、確認できるものは全てＤである。瓦当裏面調整は、軒丸瓦 133 ～ 135 がＣ１、軒丸瓦 136・137 がＣ２である。

出土最古層位は多くがⅡ層より上位であるが、軒丸瓦 135 のみ第５面出土(SKb130 下層)と大きく遡る。丸瓦の軒部への接合位置が低く、上面が反ることからも古い様相をもつといえ、第５面に位置付けて矛盾ないであろう。

軒丸瓦 138・139 (2513・2514)　軒丸瓦 133 ～ 137 と同様の文様構成と形態をもつが、巴断面はやや低く扁平な観のあるものである。内区指数は 0.60・0.66 と大きく、軒丸瓦 139 は珠文数 16 個で珠文径 0.9cm を測る。文様には一見、古い様相をもつようにもみえるが、瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形はＤであり、技法的には新しい要素を伴う。瓦当裏面調整はＣ３である。出土最古層位はⅡ層である。

軒丸瓦 140(2515)　瓦当面径に比して文様区径が小さいが、巴尾部は比較的細長い (45%) ものである。珠文は径 1.3cm と大振りである。瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形はＤである。瓦当裏面調整はＣ３である。出土最古層位は第１面である。

軒丸瓦 141 ～ 144 (2516 ～ 2519)　瓦当面径が小振りな上に、瓦当面に比して文様区径が小さいものである。相対的に巴頭部が大きく、尾部が短くみえるが、巴尾長は 25 ～ 39%であり、「短い」領域ではない。軒丸瓦 141 は、三巴文の形態（特に尾部の太さや断面形態・巻き方）が不揃いである。瓦当面剥離材はｂであり、瓦当成形法はＤである。瓦当裏面調整はＣ２ないしＣ３である。出土最古層位は、軒丸瓦 141 ～ 143 が第１面、軒丸瓦 144 がⅡ層である。文様・技法からみて軒丸瓦 144 をⅡ層まで遡らせることは困難であり、混入品と考えられる。

軒丸瓦 145 ～ 150 (2520 ～ 2525)　上記してきたⅣ類軒丸瓦は、巴頭部の小さな一群であったが、以下は巴頭部の大きな一群である。軒丸瓦 145 ～ 150 は、径 1.5cm を超える大きな巴頭部と、比較的細長い巴尾部（34 ～ 50%）をもつ。巴尾部の基部は狭く、細身にみえる。内区指数は 0.56 ～ 0.82 で 0.60 台が多い。珠文数は 12 ～ 16 個とやや多いが、軒丸瓦 149 (珠文径 1.3cm)・軒丸瓦 150 (珠文径 1.2cm) のように、必ずしも珠文径が小さくないものもある。また軒丸瓦 148 は、瓦当面径が 16.4cm 前後に復元でき、最も大振りな法量といえ、取り付けられた丸瓦も厚手の大型品である。

瓦当面の剥離材はａ２で、瓦当成形はＤである。瓦当裏面調整は、軒丸瓦 146・149 がＣ１、他はＣ２である。

出土最古層位は、軒丸瓦 145・149・150 が第６面で、軒丸瓦 146 が第３面である。いずれも本来は第６面段階にまで遡ると考えられる。

軒丸瓦 151 ～ 160 (2526 ～ 2535)　大振りな巴頭部と、基部の太く長さの短い（巴長 19 ～ 28%）尾部からなる。巴尾部の巻きは、基部側も先端側も大きく変わらないため、尾部先端が外側に向かって斜放射状に延びるようにみえる。内区指数は 0.58 ～ 0.65 主体で巴径の大きなものが多く、これに関連して珠文径は 0.8 ～ 1.1cm と小振りである。軒丸瓦 151 は、やや鉤形に近い巴頭部をもち、巴文の間に「建宗」と陽刻された文字を伴う。軒丸瓦 156 は、巴尾部先端が特に外側に開く傾向が顕著である。

瓦当面の剥離材は、軒丸瓦 151・156・157・159 がａ１もしくはその可能性をもつものであり、軒丸瓦 152 ～ 154・158 がａ２、軒丸瓦 160 がｂである。瓦当成形法の判断できる個体は少ないが、軒丸瓦 151 はＡと考えられ、軒丸瓦 159 はＤである。瓦当裏面調整はＣ２であるが、軒丸瓦 152 の瓦当裏面下半には、顎部円周のナデに後出するイレギュラーな強いナデによって器面が抉られる。

出土最古層位は、軒丸瓦 151・160 が第６面、軒丸瓦 156 が第５面である他はⅣ層より上位層である。軒丸瓦 151 は、高松城跡内堀や讃岐国分寺で同笵とみられる個体が表採されている。軒丸瓦 160 は第６面で取り上げられているが、剥離材ｂであることから到底そこまでは遡らないと判断される。

軒丸瓦 161 ～ 168 (2536 ～ 2543)　大振りな巴頭部とやや長め (巴尾長 30 ～ 44%) の巴尾部からなる。軒丸瓦 151 ～ 160 よりも巴の巻きは強く、巴尾部は全体として連続的に隣の巴尾部に近接する。巴尾基部は太いが、軒丸瓦 151 ～ 160 よりも長めにみえる。内区指数は 0.54 ～ 0.67 である。

瓦当面の剥離材は、軒丸瓦161～163がａ１で、軒丸瓦164～167がａ２、軒丸瓦168がｂである。瓦当成形法は、Ｄと考えられる。瓦当裏面調整は、軒丸瓦161・162がＣ１で、他はＣ３である。また丸瓦との取り付けをみると、軒丸瓦161は瓦当部のやや下がった位置に付けられるため、丸瓦前端上面が大きく反り返る。

出土最古層位は、軒丸瓦163が第５面、軒丸瓦165が第４面、軒丸瓦161・162・164・168がⅡ層、軒丸瓦166が第２面である。文様構成・技法からみて、軒丸瓦161は本来はより遡る層位に伴うとみてよいであろう。

軒丸瓦 169～174（2544～2549） 巴頭部の大きな一群の中では、相対的に小振りな巴頭部をもつものである。巴尾基部は太く、先端は細い。ただし巴長は22～36％と短めである。巴頭部側がより強く内側に巻き込んでおり、頭部はやや鉤形に近くみえる。瓦当面径は13.0cm前後が多く、若干小さい傾向にある。軒丸瓦169～173は、一見すると同文的ともいえる近似した文様構成であるが、珠文数に若干の差異を見出せる。軒丸瓦174は瓦当面径が大きく、珠文数も多い。別の一群とした方がよいかもしれない。

瓦当面剥離材は、軒丸瓦169・172・173がａ１かその可能性をもち、軒丸瓦170・171がａ２、軒丸瓦174がｂである。瓦当成形法は、観察できるものは全てＤである。瓦当裏面調整は、Ｃ２であるが指頭圧痕が認められるものが多い。軒丸瓦169・172は、丸瓦前端上面が若干反り返る。

出土最古層位は、軒丸瓦170が第５面、軒丸瓦169がⅣ層である他は、第３面より上位層出土である。

軒丸瓦 175～177（2550～2552） 軒丸瓦169～174に似るが、巴頭部～尾基部の巻き込みが強くなく、頭部が鉤形を呈さないものである。瓦当面剥離材は、軒丸瓦175がａ１とみられ、軒丸瓦176がａ２、軒丸瓦177がｂである。瓦当成形は軒丸瓦176がＤであり、瓦当裏面調整はＣ３である。

出土最古層位は、軒丸瓦175がⅡ層、軒丸瓦176が第２面、軒丸瓦177が第１面である。

軒丸瓦 178～186（2553～2561） 相対的にやや小振りな巴頭部と、若干太い基部から細長く延びる巴尾部からなる。巴尾長は30％台主体で、軒丸瓦178では49％にも及ぶ。巴尾部断面は、三角形ないし高い蒲鉾形を呈しており、文様の輪郭（立ち上がり）が明瞭である。内区指数は0.56～0.63とやや大きいが、珠文が12個以上で径1.2mm以上のものが多いため、珠文が詰まったようにみえる。文様構成としては共通した点が多いが、子細にみると若干の相違が指摘できる。軒丸瓦178は巴頭部の間隔が広く巴長も長く（49％）、16個の珠文の大きさ・間隔も均等で、周縁幅もさほど広くなく、均整の取れた文様構成をとる。これに対して軒丸瓦179・180では、周縁幅が広く、文様区が相対的に狭くみえ、三巴文も頭部の間隔が狭く萎縮したようにみえる。また軒丸瓦186では、巴尾部の巻き方が硬直的であり、均整さに欠ける。

技法的には、これらは瓦当面剥離材ｂ、瓦当成形法Ｄ、また瓦当裏面調整Ｃ２、という共通性がある。この他、瓦当面外縁に面取りが施されるものがあることが、特徴的である。

出土最古層位は、軒丸瓦178・186がⅡ層、軒丸瓦181・185が第２面、軒丸瓦180・182～184が第１面、軒丸瓦179・181が第１・２面である。軒丸瓦178は、第２面以降に、多くみられるので、本来の帰属層位は第２面であろう.

軒丸瓦 187～200（2562～2575） 大振りな巴頭部と、太くやや短く延びる巴尾部（巴長25～30％主体）からなる。軒丸瓦178～186よりも巴頭部が大きく、尾部が太い一群といえる。内区指数0.57～0.65とやや大きく、珠文数12個以上が主体である点は、軒丸瓦178～186と共通した文様構成である。ただ文様の輪郭は、軒丸瓦178～186ほど明瞭ではなく、巴尾部断面はやや扁平な蒲鉾形である。

技法的には、瓦当面剥離材ｂ、瓦当成形法Ｄで共通する。瓦当裏面調整はＣ３である。また瓦当面外縁の面取りが若干量認められる。

出土最古層位は第２面ないし第１面が多いが、軒丸瓦189・191・192・200はⅡ層出土である。ただし、取り上げ単位にSXb02内瓦溜まりも混入している可能性があるため、検討の余地がある。なお軒丸瓦187・190は、高松城下の紺屋町遺跡出土瓦と同笵である。

軒丸瓦 201～205（2576～2580） 大振りな巴頭部と、基部が太くやや短く延びる巴尾部（巴長24～30％）をもつ。軒丸瓦187～200よりも巴が全体に大きく、逆に珠文が小振り（0.8～1.1cm）であることが指摘できる。また軒丸瓦204は、巴頭部外側の輪郭が直線的であるが、これは円弧上に割り付けられた巴尾部に巴頭部を不整合に繋げた、瓦笵の割り付け方法に起因すると考えられる。

技法的には、瓦当面剥離材は軒丸瓦201がａ２で他はｂ、瓦当成形法はＤであり、瓦当裏面調整はＣ２ないしＣ３である。軒丸瓦203の瓦当面外縁は面取りさ

れる。

出土最古層位は、軒丸瓦204がⅡ層で他は第2面より上位層である。軒丸瓦202は、珠文付近の笵傷があるものとないものがあるが、笵傷のない同笵例が東ノ丸跡歴博地点SX24で出土している。軒丸瓦204も珠文に笵傷を伴うものとないものがあるが、2者ともに東ノ丸跡歴博地点SX29で出土しており、同地点第1遺構面上層からは笵傷を伴わないものが出土している。

軒丸瓦206～218(2581～2593)　巴頭部の大きな一群としてはやや小振りな頭部と、かなり短い領域に近い巴尾部（巴長25～31%）からなる。珠文数は12個主体であり、珠文径は1.1～1.4cmと若干大振りになっている。瓦当面の剥離材は軒丸瓦209がａ2である以外ｂであり、瓦当成形はＤである。瓦当裏面調整はＣ2ないしＣ3である。瓦当面外縁に面取りを施すものもみられる。

出土最古層位は、軒丸瓦207がⅡ層、軒丸瓦206・214・215がⅡ層の可能性をもつが、いずれも撹乱等の混入の可能性を排除できない出土状況である。他は軒丸瓦209・213が第2面、軒丸瓦210・216～218が第1面である。

軒丸瓦219～221(2594～2596)　軒丸瓦206～218に似るが、巴尾部により短小化傾向が明瞭なもの（巴長25～28%）である。巴文は基部が太く、先端近くまでかなりの幅をもつ。瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形法はD、瓦当裏面調整はＣ3である。出土最古層位は軒丸瓦219～221が第1面、軒丸瓦220が第2面である。

軒丸瓦222～231(2597～2606)　巴頭部が大きく巴尾部はやや短め（巴長25～36%）であるが、巴尾部先端側が細いため、細長い尾部をもつようにみえる一群である。全体に均整の取れた三巴文であるが、軒丸瓦229・231はやや硬直した直線的な巴尾部をもつ。珠文は12～16個であるが、径は1.2～1.5cmと大振りである。瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形法はＤで、瓦当裏面調整はＣ3である。また瓦当面外縁に面取りを施すものが多い。出土最古層位は軒丸瓦222～224・227が第1面であるが、軒丸瓦230は第2面、軒丸瓦225・226はⅡ層である。軒丸瓦225・226は第1・2面からの混入の可能性もあり、検討の余地を残す。軒丸瓦230は出土状況から第2面でよいと考えられる。

軒丸瓦232・233（2607・2608）　大きな巴頭部と、やや短めだが細い巴尾部からなり、巴頭部の括れは明瞭でなく連続的に尾部に繋がるものである。瓦当面剥離材は、軒丸瓦232はａ2、軒丸瓦233はｂであり、ともに瓦当裏面調整はＣ3である。出土最古層位は第1・2面である。

軒丸瓦234～237（2609～2612）　軒丸瓦145～233は①巴頭部が大きく、②巴尾部が比較的長い特徴を共有する一群であったが、軒丸瓦234～238は①巴頭部が小さく、②巴尾部が短い一群である。軒丸瓦234～237は、文様区径が6.5～7.4cmとかなり小さい。軒丸瓦234は周縁幅を広くとるため、瓦当面径は13cm台に達するが、他は瓦当面径11～12cm台にとどまる。瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形法はＤであり、瓦当裏面調整はＣ3である。出土最古層位は軒丸瓦234・235が第1面である。軒丸瓦237は第4面(SKb95)出土で取り上げられているが、混入の可能性が高い。

軒丸瓦238(2613)　小さな巴頭部と、幅広で短く扁平な断面をもつ巴尾部からなる。瓦当面径は11.6cm前後であり、小さい。珠文は9個で径1.6cmと大粒である。瓦当面剥離材はｂ、瓦当裏面調整はＣ3である。出土最古層位はⅡ層であるが、第1面に帰属するものと考えられる。

軒丸瓦239(2614)　小さな巴頭部と、細く短小な巴尾部（巴長24%）からなる。珠文が8個と少ないことから、軒丸瓦86～97に含めて分類することも可能であるが、巴尾部が短いことから分離した。瓦当面剥離材はａ2で、出土最古層位は第3面である。

軒丸瓦240～249（2615～2624）　軒丸瓦240～265は、①巴頭部が大きく、②巴尾部が短い一群である。軒丸瓦240～249は、巴尾部が細身でやや長くみえるもの（巴長21～23%）を一括した。軒丸瓦248の周縁には丸に「一」の刻印がみられる。瓦当面剥離材はｂ、瓦当成形法はＤであり、瓦当裏面調整はＣ3である。瓦当面外縁を面取りするものが若干存在する。出土最古層位は、軒丸瓦240・242・245・247・249が第1面で、軒丸瓦246が第2面、軒丸瓦243・248がⅡ層である。軒丸瓦243は第2面からの混入の可能性もあり、他のⅡ層以下の出土例も混入とみた方がよいであろう。

軒丸瓦250～265（2625～2640）　軒丸瓦240～249よりも巴尾部が短くみえるもの(巴長15～23%)である。特に軒丸瓦251・253・262・263～265は、巴頭部に比して極端に尾部が短く、「,」形を呈する。珠文径も1.4～2.0cmと大きいものが多い。瓦当面剥離材

はｂ、瓦当成形法はＤであり、瓦当裏面調整はＣ３である。瓦当面外縁に面取りを施すものもみられる。出土最古層位は大半が第１面である。軒丸瓦255は第４面、軒丸瓦260は第３面出土であるが、軒丸瓦255は混入と捉えておきたい。軒丸瓦260は瓦当面剥離材がａ２であり、第３面まで遡る可能性もある。

1. 6. 軒丸瓦Ｖ類（軒丸瓦266～276:2641～2651）

三巴文の周囲に珠文を伴わないものをＶ類とした。いずれも巴頭部は大きいため、巴尾部の長短・巻き方で３種に細別した。

軒丸瓦266～270(2641～2645)　巴尾部が細長く延びるもの（巴長26～36%）である。軒丸瓦266・267は文様の彫りが深く、巴尾部断面が内側の傾斜が急な高い蒲鉾形を呈する。軒丸瓦268～270は、より文様が扁平なものである。剥離材は全てｂであり、瓦当成形法はＤとみられる。また全てに瓦当部外縁の面取りが認められる。出土最古層位は軒丸瓦266･269が第１面であるが、出土点数が少ないためこれが上限を示すかどうか、なお検討の余地はあろう。なお軒丸瓦267の同笵品は、香西寺土塀・志度寺土塀で見出せる。

軒丸瓦271～275(2646～2650)　巴尾部が短いもの（巴長18～24%）である。軒丸瓦275の周縁には「へい」刻印が認められる。剥離材は全てｂ、瓦当成形法はＤである。瓦当面外縁の面取りを行うものもある。出土最古層位は、軒丸瓦271～273が第１面である。軒丸瓦274はⅡ層・軒丸瓦275は第５面であるが、混入と見なした方が無難であろう。

軒丸瓦276(2651)　巴尾部の巻きが弱く、やや直線的で外開きにみえるものである。瓦当面剥離材はｂである。出土最古層位は一応、Ⅱ層であるが混入の可能性も否定できない。

1. 7. 軒丸瓦Ⅵ類（軒丸瓦277：2652）

三巴文の変形したような草文状の文様をもつ、特徴的なものである。瓦当面径は11.5cmを測り、かなり小振りである。瓦当面剥離材はａ２で、瓦当裏面調整はＣ１である。丸瓦の貼り付け位置は、瓦当のやや下がったところであり、丸瓦部前端上面が反り返る。出土最古層位は第６面であり、同笵品が西の丸町Ｃ地区で第６面相当のSKc40や、西の丸町Ａ地区撹乱より出土している。

2. 軒平瓦（図版236～248）

2. 1. 概要

415点を検討対象とし、同笵関係を念頭に置いて184種に分類した。これらは、中心飾りの形態と唐草文の巻き方から、24種（系統群）と中心飾り不明の一群に整理できる。この文様系統からⅠ～ⅩⅩⅤ類の大区分を設定し、より細かな組列を形成するとみられるまとまり毎に記述した。唐草文の反転状況は、中心側から記述した。また瓦当上縁（上角面）の面取りについては、乗岡実氏の分類（乗岡1997）に準拠した。すなわち、面取りＡ：面取り幅１cm以上が瓦当左右端に及ぶもの、面取りＢ：面取り幅は広いが左右端に及ばないもの、面取りＣ：幅狭の面取りで左右端に及ぶもの、面取りＤ：幅狭で左右端に及ばない面取り、である。この他、法量や出土遺構・層位等については観察表と一覧表を参照されたい。

2. 2. 軒平瓦Ⅰ類（軒平瓦１・２：2653・2654）

中心飾りが桐紋のものをⅠ類とした。

軒平瓦１(2653)　細い陽刻線で表現される桐紋である。中心葉と両側葉は平行して垂直方向に延びており、各葉の輪郭線は交差している。これは、中心葉が前面に出て両側葉の一部が隠れて斜め方向に延びる通常の桐紋とは異質な意匠といえる。葉の輪郭線には欠刻も認められない。葉の上側には花梗と花蕾がかろうじて認められ、五三桐とみられる。唐草文は下・上・下と３転し、内側より２・３転目の唐草は上下に重複する。

瓦当部上縁には、面取りＤが施される。平瓦部との接合方法は明確でないが、断面にみえる粘土の皺をみると平瓦広端部を斜めに削り落とした「瓦当貼り付け技法」の可能性を指摘できる。胎土には２～３㎜の石英粒・長石粒を多く含む。瓦当の成形方法と胎土は、大多数の在地系瓦とは異質であり、搬入品の可能性もある。Ｖ層より出土しており、第６面段階での使用が想定される。破片の重複部分が少なく判断が難しいが同笵的同文の事例として、東ノ丸跡県民ホール地点第３層出土瓦がある。また文様意匠の近似例は、高知城三ノ丸跡出土軒丸瓦に認められる。

軒平瓦２(2654)　レリーフ状を呈する立体的で定型的な桐紋（五三桐か）をもつ。唐草は上・下と２転し、巻きが強い。平瓦との接合方法は「顎貼り付け技法」である。同笵例が高松城東ノ丸跡県民ホール地点捨石上面・Ⅰ期石垣背面石列瓦層より出土しており、岡山城跡本丸中の段Ⅲ-11 ト-B層より同笵もしくは同文瓦

が出土している。

2. 3. 軒平瓦Ⅱ類（軒平瓦３：2655）

四目紋を中心飾りとする。唐草は下・上と２転し、比較的巻きが強い。瓦当部は顎貼り付けであり、瓦当部裏面と平瓦部の間に補充粘土が貼られ、その隙間にカキ目が認められる。また瓦当面外区にも、接合痕状に段が連続している。２点中１点は第５面のSKb130より出土しており、第５面に伴うものと思われる。四目紋は近江源氏佐々木氏の家紋であり、周辺では丸亀藩京極氏の家紋である。Ⅱ類が京極氏に関連する瓦として生産されたのか、単に瓦の意匠として製作されたのかは、事例が少なく明確でない。

2. 4. 軒平瓦Ⅲ類（軒平瓦４：2656）

中心飾りが菱文のもの。レリーフ状の菱形の周辺を菱形に陽刻線が巡る。唐草は３回反転し、それぞれは連続せず分離している。また左右で巻き方に違いがあり、右半部では下・上・下と交互に巻くが、左半部では下・下・下と同じ向きに巻く。

６個体出土したうち、面取りＡを施すものが３点、面取りを施さないものが３点ある。瓦当面の遺存状態が必ずしも良くないものが多いため、断定はできないが左半部３転目の唐草と外区との間の笵傷の状況は面取りＡと面取りなしとでは同じであり、両者の間にさほど大きな時間差を想定することは難しい。ともに瓦当面は顎貼り付け技法（カキヤブリ）によるものの、面取りＡの個体は平瓦部が上外区高と一致し、内区には及んでいない。これに対して面取りなしの個体は、平瓦部が内区上半にまで及ぶため、文様部分に接合痕が生じたり、内区上半の文様の潰れないし不十分な状態で瓦笵から起こされている。つまり面取りＡは、顎貼り付けの位置が瓦当の上端にくるため、分厚くなった外区幅を減じるための成形技法と捉えることができる。

出土最古層位は第５面のSKb130であるが、唐草が３転すること、面取りＡが施されることは、より古い要素といえる。継続使用されてきたものが第５面段階で廃棄されたとみるべきか。

2. 5. 軒平瓦Ⅳ類（軒平瓦５・６：2657・2658）

方形に巡る陽刻の枠線の内側に珠文を主体とする文様意匠を配する一群である。唐草は枠線の側面から延びており、特に強く巻き込むのが特徴的である。また通常のものよりも瓦当高が高い、大振りな軒平瓦である。

軒平瓦５(2657)　方形枠線の四隅がＬ字形に内側に屈折しており、枠線内の中心には宝珠文、その周辺には５個の珠文が囲む。唐草は遺存部分で３転するが、想定される本来の幅を考慮すると４転する可能性もある。唐草の巻きは非常に強く、渦巻き状を呈する。出土最古層位は第２面であるが、より遡る可能性もある。

軒平瓦６(2658)　方形枠線の内側に珠文が七曜形に配される。唐草は枠線側面から３転し、さらにその上側で枠線から子葉が派生する。左半部の唐草には明瞭な笵傷があり、外区へと繋がる。軒平瓦５･６ともに顎貼り付け（カキヤブリ）である。出土最古層位はⅡ層である。

2. 6. 軒平瓦Ⅴ類（軒平瓦７～20：2659～2672）

上向三葉文を中心飾りにするものをⅤ類とし、三葉文の意匠により７種に細分した。

軒平瓦７(2659)　中心葉が三角形で、側葉も先端が尖る剣頭形を呈するものである。唐草は中心飾りの下側から上・下・上と３転し、左右の蔓は連続している。右側２転目の唐草上側と外区の間に瘤状の笵傷が認められる。瓦当面は顎貼り付けで、平瓦凸面の接合部にはカキ目が施される。出土最古層位は第５面であるが、より遡る可能性もある。周辺調査区での同笵瓦出土例はないが、高松城東ノ丸跡県民ホール地点Ⅰ期下層石垣背面石列瓦層・Ｋ－16区瓦溜ＳＫ01出土瓦に、同様の中心飾りをもち唐草が２転（下・上）する事例があり、同一系統として捉えることができよう。

軒平瓦８・９（2660・2661）　太く丸い中心葉と、先端が外側に丸まる側葉からなる中心飾りをもつ。中心葉と側葉の基部には珠文状の結束点がある。唐草は中心飾り下端の結節点から横方向に延びる軸線状の蔓から上に３転するもので、唐草の先端は丸く太く収まり巻きは弱い。瓦当面高は低く、狭小な内区である。軒平瓦８･９は同笵の可能性も否定できないが、遺存状態が悪く、左側葉や左半の唐草１転目の巻き方が若干異なるため、同文異笵として捉えた。ともに顎貼り付けであり、内区の中位に接合痕が明瞭にみられる。軒平瓦８は面取りなし、軒平瓦９は面取りＡである。出土最古層位は軒平瓦８が第３面、軒平瓦９が第１・２面だが、瓦当剥離材がａ１であることや、瓦当面高が低いことから第６面に伴うものと考えられる。高松城東ノ丸跡県民ホール地点捨石上面出土・内堀採集瓦に、同文が見出せる。

軒平瓦 10（2662） 珠文状の結束点から延びる太い剣頭形の三葉をもつ。結束点から両側に子葉を伴う軸線状の蔓が延び、さらにその上側に平行して３転する唐草文が配される。瓦当面には、剥離材ａ１が顕著に認められる。瓦当面は、顎貼り付けもしくは瓦当貼り付けと思われる。瓦当面上縁は、幅３～５㎜の狭い面取りが左右端まで及ぶ(面取りＣ)。出土最古層位は第４面だが、より遡る可能性があろう。同笵瓦が東ノ丸跡県民ホール地点Ｉ期下層石垣背面石列瓦層・第５・４層、同歴博地点第４遺構面上層で確認できる。

軒平瓦 11～13（2663～2665） 陽刻線で輪郭を表現した三葉を中心飾りにし、長く延びて内区両端で１転する唐草と、その下側に２条平行する波形の子葉を伴う。いずれも瓦当面は顎貼り付けで成形されている。軒平瓦11は、唐草の先端が上向きに小さく丸く収まり、その外側に３つの花蕾がある子葉(茎)が配される。出土最古層位は第６面である。同笵もしくは同文瓦が東ノ丸跡県民ホール地点Ｏ－16区瓦溜ＳＫ01・Ｋ16区－瓦溜ＳＫ01、第３層、同歴博地点第３遺構面上層、内堀より出土している。軒平瓦12は、文様構成は軒平瓦11に似るが、唐草が上方に巻かずに丸く収まること、子葉(茎)の先端に蕾が表現されないことが異なる。軒平瓦13は、唐草と子葉が一体化して、上方に強く巻き込む唐草となっている。出土最古層位は第３面である。同笵瓦が東ノ丸跡歴博地点第３遺構面上層・第２遺構面SX28で確認できる。また同文異笵としては東ノ丸県民ホール地点捨石上面出土瓦がある。

以上のように、軒平瓦11～13は唐草・子葉の形状により軒平瓦11→12→13と文様の簡略化を辿りながら型式学的に変化することが想定され、出土層位も一応矛盾しない。

軒平瓦 14～17（2666～2669） 花梗の先端に花蕾を配する。いずれも瓦当面は顎貼り付けとみられる。軒平瓦14・15は花蕾が花梗に繋がる。軒平瓦14では各花梗毎に３つの花蕾が伴い、軒平瓦15ではやや肥大化して不明瞭だがやはり３つの花蕾が認められる。唐草の形状は、軒平瓦14では中心飾りの下端から長く延びるが、軒平瓦15では中心飾りの横から短く延びており、軒平瓦14の方が古い様相をもつ。軒平瓦16・17は、花蕾とみられる珠文が３個、各葉（花梗）から分離して伴う。唐草の巻きが軒平瓦14･15とは逆であり、別の系統と考えた方がよいかもしれない。なお、軒平瓦16･17は同笵の可能性もあり、同笵とみた場合には軒平瓦16→17と瓦笵の文様の潰れが進行したものと思われる。出土最古層位は軒平瓦14・16・17がⅡ層、軒平瓦15が第２面であり、大勢としてはⅡ層すなわち第３面での使用が考えられる。ただし軒平瓦14は東ノ丸跡県民ホール地点Ｋ－16区瓦溜ＳＫ01と岡山城本丸跡中の段・下の段出土瓦に同文例があり、本来的には第６面まで遡ることが考えられる。また軒平瓦15は、同歴博地点第２面SX28・SX31に同文例がある。さらに唐草の巻きが反対であるが、東ノ丸跡歴博地点第４遺構面上層に軒平瓦16･17に近い意匠をもつものがある。

軒平瓦 18・19（2670・2671） 直線的な三葉を中心飾りにもつ。唐草は中心飾り下端から長く延び、連続的に２転する。瓦当面は顎貼り付け（カキヤブリ）である。軒平瓦18は、中心葉と左側葉との間に笵傷がある。瓦当高が低く瓦当面上縁の中央付近を幅９㎜程度に広く面取りするが、両端までは及ばない（面取りＢ)。顎貼り付けに伴う接合痕は、瓦当面では内区の中位に認められ、瓦当面の大半が平瓦広端部であることがわかる。調査区内では同笵が他に４点存在するが、面取りＢを施すのは18も含めて２点で、３点は面取りなしである。瓦当高が低いためか、Ⅲ類で指摘できたような平瓦貼り付け位置の違いはない。出土最古層位は第６面である。軒平瓦19は、軒平瓦18をそのままスケール・アップさせたような瓦当文様をもつ。同笵３点中、面取りＣが１点、面取りなしが２点であるが、いずれの場合も外区上部の幅と平瓦広端部とが一致する。出土最古層位は第２面であるが、本来の伴出面はより遡るとみられる。

軒平瓦 20（2672） 幅広で先端の尖る三葉を中心飾りにしており、唐草は同じ方向に２転（上・上）する。中心飾りの形態は軒平瓦18･19と同様であるが、唐草の巻き方が異なる。三葉・唐草ともに軒平瓦18･19よりも幅広で潰れたように瓦笵から起こされるが、出土遺構は第６面SKb192であり、第６面の中でも古い時期の所産といえる。瓦当面の成形は顎貼り付けであり、上外区幅と平瓦広端部が一致する。

2. 7. 軒平瓦Ⅵ類（軒平瓦 21～27：2673～2679）

下向三葉文を中心飾りとするものをⅥ類とし、三葉文や唐草文の意匠で５種に細分した。

軒平瓦 21（2673） 葉脈表現からの転化とみられる棘状の輪郭の三葉をもち、中心葉と側葉との間に葉脈表現のない子葉がある。あるいは五葉とすべきか。唐草は中心飾り上端側面から延びており、上側に１回反転する。瓦当面は顎貼り付けであり、瓦当面上縁に面

取りＤを行うもの３点、面取りなしが１点である。顎貼り付けに伴う接合痕により、中心飾り付近の文様が起こされない場合がある。出土最古層位は第５面だが、文様構成や面取りの状況から第６面まで遡る可能性が高い。なお、東ノ丸跡県民ホール地点第５・４層、Ｋ－16区瓦溜SK02と歴博地点第４遺構面SD03出土瓦は、同系統の瓦であるが、軒平瓦21よりも葉脈の数が多く細かいこと、子葉の下端に蕾状の分岐がみられることに、より先行的な要素を指摘できる。

軒平瓦22・23（2674・2675）　直線的な下向三葉を中心飾りとしており、その上端脇から唐草が延びる。瓦当面成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。軒平瓦22は、細身で「ハ」の字形に開く直線的な三葉をもつ。唐草は下・上・下と３転し、３転目の唐草は２転目の下側から長く延びるのが特徴的である。瓦当面上縁には面取りＤが施される。岡山城跡本丸中の段Ⅳ-10cト-Fb・Eb層出土瓦が同笵である。また上下を逆転させた文様構成をもつ事例が、東ノ丸Ｉ期下層石垣背面石列瓦層から出土している。軒平瓦23は、幅広で先端が剣頭形に尖る下向三葉をもつ。唐草は上・下と２転し、軒平瓦22の１転目が省略されたかたちになる。唐草の形状は、巻き込む先端部が丸く肥厚しており、外側の２転目は輪郭を突線による線描きで表現する。また内区下縁は、文様の形状に合わせて波形に作られる。出土最古層位は第５面（SKb130）であり、当該調査区内で16点出土していることから、第５面段階以降でかなり汎用された種類であることがわかる。高松城跡内堀浚渫土の採集品に同笵の可能性をもつものがある。

軒平瓦24（2676）　上端が収束して結束点をなす下向三葉を中心飾りにする。唐草は結束点付近から延び、渦巻き状に強く巻いて２転（上・下）する。瓦当面はカキ目を伴う顎貼り付けで成形されており、大粒の離れ砂（剥離材ａ１）が多く付着している。出土最古層位は第３・４面であるが、文様・技法ともにより古い要素をもつといえよう。東ノ丸跡第１遺構面SD09出土瓦に近似した文様意匠をもつものがある。

軒平瓦25・26（2677・2678）　陽刻線による輪郭をもつ三葉を中心飾りにするものである。瓦当面は顎貼り付け技法による。軒平瓦25は、左右側葉の輪郭線が繋がって中心葉の輪郭に優先する。唐草は中心飾り上端側面から延びており、上に１転して外側に子葉が派生した後、蔓が内区側面にぶつかり終わっている。このため、当初はもう１転する唐草だった瓦笵の端を切り落として使用したものと思われる。瓦当面上縁には面取りＢと面取りＤを施すものが各１点ある。軒平瓦26は、三葉の輪郭線に切り合いがないもので、軒平瓦25よりも小振りな中心飾りである。唐草は上・上と２転し、巻きは弱く肥厚気味である。出土最古層位は、軒平瓦25が第３～６面である。東ノ丸跡歴博地点第３遺構面SP03出土瓦と、岡山城本丸跡中の段出土瓦が軒平瓦26と同笵もしくは同文であり、第６面まで遡るであろう。また、東ノ丸跡県民ホール地点捨石上面、歴博地点第２遺構面SX28出土瓦に、軒平瓦25・26と同様の中心飾りをもつ事例がある。

軒平瓦27（2679）　先端は尖るが全体に幅広い、笹葉状の三葉を中心飾りにもつ。丸く肥厚して短く巻く唐草が２転し、その外側に陽刻線で輪郭を表した子葉がある。瓦当面成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。出土最古層位はⅡ層である。

2. 8. 軒平瓦Ⅶ類（軒平瓦28～30：2680～2683）

中心飾りに陽刻線による四葉の花弁をもつ花文をⅦ類にした。唐草は中心飾り下側から延び、３転（下・上・下）する。瓦当面の成形は、いずれもカキ目を伴う顎貼り付けである。

軒平瓦28・29（2680・2681）　軒平瓦28は、四葉の花弁の輪郭線が各々分離しており、中心に中房を示す珠文がある。唐草は蕨手状を呈しており、左半部の２転目がＣ字形に短く巻くのが特徴である。瓦当面上縁は面取りＡであり、平瓦広端部は上外区と一致する。出土最古層位は第６面である。東ノ丸跡県民ホール地点第３層で同笵瓦が出土している。また、東ノ丸跡歴博地点第４遺構面SD03出土瓦は、軒平瓦28と同笵と考えられるものの、全体に陽刻線が軒平瓦28よりも太く、中心飾りの四葉の輪郭は繋がっている。また、中心飾り上半の両側に各１個、唐草右半部の１・２転目の間、同左半部の１転目下に各１個の計４個の珠文が加わっている。つまり同じ瓦笵であるが、軒平瓦28が先行し、東ノ丸跡SD03出土瓦が後出することが明確である。後者は面取りを行わないが、上外区高と平瓦厚とはほぼ一致する。

軒平瓦29は、上記した東ノ丸跡SD03出土瓦と同笵であるが、文様の下半がないのが特徴である。このため、本来は四葉であった中心飾りの花弁が三葉になっており、唐草部分にあった２個の珠文は内区下端で半分かろうじてみられる。また唐草左半部の１転目先端では、内区下端に延びて途切れる陽刻線と、そこから派生して巻き込む陽刻線がある。途切れる陽刻線は東

ノ丸SD03出土瓦の左側1転目の唐草と一致する。これらの状況から、軒平瓦29は東ノ丸SD03出土瓦で使用された瓦笵の下端部を切り落としたことが想定できる。また瓦当面上縁の面取りは行われない。上外区高と平瓦厚とはほぼ一致する。出土最古層位はⅣ層である。

以上まとめると、軒平瓦28→東ノ丸跡SD03出土瓦→軒平瓦29の順で同じ瓦笵が再加工されていることがわかる。東ノ丸跡SD03出土瓦の瓦笵の加工は、単に文様構成に珠文を加えるだけであったが、軒平瓦29では瓦笵下端部の切り落としという大きな変化を経たことが想定される。

軒平瓦28では、瓦当面の上外区と平瓦部の厚さが一致するため、分厚くなる（高くなる）上外区を削り落とし、下外区高とのバランスを維持していた。しかし東ノ丸跡SD03出土瓦では、面取りをしないにもかかわらず、顎貼り付けの位置は軒平瓦28と同じため、上外区と下外区の高さに大きな差異が生じた。このため軒平瓦29では、瓦笵下端を切り落とし内区高を低くすることで、下外区高を上外区高と同様にしたとみられる。つまり、顎貼り付けの接合部が内区に及ぶのを避け、かつ面取りの行程を省略しても、上下の外区高が揃うように、瓦笵そのものを加工したと考えられるのである。当然その前提として、瓦当面の高さを規制する規格の存在が想定されるが、3者ともに瓦当面高（軒平瓦28は面取り部分を除外）は3.5cm前後で一致する。この瓦当面高の維持のために、東ノ丸SD03出土瓦では下外区高を低くし、軒平瓦28では平瓦厚の薄手化などの変化も指摘できる。

軒平瓦30（2682・2683） 幅広の陽刻線で四葉の花弁の輪郭を表現する。唐草は蔓が連続して3転（下・上・下）する。出土最古層位はⅡ層である。

2. 9. 軒平瓦Ⅷ類（軒平瓦31：2684）

中心飾りが蔦葉とみられるものである。蔦葉は下側の三葉が陽刻線で輪郭が表され、上側の二葉は先端が丸く膨らむ陽刻線である。唐草は中心飾り上側側面から2転（上・上）し、1転目と2転目の間に珠文が1個配される。瓦当面成形はカキ目を伴う顎貼り付けであり、脇区に接合痕が明瞭にみえる。出土最古層位はⅡ層である。

2. 10. 軒平瓦Ⅸ類（軒平瓦32・33：2685～2687）

輪郭を陽刻線で表す菊花文を中心飾りにもつものである。唐草は2転する。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けによる。

軒平瓦32は八葉の花弁をもち、中房を珠点で表す。唐草は中心飾り側面から上・下と2転し、短く巻き込む。内区上半に平瓦・顎部の接合痕が認められるが、文様（陽刻線）は明瞭に瓦笵から起こされている。出土最古層位は第3面である。

軒平瓦33は八葉の花弁をもち、中房は軒平瓦32よりも大振りである。菊花の両脇に葉がレリーフ状に表現される。葉の下側より唐草が短く2転（下・上）する。また内区下縁は、中心飾り部分と唐草部分で波形に起伏する。出土最古層位は第1・2面であるが、瓦当面の剥離材がa2であり、キラコではないことからもう少し遡る可能性がある。

2. 11. 軒平瓦Ⅹ（軒平瓦34：2688）

半裁菊花文を中心飾りにもつものである。菊花は上半部の半裁形態であり、九葉（本来は十六葉）である。菊花の両側にレリーフ状の葉を配する点は、軒平瓦33と同様である。唐草はⅨ類よりも短く巻き込んでおり、おそらく2転するものと思われる。菊花と右側葉との間には「水」字が陽刻されている。防火を示す吉祥句か、高松新瓦町の水屋を示すものと思われるが、おそらく前者であろう。瓦当面の剥離材はキラコ（剥離材b）であり、瓦当面成形はカキ目を伴う顎貼り付けである。

2. 12. 軒平瓦Ⅺ類（軒平瓦35～43：2689～2697）

幅広の陽刻線で花文を表現する一群をXI類とした。これらには複数の文様意匠が含まれるため、①軒平瓦35～38・②軒平瓦39～41・③軒平瓦42・43の3者に分離した方がよいかもしれない。いずれも瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付け技法による。

軒平瓦35～37（2689～2691） 菊花とみられる八葉の花弁と中心部の珠点を伴うものである。軒平瓦35は、菊花花弁の基部の細く先端は丸く膨らむ。花弁は均等に8分割されている。中心飾り側面から蔓の連続した唐草が延び、上・下・上と3転する。特徴的なのは、唐草先端の子葉が3転目の直下に配されることである。平瓦部と顎部の接合部は、内区中位であるが、文様は明瞭に笵から起こされている。瓦当剥離材はbである。出土最古層位は、第2面である。同笵とみられる事例が、東ノ丸跡県民ホール地点O－16区瓦溜SK01・K－16区瓦溜SK02、紺屋町遺跡から出土している。

軒平瓦36は、軒平瓦35に極めて近い意匠をもつが、菊花花弁の先端部が不定形で、基部も太い。また各唐草の接続状況が異なる。全体に軒平瓦35よりも平板

な文様に見受けられる。平瓦部と顎部との接合部位は、軒平瓦35と同様である。瓦当剥離材はb。出土最古層位は第1面。同笵とみられるものが、内堀浚渫土採集品にある。

軒平瓦37は、中心飾りの八葉菊花が縦・横線を設定し、斜め線を縦・横線の中間に配したようになっているため、「米」字形を呈する。また中心飾り下端の両側に珠文が各1個配される。唐草は中心飾りの上端側面から延びており、1転（上）する。その外側まで蔓は伸びて子葉状に膨らんで収束する。内区の形状は下縁の両端が狭くなっている。平瓦部と顎部との接合部位は、軒平瓦35・36と同様である。瓦当面剥離材はbである。出土最古層位は第1面である。同文異笵とみられるものが、紺屋町遺跡で出土している。

軒平瓦38（2692） 十六葉の菊花とみられる中心飾りをもつ。唐草は中心飾り下端の両側から延び、2転する。さらにその外側に子葉が伴う。顎貼り付けの部位は内区上半であるが、文様は明瞭に起こされている。表面は摩滅しているが、内区の一部にキラコ（剥離材b）が認められる。出土最古層位はⅡ層であるが、混入の可能性があり、第2面以降にみるのが妥当であろう。東ノ丸跡第2遺構面SX24出土瓦に同笵例がある。

軒平瓦39～41（2693～2695） 放射状に延びる直線から構成される中心飾りをもつ。唐草は同じ向き（上・上）に2転し、先端が丸く肥厚する。瓦当面の成形は、顎貼り付けによる。これらは、笵から起こされた状況が若干異なるため別個に分類したが、同笵の可能性も残される。軒平瓦39は、中心飾り6本の直線を放射状に配しているが、軒平瓦40では垂直方向の直線がなく4方向の放射状に、また軒平瓦41では上半も欠失して下半の2方向のみとなっている。軒平瓦41での中心飾り上半の欠失部分は、顎貼り付けの平瓦部に当たるため、笵起こしが不十分だったことに起因するとみられる。出土最古層位は、軒平瓦39がⅡ層、軒平瓦40が第2面、軒平瓦41が第1・2面である。

軒平瓦42（2696） 先端の肥厚する五弁花文を中心飾りにする。唐草は五弁花下半の花弁に接して延びており、連続的な蔓から2転（上・下）する。顎部と平瓦部との接合部位は内区上半であり、接合部付近の文様は十分には瓦笵から起こされていない。出土最古層位は第5面である。

軒平瓦43（2697） 「十」字形を呈する四葉の花文（？）を中心飾りにする。唐草は中心飾り下端から3転するが、左半部では下・上・下と反転するのに対して、右半部では下・下・上と反転し、3転目は中心飾りに向かって対向して延びている。顎部と平瓦部との接合部位は内区上半である。出土最古層位は第5面である。同笵例が東ノ丸跡県民ホール地点第5・4層・第3層・K－16SK02、同歴博地点第4遺構面SD03・第2遺構面SX29・第2遺構面上層より出土しており、歴博地点SD03での出土状況から第6面を上限とすることが考えられる。。

2. 13. 軒平瓦Ⅻ類（軒平瓦44・45：2698・2699）

「Y」字形を呈する三葉文を中心飾りにするものである。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。軒平瓦44の各葉には5本の棘状の突起が伴っており、花ではなく葉の意匠であることが窺える。唐草は同じ向き（下・下）に2回反転する。出土最古層位はⅣ層であり、第5面に伴うものと思われる。また同笵とみられる事例が東ノ丸跡歴博地点第1面SD09より出土している。

軒平瓦45は、中心飾りの三葉に棘状の突起が伴わない。1転する唐草の起伏に平行してオタマジャクシ形の子葉が配される。出土最古層位はⅡ層であるが、唐草と子葉の類似形態を参考にすると、より古く遡る可能性もある。

2. 14. 軒平瓦ⅩⅢ類（軒平瓦46～48：2700～2702）

「A」形およびその変形とみられる「用」字形の意匠を中心飾りとするものである。瓦当成形はいずれもカキ目を伴う顎貼り付けである。

軒平瓦46・47（2700・2701） 中心飾りに「A」形の意匠を陽刻線で表す。唐草は、右半部1転目が「A」形から連続して延び、左側1転目は「A」形の直下から延びる。2転目の唐草の直下には、唐草に対向するように「～」形の子葉が配される。軒平瓦46は、「A」形が大振りで内区高も高いが、軒平瓦47は「A」形が小さく内区高も低い。軒平瓦46の出土最古層位は第5面で複数認められ、東ノ丸跡県民ホール地点第3層より同笵の可能性をもつ瓦が出土している。軒平瓦47の出土最古層位は第3面である。東ノ丸跡歴博地点では第4遺構面SD03、第1遺構面SD09より同笵瓦が出土しており、第6面段階まで遡る可能性もある。このほか、内堀浚渫土採集品にも同笵の可能性をもつものが認められる。

軒平瓦48（2702） 「A」形の変形とみられる「用」字形の中心飾りをもつ。唐草が大きく巻き込む1転目

の形状はXⅢａ類に近い。脇区に「∴」刻印を捺す。出土最古層位は第４面である。

2. 15. 軒平瓦XⅣ類（軒平瓦 49 ～ 52：2703 ～ 2706）

唐草文を中心飾りにもつ。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。

軒平瓦 49 ～ 51（2703 ～ 2705） 中央側に向かって対向する唐草文を中心飾りとするものである。軒平瓦 49 は、対向する１対の唐草の下側に、さらにこれらと対向する１対の唐草が伴い、中心飾りを構成する。中心飾りの外側には１転する唐草と、これに対向するような「～」形の子葉がある。出土最古層位は、第３面である。東ノ丸跡歴博地点第３面 SX17 出土瓦に同笵例がある。

軒平瓦 50 は、軒平瓦 49 の中心飾りの下側で対向する唐草と、外側の子葉を省略した文様意匠である。内区上半に顎部の接合線が認められる。出土最古層位はⅡ層であり、第３面に伴うものとみられる。

軒平瓦 51 は、軒平瓦 49 の中心飾りの上側の対向する唐草を省略したような「C」形の中心飾りをもつ。外側の唐草は、下・上に２転する通常の形態である。出土最古層位は第２面である。軒平瓦 49・50 の瓦当面の剥離材が剥離材ａ２であるのに対して、軒平瓦 51 は剥離材ｂを使用している。内堀浚渫土採集品に、軒平瓦 51 に近い意匠をもつものがある。

軒平瓦 52（2706） 対向する唐草が宝珠形に繋がる中心飾りをもつ。唐草は上に１転し、その外側に子葉が派生する。瓦当面にはキラコが認められる。出土最古層位はⅡ層であり、東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX24・SX29 出土瓦に同笵例がある。

2. 16. 軒平瓦XV類（軒平瓦 53：2707）

九曜文を中心飾りにもつものである。唐草は分離して２転する。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。出土最古層位はⅡ層である。同笵が東ノ丸跡県民ホール地点Ｋ－ 16 区瓦溜 SK01・SK02 より出土している。

2. 17. 軒平瓦XVI類（軒平瓦 54：2708）

大粒の珠文と両脇のやや小振りな珠文を中心飾りにもつものである。唐草は下側に１転し、その外側に子葉を伴う。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けであり、顎部の接合部位は上外区と内区の境付近である。出土最古層位はⅡ層であり、第３面での使用が考えられる。

2. 18. 軒平瓦XVII類（軒平瓦 55：2709）

下向きの矢印形の中心飾りをもつ。先端が若干丸く膨らむこと、また中心飾り両側の斜め線の先端が膨らんで分岐していることから、軒平瓦 11 ～ 13 などの花蕾をもつ上向三葉文系の系譜を引く可能性もある。瓦当面の成形は、顎貼り付けである。出土最古層位はⅡ層であり、第３面での使用が考えられる。

2. 19. 軒平瓦XVIII類（軒平瓦 56：2710）

斜めに歪んだ逆「Y」字形の陽刻線と、両側に各３個並ぶやや尖った珠文を中心飾りにもつものである。文様の系譜については明らかでない。唐草は２転（上・下）する。２点出土しているが、中心飾りの珠文付近で笵傷の進行が認められる。出土最古層位は第６面である。

2. 20. 軒平瓦XIX類（軒平瓦 57 ～ 73：2711 ～ 2727）

巴文を中心飾りにするものをXIX類とした。巴文や外側の唐草の形状から９種に細分した。軒平瓦 57 ～ 70 は三巴文系、軒平瓦 71 ～ 73 は二巴文系である。瓦当面の成形は、いずれもカキ目を伴う顎貼り付けか、その可能性が高いものである。

軒平瓦 57・58（2711・2712） 左巻き三巴文の中心飾りと、やや平行気味に上・下に２転する唐草を伴うものである。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦 57 と軒平瓦 58 は法量・文様構成ともに非常に近似した同文の事例であるが、三巴の尾部の巻き方に若干の相違を指摘できる。出土最古層位は軒平瓦 57・58 ともに第３面である。東ノ丸跡歴博地点第３遺構面上層に近似した意匠の事例があるが、巴文の両側に短い縦線を配する点が異なる。

軒平瓦 59 ～ 62（2713 ～ 2716） 中心飾りが三巴文で、唐草が上・下と２転し、さらに内区下縁が中心飾りと唐草部分に分かれて波形を呈するものである。軒平瓦 59 ～ 61 は巴が左巻きで、軒平瓦 62 は右巻きであるが、全体の文様構成は共通するため、同一分類とした。いずれも瓦当面の剥離材はａ２と考えられる。軒平瓦 59 は、唐草１転目の横に横線「－」を配する。唐草は１・２転目が明瞭に連続する。軒平瓦 60 は、唐草２転目の基部が極めて細く、一見すると１・２転目が分離しているようにみえる。軒平瓦 59・60 は、内区下縁は明瞭な波形を呈する。軒平瓦 61 は、１・２転目の唐草が分離しており、内区下縁の波形は不明瞭である。また巴文も小振りで尾部の巻きが不整形である。型式

的には軒平瓦59→60→61という変化が指摘できよう。出土最古層位は軒平瓦59が第４面、軒平瓦61がⅡ層であり、第４面から第３面にかけて使用されたものと思われる。

軒平瓦62は巴の巻きが逆方向であるが、軒平瓦60に近似した文様構成をとる。出土最古層位はⅡ層であり、第３面に伴うと思われる。

軒平瓦63～66（2717～2720） 中心飾りが左巻き三巴文、唐草が連続的に２転（下・上）するものである。唐草は左右ともに三巴文の尾部先端に連続しているのが特徴である。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦63は、三巴文の側面に子葉を伴う。同笵もしくは同文が東ノ丸跡歴博地点第２面SX29より出土している。軒平瓦64･65は同笵の可能性もあるものの、巴尾部にみられる笵傷の有無や、左半部の唐草と巴尾部との接続状況が異なっているため、別分類とした。軒平瓦66も、軒平瓦64・65に極めて近似した意匠をもつ同文例である。いずれも第３面ないしⅡ層が出土最古層位であり、第３面で使用されたものと思われる。東ノ丸跡歴博地点第２遺構面上層出土瓦と同笵である。また、東ノ丸跡県民ホール地点第３層出土瓦も同笵の可能性がある。

軒平瓦67（2721） 中心飾りが右巻き三巴文、唐草が２転（上・下）するものである。２転目の唐草は短く、巻きも弱い。瓦当面の剥離材はａ２である。出土最古層位は第１面だが、本来はより遡る層位に伴うものであろう。

軒平瓦68・69（2722・2723） 中心飾りが左巻き三巴文であり、周囲に珠文を伴う。唐草は上・下と２転する。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦68は、残存状態で６個（おそらく８個）の珠文が巴文の周囲に配される。唐草は、巴文には接しておらず、巴文下半の側面から上・下と２転する。巴文右側面の珠文は笵傷によって巴尾部・右半部唐草に繋がっている。出土最古層位は、第３面である。同笵が東ノ丸跡歴博地点第１遺構面ＳＤ08より出土しているが、笵傷や文様の潰れの状況からみて、東ノ丸ＳＤ08の方が先行するものと思われる。

軒平瓦69は笵傷が進行しており、珠文の状態が明確でないが、巴文の上側に２点配されているようである。内区の位置が瓦当面の右側に偏して、右脇区が狭くなっている個体もある。出土最古層位はⅡ層であり、第３面での使用が想定される。

軒平瓦70（2724） 左巻き三巴文を中心飾りとしており、両側には唐草から変形したものと思われる一巴と「～」形の子葉が配される。瓦当面の剥離材はａ２である。出土最古層位はⅡ層である。同笵とみられる例が、内堀浚渫土採集品にある。

軒平瓦71（2725） 右巻き二巴文を中心飾りとしており、周囲に６個の珠文が巡る。唐草は中心飾り下半の側面から延び、２転（下・上）する。瓦当面の剥離材はａ１である。出土最古層位は、第３面である。

軒平瓦72（2726） 摩滅が著しく中心飾りが不明瞭であるが、右巻き二巴文と思われる。唐草は中心飾り下端側面から２転（上・下）する。平瓦部凹面には、狭端部側に酸化した土師質焼成の範囲が長方形に認められる。葺き足部が二次的に被熱したと考えられる。ただし、酸化部分の長さは広端側から４㎝前後であり、そのまま葺足長とみるには短か過ぎる。出土最古層位は第３面である。

軒平瓦73（2727） 左巻き二巴文を中心飾りにする。唐草は中心飾り下半側面から２転（上・下）しており、１転目の唐草の上側に蔓と平行した陽刻線が延びる。また内区下縁は波形に起伏する。瓦当面の剥離材はａ２である。出土最古層位は第３面である。

2. 21. 軒平瓦XX類（軒平瓦74～104:2728～2758）

宝珠文を中心飾りにもつ一群である。宝珠文や唐草の形状によって、８種に細分した。軒平瓦74～102は宝珠文がレリーフ状に陽刻されるもの、軒平瓦103・104は陽刻線で輪郭が表されるものである。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。

軒平瓦74～76（2728～2730） 縦長で肉厚な宝珠文を中心飾りにもち、宝珠の下側から蕨手状に延びる唐草を伴うのが特徴である。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦74は、宝珠文上半に２条の陰刻の弧線を入れる。唐草は左右で形状を異にするが、右側の３転目は巻き込んだ先端が４転目に繋がっており、「Ｒ」形を呈する。出土最古層位は第３面であり、東ノ丸跡歴博地点第２面SX24から出土した２種の宝珠文軒平瓦の文様構成（唐草の配置）が崩れたものとみられる。軒平瓦75･76は、中心飾りが遺存していないが、唐草の形状から軒平瓦74と同一系統と捉えた。蕨手状に立ち上がる唐草は、軒平瓦74よりも斜め方向に延びており、巻きの弱い唐草もみられる。軒平瓦75の出土最古

層位は、Ⅱ層である。

軒平瓦 77 ～ 81 (2731 ～ 2735)　やや寸詰まりで先端の尖った肉厚な宝珠文を中心飾りにもつ。唐草は宝珠の下側から上方に大きく巻き込み、２転（上・下）する。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦77は、左右の均整がとれた唐草文をもつ。宝珠の下端両側から唐草が延びる。軒平瓦 78 は、軒平瓦 77 と非常に酷似した文様構成をとり、同笵の可能性が極めて高い。宝珠下側から左右分離して始まる唐草の蔓が笵傷によって繋がること、また左右２転目の下側に「⌒」形の子葉が配されることが軒平瓦 77 と異なる点である。他の文様には潰れなどの変化は認められないため、瓦笵使用の比較的初期の段階で子葉が加えられたものと思われる。軒平瓦 79 は、軒平瓦 78 と同笵の可能性がやはり極めて高いが、宝珠上半の両側に逆「ハ」字形の子葉が認められる点が軒平瓦 78 とは異なる。他の文様をみると、軒平瓦 78 よりも軒平瓦 79 の方が文様の潰れや笵傷の進行が認められるため、軒平瓦79が後出するのは明確である。このため、同一瓦笵が一定度消耗した時点で新たに子葉が加えられたものと推測される。

以上まとめると、軒平瓦 77 → 78 → 79 の変化は、同一瓦笵での再加工を示すものと考えられる。いずれも出土最古層位はⅡ層であり、３種で16点に及ぶ。軒平瓦 79 は、東ノ丸跡歴博地点第１面 SD09 出土瓦に同笵例がある。

軒平瓦80は、上端がやや長く尖る宝珠文を中心飾りにもち、唐草は左右で巻き方の異なる構成をとる。右半部の唐草は、１転目と２転目の蔓がともに宝珠側縁に繋がっており、１転目の巻きは小さい。また２転目の右半部唐草の下側には、「U」字形に子葉が配される。左半部の唐草は、軒平瓦 77 ～ 79 と同様であるが、外側に子葉が配されるか否か、欠損しているため不明である。出土最古層位は、第６面（SPb924）であるが、同笵５点中４点が第３面よりも上位層であり、本来は第３面を上限とするとみられる。

軒平瓦81は、宝珠下側の内区下縁から蕨手状に延びる唐草を伴う。顎部と平瓦部との整合部位が内区上半にあたるため、宝珠文の上半が陰刻の弧線状を呈するものも存在する。出土最古層位はⅡ層である。

軒平瓦 82 ～ 85 (2736 ～ 2739)　軒丸瓦 77 ～ 81 よりも若干小振りだが肉厚な宝珠文を中心飾りにもち、宝珠の上半側面から２転（上・下）して延びる唐草を伴う。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦82は、宝珠上端の両側から宝珠とは離れて唐草が延びる。文様は明瞭に瓦笵から起こされる。軒平瓦 83 は、軒平瓦 82 と同一笵を用いているとみられるもので、唐草の蔓が宝珠文の中位側面に繋がっている点が異なる。ただし軒平瓦 82 でみられた宝珠上端まで延びる蔓も看取でき、蔓が二股に分かれたような形状となっている。顎部と平瓦部の接合痕が内区上半にあるため、笵ずれが生じている。軒平瓦 84 は、軒平瓦 83 と同一笵とみられるが、唐草周辺の笵木目の明瞭化と文様の潰れが顕著である。また、内区高が 1.7cm と低く（軒平瓦 82・83 は 2.1cm）。軒平瓦 83 で使用された瓦笵の上縁を３mm 前後切り落としていることが想定され、軒平瓦 28・29 同様の瓦笵の再加工の可能性を指摘できる。出土最古層位は軒平瓦 82 が第３面、軒平瓦 83・84 がⅡ層である。

軒平瓦 85 は、１・２転目の唐草が分離している。出土最古層位はⅡ層である。

軒平瓦 86・87 (2740・2741)　小粒で上端が尖る宝珠文が中心飾りで、宝珠文上端に繋がる唐草を伴う。瓦当面の剥離材は軒平瓦 86 はｂ、軒平瓦 87 はｂもしくはａ２である。軒平瓦 86 は２転（上・下）する唐草をもち、巻き込む先端は若干丸く膨らむ。出土最古層位は第１面であり、同笵例は東ノ丸跡県民ホール地点Ｋ－16区瓦溜 SK01・SK02、歴博地点第３遺構面上層出土瓦にあるが、軒平瓦86よりも内区高が低い。軒平瓦 87 は唐草が１転し、その外側に連続して「～」形の子葉が繋がる。

軒平瓦 88 ～ 90 (2742 ～ 2744)　正円形を呈し上端が尖る、さほど肉厚ではない宝珠文を中心飾りにもち、宝珠下半から延びて２転（下・上）する唐草文を伴う。瓦当面の剥離材はａ２である。軒平瓦88は、宝珠の下側から延びて強く巻く唐草をもつ。宝珠の両側には逆「ハ」の字形に子葉が配され、唐草２転目の下側に平行して１転目から子葉（蔓）が延びる。左半部２転目は、途中で途切れて脇区に至っており、左端部の瓦笵が切り落とされていたことを窺わせる。なお、顎部・平瓦部の接合部位は内区上半にあるため、宝珠文上半が陰刻状を呈する。攪乱からの出土のため、所属層位は不明だが、東ノ丸跡歴博地点第２面SK31で同笵瓦が出土している。岡山城跡本丸中の段Ⅱ-8ト-SK56 出土瓦と同一系譜か。

軒平瓦89は、顎部の貼り付け部位が内区中位のため、接合痕との識別が難しいが、宝珠に２条の陰刻弧線を施している。瓦当面上縁には、面取りＣが施される。軒平瓦 90 は、軒平瓦 89 と同様の文様構成であり、宝珠の意匠も近似する。宝珠が小振りで、唐草の巻きが短い点が異なる。

軒平瓦 91 ～ 100（2745 ～ 2754） 肉厚だが平面的で円形に近い宝珠文を中心飾りにもち、宝珠下半側面から大きく巻き込んで１転する唐草を伴う。唐草の外側には「V」形の子葉が配される。文様構成はかなり定型的であり、個体差は文様の細かな形状や、内区の大きさにとどまる。瓦当面の剥離材は、全てｂである。

軒平瓦 91･92 は、内区高 3.0cm 前後を測るため、唐草が縦長に大きく巻き込み、子葉も斜め上方に長く延びている。宝珠・唐草・子葉相互が均整のとれた配置であり、また適度な余白をもつ内区の構成となっている。顎部・平瓦部の接合部位は内区上半であるが、文様は潰れや欠落なく明瞭に起こされている。出土最古層位は軒平瓦 91 が第２面、軒平瓦 92 がⅡ層である。

軒平瓦 93・94 は内区高 2.7cm、軒平瓦 95・96 は内区高 2.4cm であり、軒平瓦 91・92 よりも低い内区となっているが、唐草や子葉の形状はほぼ同様である。軒平瓦 93･94 は、平瓦部凹面中央から瓦当面中央にかけて表面が剥離・摩滅しているが、これは葺かれていた際の消耗状況を示す。軒平瓦 94 の平瓦部凹面には、摩滅部分の外側に沿ってきめ細かな泥土が付着している。実際に葺かれている瓦（坂出市前川商店の味噌・醤油倉：19 世紀中葉頃）との比較から、この泥土は組み合っていた瓦（軒丸瓦・平瓦）を伝い長期間流下・付着したものと考えられる。したがって、軒平瓦 94 の葺足長は 12cm 前後に推定できる。出土最古層位は軒平瓦 93・94 が第２面、軒平瓦 95・96 が第１面である。軒平瓦 94 は、東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX24 に同笵例がある。

軒平瓦 97 ～ 99 は、内区高 2.0cm 前後であり、軒平瓦 91 ～ 96 よりもかなり低い内区である。このため唐草の巻きが小さく、相対的に宝珠が大振りにみえる。軒平瓦 97 は軒平瓦 91 ～ 96 と同様の内区幅と唐草の幅（横方向の巻きの長さ）をもつが、軒平瓦 98･99 は内区幅が狭く、全体に文様が小さくまとまる。両者の違いは平瓦にも表れており、軒平瓦 97 が軒平瓦 93 ～ 96 と同様の 1.5cm の平瓦厚であるのに対して、軒平瓦 98･99 は 1.3mm と薄手化している。出土最古層位は軒平瓦 97 が第１面、軒平瓦 99 が第２面である。

軒平瓦 100 は、軒平瓦 98･99 よりもさらに狭い内区幅である。狭い内区幅で余白をもつ均整な文様構成をとるため、宝珠・唐草・子葉はXX ｆ類の中では最も小さくまとまる。また特徴的なのは、宝珠文の下側で左右唐草の蔓が繋がっており、その下側に「▲」形の陽刻が認められる点である。平瓦厚は 1.0cm と非常に薄い。出土最古層位は、第２面である。

軒平瓦 101・102（2755・2756） 小振りな逆ハート形の宝珠文を中心飾りにもつ。唐草は蔓が連続して延び２転（下・上）する。瓦当面の剥離材はａ２である。

軒平瓦 101･102 は、内区幅はほぼ同じだが内区高が軒平瓦 101 で 1.7cm、軒平瓦 102 で 2.3cm と大きく異なる。このため、横方向での宝珠・唐草の位置関係は概ね共通するが、縦方向では軒平瓦 101 は唐草が圧縮されたように配されている。出土最古層位は軒平瓦 101 がⅣ層、軒平瓦 102 が第３面である。

軒平瓦 103（2757） 陽刻線で輪郭と弧線を表す宝珠文を中心飾りとする。唐草は、宝珠下端から長く延びて２転（上・下）する。瓦当面の剥離材はａ１である。出土層位は不明だが、文様・剥離材などはより古く遡る要素をもつといえよう。

軒平瓦 104（2758） 陽刻線で輪郭を表し、その内側にレリーフ状の宝珠本体をあしらう意匠である。本体の上端には２条の陽刻弧線がみられる。唐草は、宝珠下端側面から延びており、２転（上・下）する。剥離材はａ２である。出土最古層位は第２面で、東ノ丸跡県民ホール地点第３層出土瓦に、同笵例が認められる。文様の系譜としては、東ノ丸跡歴博地点第４遺構面上層出土の 534 に連なる可能性もある。

2. 22. 軒平瓦XXⅠ類（軒平瓦 105 ～ 115：2759 ～ 2769）

クローバー形に中心飾りの輪郭を陽刻線で表すものをXXⅠ類とした。文様意匠の系譜としては、宝珠文・三葉文（半裁四葉文）・唐草文（軒平瓦 52）のいずれかの可能性がある。瓦当面の成形は、いずれもカキ目を伴う顎貼り付けである。

軒平瓦 105 ～ 113（2759 ～ 2767） 唐草文が下・上に２転するものである。瓦当面の剥離材は大半がａ２と考えられるが、軒平瓦 113 は同笵例からｂであることがわかる。軒平瓦 105 は、中心飾りの上端が鋭く尖っており、宝珠形に近い形態をもつ。唐草の蔓は、中心飾り下縁の形状に平行して左右が繋がる。唐草は大きく巻き込む。

軒平瓦 106 は、中心飾り上端が尖らず丸く膨らみ、半裁四葉（軒平瓦 29）に近い形態である。唐草は中心飾り下端側面から延び、小さく巻き込む。出土最古層位は、第３面である。中心飾りの幅が異なるため同笵ではないが、近似した文様構成をとる事例として、東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX24 出土瓦がある。

軒平瓦 107･108 は、軒平瓦 106 に近似する文様構成をとる同文品である。軒平瓦 109・110・111 は、中心飾り下端中央が明瞭に深くくびれている。軒平瓦 109

・110の中心飾りは上半部が長く立ち上がり縦横比が１：１であるが、軒平瓦111は上半部が短く全体に扁平な形態である。出土最古層位は、軒平瓦109がⅣ層、軒平瓦107が第３面、軒平瓦108が第１・２面である。軒平瓦109は出土状況から混入の可能性もあり、より上位層に伴うものであろう。軒平瓦111は東ノ丸跡歴博地点第２遺構面SX29出土瓦に同笵がある。

軒平瓦112は、本来の瓦笵の上半部のみが内区に笵起こしされており、中心飾りや１転目の唐草は下端を欠く。既述した軒平瓦29のように瓦笵下端を切り落とした可能性もあるが、下外区に向かって内区下端が潜り込むような接合痕がみられる点が注意される。瓦笵から外された後に、内区下半部分に粘土を充填して下外区を成形した可能性があろう。出土最古層位は第３面である。

軒平瓦113は、軒平瓦111同様の扁平な中心飾りをもつ。唐草は軒平瓦105～112よりも短く、かつ小さく巻き込む。１転目と２転目が分離している点も異なる。剥離材が唯一キラコであることも、他のXXⅡａ類とは異なる点である。出土最古層位はⅡ層である。同笵が東ノ丸跡歴博地点第２遺構面SX29より出土している。

軒平瓦114(2768)　扁平な宝珠状の中心飾りをもつ。唐草は中心飾り上半側面から上・下と２転する。摩滅が著しいが、瓦当面の剥離材はａ２か。

軒平瓦115(2769)　中心飾り下側中央のくびれの形状が軒平瓦105～114とは異なる。東ノ丸跡歴博地点第２遺構面上層出土瓦（報1552）に近い形態である。唐草は上・上と２転する。

2. 23. 軒平瓦XXⅡ類(軒平瓦116～153:2770～2807)

上向の半裁花菱文を中心飾りにもつものをXXⅡ類とした。早く安藤文良氏が指摘している（安藤1984）ように、近世後半に高松城で盛行する文様意匠である。半裁花菱文や唐草文の形状によって15種に細分した。瓦当面の成形は、カキ目を伴う顎貼り付けである。また瓦当面の剥離材は、ほぼ例外なくｂである。

軒平瓦116・117（2770・2771）　半裁花菱文の花弁輪郭付近が分厚く、中心部（中房）や子葉を太い陽刻線で表現する。唐草は２本の陽刻線で輪郭を表現しており、半裁花菱の上半部両側から斜め上方へ、渦巻状に強く巻いて２転するのが特徴である。唐草の外側には、やはり２本の輪郭線で表した「Ｖ」形の子葉が伴う。軒平瓦116・117は同笵の可能性が高い。出土最古層位は第１面である。

軒平瓦118（2772）　軒平瓦116・117に近い文様構成をとるが、半裁花菱が凹凸のない平板なレリーフ状であること、また唐草も幅広の陽刻線であることが異なる。半裁花菱は小振りである。出土最古層位は第１面で、その中でも最も後出する明治期のSXb02より出土している。

軒平瓦119(2773)　半裁花菱の花弁中央の軸線付近を分厚く、花弁の周縁を薄く表現し、さらにその外側の輪郭を陽刻線で表現している。唐草は軒平瓦116・117と同様、２重の陽刻線で表され、半裁花菱上半の側面から延びて２転（上・下）する。出土最古層位は第２面である。

軒平瓦120～122(2774～2776)　半裁花菱に形態差が認められるが、特徴的な唐草文の共通性（２重の陽刻線で表し、下・上と２転する）から単一の組列が想定されるため、まとめて分類した。軒平瓦120は半裁花菱の花弁先端が丸く突出しており、また花弁中心に子葉状の軸線が認められ、輪郭が特に分厚いが全体にレリーフ状に作られる。XXⅡ類の中でも、最も紋章としての唐花菱文に近い、端正な形態である。唐草は半裁花菱側面の花弁間から延びており、１転目と２転目の蔓は平行して延びる。唐草先端は内側に屈折し、小さく丸く膨らんで収まる。出土最古層位は第３面であり、XXⅡ類で最も古い時期の使用が想定できる。東ノ丸跡歴博地点第３遺構面上層・第２遺構面SX24出土瓦、内堀浚渫土採集品、月見櫓に同笵例がある。また、高松市仏生山町法然寺来迎堂北側の小堂に、同笵とみられる瓦がある。

軒平瓦121は、花弁の輪郭を幅広の陽刻線で表し、中房や花弁の軸線も陽刻するが、花弁の中央部は低く平坦である。したがって軒平瓦120よりも、立体感の乏しいレリーフ状を呈している。また、軒平瓦120よりも半裁された左右の花弁の長さが短くなっており、上側の花弁の大きさが強調されるようになっている。全体的に、紋章としての唐花菱文との相違が目立つ。唐草は上側の花弁の両側から延びており、１・２転目の蔓は僅かに平行して延びるが、唐草先端は太く巻き込む。内区高が2.4cmと狭くなる（軒平瓦120は3.2cmと広い）。出土最古層位は第３面であり、同笵が東ノ丸跡県民ホール地点第３層、歴博地点第２遺構面SK23・SX24にある。また当該調査区では出土していないが、県民ホール地点Ｏ－16区瓦溜SK01、歴博地点第２遺構面SX24・第２遺構面上層の出土瓦には、軒平瓦

120と軒平瓦121の中間的な唐草文の形態をもつものがある。

軒平瓦122は、半裁花菱の花弁全体が陽刻されており、花弁中央の軸線や肉厚な輪郭部などの表現は認められない。中房は花弁から明瞭に分離している。また唐草文は短く、１転目の先端は巻き込まずに収束し、２転目先端も折り返し気味に肥厚する程度である。内区高は2.2cmとさらに狭い。出土層位は不明だが、同笵が西の丸町Ｃ地区SXc13・14で認められるため、第２面に帰属させ得る。同笵瓦はこの他、東ノ丸跡歴博地点第３遺構面上層・第２遺構面SX29、内堀の出土・採集瓦にみられる。

以上のような文様構成から、型式学的には軒平瓦120→東ノ丸跡Ｏ－16区SK01出土瓦→軒平瓦121→軒平瓦122という序列が考えられる。

軒平瓦123～131（2777～2785） ⅩⅫａ類と同様の半裁唐花菱文を中心飾りにもつ。唐草文は半裁花菱上半の側面から延び２転（上・下）するが、１転目の唐草と連続して子葉が延びるのが特徴である。半裁花菱花弁の軸線の形状や、唐草文の形状によって細分できる。軒平瓦123・124は、特に上側の花弁軸線が非常に長く明瞭である。唐草文は１・２転目と子葉が繋がっており、子葉と２転目唐草の蔓は平行して延びる。軒平瓦123は内区高3.1cmと広く、軒平瓦120のような古式の内区法量に近似する。軒平瓦124では内区高2.6cmとやや狭い。出土最古層位は、軒平瓦123が第１面、軒平瓦124が第２面である。

軒平瓦125～131は、唐草１転目と２転目が分離し、子葉も分離する。このため、一見すると子葉は唐草２転目に伴うような配置になっている。上側の花弁軸線は、軒平瓦123・124ほど長くない。半裁花菱文・唐草文の形状に若干の細かな差異は認められるが、軒平瓦120～122で指摘できたような型式学的な変異を認めることは難しい。内区高は2.3～2.8cmの幅がある。出土最古層位は第１面が多いが、軒平瓦128はⅡ層である。

軒平瓦132・133（2786・2787） 軒平瓦123～131同様の半裁の唐花菱文をもつが、唐草文外側の輪郭線が波形に起伏しており、半裁花菱文花弁の外形と同じ形状を呈する。子葉は、先端が「ｙ」形に分岐する。軒平瓦133は、子葉の先端が棘状に尖る。出土最古層位は軒平瓦133が第１面である。軒平瓦132はⅡ層の可能性もあるが、他者より大きくかけ離れた層位のため、混入と捉えておきたい。

軒平瓦134・135（2788・2789） 半裁の唐花菱文を中心飾りとするが、花弁輪郭部の陽刻線は幅広で肥厚する。また２回反転（上・下）する唐草と子葉は、軒平瓦132・133でみられたような波形の起伏がさらにデフォルメされている。軒平瓦134は、半裁花菱の上側の花弁に伴う軸線が短く珠点状になり、中房に近接している。半裁された花弁の軸線は太く明瞭である。唐草は先端が丸く太く膨らんでおり、その外側に「ｙ」形の子葉が配される。軒平瓦135は、上側の花弁がデフォルメされて王冠形を呈する。上側花弁の軸線は中房と繋がって一体化している。唐草は雲形に膨らみ、本来の反転方向（上・下）が不明瞭になっている。軒平瓦135は出土最古層位が第１面で、大久保家屋敷廃絶時の溝とみられるSDb04埋土と、明治期のSXb02より出土していることから、19世紀中葉～後葉の所産と考えられる。軒平瓦134の出土層位（Ⅱ層）は、混入とみた方がよいであろう。

軒平瓦136(2790) 半裁花菱の上側花弁がさらに大きく強調され、左右の花弁は矮小化している。唐草も１・２転目が棘状に小さくなっており、その外側に「～」形の子葉と唐草状の子葉が配される。

軒平瓦137～140(2791～2794) 花弁に軸線を伴わない半裁唐花菱文を中心飾りとする。唐草は半裁花菱の花弁状にデフォルメされ、一見すると中心飾りと唐草の区別が困難なものもある。唐草のデフォルメの仕方が軒平瓦134～136とは異なっており、むしろ軒平瓦132・133に近い。このことから軒平瓦132・133に後続し、軒平瓦134～136とは別系譜の可能性がある。軒平瓦137は、唐草１転目は上方に明瞭に巻き込むものの、２転目は蔓部が短いため唐花菱状を呈しており、一見すると唐草か子葉かが紛らわしい。その外側の子葉は、幅広いが「Ｖ」形を呈する。出土層位は第１面が多く、その中でも明治期のSXb02に集中する。最古層位はⅡ層であるが、これはSXb02からの混入と考えられる。東ノ丸跡県民ホール地点Ｏ－16区瓦溜SK01出土瓦に同笵例がある。また同地点第３層出土の「高杢／水谷」刻印瓦は、軒平瓦137よりも先行するが同類の範疇で捉えられる可能性をもつ。

軒平瓦138は、半裁花菱文の形状は軒平瓦137と大差ないが、２転目の唐草は外側輪郭の膨らみが２つであり、唐花菱形に３つあった軒平瓦137とは異なる。また子葉のデフォルメも顕著であり、「Ｂ」形を呈する。

軒平瓦139は、半裁花菱の中房がかなり小さな珠点になる。唐草１転目の巻きはまだ比較的明瞭だが、２転目は垂直方向に延びて「Ｂ」形に近い形状を呈する。

さらに子葉は銀杏葉形に先端が３つに分岐して膨らむ。出土最古層位は第１面であり、明治 27 ～ 31 年の陶磁器生産に伴う物原 SXb01 より出土している。軒平瓦 140 も、これに近い文様構成であるが、２転目の唐草文はより直線的に延びて「B」形を呈する。

軒平瓦 141(2795)　レリーフ状の半裁唐花菱文を中心飾りにもち、下・上と２転する唐草文を伴う。子葉はない。花弁の周縁を分厚く作る。また唐草は、半裁花菱の側面から１転目と２転目の蔓が平行して延びている。唐草の表現（幅広の陽刻線か２重陽刻線か）の違いはあるが、軒平瓦 120 に近似した中心飾りと唐草配置といえる。同笵例が東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX31 に認められる。

軒平瓦 142・143（2796・2797）　半裁花菱の花弁中央が明瞭に窪んで軸線を陽刻線として示す。半裁された左右の花弁先端の輪郭は、切り込みが深くなっている。唐草１・２転目の蔓が繋がっている。以上の特徴が軒平瓦 141 とは異なる。

軒平瓦 144 ～ 146（2798 ～ 2800）　１・２転目の唐草が分離している。軒平瓦 144･145 は上側の花弁中央に軸線が陽刻されるが、軒平瓦 146 は軸線が認められない。出土最古層位は、いずれも第１面である。東ノ丸跡県民ホール地点Ｏ－ 16 区 SK01 出土瓦、内堀浚渫土採集品に軒平瓦 146 の同笵品が認められる。また、東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX26 出土瓦に同文例が見出せる。

軒平瓦 147・148（2801・2802）　軒平瓦 123 ～ 131 と同様の半裁唐花菱文を中心飾りにもち、その外側に２転（上・下）する唐草を伴う。軒平瓦 147 は、花菱文の花弁中央に軸線を伴うが、軒平瓦 148 では軸線は上側の花弁のみに認められ、左右両側の半裁花弁は輪郭部が肥大化して「Z」形を呈する。帰属層位は、ともに第１面とみられる。

軒平瓦 149・150（2803・2804）　半裁花菱文と唐草文の形状が軒平瓦 137 ～ 140 と共通するが、唐草外側の子葉がないものである。軒平瓦 149 は、軒平瓦 137･138 に近い文様の形状をもつ。軒平瓦 150 は、左右両側の半裁花弁が「Z」形を呈しており、軒平瓦 148 の半裁花菱に近似する。出土最古層位は、ともに第１面である。

軒平瓦 151 ～ 153(2805 ～ 2807)　唐草が上へ１転し、その外側に子葉を伴うものである。中心飾りの形状に差異が認められるが、ここでは一括した。軒平瓦 151 は、花弁の輪郭・軸線、中房が明瞭な半裁唐花菱文をもつ。子葉は「へ」形に屈折して延び、先端は剣先状に尖る。葺足長 13.5cm を測る。軒平瓦 152 は、幅広で肉厚な半裁花菱をもち、花弁に軸線は伴わない。軒平瓦 153 は、全体が平板で小振りな陽刻の半裁花菱をもつ。上側の花弁先端は鋭く長く尖る。唐草・子葉は幅広い。軒平瓦 153 の出土最古層位は、第１面である。

2. 24. 軒平瓦XⅢ類(軒平瓦 154 ～ 158:2808 ～ 2812)

下向の半裁花菱文を中心飾りにもつものである。唐草文の巻きや子葉の有無によって３種に細分した。

軒平瓦 154（2808）　上・下に２転して強く巻き込む蕨手状の唐草文を伴う。半裁花菱の花弁は先端が長く尖っており、花弁中央に軸線はない。出土最古層位は第２面である。

軒平瓦 155 (2809)　唐草の外側輪郭が膨らみ、唐花菱の花弁状を呈する。軒平瓦 149 の中心飾りの天地を逆転させたような文様構成である。第３面出土として取り上げられているが、XⅢ類での在り方からみて第１面に伴うものと捉えた方が妥当であろう。

軒平瓦 156 ～ 158(2810 ～ 2812)　レリーフ状の下向半裁花菱文を中心飾りにもち、下・上へ２転する唐草と子葉を伴う。１転目の唐草が、ほぼ垂直方向に延びるのが特徴的である。瓦当面成形はカキ目を伴う顎貼り付けであり、瓦当面の剥離材はｂである。軒平瓦 156 は、花弁の軸線が明瞭な半裁花菱をもち、１転目唐草の巻き込んだ先端が分離して珠点となる。唐草２転目は水平方向に延び、先端の巻き込みはやや弱い。唐草下側の子葉は「～」形を呈し、外側先端がやや幅広くなる。平瓦部凹面の風化範囲から想定される葺足長は 9.0cm である。同笵とみられる瓦が東ノ丸跡県民ホール地点第３層より出土している。また、高松城下郊外の農村部にあたる空港跡地遺跡（高松市林町）Ⅱ－ 20 区 SK48 出土瓦は唐草文が３転するが、軒平瓦 156 に先行する同系統の瓦と考えられる。

軒平瓦 157 は、半裁花菱文の花弁の幅が狭いため、各花弁の間隔が空く。軒平瓦 156 よりも半裁花菱の表現は立体的であり、花弁輪郭が分厚く中央付近は薄いが、軸線・中房は分厚く陽刻される。また軒平瓦 156 で唐草として表現されていた箇所が、珠点を伴う葉（１転目唐草に相当）や子葉（２転目唐草に相当）と

なっている。本来子葉であった部分は、内側先端が丸く肥厚する子葉として表される。瓦当面全体の形状は、脇区外縁が狭くなっており、瓦当面の上側隅部が大きく面取りされるなどの特徴があるため、あるいは桟瓦であるかもしれない。平瓦部凹面に「御(カ)街」と読める墨書がある。

軒平瓦158は、軒平瓦157と同様の半裁花菱文を中心飾りにもつ。中心飾り両側には唐草様の子葉が左右2個ずつ認められるが、軒平瓦157での2転目唐草の転化した子葉と、本来の子葉に相当するものと思われる。瓦当面全体の形状は、やはり両端が狭くなっている。

2. 25. 軒平瓦XXV類（軒平瓦159・160：2813・2814）

花弁が細長く軸線を伴わない唐花菱文を中心飾りにもつものである。瓦当面成形は、おそらくカキ目を伴う顎貼り付けであろう。また瓦当面の剥離材は、bである。軒平瓦159は、1転（上）する唐草とその外側で平行する2つの子葉を伴う。内側の子葉は、本来は下側に巻く唐草であったと考えられる。軒平瓦160は、軒平瓦159の内側の子葉が省略されたような文様構成である。出土層位は第1面で、明治後半～大正期と考えられるSDb03から出土した。

2. 26. 軒平瓦XXV類（軒平瓦161：2815）

半裁田字草文を中心飾りにもつものをXXV類とした。花弁の輪郭は、陽刻線で表される。唐草は、中心飾り側面から1・2転目の蔓が平行して延び、下・上に巻き込む。瓦当面成形はカキ目を伴う顎貼り付けであり、瓦当面の剥離材はキラコ（剥離材b）である。出土層位は第2面である。

2. 27. 軒平瓦XXVI類（軒平瓦162～181：2816～2835）

中心飾りが遺存せず、唐草のみ認められるものを文様系統不明として一括した。唐草の形状によって7種に細分した。

軒平瓦162（2816） 中心飾りから延びる蔓が途中で2つに分岐し、それぞれで2回反転するものである。瓦当面の成形方法は、瓦当部側面の調整痕から顎貼り付けの可能性を指摘できるが、断面では明瞭に確認することができない。また瓦当面の剥離材はaである。出土最古層位は第6面である。

軒平瓦163（2817） 唐草2転目の外側に唐草の巻き込みに対向するようなオタマジャクシ形の子葉を伴うものである。同様な子葉は軒平瓦46・47にも認められるため、これらと同類の可能性があるが、軒平瓦46・47のいずれとも異笵である。

軒平瓦164・165（2818・2819） 唐草外側の内区上半に「～」形の子葉を配するものである。軒平瓦123～131と同類である可能性が高い。

軒平瓦166～170（2820～2824） 下・上の順に2転する唐草文をもつものである。複数の文様系統に伴うと思われるが、中心飾りとの組み合わせを明示できるものはない。

軒平瓦171～174（2825～2828） 上・下の順に2転する唐草文をもつものである。やはり複数の文様系統に伴うものと思われる。

軒平瓦175～177（2829～2831） 上・上の順に巻き込む唐草文をもつ。軒平瓦175は、唐草の巻き方や顎貼り付け後の調整方法が軒平瓦26に近似する。また軒平瓦176）は、軒平瓦39～41の唐草に近似する。

軒平瓦178・179（2832・2833） 下・下の順に巻き込む唐草文をもつ。軒平瓦178は、軒平瓦44の唐草に近い。

軒平瓦180・181（2834・2835） 蔓が直線的に長く延びて上側に1転するものである。軒平瓦180は、中心飾り付近が瓦笵から外された後に強くナデられているが、棘状の突起を伴う下向の三葉文軒平瓦21の可能性がある。ただし、軒平瓦21とは異笵である。

3. 軒桟瓦（図版248～250）

3. 1. 概要

当該調査区で出土した軒桟瓦は、かなり少量である。一定度瓦当面が遺存して分類作業の検討に耐え得るのは、わずかに41点であった。また、小丸瓦当のみの破片が多いため、統一的な分類基準の設定が困難である。取り敢えず以下では、小丸瓦当の位置（瓦当面の左側・右側）で大きく分け、その上で平部瓦当の文様構成で分類を行った。Ⅰ～Ⅴ類は瓦当面の右端に小丸瓦当が位置するもの（逆桟瓦）であり、Ⅵ～Ⅶ類は瓦当面左端に小丸瓦当があるものである。小丸瓦当のみの個体は、各分類（小丸瓦当部の位置）の末尾に仮の分類案として付けた。詳細については、一覧表を参照された

い。

3. 2. 軒桟瓦Ⅰ類（軒桟瓦 1：2836）

平部瓦当の中心飾りが三巴文であり、軒平瓦66と同笵の可能性が高い。小丸瓦当は遺存していないが、桟部側面や平部瓦当右外縁のナデ調整をみると、瓦当面右端に小丸瓦当が貼り付けられていたことは間違いなかろう。出土地点は攪乱だが、軒平瓦との同笵関係を前提にするとⅡ層（第３面）に伴う可能性がある。高松城跡における軒桟瓦としては、最古の事例といえる。

3. 3. 軒桟瓦Ⅱ類（軒桟瓦 2 ～ 5：2837 ～ 2840）

平部文様区の中心飾りが上向の半裁花菱文のものである。文様構成から、４種に細分した。

軒桟瓦 2（2837） 平部瓦当が一部遺存するのみだが、２本の陽刻線で唐草輪郭を表現することから、半裁花菱文を中心飾りにもつ軒平瓦 120 ～ 122 と同一文様系譜であると考えられる。小丸瓦当には尾部の長い左巻き三巴文が認められる。平部瓦当は顎貼り付けによる。出土層位は第２面である。

軒桟瓦 3（2838） 平部瓦当は、軒丸瓦 145 と同笵である。

軒桟瓦 4（2839） 平部瓦当は、軒丸瓦 149・150 と同じ文様系譜をもつ。小丸瓦当は、左巻きで珠文を伴わない三巴文である。出土最古層位は、第１面である。

軒桟瓦 5（2840・2841） 平部文様区は、軒平瓦 153 と同笵であり、軒丸部は左巻き三巴文（珠文なし）である。出土最古層位は、第１面である。

3. 4. 軒桟瓦Ⅲ類（軒桟瓦 6・7：2842・2843）

平部文様区の中心飾りが唐花菱文と考えられるもので、軒平瓦 159・160 と同一系譜と捉えられる。

軒桟瓦 6・7（2842・2843） 軒桟瓦６は、軒平瓦 160 に近い文様構成である。軒桟瓦７は、子葉が短く「W」形に起伏が顕在化していること、また唐草先端が丸く肥厚して収まることから、軒平瓦 160 よりも後出的な要素を指摘できる。平部瓦当右外縁に「高松／玉屋」刻印が捺される。

3. 5. 軒桟瓦Ⅳ類（軒桟瓦 8：2844）

平部文様区の中心飾りに半裁菊花文をもつ。中心飾り両側には上方に１転する唐草があり、その外側には「((」形に子葉が各２本配される。小丸瓦当は左巻き三巴文であり、周囲に 12 個の珠文を伴う。３㎜以上の大粒の石英・長石を多量に含んでおり、在地産瓦とは異質な砂質気味の胎土をもつが、平部瓦当の成形は顎貼り付けの可能性がある。出土最古層位はⅡ層の可能性があるが、混入の可能性も否定できない。

3. 6. 軒桟瓦Ⅴ類（軒桟瓦 9 ～ 24：2845 ～ 2860）

平部瓦当右外縁に付く小丸瓦当のみの個体を一括してⅤ類とした。三巴文の巻きの方向（右・左）や珠文の有無によって、４種に細分した。

軒桟瓦 9（2845） 左巻き三巴文の周囲に 13 個の珠文を伴う。対向する巴頭部の間（内区の中心）には、直径１㎜の珠点が陽刻されており、文様の割付に伴う中心点と考えられる。

軒桟瓦 10 ～ 20（2846 ～ 2856） 珠文を伴わない左巻き三巴文をもつ。軒桟瓦 10 ～ 15 は巴尾部が長く、各巴の形態が同形同大で均整のとれた配置にある。軒桟瓦20は、肥大化した巴頭部と短い巴尾部をもつ。出土最古層位は、軒桟瓦 11・12・17・19 が第１面、軒桟瓦 14・16・20 がⅡ層である。

軒桟瓦 21・22（2857・2858） 珠文を伴わない右巻き三巴文をもつ。軒桟瓦21は、細長い巴尾部をもつが、各巴尾部の長さが不揃いで均整さに欠ける。第１～２面出土である。軒桟瓦 22 は、巴頭部が肥大化し、短く幅広の巴尾部をもつ。第１面出土。

軒桟瓦 23 ～ 25（2859 ～ 2861） 無文の内区をもつものである。内区径はほぼ同一で、外区幅が狭いために瓦当径が小さくなる軒桟瓦 23・24 と、外区幅が広く瓦当面径の大きい軒桟瓦 25 がある。いずれも攪乱からの出土であり、明治期以降の所産と考えられる。

3. 7. 軒桟瓦Ⅵ類（軒桟瓦 26：2862）

平部文様区の中心飾りに橘花文ないし蓮花文をもつものである。唐草は中心飾り下側から延びて２転(上・下)する。１・２転目の間から２本の子葉が延びる。小丸瓦当には、珠文を伴わない右巻き三巴文が配される。平部瓦当は顎貼り付けである。また平部瓦当右外縁には、「ウタツ富 (カ)」刻印が捺されている。同様の刻印は、桟瓦類にも認められる。同笵が３個体認められるが、同一刻印の桟瓦も含めていずれも攪乱出土であり、明治期以降の所産と考えられる。同笵瓦は高松城内・城下では現在のところ確認できないが、宇多津町大門の民家に葺かれた現役瓦に同笵例が見出せる。

3. 8. 軒桟瓦Ⅶ類（軒桟瓦 27・28：2863・2864）

平部瓦当左端に付く小丸瓦当の破片を一括してⅦ類とした。

軒桟瓦 27（2863） 珠文を伴わない左巻き三巴文をもつ。巴頭部は丸く大きく、尾部は細く短い。

軒桟瓦 28（2864） 内区・外区の区分がなく、瓦当面全体が膨らんだ凸面となっている。

4. 土塀瓦（図版 250）

4. 1. 土塀瓦Ⅰ類（土塀瓦 1：2865）

平部文様区の中心飾りが８葉の菊花文で、そこから唐草が２転（下・上）する。

4. 2. 土塀瓦Ⅱ類（土塀瓦 2：2866）

軒平瓦 128・129 を逆転させたような半裁花菱文（下向）を平部文様区の中心飾りとするものである。

4. 3. 土塀瓦Ⅲ類（土塀瓦 3・4：2867・2868）

軒桟瓦の小丸瓦当にあたる部位の破片である。方形を呈する瓦当面の文様区に、剣先形の花弁をもつ菊花文がある。

5. 菊丸瓦（図版 251 ～ 254）

5. 1. 概要

菊丸瓦は多量に出土しており、163 点を分類対象とした。同笵関係を念頭に置いた分類により、36 種に分けられ、さらにこれらを文様の表現方法によって７種 16 系統に整理した。

5. 2. 菊丸瓦Ⅰ類（菊丸瓦 1 ～ 13：2869 ～ 2881）

菊花文で花弁の輪郭を陽刻線で表現し、花弁先端まで輪郭が表現されたものをⅠ類とした。

菊丸瓦 1 ～ 4（2869 ～ 2872） 花弁が 16 葉のものである。瓦当面の剥離材は、剥離材ａ２と考えられる。菊丸瓦１は、花弁先端の輪郭平面が尖り気味で、断面は高く盛り上がってレリーフ状を呈する。中房は花弁基部よりも高く、輪郭が明瞭である。Ⅰ類の中で最も立体的な表現が認められる。外区は相対的に幅が狭く、またほぼ正円形を呈する。出土最古層位は第５面であり、当該調査区で確認できる最古の菊丸瓦である。東ノ丸跡県民ホール地点第３層、Ｏ－16 区瓦溜 SK01 より同笵とみられる瓦が出土している。菊丸瓦２は、瓦当面径が菊丸瓦１よりも若干小さい。花弁先端の輪郭は若干盛り上がるが、かなり丸味を帯びており中房の輪郭も不明瞭である。外区の幅は相対的に狭く、正円形に作られる。出土最古層位は、第３面である。ただし、上限はもう少し遡る可能性がある。菊丸瓦 3・4 は、花弁先端の輪郭線と花弁相互の分割線が不整合に繋がる箇所がある。また前者の方が彫りが深い。このことから、花弁先端の輪郭線を全周させ、その後に分割線を彫り込んだ可能性がある。なお中房は、花弁の分割線の彫り残しとして相対的に表現される。瓦当面径に占める外区幅の比率が増し、瓦当面外縁は歪な不整円形に作られる。菊丸瓦３は第３面が出土最古層位である。菊丸瓦４は第１面出土だが、瓦当面の剥離材がａ２であることを考慮すると、第３面まで遡る可能性がある。ともに東ノ丸跡県民ホール地点第３層に同笵瓦がある。

菊丸瓦 5 ～ 8（2873 ～ 2876） 花弁が 13 葉のものである。いずれも菊丸瓦１ほどではないが、菊丸瓦２同様に花弁先端の輪郭が肉厚に盛り上がっており、やや不明瞭ながら中房も高く表現されている。瓦当面の剥離材は、菊丸瓦５がａ２であるが、菊丸瓦６～８は石英・長石粒の目立つａ１である。菊丸瓦５は、Ⅳ層が出土最古層位であり、東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SK27 出土瓦が同笵である。菊丸瓦６～８は、花弁先端の間に陽刻の弧線が認められ、一見すると 14 葉のようにもみえる。この弧線周辺の花弁の形状はいずれも近似することから、菊丸瓦６～８は同笵である可能性もある。仮に同笵とすると、菊丸瓦６は花弁間の弧線が右に隣接する花弁先端には接しておらず、また全体に花弁先端の輪郭線が明瞭であることから、最も先行する段階のものといえる。菊丸瓦７は花弁先端の輪郭線が幅広になり、弧線は両側の花弁と繋がっており、一定度の瓦笵の使用に伴う文様の潰れが進行したことが窺える。さらに菊丸瓦８では、菊丸瓦７でみられた中房の抉れ（瓦笵への彫り込みがない箇所）がなくなり、中房が正円形を呈することから、菊丸瓦７に使用された瓦笵の一部を彫り直していることが想定される。なお、菊丸瓦６～８の大半は二次的な被熱によって酸化状態となっている。これは、多くが第２面被災関係の遺構（SXb06）から出土していることと合致する。菊丸瓦８の同笵瓦は東ノ丸跡歴博地点第２遺構面 SX28、第２遺構面上層より出土している。

菊丸瓦 9 ～ 12（2877 ～ 2880） 花弁が 12 葉のものである。瓦当面の剥離材がａ２の菊丸瓦９・10 と、ｂ

（キラコ）の菊丸瓦 11・12 に分けられる。菊丸瓦 9 は菊丸瓦 5 ～ 8 と同様、花弁先端の輪郭が肉厚に盛り上がる。出土最古層位は第 3 面である。菊丸瓦 10 は、花弁輪郭線が全体に平面的である。菊丸瓦の中でも小振りな個体であるが、外区幅は相対的に狭い。出土最古層位は第 3 面である。菊丸瓦 11 も、平面的な花弁輪郭線であるが、輪郭の陽刻線は細く文様も明瞭に笵起こしされている。花弁先端から外区に延びる笵傷のあるものとないものがある。丸瓦部の接合範囲は菊丸瓦 9 よりも狭い。出土最古層位はⅡ層である。菊丸瓦 12 も平面的だが明瞭な輪郭線をもつ。内区径は小さいが、外区幅が広いため瓦当面径は菊丸瓦 11 とほぼ同じである。丸瓦部との接合範囲は、菊丸瓦 9 よりも狭い。出土最古層位はⅡ層である。

菊丸瓦 13(2881)　花弁が 10 葉のものである。平面的だが明瞭な花弁輪郭線をもつ。瓦当面の剥離材はｂである。菊丸瓦 11 と共通した平滑な瓦当面の仕上がりといえる。出土最古層位は第 6 面であるが、混入であろう。

5. 3. 菊丸瓦Ⅱ類（菊丸瓦 14・15：2882・2883）

陰刻菊花文で花弁先端が外区内端を兼ねるものである。

菊丸瓦 14 (2882)　16 葉の陰刻花弁をもつ。花弁先端は外側に丸く膨らんでおり、その連続で外区内端を形成する。瓦当面の剥離材はａ 2 である。出土最古層位は第 2 面であるが、より遡る可能性はあろう。

菊丸瓦 15 (2883)　13 葉の陰刻花弁をもつ。花弁の先端は外区内端が優先するため、全体としては車輪状を呈する。瓦当面径は菊丸瓦としては大振りである。出土最古層位は第 3 面である。

5. 4. 菊丸瓦Ⅲ類（菊丸瓦 16 ～ 29：2884 ～ 2897）

陽刻菊花文をもち、花弁の先端が丸いものをⅢ類とした。

菊丸瓦 16(2884)　花弁が 16 葉のものである。花弁は中房に接する基部が細く、先端が丸く膨らむ。断面形態も花弁先端から中位にかけてが高く盛り上がっており、低い花弁基部に接する中房が高く作られており、立体的な作巧となっている。瓦当面の剥離材はｂである。出土最古層位はⅡ層である。

菊丸瓦 17(2885)　花弁が 13 葉のものである。菊丸瓦 16 に近い意匠であるが、花弁・中房の立体感にやや乏しい。瓦当面の剥離材はｂである。出土最古層位は第 1 面である。

菊丸瓦 18 ～ 24（2886 ～ 2892）　花弁が 12 葉のものである。瓦当面の剥離材は菊丸瓦 18 がａ 2 で、他はｂである。菊丸瓦 18 は、瓦当面径が大振りで外区幅は相対的に狭い、という菊丸瓦 1 と共通した特徴をもつ。花弁は全体的に細身だが、特に基部が細く低く、先端から中位が太く肉厚になっており、立体的な作りである。花弁先端は外側への膨らみが弱く、やや角張ったようになる箇所もある。出土最古層位は、第 5 面である。菊丸瓦 19 は、細身の花弁と小振りな中房をもち、菊丸瓦 18 に近似した文様といえる。ただし、花弁基部から中位にかけての形状が、菊丸瓦 18 ほどには細く低くはなく、やや立体感に欠ける。丸瓦部の取り付け範囲も、より狭い。菊丸瓦 20 は、花弁基部は細いが高く隆起しており、全体にかなり幅広で平面的である。出土最古層位は第 1 面であり、同笵の個体数も多いことから、第 1 面で汎用されたと考えられる。東ノ丸跡歴博地点第 2 遺構面 SK31 出土瓦に同笵がある。菊丸瓦 21 は、菊丸瓦 20 に近似した文様をもつが、外区幅は狭く作られるため、瓦当面径がひとまわり小さい。出土最古層位は第 1 面である。菊丸瓦 22 は、幅広で平面的な花弁をもち、内区径が小さいが外区幅が広いため、菊丸瓦 21 同様の瓦当面径をもつ。出土最古層位は第 1 面である。菊丸瓦 23 は、花弁基部が中房から分離する。内区・瓦当面径は菊丸瓦 22 同様である。丸瓦部の取り付け範囲は、極めて狭い。出土最古層位は第 1 面である。菊丸瓦 24 は、花弁基部が中房から分離しており、花弁全体は楔形（細長い台形）を呈する。外区幅はやや狭いが、瓦当面径は菊丸瓦 22・23 と同じである。

菊丸瓦 25 ～ 28（2893 ～ 2896）　花弁が 11 葉のものである。瓦当面の剥離材は菊丸瓦 26 がａ 1、菊丸瓦 27 がａ 2、菊丸瓦 25・28 がｂである。菊丸瓦 25・26 は、中房の輪郭が不明瞭で相対的で緩い隆起として表現される。また花弁も彫りが浅く平面的である。外区幅は狭い。丸瓦部の取り付け範囲は、広いようである。なお両者は同笵の可能性もある。出土最古層位は菊丸瓦 26 がⅡ層であり、第 3 面での使用が考えられる。菊丸瓦 27 は、瓦当面径 7.5㎝の小振りな個体であるが、文様は比較的立体感がある。また丸瓦部の取り付け範囲も広い。出土最古層位は第 2 面である。菊丸瓦 28 は、肉厚だが平面的な花弁をもち、花弁基部は中房から分離している。出土層位は不明である。

菊丸瓦 29（2897） 花弁が８葉のものである。花弁基部は中房に僅かに接する程度であり、花弁先端はやや外膨らみながら直線的である。瓦当面の剥離材はｂである。丸瓦部の取り付け範囲は狭い。出土最古層位はⅡ層だが、混入の可能性もある。

5. 5. 菊丸瓦Ⅳ類（菊丸瓦 30 ～ 32：2898 ～ 2900）

陽刻菊花文で花弁の先端が剣先形に尖るものをⅣ類とした。

菊丸瓦 30（2898） 花弁が 16 葉のものである。花弁基部は中房から分離しており、立体感のある文様となっている。瓦当面の剥離材はｂである。出土最古層位はⅣ層であるが、キラコの使用を考慮すると上位面の遺構ないし攪乱からの混入の可能性もある。

菊丸瓦 31・32（2899・2900） 花弁が 12 葉のものである。菊丸瓦 31 は菊丸瓦 30 同様に立体的な菊花文である。瓦当面の剥離材はａ２であり、丸瓦部の取り付け範囲は広い。出土最古層位はⅡ層である。菊丸瓦 32 も立体的な文様をもつが、丸瓦部の取り付け範囲は狭い。瓦当面剥離材はｂと考えられる。出土最古層位はⅡ層である。

5. 6. 菊丸瓦Ⅴ類（菊丸瓦 33：2901）

陽刻菊花文で外区内端が外膨らみの花弁先端の形状に合わせて波形を呈するものである。花弁基部は中房から分離しており、花弁は立体感に乏しい。瓦当面の剥離材は、ａ２と考えられる。出土最古層位はⅡ層である。

5. 7. 菊丸瓦Ⅵ類（菊丸瓦 34・35：2902・2903）

陽刻菊花文で外区を伴わないものをⅥ群とした。瓦当面の剥離材はｂである。

菊丸瓦 34 は、花弁基部が大きく窪み立体的な作りとなっている。中房の外縁には蓮子状に半円形の突起が連続して輪郭を形成している。出土最古層位は第１面である。菊丸瓦 35 は、菊丸瓦 34 よりも花弁の立体感がない。攪乱出土。

5. 8. 菊丸瓦Ⅶ類（菊丸瓦 36：2904）

左巻き三巴文をもつ菊丸瓦をⅦ類とした。巴頭部は丸く肥大化しているが、巴尾部は長く延びており、隣接する巴尾部と接する。瓦当面の剥離材はａ２である。また丸瓦部の貼り付け範囲は広い。出土最古層位は第３面である。

5. 9. 菊丸瓦Ⅷ類（菊丸瓦 37：2905）

横方向に扁平な楕円形の瓦当面をもち、陽刻の菊花文をもつものである。瓦当面の剥離材はｂである。

6. 鬼瓦（図版 255 ～ 260）

6. 1. 概要

当該調査区における鬼瓦の出土量は少ない。部位の特定に耐えない細片を除くと、34 点出土した程度であり、全体の形状がわかるものも限られる。このため、細かな分類は将来の課題として、取り敢えず暫定的に以下の分類を用いる。①鬼面を表現したⅠ類、②家紋をあしらったⅡ類、③その他の文様をあしらったⅢ類、の３者である。これらの後に、分類不能な破片をその他として一括して記述する。

6. 2. 鬼瓦Ⅰ類（鬼瓦１・２：2906・2907）

鬼瓦１は、第２面 SXb06 出土。右眼付近の破片である。裏面は大きく抉られ直線的な把手が付される。鬼瓦２は、第３面 SDb28 南半部掘り方出土。左顔面上半付近の破片で、立体的で肉厚なつくりである。左眼・頬・左耳の各部は粘土塊を貼り付けて成形されており、破断面にカキ目を伴う接合痕が観察できる。各部を貼り付ける顔面全体の芯部も、表面に貼り付けられており、接合部にカキ目がみられる。顔面と周縁表面・側面は、丁寧にナデ調整されている。裏面は、中央部が抉れて把手が付され、中央部以外は削り成形される。周縁裏面は貼り付けではなく、削り出される。

6. 3. 鬼瓦Ⅱ類（鬼瓦３～ 10：2908 ～ 2915）

鬼瓦３は、平成７年度調査区の試掘トレンチから出土した。付近は明治後半期以後の竹樋埋設溝（SDb03）があるが、第３面では瓦片を多く含んだ大型土坑（SKb65）があり、第５面では大型土坑（SKb105）、第６面では溝（SDb75）がある。いずれの遺構に伴うものかは明確でない。

周縁は、単調な風字形を呈しており、上縁と側縁の境の抉りがない。文様区には立体的な鶴丸紋がレリーフされる。鶴丸紋は基盤となる文様区に貼り付け成形されており、翼部は強いナデによって羽根の凹凸が表現される。眼部は管状工具の刺突によって作られる。周縁の成形は明瞭ではないが、表面側はカキ目を伴う接合痕状の痕跡が破断面にみられるため、貼り付け成形とみられる。裏面側は明確でなく、最終的には削り込みが施される。裏面把手部は抉りを伴わず、環状の把手部が貼り付けられる。焼成は良好な瓦質である。

鶴丸紋を家紋とするのは森氏であり、７区が生駒期の上級家臣森出雲の屋敷地に比較的近いこと（第６章第１節参照）から、本来は森出雲の屋敷地に葺かれていた可能性があろう。

鬼瓦４・５は、同じ意匠の四葉文をもつものである。鬼瓦４は第２面 SKb54 出土。周縁上縁と側縁の境に抉りを伴わないようであり、風字形の外形を呈する。周縁表面側と裏面側は貼り付け成形であり、裏面側の周縁は裏面全体の削り成形後に貼り付けられる。文様区には、円形の輪郭内に四葉文を配した文様が貼り付けられている。四葉文の花弁は、Ｓ字形の陽刻線を２本対向させて表現しているが、同様の意匠は「高松市街古図」（文化年間）や「東讃高松絵図」（弘化年間）において藩主連枝（松平大膳・松平主膳）の家紋（裏紋か）として描かれている。裏面の把手は、平坦な裏面中央部に貼り付けられる。焼成は瓦質であるが、周縁右上縁付近は炭素が飛んで土師質気味になっており、二次的な被熱の可能性を示す。

鬼瓦５は、７区Ａ12グリッドの調査区北西壁面側溝の瓦溜まりから出土しており、おそらく第３面の SKb65 に伴う資料であろう。文様区の四葉文は、規格は異なるが鬼瓦４と同一意匠である。周縁上縁と側縁の境に明瞭な抉りがあり、側縁はほぼ垂直方向に延びる。周縁下半にはハート形の彫り込みがあり、ヒレ部へと連続する。文様区下縁には、棟受けの抉り部がある。裏面には全体に削りが施され、その後に周縁が貼り付けられる。貼り付けられた周縁側面は、板状工具で強くナデ付けられ、さらにその後に表面全体が丁寧にナデ調整され、仕上げられる。なお、ヒレ部に近い文様区下半には、「＝」形の刻線が認められる。焼成は瓦質であるが、棟受け付近が土師質を呈しており、二次的な被熱の可能性をもつ。

鬼瓦６は、７区Ａ13グリッドの調査区北壁側溝から出土しており、本来伴っていた遺構ないし整地土は特定できない。中央の文様部分と、その裏側に貼り付けられた把手部下半が遺存するのみである。表面の文様は「上り藤に大」であり、高松藩大老大久保家の家紋である。文様は彫刻刀様の工具で彫り出されているが、子細にみると先行してヘラないし針状の工具で文様の輪郭線を描いた痕跡が各所にある。また、破断面にみえる擬口縁の状況から、文様区の基盤となる粘土板の厚さは 0.5cm 前後と非常に薄く想定できる。表面は非常に丁寧にナデ調整されており、焼成も良好な瓦質を呈する。

鬼瓦７は、Ｃ13グリッドの８Ｂ区北辺側溝から出土した。付近はかなり広範囲に攪乱があるため、二次的に移動した状態で出土した可能性がある。鬼瓦６同様、文様部付近と裏側の把手部が遺存した状況である。文様区の基盤は厚さ 1.0cm 前後であり、鬼瓦６ほどではないがやはり薄く作られている。文様は六葵紋であり、高松松平家の裏紋である。文様の輪郭線をヘラ状工具で切り込んでいるが、それに先行する中軸上の割り付け線や、輪郭線の縁取りが観察できる。表面は全体に丁寧にナデ調整される。裏面は粗雑なナデ調整がみられ、把手貼り付け部分にカキ目が施される。また把手部は貼り付け後に削り調整される。焼成は良好な瓦質で、一部に銀化状の光沢を伴う。

鬼瓦８は、８Ａ区Ⅱ層瓦溜まり出土。表面文様区に円形の輪郭を伴う文様があるが、遺存状況が悪く文様の特定は困難である。ただし、以下の特徴が認められる。①円形の輪郭を３等分して茎状の陽刻線が、内側に向かって短く延びる。②茎状線の先端から扇形に広がる文様部とその剥離面がある。この２点から文様区には本来、三葵紋が施されていた可能性が考えられる。改めて遺存状況を観察すると、周縁や文様区の基盤に比して、文様のみが著しく損傷している傾向が指摘でき、意図的に文様を消去した可能性も考えられる。周縁は、上縁と側縁との間に抉りがある。また、周縁表面の文様区側輪郭に沿って、幅広い沈線が施される。裏面は全体に削りが施され、周縁裏面側と把手部が削り出される。把手は裏面が抉られて付される。焼成は瓦質であるが、棟受け付近は土師質を呈しており、二次的な被熱の可能性がある。

鬼瓦９は、第３・４面 SPb146 出土。文様区下端の破片である。文様区には円形の輪郭と、その内側に表現された文様からなるが、鬼瓦８同様、周囲器面の良好な遺存状況にもかかわらず、輪郭部の内側の遺存状況は悪い。円形の輪郭から内側に向かって茎状の太い陽刻線が延びていることから、やはり三葵紋の可能性があろう。裏面は削りが施され、把手は裏面が抉られて付される。焼成は良好な瓦質。

鬼瓦 10 は、第３面 SDb36 掘り方内埋土出土。文様区下半の破片である。円形の輪郭の内側は、焼成後に徹底的に削り落とされており、本来の文様については全くわからない。しかし鬼瓦８・９でみたように、三葵紋を意図的に消去して廃棄する可能性があることから、鬼瓦 10 についても三葵紋の可能性は指摘できよう。裏面には削りが施されず平坦であり、把手は環状の形態を貼り付けるタイプである。

6. 4. 鬼瓦Ⅲ類（鬼瓦 11 ～ 13：2916 ～ 2918）

鬼瓦 11 は８Ａ区攪乱出土。文様区には円形の文様が貼付された痕跡があり、カキ目の顕著な接合部で剥離している。周縁上縁と側縁の間には、抉りが認めら

れる。また周縁は、表面側も裏面側も基盤となる粘土板に貼り付けられている。表面・裏面ともにナデ調整が施される。焼成は良好な瓦質を呈する。

鬼瓦12は、A12グリッドの7区南端の第3・4面レベル覆土（Ⅱ層相当）であるが、付近は攪乱が著しいため、攪乱出土の可能性もある。文様区には火焔宝珠文が貼り付けられており、宝珠文中軸には割り付け線らしいヘラ書き線が認められる。周縁上縁には抉りが入るが、抉りの位置は5・8・11よりも上縁側にあり、相対的に上縁幅が狭いことになる。周縁は、表面側も裏面側も貼り付け成形で、接合部にはカキ目が顕著に施される。裏面全体はナデ調整であり、把手は環状のものが付される。良好な瓦質焼成を呈する。

鬼瓦13は8B区Ⅱ層出土。本来の天地が明確でないが、外面右縁に棟受けの抉りが認められないため、一応図版258のように図示した。周縁上縁は、右端が蕨手状に巻き込む。裏面は全体に削りが顕著である。

6. 5. その他（鬼瓦14～29：2919～2934）

鬼瓦14は、第3・4面SDb28出土。飾りの一部とみられる。球形の粘土塊に多数の刺突が施される。

鬼瓦15～21は、周縁部の破片である。第5面SKb130下層（鬼瓦18）、第2面SXb06（鬼瓦16・17）、第1面SXb01最下層（鬼瓦19）・同Ⅲ層（鬼瓦15）、8B区C－13グリッド攪乱（鬼瓦20）、8A区西半部南北トレンチ（鬼瓦21）から各々出土している。鬼瓦15・16・18は周縁部上縁と側縁の境に抉りを伴う。鬼瓦16は、縁帯状に盛り上がる通常の周縁部のさらに外側に、基盤粘土板から連続する平坦な外周が存在する。鬼瓦20・21は鬼瓦5に近似したハート形の彫り込みを伴うが、彫り込みの周囲に沈線を伴う点が鬼瓦5と異なる。技法的には、いずれの個体も裏面を削り成形している。これに関連して、明らかに周縁部裏面側を貼り付けたとみられる個体がないため、同部は削り出し成形と考えられる。

鬼瓦22～25・28～30は、ヒレ部付近の破片である。Ⅱ層瓦溜まり（鬼瓦22）、第2面SXb06（鬼瓦24・28・29）、第1面SXb02（鬼瓦25）、SXb03（鬼瓦23）、8C区C12グリッド攪乱（鬼瓦30）、から各々出土した。鬼瓦22・23は、鬼瓦20・21の周縁部から下側に延びるヒレ部であり、おそらく鬼瓦24も同タイプであろう。鬼瓦25・28は、無文のタイプである。鬼瓦25は大半が土師質を呈しており、二次的被熱の可能性を示す。鬼瓦29は輪郭に沿って沈線を施す。鬼瓦30は小型の鬼瓦と推測され、合わせ型成形の人形のように、別作りの同形態を貼り合わせるところが他者と異なる。表面は丁寧に磨き調整され、良好な瓦質焼成を呈する。

鬼瓦26・27は雲形の装飾部をもつものであり、レリーフ状に襞を表現し、それと平行して沈線も施す。焼成は良好な瓦質である。

6. 5. 鯱瓦（鯱瓦1：2936）

SXb03出土の鯱の尾部である。芯材の上に粘土を貼り足して成形する。表面を半円形に押厚して鱗を作る。尾鰭は、放射状に襞状のレリーフを施して作られている。

7. 軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・鬼瓦（補遺）

上記分類終了後に再選別・抽出したものを図版261に示した。以下、各種別にしたがい記述する。

7. 1. 軒丸瓦

軒丸瓦278・279（2937・2938） 軒丸瓦Ⅱ類に分類できる。軒丸瓦278は鉤形の巴頭部と、相互に連続的に接して圏線状をなす細長い巴尾部からなる。珠文数は26個前後で、珠文径は小振りである。軒丸瓦279は細片だが、軒丸瓦278と同様の文様構成をとる。

軒丸瓦280・281（2939・2940） 軒丸瓦Ⅳ類である。かなり長い巴長をもち、隣接する巴尾部と重複・平行するものである。軒丸瓦68～70と同じ系譜と考えられるが、これらよりも珠文数は多い。

軒丸瓦282(2941) 軒丸瓦Ⅳ類である。鉤形で小振りな巴頭部と、外側に向かって短く巻く巴尾部からなり、軒丸瓦62～67と同一系譜と考えられる。珠文数は18個前後と多く、瓦当上面は大きく反る点に古い様相が看取できる。

7. 2. 軒平瓦

軒平瓦182～184(2942～2944) 三葉文を中心飾りとする一群である。軒平瓦182は、陽刻細線で三葉文と2転する唐草文を表す。三葉文は中心葉の上端中央に珠点があり、蔦葉文の可能性がある。第1唐草の外側には斜め上方に延びる子葉が、また第2唐草の外側には飛び唐草状の子葉が2条認められる。第2唐草外側の子葉の形状は、軒平瓦35（中心飾り菊花文）に近いが、瓦当剥離材はaと考えられるため、より遡る時期の所産とみられる。

軒平瓦183は瓦当高の高い、やや大振りな個体で、中心の三葉文は笹文か。第1唐草は先端が丸く肥厚し、第2唐草は同様の形態の輪郭が陽刻細線で表現されて

いる。このような唐草・子葉の構成は、三葉文系の軒平瓦27で認められ、文様表現の細かさからみると軒平瓦183→軒平瓦27という変遷が想定される。

軒平瓦184は、細身の三葉文を中心飾りに、また連続して3転する唐草文をもつ。瓦当面の作巧は粗雑であり、脇区には瓦当貼り付けによる亀裂が生じている。文様構成や内区の相対的な広さから、第6面段階に伴うものと判断される。第3唐草の向きが反対方向であるが、東ノ丸跡歴博地点SX28出土瓦（歴博1182）と同文的関係が指摘できる。

軒平瓦185～190(2945～2950)　宝珠文を中心飾りにもつ一群である。軒平瓦185は、やや大振りの瓦当部をもつもので、両側に子葉状の短い突起をもつ菱形に近い縦長の宝珠文を中心飾りにもつ。唐草文は3転するが、第3唐草は短く巻いており子葉状である。脇区幅が狭く、相対的に内区幅が広い。

軒平瓦186は、輪郭を陽刻細線で表す火焔宝珠文を中心飾りにもち、唐草は中心飾りから平行して3条延びる特徴的な形状をもつ。高松城旭門の現役瓦に、同笵ないし同文例がみられる。また、岡山城跡本丸中の段出土瓦（中の段81～86）にも同文例が認められる。

軒平瓦187は、陽刻宝珠文の両側に蕾状の先端部を伴う子葉が認められる。

軒平瓦188も陽刻宝珠の両側に子葉を伴うが、蕾状の表現はない。また第2唐草の下側に蔓と平行する陽刻細線が認められる。宝珠文はやや歪な形状で右側に傾く。同笵例が東ノ丸跡歴博地点SK31出土瓦（歴博963・964）に認められる。

軒平瓦189は、陽刻の火焔宝珠文を中心飾りにもち、両側に輪郭を陽刻細線で表し先端が分岐する唐草文を伴う。瓦当面剥離材はb（キラコ）であり、同笵例が東ノ丸跡歴博地点第2遺構面上層出土瓦（歴博1555）の他、旭門・法泉寺山門・男木豊玉姫神社などの現役瓦でも認められる。

軒平瓦190は、唐草文が連続的に2転（3転か）して、外側に先端が珠点状に肥厚する直線的な子葉を伴う。中心飾りの形状は明確でないが、東ノ丸跡歴博地点第4遺構面上層出土の類品（歴博538）を参考にすると、小振りな宝珠文の可能性が考えられる。

軒平瓦191(2951)　中心飾りが蔦葉文のものである。先端が3本の棘状に分岐する側葉と、丸く肥厚する唐草先端部の形状が特徴的である。丸亀・多度津・宇多津・坂出などの地域を中心に分布する現役瓦に多くみられる意匠で、高松城下（市街）での確認例は現役瓦も含め、現在までのところ本個体が唯一の事例である。

7. 3. 軒桟瓦

軒桟瓦29（2952）　レリーフ状の半裁花菱文を中心飾りにもち、輪郭を陽刻線で表した2転する唐草文を伴う。逆桟瓦であり、瓦当面の剥離材はb（キラコ）である。

7. 4. 鬼瓦

鬼瓦31（2912・2953）　既述した鬼瓦7（2912）と同一個体であり、整理作業の終盤で接合可能な周縁の存在に気が付いた。周縁部は、上縁と側縁の境に抉りがある。側縁下半にはハート形の彫り込みがあるが、沈線による縁取りはない。鰭部は、周縁外側に強く巻き込み、襞状の表現は立体的である。

8. 丸瓦（図版262～280）

8. 1. 概要

丸瓦は軒瓦をはるかに上回る数量が出土したが、細片も多いため、全てを有効に分類・識別するには至らなかった。そこで、胴部が一定程度遺存している個体（①連結面と広端面、②両側面が一定度遺存しているもの）、すなわち胴部長と胴部径（幅）が復元可能な個体を主体に抽出した。その上でそれらを①法量（胴部長・胴部幅・胴部厚）と②凹面の布目・コビキの状況、③側面の削り、④胎土などの属性から分類した。また細片でも他者と明らかに異なる特徴をもつものは分類対象とした。ただし必ずしも各個体の観察が行えず、①に最も重点を置いた分類となったため、より詳細な検討を通じてさらに細分できる余地がある。

8. 2. 玉縁丸瓦

丸瓦1（2954・2955）　全長31.8cm・玉縁長2.8cm・広端幅14.7cmを測る。石英・長石粒を多く含む、やや砂質気味の胎土をもつ。凹面に糸切り痕が明瞭に認められる個体がある(2955)。吊り紐痕は佐川氏分類のDであり、狭端側の凹面に1段認められる。胴部凹面側縁の削り幅は2.5～3.0cm、凹面広端面の削りは幅5.5～6.0cmと、かなり広い。胴部凸面は幅1.5cm前後の明瞭なヘラナデ調整が行われるが、狭端縁に縦位の縄叩き目が残るものもある(2954)。連結面は平坦であるが、玉縁凸面へは緩やかなカーブを描いて連続しているものが多い。玉縁は狭端縁が凹面側に短く内弯する。焼成は瓦質で、表面は黒色を呈するが、還元が十分でないため断面が土師質を呈するものもある。出土最古層位は第4面であるが、実際の上限は当然ながら第6面でも古い段階まで遡るであろう。

丸瓦２（2956） 胴部広端側を欠くが、胴部の狭端縁幅が15.3cmを測り、丸瓦１よりも一回り大きい。また胎土も砂粒の混入の少ない、きめ細かなものである。凹面の糸切り痕・削り幅、凸面のヘラナデ・叩き目など、技法的には丸瓦１と共通する。連結面は平坦で、玉縁凸面へは明瞭に屈折する。焼成は瓦質で、断面も灰白色を呈しており、良好な焼成である。ただし、側面付近が土師質を呈しており、二次的な被熱の可能性がある。出土層位は不明。

丸瓦３（2957～2959） 細片が多く、全体の形状・法量については明確でない。胴部中位の幅は13.0cmであり、丸瓦１よりも一回り小さい。これに対して玉縁長は4.7cmで丸瓦1･2よりも長く、狭端縁が内弯せずに直線的に延びる。また胴部凹面側縁と玉縁凹面側縁の削りが連続していることは、丸瓦1･2には認められない技法的特徴である。その他の技法は、概ね丸瓦1･2と共通する。胎土は砂粒の少ないきめ細かなものであり、焼成は表面に炭素が吸着し、断面が灰白色を呈する。７点中６点が第６面出土で、１点もＶ層出土で本来は第６面に伴うものとみてよかろう。

丸瓦４（2960） 全長30.5cm・玉縁長3.0cm・胴部狭端縁幅12.6cmを測る。丸瓦１よりも若干短いが、それよりも胴部幅（径）がかなり小さい。凹面・凸面の技法痕や玉縁の形状などは丸瓦１と共通するが、胴部凹面側縁を削りの後に横方向にナデ調整する点が異なる。胎土は石英・長石粒や黒色粒を多く含み、空隙も多いざらついた特徴がある。焼成は瓦質で、表面は銀化して光沢がある。出土層位は第６面である。

丸瓦５（2961） 全長33.1cm・玉縁長4.6cm・広端幅16.0cm前後を測る。丸瓦１よりも若干大振りであるが、胴部厚は2.0～2.3cmを測り、丸瓦１よりも薄手でやや重量感に欠ける。凹面はコビキ法であり、布目と重複する疎らな刺子痕が認められる。胴部凸面にはヘラナデが明瞭かつ密に施されるが、胴部凸面狭端側には先行する回転ナデ痕が認められる。

丸瓦６（2963） 丸瓦５よりも胴部の湾曲が緩いため、胴部径が大きくなるものである。ただし完形でないため、全長や玉縁の形状は不明である。胴部厚は丸瓦５同様に薄手である。凹面には切り離し痕が明瞭ではないがコビキ法と推測され、布目と比較的密な刺子痕が認められる。凹面の削り幅は、側縁・広端ともに狭く明瞭である。

丸瓦７（2964） 全長31.5cm・玉縁長4.0cm・広端幅15.5cmを測る。連結面から玉縁への屈曲は明瞭である。凹面には布目・刺子痕がみられるが、中央部付近は縦方向に布目のみ認められ、刺子痕もある両側と段差を伴っている。模骨に巻かれた刺子を伴う布が、完周していなかったことを示していよう。なお切り離し痕は、コビキである。焼成は良好な瓦質であり、断面灰白色、器面は暗灰色を呈する。

丸瓦８（2962） 胴部広端側を欠損する。胴部湾曲が弱いため、やや幅広で低い胴部をもつ。またこれに関連して、胴部厚も２cmと厚手である。連結面から玉縁へはやや緩やかにカーブする。凸面のヘラナデは、単位が明瞭である。凹面にはコビキ痕と細かな布目が認められ、吊り紐痕（佐川氏分類のＤ類）も明瞭である。出土層位はⅡ層であるが、以上の特徴からより遡る時期（17世紀代）の所産と捉えられる。

丸瓦９（2965） 胴部広端側を欠損する。丸瓦８に似るが、玉縁長がやや長く、凹面に細かな刺子痕を伴う。凸面のヘラナデは工具擦痕が目立ち、ハケ目状を呈する。

丸瓦10（2966） 全長29.9cm・玉縁長3.7cm・狭端幅13.8cmを測る。丸瓦７に近似するが、それよりも一回り小振りである。連結面と玉縁の境は、短く強くカーブする。凸面にはハケ目状のヘラナデが施され、胴部中位に四葉印花文状の刻印が施される。また狭端部（連結面上角）に幅２㎜程度の面取りが施されるのは、丸瓦１～９でみられなかった特徴である。凹面には丸瓦５と同様な、縦方向に細長い刺子痕が認められる。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦11（2967） 全長28.0cm・玉縁長3.4cm・広端幅12.9cm前後を測る。連結面と玉縁との境は明瞭に屈折する。狭端部凸面付近には回転ナデが認められ、それを切って縦方向のヘラナデが施される。凹面にはコビキ痕と、縦方向に長い刺子痕が明瞭である。狭端部には３㎜程度の幅狭の面取りが施され、連結面には丸瓦10同様の刻印が施される。焼成は、本来は良好な瓦質と考えられるが、二次的被熱で炭素が飛び酸化している。

丸瓦12（2968） 全長27.6cm・玉縁長3.7cm・広端幅13.6cm前後を測る。丸瓦11と比較すると、全長が短く広端幅は大差ないことから、より寸胴化させたよ

うな法量・形態といえる。しかし一方で胴部厚が5 mm近くも減少していることから、より一層の小型化に伴い薄手化が進行したことを窺わせる。連結面と玉縁との境は、短い間隔で強くカーブする。凸面には、明瞭なハケ目状のヘラナデが施され、狭端部は幅狭く面取りされる。凸面狭端側には長方形の刻印が施される。凹面にはコビキ痕とともに間隔が密で筵状になった刺子痕が認められる。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦13（2969） 全長27.7cm・玉縁長3.1cm・広端幅12.1cm前後を測る。丸瓦12に近似した法量だが、胴部の湾曲が弱く胴部幅が狭いため、胴部高が低くなっている。連結面は明瞭な平坦面をなさず、大きくカーブして玉縁に連続している。凹面にはコビキ痕が明瞭で、玉縁凹面付近には布目・刺子痕が顕著である。胴部が模骨に密着していなかったことを示すか。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦14（2970） 全長27.5cm・玉縁長3.9cm・広端幅13.5cm前後を測る。丸瓦12に近似した法量をもつが、胴部の湾曲は弱い。連結面と玉縁との境は、明瞭に屈折する。また狭端部に幅狭の面取りが施される。胴部凸面にはヘラナデ後に横方向の擦痕が認められるが、おそらくは使用時の痕跡であろう。凹面には明瞭なコビキ痕とともに、布目と刺子痕が認められる。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦15（2971） 全長25.7cm・玉縁長3.7cm・広端幅13.2cmを測る。丸瓦12と胴部幅・玉縁長は大差なく、胴部長の寸胴化が顕著である。また胴部の湾曲がさらに弱く、低い胴部高となる。連結面と玉縁との境は明瞭に屈折する。胴部凸面はヘラナデが粗雑で、先行する回転ナデが認められる。凹面にはコビキ痕とともに、細かな筵状の刺子痕が認められる。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦16（2972） 全長26.2cm・玉縁長2.6cm・広端幅13.5cm前後を測る。2.4cmという厚手の胴部厚、短い玉縁が特徴である。連結面と玉縁との境は明瞭に屈折する。凹面側縁は削り後にナデ調整される。凹面には刺子痕が認められる。胎土は、丸瓦10～15とは異なり、やや粘性に欠け亀裂の入りやすいものである。出土最古層位は第5面であり、小振りだがやや古式の丸瓦と捉えられる。

丸瓦17（2973） 全長25.5cm・玉縁長3.0cm・広端幅13.1cm前後を測る。丸瓦16と同様な胎土をもつ。連結面と玉縁との境は強くカーブする。胴部高は丸瓦16よりも低い。凹面には縦方向に長い刺子痕が認められる。

丸瓦18（2974） 全長25.4cm・玉縁長3.5cm・広端幅12.5cm前後を測る。丸瓦16と同様な胎土をもつ。法量は丸瓦17に近いが、連結面と玉縁との境が明瞭に屈折する点が異なる。凹面の刺子痕は、やや幅広だが縦方向に長く、横同士の間隔は広い。

丸瓦19（2975） 全長24.0cm・玉縁長3.3cm・広端幅12.8cm 前後を測る。連結面と玉縁との境は、強くカーブする。胴部凸面には、擦痕の明瞭なハケ目状のヘラナデが施される。凹面の刺子痕は、縦長だが縦横ともに間隔が密である。

丸瓦20（2976） 全長23.0cm・玉縁長3.7cm・広端幅12.0cm前後を測り、全長の短さに比して玉縁の長さが目立つ。連結面と玉縁との境は、明瞭に屈折する。狭端部は幅狭く面取りされる。凹面の刺子痕は縦長だが密である。焼成は二次的被熱で炭素が飛んでいるが、良好な瓦質である。

丸瓦21（2977） 全長23.9cm・玉縁長3.7cm・広端幅12.2cmを測る。連結面と玉縁との境は、強くカーブする。凸面側縁の削りは弱くナデ状で、凹面側縁の削りが明瞭である。凹面の刺子痕は縦長で密だが、大きさがやや不揃いで筵状を呈する。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦22（2978） 全長23.1cm・玉縁長3.8cm・広端幅13.0cm 前後を測る。連結面と玉縁との境は、強くカーブする。凹面側縁は明瞭に削られるが、凸面側縁はナデ調整され丸味を帯びる。凹面には筵状の刺子痕がみられ、それを切り込む内叩き痕が弱く認められる。なお内叩き痕が認められない個体もある。焼成は良好な瓦質で、一部銀化している。

丸瓦23（2979） 全長23.0cm・玉縁長3.8cm・広端幅11.7cm前後を測る。連結面と玉縁との境は、緩やかにカーブする。凹面の刺子痕は、縦長だが密である。

丸瓦24（2980） 全長21.4cm・玉縁長2.7cm・広端幅11.9cmを測る。連結面と玉縁との境は、明瞭に屈折する。凹面の刺子は、単位の大きさが不揃いで筵状を呈する。連結面には「丸に一」の刻印が施される。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦 25（2981） 全長 20.7cm・玉縁長 3.3cm・広端幅 12.3cm 前後を測る。丸瓦 16～18 と同様な胎土である。連結面と玉縁との境は、強くカーブする。規格の近い丸瓦 24 よりも胴部の湾曲が弱く、かなり扁平である。凹面の刺子は単位が不揃いで、筵状を呈する。

丸瓦 26（2982） 全長 19.4cm・玉縁長 3.0cm・広端幅 11.5cm 前後を測る。連結面と玉縁との境は、明瞭に屈折する。凹面の刺子痕は、単位が不揃いで筵状を呈する。側縁の削りは、凹面側は明瞭だが凸面側は微弱で、ともにナデ調整される。また、広端部・狭端部ともに幅狭の面取りが施される。焼成は良好な瓦質で、一部銀化する。

丸瓦 27（2983） 全長 26.2cm・玉縁長 3.6cm・広端幅 15.0cm 前後を測る。全長に比して胴部幅が広いこと、胴部の湾曲が緩やかなこと、胴部厚が薄手であること、などの形態的特徴をもつ。連結面と玉縁との境は、明瞭に屈折する。側縁の削りは、凸面側も凹面側も幅狭で水平方向に施される。側縁凹面の削りは、玉縁凹面の削りより後出し、両者の境界は前者に大きく削り込まれている。狭端部とともに広端部も面取りするのも、特徴的である。凹面には、明瞭な刺子痕を伴わない布目が認められ、幅 5 mm 前後の内叩きが 7 条施される。焼成は良好な瓦質で、一部銀化している。

丸瓦 28（2984） 全長 22.5cm・玉縁長 2.8cm・広端幅 13.5cm 前後を測る。丸瓦 27 同様に、全長に占める広端幅が広い特徴がある。連結面と玉縁の境は強くカーブし、広端部・狭端部に幅狭の面取りが認められる。側縁の削りは、凹面・凸面ともに水平に近い幅狭なものであり、玉縁凹面の削りを切り込む。凹面には、刺子痕に後出する 6 条の内叩き（幅 8 mm 前後）が認められる。図示した資料は二次的被熱で酸化しているが、本来は銀化した良好な瓦質焼成とみられる。

丸瓦 29（2985） 全長 22.1cm・玉縁長 3.1cm・広端部幅 13.3cm 前後を測る。やはり全長に占める広端幅が広い傾向にある。広端部・狭端部の面取り、側縁凹面削りの玉縁凹面への切り込み、条数の多い内叩き（15 条）などは、丸瓦 27・28 と共通する。凹面の刺子痕は筵状だが胴部は内叩きで消去される。焼成は良好な瓦質で、一部銀化している。

丸瓦 30（2986） 全長 21.1cm・玉縁長 3.2cm・広端幅 11.5cm を測る。全長に占める広端幅は、丸瓦 27～29 ほど広くない。広端部は面取りされる。凹面には筵状の刺子痕と、6 条の内叩きが認められる。焼成は良好な瓦質である。

丸瓦 31（2987） 全長 18.5cm・玉縁長 2.1cm・広端幅 8.4cm を測る。出土丸瓦中最小であり、極小規模の建物ないし塀などに葺かれていたと考えられる。広端部・狭端部に幅狭の面取りが施される。凹面には筵状の刺子痕が認められる。焼成は良好な瓦質で、一部銀化する。一見すると明治期以降の新しい時期の所産にみえるが、第 2 面 SKb62 より出土している。

8. 3. 行基丸瓦

丸瓦 32（2988） 全長 31.4cm・広端幅 14.0cm 前後を測る。法量・胎土・焼成、さらに吊り紐痕が丸瓦 1 に近似しており、同一産地の可能性が高い。注目されるのは、丸瓦 1 凸面でみられた縄叩き目が認められない点である。丸瓦 1 では、玉縁（厳密には連結面）成形後に、狭端側を中心とした胴部凸面を叩いている。玉縁を伴わない丸瓦 32 で叩きが行われないことから、凸面の叩きは玉縁成形に伴う技法の可能性が指摘できよう。

丸瓦 33（2989） 狭端側のみ遺存しており、全長は不明。凸面は、横方向のナデ（回転を利用しないヘラナデか）が顕著に認められる。凹面には糸切り痕が明瞭である。

丸瓦 34（2990） 全長 25.0cm・広端幅 12.2cm を測る。凸面には板ナデ状のヘラナデ痕が、凹面には縦長で密な刺子痕が認められる。

丸瓦 35（2991） 全長 22.4cm・広端幅 11.5cm 前後を測る。丸瓦 17・18 に近似した胎土をもつ。胴部が分厚いのも丸瓦 17・18 と共通する要素である。焼成は瓦質だが、二次的被熱により一部炭素が飛んでいる。

9. 輪違い（図版 280）

輪違いは出土量が極めて少なく、破片を含めても数点認められる程度である。輪違い 1（2992）は、凹面がナデ調整されて布目を残さない。また広端・狭端・側縁のいずれも削り（切り落とし）痕が認められる。焼成は良好な瓦質である。出土遺構は第 6 面の SKb192 であるが、より新しい時期の混入品と考えられる。

10. 平瓦・海鼠瓦（図版281～283）

10. 1. 概要

平瓦も丸瓦同様に多量に出土した。今回の整理作業では、①3辺以上が遺存して、長さないし幅が判明するもの、②長・幅が不明でも特徴的な技法・胎土で他者との区分が可能なもの、を対象として分類作業を行った。しかし時間的な制約もあり、全ての分類作業が終了するまでには至らなかったため、代表的な資料の提示にとどめた。より詳細な内容の提示は、機会を改めて行いたい。

上記事情のため、層位別の出土傾向を検討し得ていないが、組み合わせの関係上、予察的には丸瓦と軌を一にした変遷過程が想定できる。すなわち①弧深の低下、②全長の短小化、である。

10. 2. 平瓦

平瓦1（2993） 広端側のみ遺存し、広端幅22.8cm・厚さ2.1cm・弧深2.7cmを測る。凸面は離れ砂が付着し無調整で、凹面は幅広で削り状の強いヘラナデが施される。側縁凹面は面取りされる。胎土は砂粒を多く含む粗いもので、丸瓦1に近似している。焼成は瓦質で表面が漆黒色を呈する。

平瓦2（2994） 2辺がわずかに遺存するだけだが、凹面に糸切り痕とそれを消去する強いヘラナデが認められる。

平瓦3（2995） 狭端側が遺存するが、同一型式とみられる別個体（広端側）と図上接合すると、全長32.0cm前後・広端幅27.6cm前後・狭端幅25.0cm・厚さ2.0cm・弧深3.0cmを測る。凹面には削り状の強いヘラナデが施され、凸面には離れ砂が顕著に認められる。焼成は瓦質だが、二次的被熱により大半が酸化している。また、凹面狭端側には葺き足痕が認められる。

平瓦4（2996） 全長26.4cm・広端幅23.5cm・狭端幅21.5cm・厚さ1.6cm・弧深2.2cmを測る。凹面は横方向のヘラナデの後、縦方向にヘラナデされる。狭端部は面取りされる。焼成は良好な瓦質である。狭端側には葺き足痕がみられ、葺き足長・幅ともに平瓦3の85%前後に縮小している。

平瓦5（2997） 全長24.3cm・広端幅23.2cm・狭端幅21.4cm・厚さ1.5cm・弧深2.0cmを測る。平瓦4同様、凹面は横方向の後に縦方向のヘラナデ調整が施される。狭端部凹面は面取りされる。凸面には離れ砂が認められる。焼成は良好で、一部銀化している。凹面狭端側の葺き足痕は、長さ・幅ともに平瓦4の82%前後に縮小している。

平瓦6（2998） 2辺が遺存する個体であるが、凹面のみならず凸面も丁寧にヘラナデする、特徴的な調整技法を有する。凹面のヘラナデも、幅狭で縦方向の後に横方向を密に施しており、他者よりも丁寧である。ヘラナデ後、凹面にはヘラないし針状工具で刻書が施される。刻書は、遺存部分で6行書かれるが、内容については明確にし得ない。焼成は良好な瓦質である。出土層位は第6面である。

10. 3. 海鼠瓦

海鼠瓦は少量が出土しており、法量や穿孔位置などで複数に分類可能であるが、ここでは代表的な1点を図示した。

海鼠瓦1（2999） 2辺が遺存する個体で、隅部と中央部に径1cm程度の穿孔がみられる。中央部の穿孔が中心に位置すると仮定すると、1辺24cm前後に復元できる。

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剥離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 攪乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦 1	2376	(14.5)cm	(10.9)cm	(8.5)cm	(0.77)%	R	(63)%	14 個	0.7cm	砂質気味	器面：暗灰 N3/, 断面：灰黄 2.5Y7/2	a1	A	C2	×	瓦当裏面糸切り	4	2						2										第３～４面	（第６面）
軒丸瓦 2	2377	14.3	9.5	7.0	0.73	L	38	24	0.9		器面：灰 N5/・灰白 N7/, 断面：灰白 N8/	a1	—	C1	×		3						1								2			第６面	第６面
軒丸瓦 3	2378	(13.4)	(9.8)	(6.4)	(0.65)	L	(38)	24	0.7		器面：オリーブ黒 5Y3/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	a2	A	C1	×	瓦当裏糸切り (?)	1									1							第４面	（第６面）
軒丸瓦 4	2379	(14.0)	(10.4)	(6.8)	(0.65)	L		24	0.7		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y7/1	a1	—	C1	×		1						1										Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 5	2380	10.8	8.1	5.7	0.7	L	45	20	0.5	砂質気味	器面：灰 5Y5/1, 断面：灰白 5Y8/1	a1	B	C1	×		1									1							第４面	（第６面）
軒丸瓦 6	2381	(13.0)	(9.4)	(6.0)	(0.63)	L	38	16	0.8		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/	a1	A	C1	×		1														表土層１		表土層	（第６面）
軒丸瓦 7	2382	(13.2)	(9.0)	(5.4)	(0.60)	L	(50 ～)	12	1.1		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰白 2.5Y8/1・灰白 5Y7/1	a2	A	C2	×		1					1											第２面	（第６面）
軒丸瓦 8	2383	12.8	8.6	5.0	0.58	L	54	12	1.1		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰 5Y5/1・灰白 5Y8/1	a2	A	C1	×		5					2	1								第１～５面１	1	Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 9	2384	(13.6)	(10.0)	(5.0)	(0.56)	L		11	1.0		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 5Y5/1	a2	—	—	×		1													1			第６面	第６面
軒丸瓦 10	2385	12.9	7.7	4.9	0.63	L	58	12	1.0		器面：灰 N4/・灰 N6/, 断面：灰白 N8/・灰白 5Y7/1	b	D	C3	×		11		1	1		3	2		1							3	第３面	第３面
軒丸瓦 11	2386	13.0	9.4	6.0	0.63	R	61	18 ～ 20	0.8		器面：灰 5Y5/1・にぶい黄橙 10YR7/3, 断面：灰 5Y5/1・灰白 2.5Y8/2	a2	A	C2	×		1												1				Ⅴ層	第６面
軒丸瓦 12	2387	(13.4)	(9.6)	(6.0)	(0.62)	L	53	15	0.9		器面：灰 N5/, 断面：灰白 2.5Y8/1・灰 N5/	a1	A	C2	×		2					2											第２面	（第６面）
軒丸瓦 13	2388	14.0	9.0	5.6	0.62	L	28	17 ～ 18	0.8		器面：灰白 5Y7/1・灰 5Y5/1, 断面：灰 N5/・灰 7.5Y8/1	a1	—	C2	×		1									1							第４面	（第６面）
軒丸瓦 14	2389	13.1	8.3	5.8	0.69	R	56	13	1.0		器面：灰 N5/, 断面：灰 N5/・灰白 2.5Y 8/1	a1	—	C2	×		3					1	1									1	Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 15	2390	13.8	8.9	5.9	0.66	L	42	11	1.2		器面：灰 N5/・灰白 7.5YR7/1, 断面：灰白 7.5Y8/1	a1	—	C1	×		7					1		1	1				1		1	第１～５面１	1	第６面	第６面
軒丸瓦 16	2391	13.4	8.4	5.6	0.66	L	58	12	1.0		器面：黒 N2/・灰白 7.5Y8/1	a1	A	C1	×		13		1				1	2	1		2		4		1		1	第６面	第６面
軒丸瓦 17	2392	13.5	9.0	5.8	0.64	L	40	12	1.1		器面：灰 5Y4/, 断面：灰白 5Y8/1	a1	A	C2	×		7			2		1			3								1	第３面	（第６面）
軒丸瓦 18	2393	13.0	8.6	5.5	0.63	R		12	1.0		器面：灰 5Y5/1・灰 N4/, 断面：灰 5Y5/1・灰白 5Y8/1	a1	A	C2	×		1						1										Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 19	2394	13.3	8.8	5.6	0.63	L	31	11	1.4		器面：灰白 5Y7/1・灰 N5/, 断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N6	a1	A	C2	×		2						2										Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 20	2395	13.4	8.3	5.2	0.62	L	46	12	1.1		器面：灰 5Y6/1, 断面：灰 5Y5/1・灰白 5Y8/1	a2	—	C2	×		2						1									1	Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 21	2396	13.1	8.5	4.9	0.57	L	41	9	1.0		器面：黄灰 2.5Y6/1, 断面：灰黄 2.5Y7/2・黄灰 2.5Y6/1	a2	—	C2	×		5					1	2		2								第３面	（第５面～）
軒丸瓦 22	2397	(12.0)	8.6	4.7	(0.54)	L	45	9	1.1		器面：黄灰 2.5Y6/1・灰 5Y5/1・灰 N5/, 断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N5/	a2	—	C2	×		2	1														1	—	（第５面～）
軒丸瓦 23	2398	13.0	8.9	5.9	0.66	L	37	11	0.9		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y6/1, 断面：灰 5Y6/1・灰 7.5Y5/1	a2	D	C2	×		11	2				2	2	1	1							3	第３面	第３面
軒丸瓦 24	2399	13.4	8.9	5.7	0.64	L	35	11	1.0		器面：灰白 10YR8/2・灰 N4/, 断面：灰 N5/・灰白 7.5Y8/1	a1	D	C2	×		4		1					1	1						第１～３面１		第３面	第３面
軒丸瓦 25	2400	(13.4)	8.9	5.7	(0.64)	L	34	12	1.1		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1, 断面：灰 N6/1・灰白 5Y7/1	a2	A	C2	×	瓦当面に漆喰	2			1													1	第１面	（第３面）
軒丸瓦 26	2401	14.6	8.9	6.4	0.71	L	50	12	0.8		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	A?	C1	×		2						1							1			第６面	第６面
軒丸瓦 27	2402	14.5	10.0	6.2	0.62	L	41	12	1.1		器面：灰 N4/・灰 N7/, 断面：灰白 N8/	a1	D?	C2	×		1	1															—	—
軒丸瓦 28	2403	(14.4)	(10.0)	(6.4)	(0.64)	R		14	1.0		器面：灰 5Y6/1・灰 N5/, 断面：灰白 N7/	a1	D?	C3	×		1									1							第４面	（第６面）
軒丸瓦 29	2404	14.7	9.6	6.4	0.66	R	40	13	1.0		器面：灰 N4/, 断面：灰 N4/・灰白 N8/	a2?	D?	C2	×		3	1								2							第４面	（第６面）
軒丸瓦 30	2405	13.2	9.1	5.8	0.63	L	41	12	1.1		器面：灰白 5Y7/1, 断面：灰 5Y6/1・灰白 5Y8/1	a2	D?	C1	×		1	1															—	—
軒丸瓦 31	2406	13.8	8.7	5.8	0.66	L	33	12	1.0		器面：灰白 5Y9/1・灰 N6/, 断面：灰白 5Y9/1・灰 N6/	a2	D?	C1	×		1							1									第３・４面	（第５面）
軒丸瓦 32	2407	13.5	9.2	5.8	0.63	L	36	12	1.1		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	a2	D?	C2	×		2			1			1										Ⅱ層	—
軒丸瓦 33	2408	(14.4)	(10.4)	(8.0)	(0.76)	L		18 ～ 20	0.8	黒色粒を含み砂質気味	器面：灰白 2.5Y8/1・暗灰 N3/, 断面：灰白 5Y8/1	a1	D	C2	×		1													1			第６面	第６面
軒丸瓦 34	2409	(15.7)	10.8	8.8	0.81	L	(34 ～)	18	0.8		器面：灰 N4/・灰 7.5Y4/, 断面：灰黄 2.5Y7/2	a1	A	C1	×		1					1											第２面	（第６面）
軒丸瓦 35	2410	(13.4)	8.9	6.7	0.75	L	(41)	16 ～ 18	1.0		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a1?	D	C1	×		1														Ⅰ・Ⅱ層１		Ⅰ・Ⅱ層	（第６面）
軒丸瓦 36	2411	(15.2)	(10.3)	(7.6)	(0.73)	L	(41 ～)	14	1.2		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 N8/	a1	D	C1	×		1									1							第４面	（第６面）
軒丸瓦 37	2412	14.0	9.6	7.0	0.72	L	43	16	0.9		器面：灰 7.5Y5/1, 断面：灰白 N8/	a1	A	C1	×		1			1													第１面	（第６面）
軒丸瓦 38	2413	14.5	9.7	6.9	0.71	L	42	18	1.2		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 N8/・灰 N4/	a2	—	C1	×		3													3			第６面	第６面
軒丸瓦 39	2414	11.5	7.5	5.3	0.70	L	44	14	0.8		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N8/	a1	—	C1	×		6	1	1				1							3			第６面	第６面
軒丸瓦 40	2415	13.8	9.5	6.2	0.65	L	41	20	1.0		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	a1	—	—	×	（鳥衾）	1		1														第１・２面	（第６面）
軒丸瓦 41	2416	12.1	7.5	4.7	0.62	L	—	18	0.8		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 N8/	a1	B?	C1	×		1													1			第６面	第６面
軒丸瓦 42	2417	13.0	8.7	5.6	0.64	L	31	14	0.9	マーブル状	器面：にぶい黄橙 10YR7/3, 断面：にぶい黄橙 10YR7/3・灰 N6/・橙 5YR6/6	a2?	D?	C3	×		10	1	1				1		1				4		1	表土層１		第６面	第６面
軒丸瓦 43	2418	14.0	9.4	6.2	0.65	L	28	12	1.1		器面：灰白 N7/・灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/1	a2	D?	C1	×		8	2		2		1							2				1	第５面	第５面
軒丸瓦 44	2419	14.2	9.8	6.7	0.68	L	45	12	1.6		器面：黄灰 2.5Y5/1・灰白 2.5Y7/1, 断面：灰白 2.5Y7/1・黄灰 2.5Y4/1	a2	D?	C3	×		1														第１～３面１		第１～３面	—
軒丸瓦 45	2420	(13.8)	(10.0)	(6.0)	0.60	R	—	12	1.1		器面：黄灰 2.5Y6/1, 断面：にぶい黄橙 10YR7/2	a1	A?	C1	×		1													1			第６面	第６面
軒丸瓦 46	2421	12.6	8.6	5.8	0.67	L	33	12	1.1		器面：灰 N4/・灰白 7.5Y7/1, 断面：灰白 7.5Y8/1	b	D	C3	×		2					1									第１～４面１		第２面	第２面
軒丸瓦 47	2422	13.7	9.9	6.2	0.62	L	54	17	0.9		器面：灰 N4/, 断面：灰 N8/	a1	A	C2	×		3	1		1		1											第２面	（第６面）
軒丸瓦 48	2423	13.9	8.7	5.5	0.63	L	59	11	1.1		器面：灰白 N8/・灰 N6/・暗灰 N3/, 断面：灰 N8/・7/	a1	D	C2	×		4	1					1						1		1		第６面	第６面
軒丸瓦 49	2424	13.6	8.2	5.3	0.64	L	36	13	0.9		器面：灰 N5/・灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a1	D	C2	×		2	1														1	—	（～第３面）
軒丸瓦 50	2425	(13.0)	(9.0)	(5.5)	0.61	L	36	12	0.9		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N7/・灰 N6/	a1	A	C2	×		1	1															—	（～第３面）

第３表　軒瓦観察表（１）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剝離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 撹乱	第1·2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3·4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦 51	2426	14.3	9.5	5.4	0.56	L	61	12	1.1		器面：灰 N4/・灰 7.5Y6/1, 断面：灰 N5/・灰白 7.5Y8/1	a2	D?	C2	×		18			1		8	9											Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 52	2427	(13.8)	(9.0)	(5.0)	(0.55)	L	—	14	1.2		器面：灰 5Y4/1, 断面：灰白 2.5Y8/1	a2	—	C2	×		1								1								第3面	第3面
軒丸瓦 53	2428	13.4	8.6	4.9	0.56	L	36	12	1.0		器面：灰白 5Y7/1・灰白 N8/, 断面：灰白 5Y7/1・灰白 N8/	a2	D?	C2	×		2					1			1								第3面	第3面
軒丸瓦 54	2429	(13.0)	(9.0)	(5.3)	(0.58)	L	—	12	0.8		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y6/1, 断面：灰 5Y5/1・灰 N6/	a2	D	C2	×		1	1															—	第3面
軒丸瓦 55	2430	13.6	9.0	5.1	0.56	L	41	12	1.2		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰 N6/	a2	D?	C2	×		2						1									1	Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 56	2431	13.0	8.8	4.7	0.53	L	33	12	1.2		器面：黄灰 2.5Y6/1・黄灰 2.5Y5/1, 断面：黄灰 2.5Y6/1	a2?	D	C2	×		1			1													第1面	（第3面）
軒丸瓦 57	2432	13.1	8.9	4.8	0.53	L	33	8	1.2		器面：灰 N6/, 断面：灰 N6/	a2	D	C2	×		9	3				1	2					1	1			1	第5面	（第3面）
軒丸瓦 58	2433	(13.0)	(8.6)	(4.9)	0.56	L	30	8	1.2		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	A	C2	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 59	2434	13.6	9.6	6.8	0.70	L	39	14	1.1		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N4/	a2	A?	C2	×		1														第3～6面1		第3～6面	（第6面）
軒丸瓦 60	2435	13.2	8.9	5.2	0.58	L	39	12	1.2		器面：灰 5Y4/1, 断面：灰白 N7/・灰 5Y5/1	a2	D?	C2	×		15	3	1	2		4	1		2					1		1	第6面	（第3面）
軒丸瓦 61	2436	12.8	8.2	5.3	0.64	L	38	12	1.2		器面：灰 5Y4/, 断面：灰白 N8/・灰 N5/		D?	C2	×		6						1		1		1		1			2	第5面	第5面
軒丸瓦 62	2437	13.4	8.9	5.6	0.62	R	30	12	1.0		器面：灰白 2.5Y7/1・灰 N5Y, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	a2	D	C3	×		5	2				3											第2面	（第5面）
軒丸瓦 63	2438	12.9	8.5	5.5	0.64	R	35	12	1.0		器面：灰 N5/, 断面：灰 N5/・灰白 N8/	a2	D?	C3	×		14	3					5		1		2	1				2	Ⅳ層	第5面
軒丸瓦 64	2439	13.2	9.4	6.1	0.64	R	43	12	1.0		器面：灰 5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 7.5Y6/1	a2	D	C3	×		7	1				1			3		1			1			第6面	第6面
軒丸瓦 65	2440	13.3	9.4	5.9	0.62	R	41	12	1.1		器面：灰白 5Y8/1・灰 N6/, 断面：灰白 N8/	a2	D?	C2	×		5	1					1	2	1								第3·4面	（第5面）
軒丸瓦 66	2441	14.1	8.7	5.1	0.58	R	33	13	1.1		器面：灰 N4/・灰 N5/, 断面：灰 N6/・灰白 5Y8/2	a2	D	C3	○		4					1	3										Ⅱ層	（～第3面）
軒丸瓦 67	2442	12.9	8.5	4.3	0.50	L	23	12	1.0		器面：灰白 5Y7/1, 断面：灰白 N6/・灰白 5Y8/1	a2	D?	C3	×		13	1		4		1	1		4					1		1	第6面	（第3面）
軒丸瓦 68	2443	13.1	9.7	5.3	0.54	R	50	11	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 2.5Y8/1・灰白 10YR8/1	a1	D	C3	×		1	1															—	（第6面）
軒丸瓦 69	2444	12.8	9.2	5.8	0.63	R	61	9	1.1		器面：灰白 10YR7/1, 断面：にぶい黄橙 10YR7/2・灰 N6/	a2	D	C3	×		8	1		1			2		2		2						第4面	第4面
軒丸瓦 70	2445	(12.8)	(9.2)	6.0	0.65	R	—	9	1.0		器面：灰白 5Y7/1, 断面：灰白 7.5Y7/1	a2?	D	C2	×		1					1											第2面	（～第2面）
軒丸瓦 71	2446	12.8	8.8	5.6	0.63	L	32	9	1.0		器面：灰 N4/, 断面：灰 N5/	a2	—	C3	×		2															2	—	—
軒丸瓦 72	2447	(12.4)	(7.8)	(4.8)	(0.61)	L	29	12	1.0		器面：灰 N4/・灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/2・灰白 N7/	a2	D	C3	×		1								1								第3面	第3面
軒丸瓦 73	2448	(13.4)	(8.6)	5.2	(0.60)	L	39	12	0.9		器面：灰 5Y6/1・灰 N5/, 断面：灰 N5/	a2	D	C3	×		2								2								第3面	第3面
軒丸瓦 74	2449	(13.2)	8.3	5.0	0.60	L	44	12	0.9		器面：浅黄橙 10YR8/3・黒褐 10YR3/1, 断面：灰白 2.5Y8/1・黄灰 2.5Y6/1	a2	D	C3	×		7					2	3		2								第3面	第3面
軒丸瓦 75	2450	12.8	8.9	5.2	0.58	L	40	12	1.0		器面：灰 N5/・灰白 2.5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/1	a2	D	C3	×		2						2										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 76	2451	13.1	8.7	5.1	0.58	L	44	12	0.9		器面：灰 N6/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D	C3	×		4								3		1						第4面	第4面
軒丸瓦 77	2452	13.3	9.0	5.2	0.57	L	41	12	0.9		器面：灰 5Y6/1・灰 5Y5/1, 断面：灰白 2.5Y8/2・灰 5Y5/1	a2	D	C3	×		2	1							1								第4面	第3面
軒丸瓦 78	2453	12.4	9.0	5.1	0.55	L	47	12	1.0		器面：灰 N5/, 断面：灰 N6/	a2	D?	C3	×		18		1	5		1	5		3			(1)			1	1	第6面	（第3面）
軒丸瓦 79	2454	12.6	8.8	5.0	0.56	L	—	12	0.8		器面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/, 断面：灰 N6/・灰白 N8/	a2	—	C3	×		3								2				1				第5面	（第3面）
軒丸瓦 80	2455	13.1	8.4	4.7	0.55	L	33	12	0.9		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D?	C3	×		13			1		1	6		4				(1)				第3面（第5面）	第3面
軒丸瓦 81	2456	13.0	8.5	4.7	0.55	L	26	12	1.0		器面：灰白 N7/, 断面：灰白 10Y8/1・灰 N5/	a2	D	C3	×		1														第1～3層1		第1～3層	（第3面）
軒丸瓦 82	2457	13.0	8.8	5.1	0.57	L	28	12	0.9		器面：灰 7.5Y6/1, 断面：灰 N6/	a2	—	C2	×		1										1						第4面	第4面
軒丸瓦 83	2458	(13.0)	(9.2)	(5.0)	(0.54)	L	—	12	1.0		器面：灰白 2.5Y8/2, 断面：灰 N5/	a2	D	C3	×		2								1						表土層1		第3面	第3面
軒丸瓦 84	2459	12.7	8.7	4.6	0.52	L	36	10	1.0	マーブル状	器面:にぶい黄橙10YR7/4・褐灰10YR5/1, 断面:黄橙10YR8/6・灰白10YR8/1	a2?	D?	C3	×		3					1	2										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 85	2460	13.1	9.0	4.2	0.47	R	37	11	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D?	C3	×		11	2					4	1	2			1				1	Ⅳ層	（第3面）
軒丸瓦 86	2461	(13.2)	8.6	(5.2)	(0.60)	L	35	10	0.9		器面:灰白 N7/・灰 N5/, 断面:灰白 N7/・灰 N6/	a2	—	C3	×		1							1									第3·4面	第3・4面
軒丸瓦 87	2462	12.6	8.9	5.1	0.57	L	31	9	0.9		器面：灰 N4/・灰白 2.5Y8/2, 断面：灰 N6/・灰白 2.5Y8/2	b	D?	C3	×		10	3	3	1		3											第2面	第2面
軒丸瓦 88	2463	13.8	8.7	4.8	0.55	L	37	9	1.2		器面：灰白 N8/・灰 N6/, 断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N6/	a2	D?	C2	×		9	2		2		1			3							1	第3面	第3面
軒丸瓦 89	2464	13.6	8.8	5.1	0.57	L	28	9	1.2		器面：灰 5Y5/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/1・灰 5Y4/1	a2	D?	C3	×		2	1									1						第4面	第4面
軒丸瓦 90	2465	12.6	9.0	5.0	0.55	L	29	9	0.9		器面：黄灰 2.5Y6/1, 断面：灰白 2.5Y8/1	b?	D?	C3	×		3			1		2											第2面	第2面
軒丸瓦 91	2466	13.2	9.0	5.2	0.57	L	38	8	0.9		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D?	C3	×		13		1	3		2	2		5								第3面	第3面
軒丸瓦 92	2467	(12.8)	(9.0)	(4.8)	(0.53)	L	37	9	0.9		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y7/1	a1	—	C3	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 93	2468	13.7	8.7	4.8	0.55	L	31	8	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N7/・灰白 7.5Y8/1	a2	—	C3	×		1	1															—	（第3面）
軒丸瓦 94	2469	13.2	8.8	5.0	0.56	L	36	9	1.3		器面：暗灰 N3/・灰 N5/, 断面：灰 N5/・灰白 N7/	a2?	D	C3	×		1												1				第5面	（第5面）
軒丸瓦 95	2470	13.0	9.2	5.3	0.57	L	35	8	1.0		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	a1	—	C3	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 96	2471	13.6	8.8	(4.3)	(0.48)	L	—	9	1.2		器面：灰 5Y6/1, 断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a2	D	C3	×		1												1				第5面	（第5面）
軒丸瓦 97	2472	(13.4)	(9.0)	(4.8)	(0.53)	L	—	10	1.2		器面：灰 N5/, 断面：灰 N5/・灰白 5Y8/1	a2	D	C3	×		1										1						第4面	第4面
軒丸瓦 98	2473	14.1	9.3	4.5	0.48	R	25	8	1.2		器面：灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/2・灰 N5/	—	D?	C3	×		4		1				1		1			1					Ⅳ層	（第5面）
軒丸瓦 99	2474	14.2	9.4	4.1	0.43	L	27	10	1.1		器面：灰 5Y6/1・灰黄 2.5Y7/2, 断面：灰白 2.5Y8/2・黄灰 2.5Y5/1	a2?	D?	C3	×		4	2		1			1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 100	2475	12.9	9.4	4.7	0.50	R	(27)	10	1.4		器面：灰黄 2.5Y7/2, 断面：灰黄 2.5Y7/2・黄灰 2.5Y6/1	a2?	D	C3	×		1															1	—	—

第4表　軒瓦観察表（2）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剥離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 撹乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦 101	2476	13.2	9.1	4.6	0.50	R	(23)	8	1.4		器面：灰 5Y4/1, 断面：灰白 5Y7/1	a2	D?	C3	×		1	1																—	—
軒丸瓦 102	2477	12.9	9.2	4.5	0.48	R	37	9	1.4		器面:黄灰2.5Y6/1・にぶい黄橙10YR7/3, 断面:にぶい黄橙10YR7/3・黄灰2.5Y5/1	a2?	D?	C3	×		2			1												1		—	—
軒丸瓦 103	2478	(14.0)	(9.0)	(4.0)	(0.44)	L	—	9	1.1		器面：灰 5Y6/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D	C3	×		1					1												第２面	（～第２面）
軒丸瓦 104	2479	(13.4)	(9.6)	(4.3)	(0.44)	R	—	8	1.3		器面：灰 N4/・灰 5Y6/1, 断面：灰白 5Y7/1	a1?	—	C3	×		2	2																—	—
軒丸瓦 105	2480	(14.4)	(10.0)	(4.1)	0.41	L	—	10	1.1		器面：灰黄 .5Y7/2・灰 N4/, 断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 5Y6/1	a2	D	C3	×		1					1												第２面	（～第２面）
軒丸瓦 106	2481	13.8	8.3	5.5	0.66	R	30	12	1.0		器面：黄灰 2.5Y5/1・灰黄 2.5Y6/2, 断面：灰 5Y5/1・灰黄 2.5Y7/2	a2	D	C3	×		1								1									第３面	第３面
軒丸瓦 107	2482	(12.8)	(8.4)	5.3	(0.63)	L	—	12	1.2		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	a2	D?	C3	×		1								1									第３面	第３面
軒丸瓦 108	2483	(12.8)	(8.5)	5.3	(0.62)	L	26	12	1.1		器面：灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/1・灰白 N7/	a2?	C	C3	×		1														1	—	—
軒丸瓦 109	2484	13.1	8.2	5.0	0.60	L	32	12	0.7		断面：浅黄 2.5Y7/3・灰 5Y5/1	a2	D	C3	×		35	4	1	2			14(2)		6		1	(1)			1	第１～５面 １	2	第６面	（第３面）
軒丸瓦 110	2485	12.7	8.5	5.1	0.60	L	31	12	1.2		器面：灰 N4/・灰 5Y6/1, 断面：灰 N6/	b	D?	C3	○?		1					1												第２面	第２面
軒丸瓦 111	2486	(12.8)	(8.2)	(5.0)	(0.60)	L	24	12	1.0		器面:黄灰2.5Y6/1, 断面:灰白2.5Y8/1・灰 N6/	b	—	C3	×		1			1														第１面	（～第１面）
軒丸瓦 112	2487	12.8	8.7	5.2	0.59	L	30	12	1.1		器面：灰 N4/4, 断面：灰白 5Y7/1	a2	D?	C3	×		1	1																—	—
軒丸瓦 113	2488	(13.4)	8.9	5.2	0.58	L	32	12	1.1		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y5/1, 断面：灰 5Y4/1・灰白 5Y8/1	b?	A?	C3	×		1					1												第２面	第２面
軒丸瓦 114	2489	12.4	8.0	4.7	0.58	L	—	12	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/	b	D?	C3	×		1		1															第１・２面	第１・２面
軒丸瓦 115	2490	(14.0)	(9.2)	(5.2)	(0.56)	R	—	12	1.2		器面：灰 N4/・灰白 7.5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/1	b	—	C3	×		1			1														第１面	（～第１面）
軒丸瓦 116	2491	(13.0)	(9.0)	5.0	(0.55)	L	25	12	1.1		器面：灰 5Y6/1, 断面：灰 N6/・灰白 7.5Y8/1	a2	—	C2	×		1														1	—	—
軒丸瓦 117	2492	(12.8)	(9.8)	(5.2)	(0.53)	L	—	12	0.9		器面：灰 N4/・灰白 7.5Y7/1, 断面：灰白 7.5Y8/1	a2	D?	C3	×		2								2									第３面	第３面
軒丸瓦 118	2493	13.0	7.9	4.4	0.55	L	30	12	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 2.5Y7/1	b	D?	C3	×		3	1		2														第１面	第１面
軒丸瓦 119	2494	12.3	7.8	4.5	0.57	L	(33)	12	1.2		器面：灰 5Y4/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	?	D?	C3	×		1	1																—	—
軒丸瓦 120	2495	11.9	7.8	4.7	0.61	L	28	12	1.1		器面：灰 5Y6/1・灰 5Y5/1, 断面：灰白 2.5Y7/1	b	D	C3	×		1		1															第１・２面	第１・２面
軒丸瓦 121	2496	11.9	7.7	4.7	0.61	L	35	12	1.1		器面：暗灰 N3/・灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	×		1						(1)											（Ⅱ層）	（第３面）
軒丸瓦 122	2497	(13.4)	(8.6)	(4.4)	(0.51)	L	—	12	1.1		器面：灰 N4/・黄灰 2.5Y6/1, 断面：灰白 2.5Y8/1	b	D	C3	×		1			1														第１面	第１面
軒丸瓦 123	2498	12.5	7.8	4.1	0.52	L	33	12	1.1		器面：灰 N4/, 断面：灰黄 2.5Y7/2	b	D?	C3	×		1			1														第１面	第１面
軒丸瓦 124	2499	12.8	8.3	4.5	0.54	L	28	11	1.1		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	b	D	C3	×		1														1	—	—
軒丸瓦 125	2500	12.1	8.6	4.3	0.50	L	27	12	0.9		器面：灰 5Y4/1・黄灰 2.5Y6/1, 断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 5Y5/1	a2	D?	C3	×		3					1	1									1	Ⅱ層	（第２面）
軒丸瓦 126	2501	12.6	7.6	3.8	0.50	L	31	12	1.1	マーブル状	器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 7.5Y8/1	b	D?	C3	×		1	1															—	—
軒丸瓦 127	2502	12.4	7.6	4.0	0.52	L	28	12	1.1		器面：（表）灰 N5/・（裏）灰白 7.5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/2	b	D	C3	×		11		2	6			3									4	Ⅱ層	（第２面）
軒丸瓦 128	2503	12.4	7.6	3.8	0.50	L	25	12	1.0		器面：灰 N4/・灰白 N7/, 断面：灰白 N8/	b	D?	C3	×		1	1															—	（第１面）
軒丸瓦 129	2504	12.0	7.5	3.8	0.50	L	23	12	1.1		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 7.5Y8/1	b	D	C2	×		4	2		2														第１面	第１面
軒丸瓦 130	2505	11.6	7.8	4.0	0.51	R	30	10	1.2		器面：灰白 N7/・灰白 N5/, 断面：灰白 N8/	a2?	D?	C3	×		1														1	—	第１面
軒丸瓦 131	2506	13.8	9.0	5.3	0.58	L	64	12	0.9		器面：灰白 5Y7/1・灰 5Y6/1, 断面：灰 N5/・灰黄 2.5Y7/2	a2	D	C3	×		11	2	1				1	1	2		1	1	2					第５面	第５面
軒丸瓦 132	2507	(12.6)	(8.5)	(4.8)	0.56	R	33	12	1.1		器面：浅黄橙 10YR8/3, 断面：灰白 10YR8/2・黄灰 2.5Y6/1	a2	D	C3	×		1					1												第２面	（～第２面）
軒丸瓦 133	2508	(14.1)	8.7	5.4	0.62	R	40	13	1.0		器面：灰白 2.5Y7/1・灰 N4/, 断面：灰黄 2.5Y7/2	a1	D?	C1	×		3						1									2	Ⅱ層	（～第３面）
軒丸瓦 134	2509	14.3	8.5	5.6	0.65	R	33	12	1.0		器面：灰 7.5Y6/1・灰 N5/, 断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	a2	D	C1	×		10	1		1		6	2										Ⅱ層	第３面
軒丸瓦 135	2510	14.4	9.3	5.3	0.56	L	—	14	1.0		器面：灰 N6/, 断面：灰白 N8/	a2	D?	C1	×		1												1				第５面	第５面
軒丸瓦 136	2511	13.3	9.0	5.4	0.60	L	37	12	1.0		器面：暗灰 N3/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N3/	a2	D	C2	×		1			1														第１面	—
軒丸瓦 137	2512	(13.2)	(8.9)	(5.2)	(0.58)	L	—	12	1.1		器面：オリーブ黒 5Y3/1, 断面：灰白 5Y7/1・灰 5Y5/1	a2	D	C2	×		1			1														第１面	—
軒丸瓦 138	2513	14.1	8.1	5.4	0.66	L	45	12	1.0		器面：暗灰 N3/・灰白 5Y7/, 断面：灰白 N8/	b	D?	C3	×		1	1																—	（第２面）
軒丸瓦 139	2514	13.6	8.4	5.1	0.60	L	32	16	0.9		器面:灰N4/, 断面:灰白2.5Y7/1・灰N6/	b	D?	C3	×		1						1											Ⅱ層	第３面
軒丸瓦 140	2515	13.4	7.6	4.3	0.56	R	45	12	1.3		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰白 N8/	b	D	C3	×		5	2		3														第１面	第１面
軒丸瓦 141	2516	11.9	7.1	4.1	0.57	L	39	12	1.1		器面：灰 N4/・灰白 7.5Y8/1, 断面：灰白 7.5Y8/1	b	D?	C2	×		3			3														第１面	第１面
軒丸瓦 142	2517	12.8	6.9	3.5	0.50	L	38	10	1.3		器面：灰 N4/・灰 5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	D	C3	×		2	1		1														第１面	第１面
軒丸瓦 143	2518	11.4	6.9	3.7	0.53	R	25	12	1.1		器面：灰 7.5Y5/1・灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	×		6	2		3												1	第１面	第１面
軒丸瓦 144	2519	13.4	7.6	3.7	0.48	L	25	12	1.2		器面：灰白 5Y8/1・灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D	C3	×		1						1										Ⅱ層	Ⅱ層
軒丸瓦 145	2520	(12.0)	(7.3)	(6.0)	(0.82)	R	(34)	16	0.8		器面：暗灰 N3/・灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/1	a2	D?	C2	×		1													1			第６面	第６面
軒丸瓦 146	2521	12.5	8.3	5.8	0.69	L	50	15	0.9		器面：灰 5Y5/1・灰黄 2.5Y7/2, 断面：灰白 2.5Y8/1・灰 5Y5/1	a2	D?	C1	×		1								1									第３面	（第６面）
軒丸瓦 147	2522	(13.6)	8.9	6.0	0.67	L	(45)	14	1.0		器面：灰 N4/・灰 N5/, 断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a2	D	C2	○		1			1														第１面	（第６面）
軒丸瓦 148	2523	(16.4)	(12.0)	(7.6)	(0.63)	L	—	12	1.2		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/2, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	D	C2	×		1					1												第２面	（第６面）
軒丸瓦 149	2524	13.9	10.5	6.4	0.60	L	34	13	1.3		器面：浅黄橙 10YR8/3, 断面：淡黄 2.5Y8/3・灰 N6/	a2	D	C1	×		2										1				1			第６面	第６面
軒丸瓦 150	2525	(13.2)	9.2	5.2	0.56	L	40	14	1.2		器面：暗灰 N3/・灰 N4/, 断面：灰白 N7/	a2	D	C2	×		1													1			第６面	第６面

第５表　軒瓦観察表（３）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剥離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 撹乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦 151	2526	14.5	9.7	6.7	0.69	L	19	12	0.9		器面：暗灰 N3/，断面：灰 N5/	a1	A?	C2	×	内区に「建宗」	9	1				1	3				1			1		2		第6面	第6面
軒丸瓦 152	2527	13.0	8.3	5.4	0.65	R	27	12	0.8		器面：灰 5Y5/1・浅黄橙 10YR8/3，断面：灰 5Y5/1	a2	D?	C2	×		8	1		3					2		1					1	第4面	第4面
軒丸瓦 153	2528	13.3	8.7	5.4	0.62	R	21	12	1.0		器面：灰 N4/・灰黄 2.5Y7/2，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N6/	a2	D?	C2	○		5			1		2			1							1	第3面	第3面
軒丸瓦 154	2529	12.6	9.0	5.6	0.62	R	23	12	1.0		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a2	D?	C3	×		13		1	1		2	2		4			1				2	Ⅳ層	（第3面）
軒丸瓦 155	2530	15.1	9.1	5.4	0.59	R	20	12	0.8		器面：暗灰 N3/・灰黄褐 10YR5/2，断面：灰白 2.5Y8/1・灰白 N7/	a1	D?	C2	×		1					1											第2面	—
軒丸瓦 156	2531	12.8	9.5	5.6	0.58	R	23	12	1.1		器面：灰 N6/・灰 7.5Y6/1，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	a1?	D	C2	×		2												2				第5面	第5面
軒丸瓦 157	2532	13.5	8.9	5.2	0.58	R	27	12	1.1		器面：灰白 7.5Y7/1・灰 7.5Y5/1，断面：暗灰 N3/・灰白 7.5Y8/1	a1?	D	C3	×		12	2		2		1	5								第1～3面1	1	Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 158	2533	13.3	8.7	5.1	0.58	R	28	12	0.8		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y7/1・灰 N4/	a2	D?	C2	×		5					2	1									2	Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 159	2534	(13.0)	(8.8)	(5.0)	(0.56)	R	22	12	1.1		器面：灰 N4/・にぶい黄橙 10YR7/2，断面：にぶい黄橙 10YR7/2・黄灰 2.5Y6/1	a1	D	C2	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 160	2535	(12.6)	(9.4)	(4.9)	(0.52)	L	25	12	1.0		器面：暗灰 N3/・灰白 N7/，断面：灰白 7.5Y8/1	b	—	C3	×		1													1			第6面	（第2面）
軒丸瓦 161	2536	13.9	9.7	6.5	0.67	L	42	12	0.9		器面：灰 N5/・灰白 2.5Y8/1，断面：灰白 5Y8/1	a1	D	C1	×		1						1										Ⅱ層	（第6面）
軒丸瓦 162	2537	15.0	8.8	5.7	0.64	R	33	12	1.0		器面：灰白 5Y7/1・黄灰 2.5Y5/1，断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	a1	D?	C1	×		3						3										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 163	2538	(14.4)	(9.8)	6.0	(0.61)	R	31	12	1.2		器面：灰 N4/・灰 5Y6/1，断面：灰白 N8/・灰 N6/	a1?	—	C3	×		2								1				1				第5面	第5面
軒丸瓦 164	2539	(12.8)	9.7	6.1	0.62	L	44	12	0.9		器面：灰 N4/・灰白 5Y8/1，断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	a2	D	C3	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 165	2540	14.2	8.6	5.4	0.62	R	33	12	0.9		器面：（表）灰白 2.5Y7/1・（裏）灰 N5/，断面：灰白 2.5Y7/1・灰 N5/	a2	D	C3	×		3			1					1		1						第4面	第4面
軒丸瓦 166	2541	(13.6)	(9.4)	5.6	(0.59)	R	30	12	1.4		器面：灰 7.5Y5/1，断面：灰白 5Y8/1	a2	—	C3	×		3					3											第2面	（～第2面）
軒丸瓦 167	2542	14.5	10.2	(5.6)	(0.54)	L	30	9	1.1		器面：灰白 N7/・灰 N6/，断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2?	—	C3	×		1														第3～6面1		第3～6面	（第6面）
軒丸瓦 168	2543	12.7	9.0	5.4	0.60	R	36	12	1.4		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/	b	—	C3	×		2						2										Ⅱ層	第2面
軒丸瓦 169	2544	12.9	8.6	5.2	0.60	L	31	9	1.0		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/・灰 N6/	a1	D?	C2	×		13			1		1			6		1	1				3	Ⅳ層	第5面
軒丸瓦 170	2545	12.9	8.5	4.8	0.56	L	36	12	1.3		器面：灰白 5Y7/1・灰 N4/，灰白 7.5Y8/1・灰 7.5Y6/1	a2	D	C2	×		11			2		1	2		1			1	2			2	第5面	第5面
軒丸瓦 171	2546	13.0	9.1	5.5	0.60	L	23	1	1.1		器面：灰 5Y5/1・灰 N4/，断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N6/	a2	D?	C2	×		1		1														第1・2面	—
軒丸瓦 172	2547	12.7	8.9	4.9	0.55	L	22	8	1.3		器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	a1?	D?	C2	○		1								1								第3面	第3面
軒丸瓦 173	2548	(13.2)	(9.0)	4.4	(0.48)	L	25	12	1.4		器面：灰 N5/，断面：灰 N7/	a1	D	C2	×		1						1										Ⅱ層	（第3面）
軒丸瓦 174	2549	14.1	9.2	5.1	0.55	L	31	16	1.1		器面：灰 5Y5/1・灰 N5/，断面：灰白 5Y8/1・灰 N6/	b	D?	C3	×		2		1			1											第2面	第2面
軒丸瓦 175	2550	12.7	8.8	5..3	0.60	R	30	12	1.2		器面：灰 N6/，断面：灰白 N8/・灰 N5/	a1?	D?	C3	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 176	2551	13.6	8.1	4.9	0.60	L	36	12	1.2		器面：暗灰 N3/・灰白 5Y7/1，断面：灰 N5/	a2	D	C3	×		2					2											第2面	（～第2面）
軒丸瓦 177	2552	12.2	8.0	4.8	0.60	L	33	12	1.3		器面：灰 N4/・灰 5Y5/1，断面：灰白 N7/	b	D?	C3	×		2			2													第1面	—
軒丸瓦 178	2553	12.4	8.5	5.3	0.62	L	49	16	1.2		器面：灰白 N4/・灰白 7.5Y7/1，断面：灰白 N8/	b	D?	C2	×		16	2	2	5		5	1									1	Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦 179	2554	13.4	8.0	5.2	0.63	L	39	16	1.2		器面：（表）灰 N4/・（裏）灰 N5/，断面：灰白 N8/	b	D?	C2	○		2	1	1														第1・2面	（第2面）
軒丸瓦 180	2555	13.7	8.1	5.1	0.62	L	36	15	1.2		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1・灰白 N7/	b	D?	C2	○		3			3													第1面	（第2面）
軒丸瓦 181	2556	13.8	8.9	5.2	0.58	L	37	12	1.3		器面：暗灰 N3/，断面：灰白 N8/・灰白 N7/	b	D	C2	○		4	1	1	1		1											第2面	第2面
軒丸瓦 182	2557	13.6	(7.8)	(4.5)	(0.57)	L	—	16	1.2		器面：（表）灰 N4/・（裏）灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/	b	—	C2	○		2	1		1													第1面	（第2面）
軒丸瓦 183	2558	12.6	7.7	4.4	0.57	L	34	12	1.2		器面：灰白 7.5Y7/1・灰 N4/，断面：灰白 N8/	b	D	C2	×		2			1												1	第1面	第1面
軒丸瓦 184	2559	(14.0)	(8.8)	(5.0)	(0.56)	R	27	12	1.2		器面：灰 N4/・灰 7.5Y6/1，断面：灰白 N8/	b	D	C2	×		1			1													第1面	（第2面）
軒丸瓦 185	2560	(12.8)	(8.6)	(5.0)	(0.58)	L	—	16	1.2		器面：灰 N6/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y7/1	b	D	C2	×		1					1											第2面	第2面
軒丸瓦 186	2561	(13.0)	8.0	4.6	0.57	R	33	16	1.2		器面：灰 N6/，断面：灰白 7.5Y8/1	b	D	C2	×		1						1										Ⅱ層	—
軒丸瓦 187	2562	12.7	8.4	5.5	0.65	L	30	12	1.0		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	b	D	C3	×		8			6		1	(1)										第2面（Ⅱ層）	第2面
軒丸瓦 188	2563	12.8	8.6	5.6	0.65	L	36	12	1.3		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	b	D	C3	○		2	1		1													第1面	（第2面）
軒丸瓦 189	2564	12.0	8.2	5.2	0.63	R	28	14	1.2		器面：灰 N4/・灰 5Y6/1，断面：灰白 5Y8/1	b	—	C3	×		1						1										Ⅱ層	第3面
軒丸瓦 190	2565	14.0	9.1	5.7	0.62	L	29	16	1.0		器面：灰 N5/・灰 N4/，断面：灰白 2.5Y7/1・灰 N5/	b	D	C3	×		2					2											第2面	第2面
軒丸瓦 191	2566	13.5	8.8	5.4	0.61	L	29	16	1.2		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1，灰白 N8/・灰 N5/	b	D?	C3	○		3			2			1										Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦 192	2567	12.6	8.5	5.2	0.61	L	26	16	1.0		器面：灰 N4/・灰 N6/，断面：灰 N6/・灰白 5Y8/1	b	D	C3	×		4	1		2			1										Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦 193	2568	12.3	8.6	5.2	0.60	L	27	17	1.0		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/	b	D	C3	×		2					2											第2面	第2面
軒丸瓦 194	2569	(14.2)	(8.8)	5.2	(0.59)	L	33	16	1.2		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/	b	D?	C3	○		4	1		1		1										1	第2面	第2面
軒丸瓦 195	2570	(14.0)	(10.8)	(6.5)	(0.60)	L	—	10	1.2		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/	b	—	C3	○		1			1													第1面	—
軒丸瓦 196	2571	(14.0)	(8.6)	(5.6)	(0.65)	L	—	12	1.2		器面：（表）灰 N4/・（裏）灰白 5Y7/1・灰 N4/，断面：灰白 N8/	b	D	C3	×		1			1													第1面	—
軒丸瓦 197	2572	12.4	8.3	4.8	0.57	L	27	17	0.8		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	b	D?	C3	×		4			2		2											第2面	第2面
軒丸瓦 198	2573	(14.0)	(9.0)	(5.4)	(0.60)	L	30	16	1.0		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y7/1	b	—	C3	×		1													1			—	—
軒丸瓦 199	2574	(12.4)	(8.8)	(5.6)	(0.63)	L	26	16～18	0.9		器面：灰 N5/，断面：灰 N8/	b	D	C3	×		1	1															—	—
軒丸瓦 200	2575	(12.6)	(8.8)	(5.8)	(0.65)	L	—	14	1.2		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1，断面：灰白 2.5Y8/2	b	D	C3	×		1						1										Ⅱ層	（第2面）

第6表　軒瓦観察表（4）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剥離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 搅乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦201	2576	13.1	8.8	5.7	0.64	L	30	12	0.8		器面：灰N5/，断面：灰N6/・灰白N8/	a2	D?	C2	×		1		1															第1・2面	（第2面）
軒丸瓦202	2577	13.0	8.9	5.9	0.66	L	26	12	0.8		器面：灰10Y5/1，断面：灰白5Y8/1・灰N6/	b	D?	C2	×		3			1		2											第2面	第2面
軒丸瓦203	2578	13.0	9.3	6.1	0.65	L	24	12	1.0		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白5Y7/1	b	D	C3	○		2	1	1														第1・2面	（第2面）
軒丸瓦204	2579	12.9	8.9	5.8	0.65	L	27	12	0.8		器面：灰N4/・灰N5/，断面：灰白N8/・灰N5/	b	D?	C3	×		6		1			1	2								表土層1	1	Ⅱ層	第3面
軒丸瓦205	2580	12.2	8.8	5.3	0.60	L	27	12	1.1		器面（表）灰N4/・（裏）灰N4/・灰白N8/，断面：灰白N8/・灰白N7/	b	D	C3	×		1	1															—	—
軒丸瓦206	2581	12.9	8.2	4.9	0.59	L	28	14	1.3		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/2	b	D	C3	×		5			4			(1)										第1面（Ⅱ層）	第1面
軒丸瓦207	2582	(12.4)	(8.6)	5.2	(0.60)	L	27	12	1.2		器面：暗灰N3/，断面：灰白2.5Y7/1	b	D	C3	×		1						1										Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦208	2583	13.6	8.5	4.9	0.57	R	28	12	1.1		器面：暗灰N3/・灰白7.5Y7/1，断面：灰白7.5Y8/1・灰白7.5Y7/1	b	D	C3	○		1	1															—	—
軒丸瓦209	2584	12.7	8.1	4.6	0.56	L	25	12	1.3		器面：灰N5/，断面：灰白N8/・灰N5/	a2	D	C3	×		1					1											第2面	（～第2面）
軒丸瓦210	2585	13.7	8.0	4.5	0.56	R	29	12	1.4		器面：暗灰N3/・灰N6/，断面：灰白5Y8/2	b	D	C2	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦211	2586	(12.4)	(7.8)	(4.5)	0.57	L	—	12	1.3		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	D	C2	×		1	1															—	—
軒丸瓦212	2587	13.3	8.4	4.6	0.54	L	30	12	1.4		器面：灰N4/・灰白2.5Y8/1，断面：灰白N8/	b	D	C3	○		1														表土1		—	—
軒丸瓦213	2588	(13.0)	(8.0)	(4.4)	0.55	L	38	14	1.3		器面：灰N5/，断面：灰黄2.5Y7/2	b	D?	C3	×		1					1											第2面	第2面
軒丸瓦214	2589	13.4	8.1	4.3	0.53	R	29	14	1.3		器面：灰N4/，断面：灰白N7/・灰白N8/	b	—	C3	×		1						(1)										（Ⅱ層）	—
軒丸瓦215	2590	11.5	7.7	4.4	0.57	R	31	12	1.3		器面：灰N4/，断面：灰白N7/	b	D	C2	○		1						1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦216	2591	(12.0)	(7.7)	(4.1)	(0.53)	L	25	12～13	1.2		器面：暗灰N3/，断面：灰白7.5Y7/1	b	D	C3	○		1			1													第1面	（～第1面）
軒丸瓦217	2592	(14.0)	(8.6)	(4.6)	0.53	L	25	12	1.4		器面：灰白5Y7/1・灰黄2.5Y7/2，断面：灰白2.5Y7/1	b	—	C3	○		1			1													第1面	（～第1面）
軒丸瓦218	2593	11.7	7.5	4.2	0.56	L	25	12	1.3		器面：灰N4/・灰7.5Y4/1，断面：灰白7.5Y8/1	b	D?	C2	×		7	1		6													第1面	第1面
軒丸瓦219	2594	12.5	8.4	4.7	0.55	R	25	13	1.1		器面：黒7.5Y2/1・灰白5Y8/1，断面：灰白5Y8/1	b	D	C3	×		8	3		5													第1面	第1面
軒丸瓦220	2595	11.9	8.2	4.7	0.57	R	28	12	1.4		器面：灰N6/・灰白2.5Y7/1，断面：灰白5Y8/1	b	D	C3	×		3	1				1										1	第2面	第2面
軒丸瓦221	2596	12.2	8.1	4.3	0.53	L	26	12	1.2		器面：灰白N5/，断面：灰白5Y8/1	b	D	C3	×		3	1		2													第1面	第1面
軒丸瓦222	2597	13.4	9.3	5.6	0.60	R	30	16	1.3		器面(表)オリーブ黒7.5Y3/1・(裏)オリーブ黒7.5Y3/1・灰白5Y7/，断面:灰白5Y8/1	b	D	C3	○		1			1													第1面	（～第1面）
軒丸瓦223	2598	(13.0)	(8.4)	(4.8)	(.0.57)	R	36	16	1.4		器面：灰N4/・浅黄橙10YR8/3，断面：灰白N8/・灰1白10YR8/2	b	D	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦224	2599	13.4	8.4	4.8	0.57	R	33	14	1.2		器面：灰N4/，断面：灰5Y5/1	b	D	C3	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦225	2600	14.1	8.8	5.1	0.57	L	—	12	1.3		器面：灰N6/・暗灰N3/，断面：灰白2.5Y8/1	b	D?	C3	○		2			1			1										Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦226	2601	13.0	9.3	5.3	0.56	R	27	12	1.5		器面：暗灰N3/・灰白N7/，断面：灰白N8/	b	D	C3	×		2			1			1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦227	2602	(13.4)	(9.4)	(5.2)	(0.55)	R	—	12	1.5		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y8/1	b	—	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦228	2603	13.3	8.3	4.4	0.53	L	25	13	1.4		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	D	C3	○		1	1															—	第1面
軒丸瓦229	2604	(13.0)	(8.9)	(6.0)	(0.67)	R	—	14	1.2		器面：灰N6/・灰5Y6/1，断面：灰白2.5Y8/2	b	D	C3	×		1														表土1		—	（第2～1面）
軒丸瓦230	2605	12.0	9.1	5.7	0.62	R	28	10	1.3		器面：（表）灰白2.5Y7/1・（裏）灰黄2.5Y7/2，断面：灰白2.5Y8/1	b	D?	C3	○		2	1				1											第2面	第2面
軒丸瓦231	2606	11.8	9.0	5.3	0.58	L	26	12	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	D	C3	×		1	1															—	—
軒丸瓦232	2607	(12.8)	(8.2)	(5.0)	(0.60)	L	—	9～10	1.3		器面：灰N4/，断面：灰5Y6/1	a2	—	C3	×		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦233	2608	14.3	9.1	5.3	0.58	R	29	12	1.6		器面：灰白5Y7/1・灰N4/，断面：灰白7.5Y7/1	b	D?	C3	×		3	1	1	1													第1・2面	（第1面）
軒丸瓦234	2609	13.4	7.4	3.9	0.52	R	18	12	1.3		器面：灰N4/，断面：灰黄2.5Y7/2	b	D?	C3	×		2			2													第1面	第1面
軒丸瓦235	2610	11.8	6.5	3.3	0.50	L	21	12	1.1		器面：灰N6/・灰白2.5Y8/1，断面：灰白5Y8/1	b	D	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦236	2611	12.2	7.3	3.7	0.50	L	20	9	1.4		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白5Y8/1	b	D?	C3	×		2			1			1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦237	2612	11.7	6.8	3.3	0.48	R	21	9	1.3		器面：灰N5/，断面：灰白5Y7/1	b	D	C3	×		1									1							第4面	（第1面）
軒丸瓦238	2613	(11.6)	7.6	3.3	0.43	L	18	9	1.6		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	D	C3	×		1						1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦239	2614	13.4	9.1	4.7	0.51	R	24	8	1.3		器面:灰5Y5/1・にぶい黄橙10YR7/2，断面:にぶい黄橙10YR7/3・黄灰2.5Y5/1	a2	D?	C3	×		1							1									第3面	第3面
軒丸瓦240	2615	(12.2)	(8.0)	4.8	(0.60)	R	23	12	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	—	C3	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦241	2616	(13.4)	8.8	5.0	0.56	L	22	12	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	—	C3	○		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦242	2617	12.9	8.5	4.6	0.54	L	23	12	1.3		器面：（表）灰N4/・（裏）灰N6/，断面：灰白7.5Y8/1	b	D?	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦243	2618	(11.4)	7.6	4.3	0.56	L	21	12	1.2		器面：灰5Y5/1，断面：灰白5Y8/1	b	—	C3	×		1						1										Ⅱ層	（第2面）
軒丸瓦244	2619	12.1	7.7	4.3	0.55	L	21	12	1.2		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y7/2	b	D	C3	×		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦245	2620	13.2	8.1	4.3	0.53	L	21	12	1.3	マーブル状	器面：灰白5Y7/1，断面：灰白N8/	b	D?	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦246	2621	(12.0)	(8.4)	(4.5)	(0.53)	L	—	13	1.5		器面：灰N5/，断面：灰白N8/・灰N6/	b	—	C3	×		1					1											第2面	（第1面）
軒丸瓦247	2622	12.3	8.0	4.1	0.51	L	23	12	1.2		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/1	b	D?	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦248	2623	(14.0)	(9.6)	(4.8)	0.50	R	(20)	13	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	D	C3	○	周縁に刻印「丸に一」	1						1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦249	2624	13.7	8.3	4.0	0.48	L	23	10	1.3		器面：灰N5/・灰白2.5Y8/1，断面：灰白5Y8/1・灰白N7/	b	D	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦250	2625	(14.0)	(9.0)	(5.4)	(0.60)	L	—	14	1.5		器面：灰5Y5/1，断面：灰5Y5/1・灰白2.5Y8/1	a2 or b	D	C3	×		1	1															—	（第1面）

第7表　軒瓦観察表（5）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	文様区径	内区径	内区指数	巴の巻き	巴尾長	珠文数	珠文径	胎土の特徴	色調	技法 剥離材	瓦当成形	瓦当裏面	周縁面取り	その他	全点数	出土層位 撹乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
軒丸瓦 251	2626	13.3	8.7	5.1	0.58	L	17	14	1.3		器面：灰 5Y5/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	×		4			2													2	第1面	第1面
軒丸瓦 252	2627	(13.0)	(8.6)	(4.8)	(0.55)	R	23	12	1.2		器面：(表)灰 N4/・(裏)灰白 5Y7/1, 断面：灰白 N8/	b	—	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 253	2628	13.2	8.1	4.4	0.54	L	19	12	1.5		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/	b	D	C3	○		2			2													第1面	第1面
軒丸瓦 254	2629	13.4	8.2	4.3	0.52	L	20	12	1.5	マーブル状	器面：灰 5Y6/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 N8/・灰白 5Y7/1	b	D	C2	×		5	1		3	1												Ⅰ層	（第2～1面）
軒丸瓦 255	2630	(13.0)	8.0	4.3	0.53	L	19	12	1.4		器面:N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	×		1									1							第4面	（第1面）
軒丸瓦 256	2631	13.0	8.8	4.3	0.48	R	23	12	1.8		器面：浅黄橙 10YR8/4, 断面：灰白 2.5Y8/2	b	D?	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 257	2632	13.4	8.2	4.3	0.52	L	23	11	1.5		器面：(表)オリーブ黒 5Y3/1・(裏)灰白 5Y8/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	D	C2	○		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦 258	2633	(13.2)	(7.8)	(4.2)	0.53	R	22	12	1.4		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y7/1	b	—	C3	×		2	1					(1)										（Ⅱ層）	（第1面）
軒丸瓦 259	2634	11.9	7.3	3.9	0.53	R	22	10	1.2		器面：灰 N4/, 断面：灰白 2.5Y7/1	b	D	C2	×		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦 260	2635	13.2	9.2	4.8	0.52	R	20	8	1.4		器面：灰黄 2.5Y8/2, 断面：灰黄 2.5Y8/2・灰白 7.5Y7/1	a2 or b	—	C3	×		1								1								第3面	第3面
軒丸瓦 261	2636	11.8	8.0	3.9	0.48	R	15	12	1.4		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	b	—	C3	×		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 262	2637	(12.0)	(7.6)	(3.8)	0.50	L	16	10	1.3		器面：暗灰 N3/・灰黄 2.5Y6/2, 断面：灰白 N8/	b	D	C2	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 263	2638	12.8	8.8	4.4	0.50	L	20	10	2.0		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N8/	b	D	C3	×		2															2	—	（第1面）
軒丸瓦 264	2639	13.1	8.2	4.3	0.52	L	16	11	1.8		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y7/1	b	D	C3	○		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦 265	2640	12.7	8.2	4.0	0.48	L	16	12	1.8		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/	b	D?	C2	○		2			1												1	第1面	第1面
軒丸瓦 266	2641	12.7	8.2	—	—	R	36	0	—		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N7/・灰白 N8/	b	D	C3	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 267	2642	13.1	8.7	—	—	L	35	0	—		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N7/	b	D?	C3	○		4						(2)									2	（Ⅱ層）	（第1面）
軒丸瓦 268	2643	12.8	8.4	—	—	R	31	0	—		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	○		1	1															—	（第1面）
軒丸瓦 269	2644	13.6	8.7	—	—	L	27	0	—		器面：灰 N4/・黄灰 2.5Y6/1, 断面：灰白 N8/	b	D	C3	○		1			1													第1面	第1面
軒丸瓦 270	2645	13.8	8.8	—	—	L	26	0	—		器面：灰 5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	D?	C3	○		1						(1)										（Ⅱ層）	（第1面）
軒丸瓦 271	2646	13.4	8.5	—	—	R	24	0	—		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 N8/	b	D?	C3	○		3	1		1												1	第1面	第1面
軒丸瓦 272	2647	13.4	8.8	—	—	L	20	0	—	マーブル状	器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 5Y8/1	b	D	C3	○		2			2													第1面	第1面
軒丸瓦 273	2648	13.6	8.4	—	—	L	18	0	—		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y6/1, 断面：灰白 7/1	b	D	C3	×		2			2													第1面	第1面
軒丸瓦 274	2649	13.3	8.7	—	—	R	19	0	—		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 N8/	b	D	C3	×		2			1			1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦 275	2650	(11.6)	(7.0)	—	—	L	—	0	—		器面：灰 N4/・灰 7.5Y5/1, 断面：5Y8/1	b	D	C3	○	周縁に刻印「へい」	1													(1)				（第5面）	（第1面）
軒丸瓦 276	2651	12.5	8.7	—	—	L	20	0	—		器面：オリーブ黒 7.5Y3/1, 断面：灰白 5Y7/1	b	D?	C2	×		1						1										Ⅱ層	（第1面）
軒丸瓦 277	2652	11.5	7.4	—	—	—	—	—	—	砂質気味	器面：灰 N5/・灰 5Y6/1, 断面：N8/	a2	D?	C1	×		14	2				3	3		2					1(1)	2		第6面	第6面
軒丸瓦 278	2937	13.3	8.9	6.8	0.76	L	31	(26)	0.7		器面：灰褐 5YR4/2, 断面：浅黄橙 10YR8/4	a1?	A	C1?	×		1								1								第3面	（第6面）
軒丸瓦 279	2938	(14.0)	(9.4)	(6.8)	0.72	L	—	—	0.7		器面：灰褐 5YR6/2, 断面：灰白 10Y8/2	a2	—	C1	×		1								1								第3面	（第6面）
軒丸瓦 280	2939	(15.5)	(11.7)	(9.3)	0.79	L	—	—	1.0		器面：黒 N2/, 断面：灰白 N8/	a1	D	C1?	×		1								1								第3面	（第6面）
軒丸瓦 281	2940	(14.6)	(10.4)	7.0	0.67	R	54	(14)	1.2		器面：黒 N2/, 断面：灰白 2.5GY8/1	a2	D	C1	×		1											1					Ⅳ層	（～第5面）
軒丸瓦 282	2941	(14.2)	9.5	6.2	0.65	R	31	(16)	0.7	マーブル状	器面：黒 N1.5/・灰白 10Y8/1, 断面：灰白 10Y8/1	—	D?	C1?	×		1													1			第6面	第6面

第８表　軒瓦観察表（６）

種別（笵）	報文番号	法量							胎土の特徴	色調	手法			全点数	出土層位																最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚			剥離材	上角面取り	その他		撹乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
軒平瓦 1	2653	(25.6)cm	(24.4)cm	2.8cm	3.8cm	2.3cm	2.6cm	1.2cm	砂質気味	器面：灰 N5/，断面：灰白 N7/	a1	D		1												1				Ⅴ層	第６面
軒平瓦 2	2654	(24.0)	(23.0)	1.8	(3.85)	(2.0)	2.7	1.9		器面：灰 N6/，断面：灰白 N8/・灰白 N/6	a1	×		1			1														第１面	（第６面）
軒平瓦 3	2655	(24.0)	(23.0)	1.5	3.5	2.0	5.6	1.65		器面：灰白 2.5Y8/2，断面：灰 N4/・灰白 2.5Y8/2	—	D		2					1							1				第５面	第５面
軒平瓦 4	2656	(22.8)	(22.6)	2.6	3.7	2.1	4.4	1.3		器面：灰白 5Y7/1，断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a1	A		6		2			1				1	1	1					第５面	（第６面）
軒平瓦 5	2657	—	—	—	5.5	3.5	—	1.7		灰 5Y5/1	a2	×		1				1												第２面	—
軒平瓦 6	2658	24.6	(24.0)	(2.5)	(4.8)	(2.9)	5.1	1.6		器面：灰黄 2.5Y7/2，灰 N5/，断面：灰白 7.5Y8/1，灰 N5/	a2	×		2					2											Ⅱ層	第３面
軒平瓦 7	2659	(22.0)	(22.6)	1.5	3.2	1.9	2.6	1.7		器面：暗灰 N3/，断面：灰白 N8/	a1	×		2											1				1	第５面	（第６面）
軒平瓦 8	2660	—	—	—	3.0	1.7	—	1.5		器面：灰 5Y6/1・暗灰 N3/，断面灰 N6/	a1	×		1							1									第３面	（第６面）
軒平瓦 9	2661	(21.2)	(21.2)	1.7	3.1	1.6	4.5	1.8		器面：灰 7.5Y6/1，断面：灰 N8/	a1?	B		1		1														第１･２面	（第６面）
軒平瓦 10	2662	(24.4)	(24.0)	1.9	4.1	2.1	1.8	2.0	砂質気味	器面：灰 N6/・にぶい黄橙 10YR7/2，断面：灰白 2.5Y8/1	a1	C		3	1				1				1							第４面	（第６面）
軒平瓦 11	2663	—	—	1.3	5.3	2.4	4.3	1.9	マーブル状	器面：灰 5Y6/1，断面：灰白 5Y7/1	a1	×		2					1									1			第６面	第６面
軒平瓦 12	2664	—	—	0.65	3.75	2.3	4.6	3.1		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y7/1	a1	×		1	1															—	—
軒平瓦 13	2665	21.5	21.0	2.0	3.7	2.2	3.5	1.3		器面：灰黄 2.5Y7/2，断面：灰黄 2.5Y7/2・灰白 2.5Y7/1	a2?	×		1							1									第３面	第３面
軒平瓦 14	2666	—	—	—	3.5	2.1	—	1.7		器面：灰 5Y6/1，断面：灰白 5Y7/1	a1	×		1					1											Ⅱ層	（第６面）
軒平瓦 15	2667	(23.2)	(23.0)	2.0	3.5	2.2	3.3	1.5		器面：灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y7/1	a2	×		1				1												第２面	（第３面）
軒平瓦 16	2668	—	—	(1.7)	3.1	2.1	3.6	1.4		器面：灰白 2.5Y7/1・灰 10Y5/1，断面：灰白 2.5Y7/1・灰 10Y5/1	a2?	×		1					1											Ⅱ層	第３面
軒平瓦 17	2669	—	—	—	4.2	2.5	3.6	1.7		器面：灰 N5/，断面：灰白 5Y8/1	a2?	×		1					1											Ⅱ層	第３面
軒平瓦 18	2670	(19.2)	(18.7)	1.7	2.9	1.45	2.7	1.8		器面：灰 N4/，断面：灰 7.5Y8/1	a1	B		5	1		1										3			第６面	第６面
軒平瓦 19	2671	24.7	24.2	1.8	3.9	2.1	4.0	1.2		器面：灰 N6/，断面：灰白 N8/	a2	×		3	1		1		1											第２面	—
軒平瓦 20	2672	(23.6)	(22.4)	2.1	3.9	2.2	3.3	1.5		器面：灰 7.5Y6/1・灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	a1	C		1													1			第６面	第６面
軒平瓦 21	2673	24.0	22.5	2.2	3.5	2.0	5.0	1.9		断面：灰白 2.5Y8/2，断面：灰 N6/	a1?	×		5	1										1				3	第５面	（第６面）
軒平瓦 22	2674	(24.5)	(24.2)	1.6	3.4	1.8	4.0	1.4		器面：灰 7.5Y4/1，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 7.5Y5/1	a1?	×		1	1															—	（第６面）
軒平瓦 23	2675	(22.0)	(22.4)	1.6	3.6	1.9	5.4	1.3		器面：灰黄 2.5Y7/2，断面：灰 5Y5/1	a2	×		16	1		2		1	3(1)		6		1	1					第５面	第５面
軒平瓦 24	2676	—	—	—	(3.3)	1.9	—	1.3		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/	a1	×		1						1										第3･4面	第３・４面
軒平瓦 25	2677	(21.0)	(20.8)	1.4	3.6	2.1	3.75	1.6		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/・灰白 N7/	a1?	B		2						1								第３～６面		第３～６面	（第６面）
軒平瓦 26	2678	21.4	20.5	1.3	4.0	2.2	3.3	1.8		器面：にぶい黄橙 10YR7/2，断面：灰白 7.5Y8/1	a2	×		1	1															—	（第６面）
軒平瓦 27	2679	22.2	21.7	1.5	3.9	—	5.5	1.8		器面：灰 5Y6/1，断面：灰 5Y7/1・灰 N5/	a2	×		1						1										Ⅱ層	第３面
軒平瓦 28	2680	(27.4)	(26.6)	1.6	4.1	2.2	5.9	1.6		器面：灰 7.5Y6/1，断面：灰白 N8/・灰 N5/	a2	A		4	1				1						1		1			第６面	第６面
軒平瓦 29	2681	(22.0)	(21.6)	1.4	3.5	1.95	3.8	1.4		器面：浅黄 2.5Y7/3・浅黄橙 10Y8/3，断面：灰 N5/・浅黄橙 10Y8/3	a2	×		2							1			1						Ⅳ層	（第６面）
軒平瓦 30	2682・2683	—	—	(1.9)	3.8	2.8	5.2	1.7	マーブル状	器面：灰 N4/・にぶい黄橙 10YR7/2，断面：灰白 5Y8/2・灰 7.5Y6/1	a1	×		3					2	1										Ⅱ層	（第６面）
軒平瓦 31	2684	—	—	—	3.7	2.1	6.0	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰 N5/	—	×		2						2										Ⅱ層	第３面
軒平瓦 32	2685・2686	(23.0)	(22.8)	1.45	3.7	2.1	4.0	1.5		器面：灰黄 2.5Y6/2 ／灰 N5/，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	a2	×		4							3								1	第３面	第３面
軒平瓦 33	2687	(21.4)	(21.4)	1.2	3.8	2.3	2.9	1.7		器面：灰白 N8/・灰 N4/，断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	×		2	1	1														第１･２面	—
軒平瓦 34	2688	—	—	—	4.4	2.7	—	1.4		器面：暗灰 N3/，断面：灰白 5Y7/1	b	×		1	1															—	（第１面）
軒平瓦 35	2689	(24.6)	(23.8)	1.1	3.4	2.4	6.2	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y7/1	b	×		2					2											第２面	第２面
軒平瓦 36	2690	—	—	—	3.9	2.5	—	1.6		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	b	×		1			1													第１面	（第２面）
軒平瓦 37	2691	(22.0)	(21.0)	1.2	3.7	2.2	5.0	1.6		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/	b	×		3			1												表土層 1	1	第１面	第１面
軒平瓦 38	2692	(22.0)	(22.0)	1.85	3.9	2.5	6.3	1.4		器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 7.5Y8/1	b?	×		4	2	1				1										Ⅱ層	第１・２面
軒平瓦 39	2693	—	—	—	3.2	1.45	—	1.5		器面：灰 5Y5/1・灰 5Y4/1，断面：灰 5Y5/1・灰黄 2.5Y6/2	a1?	×		2						1								第 1～ 4面 1		Ⅱ層	第３面
軒平瓦 40	2694	(21.2)	(20.0)	1.3	2.9	1.5	3.6	1.7		器面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N4/，断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N4/	a2	×		1					1											第２面	（第３面）
軒平瓦 41	2695	25.0	23.0	1.5	(3.1)	1.8	5.7	1.4		器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	a2	×		1		1														第１･２面	（第３面）
軒平瓦 42	2696	(22.8)	(22.0)	0.8	3.5	2.3	4.4	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N4/	a2?	×		4		1					2				1					第５面	第５面
軒平瓦 43	2697	—	—	—	3.9	2.25	—	1.85		器面：灰白 5Y8/1，断面：灰白 N8/	a2?	×		8					1	3				2		1				第５面	（第６面）
軒平瓦 44	2698	(21.7)	(22.0)	2.3	2.8	1.8	4.4	1.3		器面：灰 N5/，断面：灰白 7.5Y7/1・灰 7.5Y6/1	a2	×		10		1	2			4		1			1				第１～５面 1		Ⅳ層	第５面
軒平瓦 45	2699	(21.5)	(20.0)	1.3	3.3	2.2	5.3	1.3		器面：黄 灰 2.5Y6/1，断 面：黄 灰 2.5Y6/1・黄灰 2.5Y5/1	a2?	×		6						6										Ⅱ層	第３面
軒平瓦 46	2700	(21.4)	(20.6)	—	4.0	2.6	—	1.3		器面：灰 N5/，断面：灰白 5Y8/1・灰 5Y5/1	a2?	×		5					1							4				第５面	第５面
軒平瓦 47	2701	(21.6)	(20.4)	(1.4)	3.75	2.1	4.8	1.5	マーブル状	器面：灰白 5Y7/1，断面：灰白 5Y8/1	a2?	×		6						1		4								第３面	第３面
軒平瓦 48	2702	(22.4)	(21.8)	1.2	3.0	1.8	4.2	1.2		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 N5/	a2?	×		1									1							第４面	第４面
軒平瓦 49	2703	23.4	22.0	1.3	3.8	1.7	5.8	1.5		器面：灰白 5Y7/1・灰 N6/，断面：灰白 5Y7/1・灰 10Y6/1	a2	×		2						1		1								第３面	第３面
軒平瓦 50	2704	25.0	24.3	(2.2)	3.7	2.3	6.8	1.7		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/・灰 N5/	a2?	×		3						3										Ⅱ層	第３面

第 9 表　軒瓦観察表（7）

種別（笵）	報文番号	法量							胎土の特徴	色調	手法			出土層位																		最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚			剥離材	上角面取り	その他	全点数	撹乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
軒平瓦51	2705	23.0	22.3	1.8	3.8	2.6	5.0	1.5	マーブル状	器面：灰N5/，断面：灰白N8/・灰白N7/	b	×		4	2		1		1											第2面	第2面
軒平瓦52	2706	—	—	—	3.2	2.2	5.5	1.2		器面：灰5Y4/1，断面：灰白2.5Y7/1	a2	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦53	2707	22.0	21.6	1.7	3.4	2.1	3.7	1.5		器面：灰白5Y7/1・灰N4/，断面：灰N5/・灰白5Y8/1	a2?	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦54	2708	(22.0)	(20.4)	1.5	3.9	1.9	4.0	1.5		器面：灰白5Y7/1，断面：灰白5Y7/1・灰白5Y5/1	a2	×		4					1	3											Ⅱ層	第3面
軒平瓦55	2709	(22.0)	(21.4)	1.6	3.5	1.9	6.0	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白10Y8/1	—	×		2		1				1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦56	2710	(20.8)	(19.4)	1.3	3.7	1.8	4.0	1.4		器面：灰7.5Y5/1，断面：灰白7.5Y8/1・灰N5/	a2	×		2						1							1				第6面	第6面
軒平瓦57	2711	20.9	20.7	2.0	3.4	2.1	4.1	1.4		器面：灰N5/，断面：灰白7.5Y8/1・灰N6/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦58	2712	(20.4)	(20.0)	1.6	3.3	1.9	4.2	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白7.5Y8/1・灰N5/	a2	×		3					1	1		1									第3面	第3面
軒平瓦59	2713	(23.4)	(23.8)	1.9	3.5	2.3	6.0	1.4		器面：灰白5Y7/1，断面：灰N4/	a2	×		4						2		1		1							第4面	第4面
軒平瓦60	2714	(23.0)	—	1.2	3.7	-2.2	5.4	1.6		器面：灰黄2.5Y7/2・灰5Y4/1，断面：灰黄2.5Y7/2	a2	×		2			1										1				第6面	（第3面）
軒平瓦61	2715	(23.8)	(22.8)	0.8	3.4	2.1	5.5	1.3		器面：灰白2.5Y8/2，断面：灰黄2.5Y7/2・灰5Y5/1	a2	×		2						1								表土層1			Ⅱ層	第3面
軒平瓦62	2716	(22.6)	(19.2)	(0.8)	3.4	1.9	5.5	1.5		器面：灰N5/，断面：灰白2.5Y8/2	a2	×		3	1				1	1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦63	2717	—	—	—	3.4	2.0	—	1.5		器面：灰黄2.5Y7/2，断面：灰白2.5Y7/1・灰N6/	a2	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦64	2718	(21.4)	(20.8)	1.0	3.3	1.8	4.3	1.4		器面：灰5Y6/1，断面：灰白5Y8/1	a2	×		5			3			1		1									第3面	第3面
軒平瓦65	2719	(22.0)	(21.6)	0.8	3.8	1.8	4.9	1.5		器面：灰5Y5/1，断面：灰白5Y8/1・灰7.5Y5/1	a2	×		7	2				2	2										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦66	2720	(21.5)	—	0.5	4.0	1.7	4.3	1.9		器面：灰黄10YR6/2，断面：灰黄2.5Y7/2・灰黄2.5Y6/1	a2	×		2					1									Ⅰ・Ⅱ層1		Ⅰ・Ⅱ層	第3面
軒平瓦67	2721	(22.2)	(21.0)	(1.5)	3.2	1.8	5.1	1.3		器面：灰黄2.5Y4/1，断面：灰白10YR7/1	a2?	×		1			1														第1面	（第3面）
軒平瓦68	2722	—	—	—	3.1	1.9	—	1.4		器面：灰N4/・灰7.5Y6/1，断面：灰白7.5Y8/1・灰N4/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦69	2723	22.6	22.0	2.3	3.1	1.9	5.5	1.5		器面：灰5Y4/1，断面：灰白5Y8/1・灰5Y5/1	a2?	×		5		1				3										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦70	2724	(24.0)	(23.4)	1.0	3.6	2.4	5.1	1.4		器面：黄灰2.5Y4/1，断面：灰5Y4/1	a2?	×		3					1	2											Ⅱ層	第3面
軒平瓦71	2725	22.9	21.5	2.0	4.0	2.3	4.8	1.4		器面：灰5Y6/1，断面：灰白5Y8/1・7.5Y5/1	a2	×		6	1	1	1		2			1									第3面	第3面
軒平瓦72	2726	(19.8)	(18.6)	1.0	2.9	1.8	3.9	1.4		器面：褐灰10YR6/1，断面：にぶい橙7.5YR7/4	_	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦73	2727	(22.8)	(22.2)	1.5	3.6	2.1	4.9	1.8		器面：にぶい黄橙10YR7/2・黄灰2.5Y4/1，断面：灰白2.5Y8/1・灰N5/	a2	D		1								1									第3面	第3面
軒平瓦74	2728	—	—	—	4.4	2.5	—	1.4		器面：灰5Y6/1，断面：灰5Y5/1	a2	×		4			1			2		1									第3面	第3面
軒平瓦75	2729	—	—	(1.5)	3.5	2.2	5.7	1.4		器面：灰5Y6/1，断面：灰5Y7/1	a2?	×		2						1										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦76	2730	—	—	(1.2)	3.3	2.1	4.0	1.5		器面：灰N5/・灰白5Y7/1，断面：灰N5/・灰白5Y7/1	_	×		1																1	—	（第3面）
軒平瓦77	2731	24.5	24.2	1.5	4.7	2.8	6.3	1.7		器面：灰白5Y7/1・灰N5/，断面：灰白N8/1・灰N5/	a2	×		4		1			2	1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦78	2732	(24.6)	(24.0)	1.5	4.4	2.9	6.4	1.5		器面：浅黄2.5Y7/3，断面：灰白2.5Y8/2・灰5Y6/1	a2	×		5					2	3											Ⅱ層	第3面
軒平瓦79	2733	(24.0)	(24.2)	(1.9)	4.2	2.4	6.0	1.7		器面：灰5Y6/1，断面：灰7.5Y5/1	a2	×		7						6										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦80	2734	(21.6)	(20.6)	1.2	3.4	2.6	4.5	1.5		器面：灰N5/・灰白5Y7/1，断面：灰N5/・灰白5Y7/1	a2	×		5					1	1		2					1				第6面	（第3面）
軒平瓦81	2735	(24.6)	(22.8)	1.3	4.3	2.6	5.8	1.5		器面：灰7.5Y5/1，断面：灰7.5Y5/1	a2	×		5			1		1	2										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦82	2736	22.0	21.4	1.2	3.5	2.2	3.6	1.8		器面：灰N5/，断面：灰白N8/・灰N4/	a2	×		2								2									第3面	第3面
軒平瓦83	2737	—	—	—	3.3	2.2	—	1.4		器面：灰白5Y7/1，断面：灰白5Y7/1	a2?	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦84	2738	—	—	1.2	3.4	2.0	5.3	1.2		器面：灰5Y6/1，断面：灰5Y7/1・灰5Y6/1	a2	×		2						1										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦85	2739	—	—	—	3.4	2.0	5.5	1.2		器面：灰白N7/，断面：灰白5Y7/1・灰N5/	a2	×		2						1										1	Ⅱ層	第3面
軒平瓦86	2740	—	—	—	4.3	2.7	—	2.1	マーブル状	器面：灰N4/・灰白N7/，断面：灰白N7/	b	×		2	1		1														第1面	第1面
軒平瓦87	2741	(21.6)	(21.4)	1.4	3.7	2.3	5.0	9.5		器面：灰N4/・灰N7/，断面：灰N6/・灰白5Y8/1	b	×		2	2																—	（第2～1面）
軒平瓦88	2742	(21.4)	(21.2)	1.4	3.2	2.2	4.1	1.6		器面：灰5Y6/1，断面：灰白5Y7/1・灰N6/	a2?	×		1	1																—	（第3面）
軒平瓦89	2743	22.2	22.6	2.0	3.7	2.5	5.6	1.7		器面：灰白2.5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/1	a2	D		1	1																—	—
軒平瓦90	2744	(23.0)	(21.6)	1.0	3.4	1.9	5.4	1.5		器面：灰白2.5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/1・灰N6/	a2	×		1																1	—	—
軒平瓦91	2745	25.5	23.9	1.4	4.5	3.1	6.1	1.6	マーブル状	器面：灰白5Y7/1，断面：灰白5Y8/1・灰白5Y7/1	b	×		3			2		1												第2面	第2面
軒平瓦92	2746	—	—	—	4.5	3.0	—	1.8		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	×		6			1			2(1)										2	Ⅱ層	（第2面）
軒平瓦93	2747	(24.6)	(23.6)	1.5	3.0	2.8	6.3	1.5		器面：灰白N5/，断面：灰白N7/・灰白N8/	b?	×		1						(1)											（Ⅱ層）	（第2面）
軒平瓦94	2748	—	—	—	3.8	2.9	—	1.7		器面：灰N4/・灰白2.5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/1	b	×		1						(1)											（Ⅱ層）	（第2面）
軒平瓦95	2749	(24.4)	(23.4)	1.7	4.1	2.3	6.0	1.5	マーブル状	器面：灰N6/，断面：灰白N8/	b	×		1			1														第1面	（第2面）
軒平瓦96	2750	—	—	—	3.7	2.2	—	1.6	マーブル状	器面：黄灰2.5Y5/1，断面：灰白5Y8/1	b	×		2			2														第1面	（第2面）
軒平瓦97	2751	—	—	—	3.3	2.1	—	1.4		器面：（瓦当面）灰N4/（平瓦部）灰白7.5Y7/1，断面：灰白7.5Y8/1	b	×		1			1														第1面	（第2面）
軒平瓦98	2752	(22.4)	(22.2)	1.7	3.6	2.15	5.9	1.4		器面：（瓦当面）灰N4/（平瓦部）灰白2.5Y7/1，断面：灰白2.5Y8/1	b	×		1																1	—	（第2面）
軒平瓦99	2753	(19.8)	(19.0)	1.4	3.4	2.2	4.1	1.4		器面：灰N6/・灰N7/，断面：灰白N8/	b	×		1					1												第2面	第2面
軒平瓦100	2754	(18.2)	(18.0)	1.2	3.2	2.1	4.3	1.2	マーブル状	器面：灰N6/・灰白6.5Y7/1，断面：灰白2.5Y7/1	b	×		1					1												第2面	第2面

第10表　軒瓦観察表（8）

種別（笵）	報文番号	法量							胎土の特徴	色調	手法			全点数	出土層位																		最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚			剥離材	上角面取り	その他		撹乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
軒平瓦101	2755	(20.0)	(19.0)	1.6	3.4	1.8	4.0	—		器面：灰5Y5/1，断面：灰白5Y8/1・灰5Y5/1	a2	×		3								2		(1)							第3面（Ⅳ層）	（第5面）
軒平瓦102	2756	(22.4)	(21.2)	1.7	3.6	2.4	4.7	1.5		器面：灰N5/，断面：灰白7.5Y8/1・灰N5/	a2	×		3					1			1								1	第3面	第3面
軒平瓦103	2757	—	—	—	3.2	1.8	—	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	a1?	×		1																1	—	—
軒平瓦104	2758	(22.8)	(21.6)	1.1	3.3	2.2	3.9	1.6	マーブル状	器面：灰N6/・灰白5Y7/1，断面：灰N8/・灰白N7/	a2	×		2					1											1	第2面	（第3面）
軒平瓦105	2759	(23.4)	(23.0)	(1.7)	(3.8)	2.5	6.0	1.4		器面：灰白N8/・暗灰N3/，断面：灰白N8/	a2	×		1						(1)											（Ⅱ層）	第3面
軒平瓦106	2760	—	—	—	3.9	2.35	—	1.7		器面：灰5Y6/1・暗灰N3/，断面：灰N6/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦107	2761	(21.6)	(21.1)	1.1	3.3	2.1	4.9	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白N8/・灰N6/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦108	2762	—	—	—	3.6	2.1	—	1.3		器面：暗灰黄2.5Y5/2，断面：灰黄2.5Y6/2	a2?	×		1		1															第1･2面	—
軒平瓦109	2763	—	—	—	3.6	2.1	—	—		器面：灰N5/，断面：灰N5/・灰白5Y8/1	a2?	×		1										1							Ⅳ層	（第5面?）
軒平瓦110	2764	23.9	23.4	1.7	3.9	2.2	5.0	1.6		器面：灰7.5Y6/1・灰N4/，断面：灰白N8/・灰N5/	a2	×		1						1											Ⅱ層	（第3面）
軒平瓦111	2765	(23.4)	(22.4)	1.4	(3.3)	2.0	4.9	1.5		器面：灰白5Y7/1・暗灰N3/，断面：灰白N8/・暗灰N4/	a2	×		3			1													2	第1面	（第3面）
軒平瓦112	2766	(21.4)	(21.4)	1.5	3.5	1.3	4.2	1.5		器面：灰5Y6/1，断面：灰白5Y7/1・灰5Y6/1	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦113	2767	—	—	—	4.8	2.6	—	1.5		器面：灰白2.5Y8/2，断面：灰白5Y8/1・灰N5/	a2	×		2	1					1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦114	2768	—	—	—	(2.8)	1.7	—	1.4		器面：灰5Y5/1，断面：灰白2.5Y8/2	a2?	×		1			1														第1面	—
軒平瓦115	2769	(22.0)	(21.0)	1.3	3.3	2.0	4.5	1.5		器面：灰黄2.5Y7/2，断面：灰黄2.5Y8/2・灰6/	a2?	×		2	2																—	—
軒平瓦116	2770	—	—	—	5.2	3.5	—	—		器面：灰白7.5Y8/1・灰N6/，断面：灰白2.5Y8/1・灰N6/	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦117	2771	—	—	1.3	(5.0)	—	6.0	1.6		器面：灰N4/，断面：灰N6/・灰白N8/	b	×		2	1		1														第1面	第1面
軒平瓦118	2772	—	—	—	3.8	2.4	—	1.5		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y7/	b	×		2	1		1														第1面	第1面
軒平瓦119	2773	(24.8)	(23.8)	1.7	4.3	(2.9)	4.8	1.8	マーブル状	器面：（瓦当面）（凹面）灰N4/（凸面）灰白5Y7/1，断面：灰白N8/	b	×		1					1												第2面	第2面
軒平瓦120	2774	(24.4)	(23.8)	—	4.7	3.1	5.2	1.7		器面：灰N5/，断面：灰白N8/・灰白N7/	b	×		12		2	1		4	2		2								1	第3面	第3面
軒平瓦121	2775	(24.0)	(23.2)	2.1	3.6	2.4	5.2	1.5	マーブル状	器面：灰黄2.5Y7/1，断面：灰黄2.5Y7/1	b	×		12		1	8		2			1									第3面	第3面
軒平瓦122	2776	(21.0)	(20.4)	1.9	3.3	2.2	4.8	1.6		器面：灰N4/，断面：灰N8/・灰N6/	b	×		1																1	—	（第2面）
軒平瓦123	2777	—	—	—	4.4	3.0	—	1.6	マーブル状	器面：（瓦当面）灰白N7/・灰N4/（平瓦部）灰7.5Y6/1，断面：灰白5Y7/1	b	×		2			2														第1面	（第2面）
軒平瓦124	2778	(24.0)	(23.2)	(1.5)	3.9	2.7	5.3	1.6	マーブル状	器面：灰白5Y7/1，断面：灰白5Y7/1	b	×		6			4		2												第2面	第2面
軒平瓦125	2779	—	8.2	—	4.5	2.3	(4.5)	1.4		器面：暗灰N3/，断面：灰白N8/	b	×		2		1	1														第1面	（第1面?）
軒平瓦126	2780	(23.4)	(23.4)	2.5	4.3	2.5	5.3	1.6	マーブル状	器面：灰N4/，断面：灰白7.5Y8/1	b	(C)		5	1		4														第1面	第1面
軒平瓦127	2781	(24.0)	(23.0)	1.8	4.4	2.4	5.5	1.5		器面：暗灰N3/，断面：淡黄5Y8/3	b	×		2			2														第1面	第1面
軒平瓦128	2782	(25.6)	(24.6)	2.6	4.2	2.7	6.3	2.0		器面：灰白5Y7/1・灰N4/，断面：灰白N8/	b	×		2			1		1												Ⅱ層	（第1面?）
軒平瓦129	2783	(24.0)	(22.8)	1.3	4.0	2.4	5.5	1.5		器面：灰N4/・灰白5Y8/1，断面：灰白5Y8/1	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦130	2784	(24.0)	(22.2)	1.3	4.0	2.8	6.0	1.3	マーブル状	器面：暗灰N3/，断面：灰白N8/	b	×		2		1	1														第1･2面	（第1面）
軒平瓦131	2785	—	—	1.1	4.4	3.1	5.1	1.5		器面：灰N4/，断面：灰白5Y7/1	b	×		2			1					1									第3面	（第1面）
軒平瓦132	2786	—	—	(3.2)	5.1	2.8	—	2.0		器面：灰N4/・灰白N7/，断面：灰白7.5Y8/1・灰白N8/	b	×		1						(1)											（Ⅱ層）	（第1面）
軒平瓦133	2787	23.4	23.6	2.3	4.6	2.8	5.8	1.4	マーブル状	器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦134	2788	22.9	22.7	1.8	4.3	2.5	5.9	1.3	マーブル状	器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	C		1						1											Ⅱ層	（第1面）
軒平瓦135	2789	23.4	(24.0)	1.9	4.1	2.3	5.7	1.6	マーブル状	器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	×		3			3														第1面	第1面
軒平瓦136	2790	(24.4)	(23.2)	1.8	4.4	2.7	6.5	1.5		器面：灰白5Y8/1・暗灰N3/，断面：灰白5Y8/1	b	×		1	1																—	（第1面）
軒平瓦137	2791	—	—	—	4.5	2.8	—	1.3		器面：灰N5/，断面：灰白N8/	b	C		5	1		3			1											Ⅱ層	（第1面）
軒平瓦138	2792	23.4	22.8	1.9	4.0	2.5	5.1	1.6		器面：灰N4/・灰白7.5Y7/1，断面：灰白5Y8/1	b	×		3	1														2		—	（第1面）
軒平瓦139	2793	21.6	21.8	2.0	3.7	2.3	4.7	1.5		器面：暗灰N3/・灰白7.5Y7/1，断面：灰白7.5Y8/1	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦140	2794	—	—	—	4.1	2.5	—	1.7		器面：灰N4/・灰黄2.5Y7/2，断面：灰白N8/	b	×		1	1																—	（第1面）
軒平瓦141	2795	—	—	—	3.8	2.6	—	1.3		器面：灰N5/・灰白N8/，断面：灰N5/	b?	×		2															2		—	（第3面）
軒平瓦142	2796	26.0	25.5	1.9	4.4	3.1	6.5	1.5		器面：灰白N8/・灰N5/，断面：灰白N8/	b?	×		1	1																—	（第3面）
軒平瓦143	2797	(20.4)	(20.4)	1.4	3.5	2.2	4.5	1.3		器面：暗灰N3/・灰白N8/，断面：灰白N8/	b	×		1	1																—	（第3面）
軒平瓦144	2798	(21.2)	(21.0)	1.4	3.6	2.2	5.1	1.4	マーブル状	器面：灰N4/，断面：灰白7.5Y8/1	b	×		5			5														第1面	第1面
軒平瓦145	2799	22.2	21.5	1.1	3.5	2.2	5.7	1.3		器面：灰5Y6/1，断面：5Y7/1・灰5Y6/1	b	×		3			2													1	第1面	第1面
軒平瓦146	2800	—	—	—	3.8	2.6	—	1.4		器面：灰白2.5Y7/1・灰N4/，断面：灰白N7/	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦147	2801	24.5	—	2.3	4.0	2.3	5.6	1.6	マーブル状	器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白5Y8/1	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦148	2802	—	—	—	3.7	2.5	—	1.5		器面：灰N6/・灰N4/，断面：灰白N7/	b	×		1					1												第2面	第1面
軒平瓦149	2803	—	—	—	4.2	2.3	—	1.4		器面：灰黄2.5Y6/1，断面：灰白N8/	b	×		1			1														第1面	第1面
軒平瓦150	2804	—	—	—	3.0	2.8	—	1.7		器面：灰白N4/・灰5Y4/1，断面：灰白N8/	b	×		1			1														第1面	第1面

第11表　軒瓦観察表（9）

種別（笵）	報文番号	法量							胎土の特徴	色調	手法			出土層位																	最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚			剥離材	上角面取り	その他	全点数	撹乱	第1･2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3･4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
軒平瓦151	2805	23.6	23.0	1.6	4.5	—	6.0	1.6		器面：暗灰 N3/・灰白 7.5Y8/1，断面：灰白 7.5Y8/1	b	×		1	1																—	（第1面）
軒平瓦152	2806	—	—	—	3.9	2.2	—	1.6		器面：灰 N6/・灰 N4/，断面：灰白 N8/	b	×		2		1	1														第1･2面	（第1面）
軒平瓦153	2807	—	—	—	4.1	2.1	—	1.6		器面：灰白 7.5Y7/1・灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1	b	×		3			3														第1面	第1面
軒平瓦154	2808	(22.0)	(22.0)	1.0	3.5	2.4	5.3	1.4	マーブル状	器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 7.5Y8/1	b?	×		1					1												第2面	第2面
軒平瓦155	2809	—	—	1.8	4.2	2.3	5.7	—	マーブル状	器面：灰 N6/，断面：灰白 N8/	b	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦156	2810	23.3	22.8	2.2	4.6	4.8	4.9	1.5		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	b?	×		2	2																—	（第1面）
軒平瓦157	2811	(23.0)	(23.6)	2.0	5.2	2.9	—	1.7		器面：暗灰 N3/，断面：灰白 7.5Y8/1	b	×	凸面墨書「御（カ）街」	1																1	—	（第1面）
軒平瓦158	2812	23.2	22.9	2.3	5.0	2.0	6.5	1.3		器面：灰 N4/，断面：灰白 2.5Y7/1	b	×		1																1	—	（第1面）
軒平瓦159	2813	(27.0)	(26.0)	1.5	4.4	2.0	6.5	1.7		器面：灰 7.5Y6/1，断面：灰白 N8/	b	C		1																1	—	（第1面）
軒平瓦160	2814	—	—	—	4.9	3.3	—	1.7	マーブル状	器面：灰白 5Y8/1・灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	b	C		1			1														第1面	第1面
軒平瓦161	2815	—	—	—	3.35	2.0	—	1.7		器面：灰 N5/，断面：灰白 N8/・灰白 N4/	a2	×		1					1												第2面	（～第2面）
軒平瓦162	2816	—	—	(1.6)	(5.1)	(3.0)	1.5	2.1		器面：灰 N4/・黄灰 2.5Y5/1，断面：灰白 2.5Y7/1	a1	×	瓦当面外区・脇区・凹面側面にミガキ(ヘラナデ)	1														1			第6面	第6面
軒平瓦163	2817	—	—	(1.0)	4.2	2.4	5.3	1.4	マーブル状	器面：灰白 5Y7/1・灰 N5/，断面：灰白 N8/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦164	2818	—	—	0.9	4.9	2.5	5.3	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/	a2?	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦165	2819	—	—	0.7	3.6	2.4	5.1	1.4	マーブル状	器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1	b	×		1																1	—	—
軒平瓦166	2820	(22.0)	(22.0)	0.8	3.5	2.2	4.0	1.7		器面：灰 N5/・灰黄 2.5Y7/2，断面：灰白 2.5Y8/1・灰 N5/	a2	×		1																1	—	—
軒平瓦167	2821	—	—	1.2	3.4	1.8	4.9	1.5		器面：灰 N5/，断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	a2?	×		1					1												第2面	—
軒平瓦168	2822	—	—	(1.0)	(3.0)	(2.3)	4.8	1.8		器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 5Y8/1・灰 5Y5/1	a2?	×		1					1												第2面	—
軒平瓦169	2823	—	—	2.1	4.4	2.0	4.1	1.8		器面：灰 N5/，断面：灰白 N8/	a1?	×		1													1				第6面	第6面
軒平瓦170	2824	—	—	(1.3)	4.0	2.2	5.5	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y7/1	b	×		1			1														第1面	—
軒平瓦171	2825	—	—	—	3.5	2.3	—	1.9		器面：灰 N4/，断面：灰白 7.5Y8/1	—	×		1													1				第6面	第6面
軒平瓦172	2826	—	—	(1.0)	3.7	2.2	5.0	1.5		器面：灰 5Y5/1，断面：灰白 N8/・灰 N5/	a2	×		1								1									第3面	第3面
軒平瓦173	2827	—	—	1.3	3.7	2.5	5.7	1.4		器面：灰 7.5Y4/1，断面：灰白 N8/・灰 N6/	a1?	×		1			1														第1面	—
軒平瓦174	2828	—	—	(0.7)	3.6	1.9	5.4	1.3		器面：にぶい黄橙 10YR7/3，断面：灰白 2.5Y8/2・灰 5Y6/1	a2	×		3						1										2	Ⅱ層	第3面
軒平瓦175	2829	—	—	0.7	4.2	2.9	1.8	1.8	マーブル状	器面：灰黄 2.5Y6/1，断面：灰白 2.5Y7/1	a2	×		1					1												第2面	（第6面）
軒平瓦176	2830	—	—	0.9	3.4	1.9	—	1.5		器面：灰 N4/，断面：灰 N6/	a1?	C		1													1				第6面	第6面
軒平瓦177	2831	—	—	—	3.8	2.0	—	—		器面：灰 N6/，断面：灰 N6/	—	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦178	2832	—	—	0.8	3.2	2.0	3.7	1.3		器面：黄灰 2.5Y5/1，断面：にぶい黄橙 10YR7/2	a2?	×		1			1														第1面	（第5面）
軒平瓦179	2833	—	—	(1.5)	3.5	2.2	4.8	1.4		器面：灰 5Y7/1，断面：灰白 7.5Y8/1・灰 7.5Y5/1	a2	×		2						1		1									第3面	—
軒平瓦180	2834	—	—	1.6	3.5	2.0	—	1.3	マーブル状	器面：灰 N4/，断面：灰 N7/	a2	×		1	1																—	（第6面）
軒平瓦181	2835	—	—	0.8	3.5	2.2	4.8	1.6		器面：灰 N4/，断面：灰白 N8/・灰 N5/	a2	×		1													1				第6面	第6面
軒平瓦182	2942	(20.8)	(20.0)	1.3	3.2	2.2	5.0	1.2		器面：暗灰黄 2.5Y4/2，断面：黄灰 2.5Y6/1	a2	×		1								1									第3面	（第6面）
軒平瓦183	2943	(23.2)	(21.6)	1.5	3.7	2.5	5.5	1.1		器面：灰 7.5Y4/1，断面：灰白 N8/・灰 7.5Y4/1	a2?	×		1	1																—	（第5面）
軒平瓦184	2944	(23.4)	(22.8)	(1.5)	3.2	1.9	3.3	1.3		器面：5Y6/1，断面：灰白 2.5Y8/1	a2?	×		1											1						第5面	（第6面）
軒平瓦185	2945	(21.4)	(21.7)	(1.3)	—	—	4.1	1.4		器面：黄灰 2.5Y4/1，断面：灰白 2.5Y8/1・黄灰 2.5Y5/1	a2?	×		1											1						第5面	（第6面）
軒平瓦186	2946	—	—	—	3.5	1.9	—	—		器面：灰黄 2.5Y7/2，断面：灰白 5Y8/1・灰 5Y6/1	a2?	×		1						1											Ⅱ層	（第3面）
軒平瓦187	2947	—	—	—	3.2	2.2	—	1.4		器面：灰黄 2.5Y7/2，断面：灰白 5Y7/1	a2?	×		1						1											Ⅱ層	第3面
軒平瓦188	2948	—	—	—	3.6	2.2	—	—		器面：灰 5Y4/1，断面：灰白 2.5Y8/1・灰 5Y4/1	a2?	×		1	1																—	—
軒平瓦189	2949	—	—	—	—	—	5.0	1.4		器面：灰 N4/，断面：灰白 5Y8/1	b	×		1																1	—	第1面
軒平瓦190	2950	—	—	—	—	—	—	1.0		器面：灰 5Y5/1，断面：灰 5Y5/1・灰白 5Y8/1	a2?	(A)		1		1															第1･2面	（第6面）
軒平瓦191	2951	—	—	—	—	—	5.0	—		器面：暗灰 N3/，断面：灰白 N8/	b	×		1	1																—	第1面

第12表　軒瓦観察表（10）

分類番号	報文番号	軒平部								小丸部					胎土の特徴	色調	剥離材	上角面取り	小丸面取り	出土層位															最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚	同笵関係	瓦当径	周縁幅	文様区径	巴径	巴の巻き						全点数	撹乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
軒桟瓦 1	2836	(22.4)cm	(18.0)cm	1.0cm	3.55cm	2.0cm	4.4cm	1.4cm	軒平瓦66	―cm	―cm	―cm	―cm	―		器面：灰5Y4/1・暗灰N3/，断面：灰N5/	a2	×	×	1	1															―	（第3面）
軒桟瓦 2	2837	―	―	―	3.7	2.2	4.7	1.4		(6.0)	1.2	3.2	2.8	L		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	C	×	3					3										第2面	第2面
軒桟瓦 3	2838	―	7.7	―	3.7	2.2	1.4	1.6	軒平瓦145	―	―	―	―	―		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	×	×	1															1	―	（第1面）
軒桟瓦 4	2839	25.6	21.1	2.4	4.6	2.4	4.5	1.7		(6.4)	1.0	4.1	3.6	L		器面：灰N4/，断面：灰白N8/	b	C	○	2			1												1	第1面	第1面
軒桟瓦 5	2840・2841	(22.0)	20.0	(1.9)	4.1	1.9	4.4	1.6	軒平瓦153	5.6	0.9	3.5	2.9	L		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰白N7/	b	C	×	3			3													第1面	第1面
軒桟瓦 6	2842	―	―	―	4.9	2.6	6.5	1.8		(6.8)	1.3	4.0	(3.5)	L		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y8/1	b	C	○	1															1	―	（第1面）
軒桟瓦 7	2843	―	―	―	4.9	2.6	5.0	1.6		―	―	―	―	―		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	C	×	1															1	―	（第1面）
軒桟瓦 8	2844	25.4	11.8	4.5	(5.7)	3.3	5.5	1.7		9.4	1.5	6.1	3.2	L		器面：暗灰N3/・灰白5Y7/1，断面：灰5Y7/1	b	C	○	1						(1)										（Ⅱ層）	（第2面～）
軒桟瓦 9	2845	―	―	―	―	―	―	―		6.2	1.0	4.5	2.4	L		器面：灰N5/，断面：灰白5Y8/1	b	―	○	1															1	―	（第2面～）
軒桟瓦 10	2846	―	―	―	―	―	―	―		6.9	1.2	4.0	3.7	L		器面：灰N4/，断面：灰白5Y7/	b	―	○	1															1	―	
軒桟瓦 11	2847	―	―	―	―	―	―	―		5.7	0.9	3.9	3.5	L		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y8/1	b	―	×	1			1													第1面	
軒桟瓦 12	2848	―	―	―	―	―	―	―		5.9	0.8	4.9	3.6	L		器面：灰N5/・灰白2.5Y7/1，断面：灰白5Y8/1	b	―	×	1			1													第1面	
軒桟瓦 13	2849	―	―	―	―	―	―	―		6.2	1.0	4.2	3.7	L		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	―	○	1															1	―	
軒桟瓦 14	2850	―	―	―	―	―	―	―		5.8	0.8	4.2	3.8	L		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1・灰白N7/	b	―	×	1						1										Ⅱ層	
軒桟瓦 15	2851	―	―	―	―	―	―	―		6.0	0.9	3.8	3.5	L		器面：灰白5Y7/1・灰N5/，断面：灰白5Y7/1	b	―	×	1															1	―	
軒桟瓦 16	2852	―	―	―	―	―	―	―		5.6	0.8	3.7	3.2	L		器面：灰N4/，断面：灰白N8/・灰白N6/	b	―	×	1						1										Ⅱ層	
軒桟瓦 17	2853	―	―	―	―	―	―	―		6.4	1.0	3.8	3.2	L		器面：灰N4/，断面：灰N8/	b	―	×	6			6													第1面	第1面
軒桟瓦 18	2854	―	―	―	―	―	4.0	1.4		5.8	0.8	4.0	3.4	L		器面：灰N4/・灰白5Y7/1，断面：灰N8/・灰N6/	b	C	×	1															1	―	（第1面）
軒桟瓦 19	2855	―	―	―	―	―	―	―		7.1	1.5	4.4	4.0	L		器面：灰N4/，断面：灰白5Y8/1	b	―	○	1			1													第1面	第1面
軒桟瓦 20	2856	―	―	―	―	―	6.1	―		8.0	1.5	4.8	4.4	L		器面：黄灰2.5Y5/，断面：灰白2.5Y8/1	b	C	○	2	1					1										Ⅱ層	（第1面）
軒桟瓦 21	2857	―	―	―	―	―	―	―		6.2	1.1	3.8	3.2	R		器面：灰5Y4/1・黄灰2.5Y6/1，断面：灰N6/・灰白5Y8/1	b	―	×	2		1			1											第2面	
軒桟瓦 22	2858	―	―	―	―	―	―	―		6.7	1.2	4.4	4.2	R		器面：灰N4/，断面：灰白2.5Y8/2	b	―	×	1			1													第1面	第1面
軒桟瓦 23	2859	―	―	―	―	―	―	―		7.0	1.7	3.3	―	―		器面：灰N4/，断面：灰白N8/・灰白N7/	b	―	○	1	1															―	（第1面～）
軒桟瓦 24	2860	―	―	―	―	―	―	―		2.6	2.7	3.3	―	―		器面：暗灰N3/，断面：灰白N8/	b	―	○	1	1															―	（第1面～）
軒桟瓦 25	2861	―	―	―	―	―	―	―		10.0	2.9	3.8	―	―		器面：暗灰N3/，断面：灰白2.5Y8/1	b	―	○	1													(1)			―	（第1面～）
軒桟瓦 26	2862	(25.0)	(25.8)	2.6	4.4	2.8	6.0	1.5		7.5	1.5	4.6	4.1	L		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y7/1	b	×	○	3	3															―	（第1面～）
軒桟瓦 27	2863	―	―	―	―	―	―	―		8.1	1.5	5.0	4.4	L		器面：暗灰N3/，断面：灰白5Y7/1	b	―	○	1									1							第5面	（第1面）
軒桟瓦 28	2864	―	―	―	―	―	―	―		7.5	―	―	―	―		器面：暗灰N3/，断面：灰白N8/	b	―	×	1						1										Ⅱ層	（第1面～）
軒桟瓦 29	2952	―	―	―	3.1	2.7	―	1.6		―	1.0	―	―	―		器面：灰N4/・灰白2.5Y8/2，断面：灰白5Y8/1・灰白N7/	b	×	×	1	1															―	（第2面）

分類番号	報文番号	軒平部							小丸部				胎土の特徴	色調	剥離材	上角面取り	小丸面取り	出土層位																	最古層位	帰属層位
		上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当高	文様区高	側区片幅	平瓦厚	瓦当径	周縁幅	文様区径	花弁数						全点数	撹乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明		
土塀瓦 1	2865	(25.0)cm	(23.6)cm	―cm	3.9cm	2.8cm	5.7cm	1.7cm	―cm	―cm	―cm	―弁		器面：暗灰N3/，断面：灰白N8/・灰白N7/	b	C	―	3	1		1		1													第2面	第2面
土塀瓦 2	2866	(23.0)	(22.4)	―	4.0	2.5	4.6	1.8	―	―	―	―		器面：灰N6/，断面：灰白N8/	b	―	―	1			1															第1面	第1面
土塀瓦 3	2867	―	―	―	―	―	―	―	5.8	1.0	3.6	16		器面：灰5Y8/1，断面：灰白5Y8/1	b	―	×	1					1													第2面	第2面
土塀瓦 4	2868	―	―	―	―	―	―	―	6.0	1.2	3.6	15		器面：灰5Y6/1，断面：灰白5Y8/1	b	―	○	1					1													第2面	第2面

第13表　軒瓦観察表（11）

種別（笵）	報文番号	法量 瓦当径	法量 文様区径	法量 花弁数	胎土の特徴	色調	剥離材	全点数	出土層位 揺乱	第1・2面	第1面	Ⅰ層	第2面	Ⅱ層	第3・4面	第3面	Ⅲ層	第4面	Ⅳ層	第5面	Ⅴ層	第6面	その他	不明	最古層位	帰属層位
菊丸瓦 1	2869	10.1cm	8.0cm	16 弁		器面：灰 N4/・灰白 2.5Y7/1, 断面：灰白 N8/	a2	10		1	2			2		2		1		1				1	第 5 面	第 5 面
菊丸瓦 2	2870	9.2	7.0	16		器面：灰白 N7/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 N5/	a2 ？	4	1					2		1									第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 3	2871	9.9	6.5	16		器面：灰白 5Y7/1・灰 N6/, 断面：灰黄 2.5Y7/2・灰 N5/	a2	6						3		1								2	第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 4	2872	8.9	6.2	16		器面：灰 5Y6/1・灰 7.5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1・灰 5Y6/1	a1	9	3		6															第 1 面	（第 3 面）
菊丸瓦 5	2873	9.7	6.4	13		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N8/・灰 N6/	a2	10		1			1			3		1	1					3	Ⅳ層	（第 4 面）
菊丸瓦 6	2874	9.9	6.8	13		器面：橙 7.5YR7/6・灰 N6/, 断面：灰 N6/ 浅黄橙 7.5YR8/6・橙 5Y6/6	a1	9			6		1	2												第 3 面	Ⅱ層	第 3 面
菊丸瓦 7	2875	10.7	6.9	13		器面：明褐 7.5YR5/6・橙 7.5YR6/6, 断面：橙 7.5YR6/6	a1	6					6													第 2 面	（第 3 面）
菊丸瓦 8	2876	11.5	7.2	13		にぶい黄橙 10YR7/4・橙 5YR7/6, 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	a1	3					3													第 2 面	（第 3 面）
菊丸瓦 9	2877	9.5	6.8	12		器面：灰 N6/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/2	a2	7	2					3		2									第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 10	2878	8.1	6.4	12		器面色・断面色：にぶい黄橙 10YR7/4	a2	1								1									第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 11	2879	9.3	6.6	12		器面：灰 N4/, 断面：灰白 N5/・灰白 N8/	b	4			3			1											Ⅱ層	（第 1 面）
菊丸瓦 12	2880	9.6	5.7	11		器面：灰 N4/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y7/1	b	3					2	1											Ⅱ層	（第 2 面）
菊丸瓦 13	2881	8.6	6.4	10		器面：暗灰 N3/・灰 7.5Y6/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	3	1													1		1	第 6 面	（第 2 面～）
菊丸瓦 14	2882	9.6	(5.2)	16		器面：灰黄 2.5Y7/2・浅黄 2.5Y7/3, 断面：灰黄 2.5Y7/2	a2	1					1													第 2 面	—
菊丸瓦 15	2883	10.8	7.3	13		器面：灰白 7.5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	a ？	2						1		1									第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 16	2884	8.7	5.8	16		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 10Y8/1	b	8			2		5	1											Ⅱ層	（第 2 面）
菊丸瓦 17	2885	9.0	6.2	13		器面：にぶい黄橙 10YR7/4・浅黄橙 7.5YR8/6, 断面：浅黄橙 7.5YR8/3	b	1			1															第 1 面	（～第 1 面）
菊丸瓦 18	2886	10.2	7.1	12		器面：灰 5Y4/1, 断面：灰白 5Y8/1	a1	10	1					2		1		1		(2)			表土層 1，Ⅰ・Ⅱ層	1	（第 5 面）	（第 5 面）
菊丸瓦 19	2887	9.5	6.5	12		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y7/1	b	1																1	—	—
菊丸瓦 20	2888	10.0	6.9	12		器面：灰 N5/・灰白 N7/, 断面：灰白 N8/	b	11	2		9														第 1 面	第 1 面
菊丸瓦 21	2889	9.0	7.2	12		器面：にぶい黄橙 10YR7/3・灰黄 2.5Y7/2, 断面：浅黄橙 10YR8/3	b	2	1		1															第 1 面	第 1 面
菊丸瓦 22	2890	8.9	5.8	12		器面：灰 5Y4/1・灰黄 2.5Y7/2, 断面：灰白 5Y8/1	b	7	2		5														第 1 面	第 1 面
菊丸瓦 23	2891	8.9	6.0	12		器面：灰白 2.5Y8/1・にぶい黄橙 10YR8/4, 断面：灰白 5Y8/1	b	5	1	2	2														1	第 1 面	第 1 面
菊丸瓦 24	2892	9.0	6.3	12		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	b	1	1																	—	（第 1 面）
菊丸瓦 25	2893	8.8	6.6	12		器面：灰 5Y4/1・灰 N4/, 断面：灰白 2.5Y8/1	b	1			1															第 1 面	（第 1 面）
菊丸瓦 26	2894	8.8	5.9	11		器面：灰 N5/, 断面：灰白 N5/・灰白 N8/	a1	4	2					2												Ⅱ層	第 3 面
菊丸瓦 27	2895	9.2	(6.0)	11		器面：灰黄 2.5Y4/1, 断面：にぶい黄橙 10YR7/2・灰 N5/	a2	4		1	2		1													第 2 面	（第 3 面）
菊丸瓦 28	2896	8.0	5.2	11		器面：灰 N5/・灰白 N7/, 断面：灰白 N8/・灰 N5/	b	1																1	—	（第 1 面）
菊丸瓦 29	2897	8.4	6.0	8		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	1						1												Ⅱ層	（第 1 面）
菊丸瓦 30	2898	9.0	6.6	16		器面：灰 N5/・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 N8/	b	6	1					3					1				表土層 1		Ⅳ層	（第 2 面～）
菊丸瓦 31	2899	8.1	6.2	12		器面：暗灰 N3/, 断面：灰白 7.5Y8/1	a2	4	2	1				1											Ⅱ層	第 3 面
菊丸瓦 32	2900	9.4	6.4	12		器面：明黄褐 10YR7/6・黄灰 2.5Y6/1, 断面：黄灰 2.5Y6/1	a2	3	1	1				1											Ⅱ層	第 3 面
菊丸瓦 33	2901	8.4	6.4	16		器面：灰 5Y5/1・灰白 5Y7/1, 断面：灰白 5Y8/1	a2	4	1		1			1										1	Ⅱ層	第 3 面
菊丸瓦 34	2902	8.2	8.1	16		器面：にぶい黄橙 10YR7/2・灰 N5/, 断面：灰白 5Y8/1	b	5	1		4														第 1 面	第 1 面
菊丸瓦 35	2903	9.0	9.0	12		器面：灰 N4/, 断面：灰白 5Y8/1	b	1	1																—	（第 1 面）
菊丸瓦 36	2904	8.3	5.8	—		器面：灰 5Y5/1, 断面：灰白 5Y8/1	a2	4						2		2									第 3 面	第 3 面
菊丸瓦 37	2905	6.0	4.0	12		器面：灰 N4/, 断面：灰白 2.5Y7/1	b	1						(1)											（Ⅱ層）	（第 1 面）

第 14 表　軒瓦観察表（12）

第３節　木製品

1. 第１面出土木製品

SXb01（図版 284）　3000 はⅣ層より出土した。長さ 7.5cm・残存幅 2.4cm・厚さ 0.7cm を測る板材に墨書された木簡である。右半部が欠損しているが、右側破断部の上端に直径 0.6cm の穴があるため、ほぼ中央部で縦方向に割れているものと思われる。表面には、中央に４文字書かれているが、判読不能である。裏面には２行の墨書がみられ、「二十二（六カ）年二月六日宣告／重禁錮」と読める。

裏面の内容からすると、表面中央に書かれた４文字は囚人名である可能性が考えられる。また上半部の穴は、この木簡が何かに懸けられる（あるいは吊される）機能を有していたことを窺わせる。囚人に関わる文書には、名籍関係を記した囚人身分帳などがあり、書式の統一は明治 26 年以降とされる（重松 1985）。それ以前は、各県毎に異なった書式を用いていたという。本例は、そのような根本的な台帳文書とは異なり、『監獄則図式』にも同様の木札は描かれていないが、囚人を識別する必要から、監獄内で用いられた木札（認識標などか）と考えられる。

SXb02（図版 284）　SXb02 のｂ断面第６層から木片・削り屑などとともに出土した。

3001 ～ 3006 は木簡である。3001 は、残存長 8.6cm・幅 3.1cm・厚さ 0.8cm を測る板材である。中央上端に直径 0.3cm の穴が開けられる。表裏両面には、同じ字体で「第五」と書かれた墨書がある。

3002 は、残存長 10.9cm・幅 3.2cm・厚さ 0.4cm を測る板材で、上側が欠損する。下端は先細りになり、先端部の幅は 0.7cm である。表面には「同橋本清行（カ）」と墨書される。

3003 は、長さ 15.2cm・幅 2.7cm・厚さ 0.4cm の板材である。左側上端が僅かに欠損する。表面には「白米四斗／みまや／太助」、裏面には「十二月廿九日」と書かれる。

3004 は、長さ 15.1cm・幅 2.4cm・厚さ 0.5cm の板材である。表面には「白米四斗／萩之津（カ）／廣助」、裏面には「十二月廿六日」と書かれる 3003・3004 ともによく似た大きさの板材を用い、書式が共通している。また白米の分量も４斗と同じであり、定型的な規格・書式をもつ荷札であると思われるが、具体的な用途については不明である。

3005 は、長さ 22.7cm・残存幅 4.5cm・厚さ 1.2cm の板材であり、右半部が欠損する。表面には「吉原錬造明治廿（十カ）六年／七月□□」、裏面には判読不能の大きな文字が２文字、書かれている。「吉原錬造明治廿六年」の行は墨で塗り潰されている。囚人に関する木札の可能性がある。

3006 は、長さ 37.1cm・幅 2.9cm・厚さ 2.3cm の方柱状の形態を呈する。上端部は表面の損傷が著しく、機能時の状況を反映するとも考えられる。表面には「□□西（カ）通町東ヨリ三間目」、左側面には「□□□　□□中」、右側面には「□□　□□□□□」（判読不能）、裏面には「□郡ヨリ三木郡迄（カ）四里三拾町」と書かれている。道標もしくは商標的な性格をもつものであろうか。

3007 は、３面に木釘が打ち込まれた、用途不明の板材である。「新器」銘の焼き印が捺される。

2. 第３面出土木製品

SKb88（図版 284・285）　排泄物が土壌化したとみられる下層（第 10 層）より、ウリ科種子とともに出土した。

3008 は、用途不明の加工板材である。３辺は直線的に延びるが下側が弧状に湾曲し、その中央部に台形状の抉りを伴う。出土状況から便所に関連する部材とも考えられるが、類例に乏しい。

3009 ～ 3047 は、籌木とみられる棒状木製品である。当該調査区出土の棒状木製品は、次の３種に大別できる。すなわち、①断面円形ないし多角形で、両端を先細りに尖らせるａ類、②断面円形ないし多角形で、両端を尖らせないｂ類、③断面方形ないし長方形で、両端を尖らせないｃ類、の３者である。SKb88 出土の棒状木製品は全てｃ類であり、先端部への加工が認められない。また法量的には 21.7cm 前後に集中しており、あたかも１枚の板から分割・裁断したようである。第 10 層より出土したこと、また木製供膳具が全く共伴しなかったこと、さらに他地域での類例から、籌木と捉えておくのが妥当であろう。

3. 第６面出土木製品

SKb152・SXb14（図版 286・287）　木製品は、土器・陶磁器とは別に取り上げ作業を行ったが、その際に遺構名の記載間違いなどで取り上げ単位に混乱が生じてしまった。各資料の出土遺構・層位は、明らかな記載間違いを訂正して観察表に示したが、上記事情からここではまとめて図示したい。

3048 は、SXb14 －⑭（便槽か）から出土した。長さ 7.0cm・幅 1.5cm・厚さ 0.2cm の板材であり、表面には

「彦右衛門」、裏面には「□□」（文字不明）の墨書が認められる。表面の文字の位置からみて、当初はもう少し幅のある板であったと考えられ、縦方向に半裁されていることが窺える。簀木に転用されたのかもしれない。

3049は板状製品の折損品である。折損前の片面には赤漆が塗布されている。

3050～3055は漆器椀である。3050は外反する口縁部と外側に踏ん張る短い高台をもつ、やや浅手の器体である。内外面ともに赤漆が塗布され、器面は硬質に仕上がっている。3051は内弯する体部と直立気味の口縁部をもつ、深手の器体である。高台高は低く、高台内側の削り込みは浅い。内外面には赤漆が塗布されており、体部外面には家紋様の圏線に囲まれた花文が石黄で描かれる。3052は強く内弯して張った腰（体部下半）と、直立する口縁部をもち、高い高台は内側の削り込みも深く細身である。外面は黒漆、内面は赤漆を塗布しており、外面に圏線で囲まれた花文が描かれる。3053は、浅手で湾曲が弱く外傾する口縁部をもつ。3054は腰の湾曲が強く、高く「ハ」の字形に踏ん張る高台をもつ。体部外面下半に、圏線で囲まれた花状の文様が描かれる。3055は、内外面に赤漆が塗布され、外面に鶴と裏白が交互に描かれている。

3056は、漆器皿ないし椀蓋である。内外面には赤漆が塗布されており、高台内側に「A°」状の墨書がみられる。

3057は、折敷と考えられる。外面に黒漆、内面に赤漆を塗布しており、側縁には木釘用とみられる小孔が連続する。外面には細かな擦痕が認められ、使用痕の可能性がある。

3058は、刷毛と考えられる。羽子板形を呈しており、図示した上側が欠損する。側縁には数段の抉りが施される。片面（図示した左面）に赤漆が塗布されるが、先端部（下端）には漆のみられない部分が帯状に認められる。また下面には黒色の塗料（黒漆か）が付着する。

3059～3075は、棒状木製品である。既述の分類によると3059がａ類、3060・3061がｂ類、3062～3075がｃ類である。3059は両端が先細りで断面円形に近く、幅広い中央部も断面は円形に近く仕上げられている。両口箸とみてよいであろう。3060・3061は両端と中央部の径がほぼ同じで、断面がやや不整形な多角形を呈する。寸胴箸の可能性があろう。3061は、若干両端が細くなる。3062は片端（図示した下側）が幅広で整形が粗く、また炭化している。3064～3066・3068・3069・3074は、断面方形の各辺が粗く裁断されている。3075は片端が尖るものの、特に先端部の加工を行ってはいない。あるいは片口箸か。以上のように、ａ類・ｂ類については箸の可能性が考えられるが、他の大多数を占めるｃ類は簀木の可能性もある。ただし、第３面SXb88出土のｃ類棒状木製品とは異なり、遺構単位での法量的まとまりは認められず、簀木と積極的に判断する材料にも乏しい。むしろ漆器椀・皿がまとまって出土している状況から、箸である可能性も否定できないであろう。

3076は、一本造りで独立した２本の歯をもつ、「連歯下駄」で、西山分類（西山1996）のⅠ－１ａ類に該当する。後歯と後歯後面は、斜め方向に摩滅している。また台表の鼻緒周辺は、足指の形に摩滅して窪んでおり、その形から主に左足用として用いられた可能性が考えられる。

3077は、節を除去した竹の先端切り口を面取りし、側面を１箇所穿孔する。笛と考えられる。

3078は用途不明の木製品である。細長い板の片端が段違いに削られ、また等間隔に木釘用とみられる小孔を伴う。3079も用途不明木製品で、細長い板の片端が断面円形の把手状に削り出され、反対の片端に浅い抉りと小孔がみられる。

3080は、曲物の側板である。側板を綴じ合わせる桜の樹皮が遺存する。

3081は、用途不明の木製品である。断面を不整形な多角形に加工した中央部と、その両端に削り出された断面長方形のほぞ状の突起からなる。

SKb171（図版287）　3082は連歯下駄で、西山分類のⅠ－１ａ類にあたる。前歯・後歯・後歯後面は顕著に摩滅しており、特に後歯後面は薄く先端が尖ったようになっている。台表には足形に窪んだ箇所があり、主に左足用であったと考えられる。

SKb178（図版288）　SKb178の第４層からまとまって出土した。共伴土器・陶磁器は様相３である。3083～3085は漆器椀である。3083は口縁部が欠損するが、器高の低い形態になると考えられる。高台は低く、内側の抉り込みも浅い。内面は赤漆、外面には黒漆が塗布される。3084は腰部が張る深手な形態であるが、腰の張りは一定度変形によるとみられる。本来は3085のような形態と考えられる。ともに高台が高く、内側の抉りはやや深い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

3086は、木栓である。先端が欠損するが、細長い円錐形を呈する。上端は多角形に加工されており、円孔が開けられる。

SKb192（図版288・289）　SKb192下層から出土した。共伴土器・陶磁器は様相1である。3087は櫛である。棟がやや緩い半円形を呈しており、歯は密である。

3088は羽子板と考えられる。やや幅広の柄をもつ点が通例の羽子板とは異なるが、柄基部側面に2段の抉りが入れられることは共通している。また側面は、ほぼ全体にわたり面取りが施される。全面に赤漆が塗布されるが、柄の先端部と本体の先端には漆の塗布されない部分があり、それに対応するように小孔が認められる。さらに本体は両面とも中央から先端にかけて、直径5 mm程度の敲打痕状の浅い窪みが多数認められる。使用痕（羽根の当たった痕跡）か。

3089・3090は、連歯下駄である。3089は長円形で前後端が直線的（隅丸長方形）な平面形態をもつことから、西山分類のⅠ－2ｃ類にあたる。欠損が著しいため、歯などの磨滅状況は明確でない。3090は西山分類のⅠ－1ａ類にあたる。後端部の両端は直線的に面取りされる。前歯は欠損するが、後歯と後歯後面先端の摩滅は明瞭である。台表には、足の痕跡とみられる窪みが認められ、おそらく右足用であったと考えられる。

3091～3102は、漆器椀である。3091～3095は、浅手の器体と直立する細身で短い高台をもつものである。このうち3092・3093は器壁が薄く、腰部の屈曲が弱く外傾気味に立ち上がることから、皿の可能性もある。内面には赤漆、外面には黒漆が塗布される。3091・3094・3095は腰部がやや角張るように強く張っており、口縁部は直立する。内面赤漆、外面黒漆が塗布されており、3094外面には草文、3095外面には草花文(？)が描かれる。3096は深手の器体をもつが、高台が低く、高台内の抉りも浅い。3097は口縁部の傾きから浅手の器体とみられるが、高台が高く高台内の抉りも深いものである。3098は器体も深手で、高台が高く高台内の抉りもやや深いものである。3099も同様であろう。3100は高台が高く、高台内の抉りも深い。内面赤漆、外面黒漆が塗布されており、外面には草文が描かれる。

3103は、漆器皿ないし椀蓋である。器壁は極めて薄い。内面赤漆、外面黒漆が塗布され、外面には草文と扇が描かれる。

SKb209（図版289）　3104・3105は漆器椀である。3104はやや浅い器体をもち、高台内の抉りは比較的浅い。内面赤漆、外面黒漆である。3105は浅手で高台の低い形態とみられ、内外面赤漆が塗布され、外面には黒漆で文様が描かれる。おそらく3055と同様の形態・文様と考えられる。

SKb208（図版289）　3106は漆器椀である。高台が高く、高台内の抉りは比較的浅い。

SKb227（図版289）　3107は、刳り下駄である。前歯中央に三角形の抉りがあり、西山分類のⅡ－1ｂ類に近いが、前歯前面が作出され台部との一体化傾向が希薄なことから、Ⅰ－1類に近い形態ともいえる。後歯には鉄釘が2本打ち込まれている。台表の足の痕跡から、右足に多用されたと考えられる。3108は西山分類Ⅰ－1ａ類の連歯下駄である。後歯と後歯後端は摩滅し、鼻緒周辺には足指の痕跡を示す窪みが認められる。

SKb229（図版290・291）　3109・3110は木簡である。3109は、長さ6.8cm・幅2.0cm・厚さ0.4cmの板材であり、片面に「武右衛門」の墨書がある。3110は、長さ12.0cm・幅4.0cm・厚さ0.5cmの板材であり、上端両側に抉り込みがある。墨書は、表面が「□□／愛染王急(カ)□□□／□□□□」、裏面が「せと」である。呪符木簡か。

3111～3113は、漆器椀である。3111は直立する深手の器体と高い高台をもつ。高台内の抉りはやや浅い。内面赤漆、外面黒漆が塗布される。3112は、3111よりも腰が張り、高い高台の内側は抉りが深い。内外面に赤漆が塗布され、外面に圏線に囲まれた巴状の花文が黒漆で描かれる。3113は、浅手の椀ないし椀蓋である。外面に圏線に囲まれた藤の花が描かれる。

3114～3126は、棒状木製品である。ｃ類（3114～3120）、ｂ類（3121～3125）、ａ類（3126）がある。ｂ・ｃ類はともに整形は粗く、ｃ類は全長24.0cm前後、ｂ類は26.0cm前後が多い。3126は両端が細く、先端に限定される面取り的な加工がみられるため、ａ類とした。とりあえずａ類は両口箸と推測できるが、ｂ・ｃ類は寸胴箸なのか箒木なのかについては、判断が困難である。

3127・3128は連歯下駄で、西山分類のⅠ－1ａ類である。ともに鼻緒周辺に足指による窪みが認められる。

3129は、人形頭部である。頭部や顔面には粗い加工痕が認められ、目・鼻・口の表現も粗雑である。頸部下端と後頭部に穿孔が認められる。

3130・3131は、曲物の底板である。

3132・3133は、用途不明の木製品である。平面台形を呈する本体の上辺中央に把手（柄）状の突起が伴う。本体下底面と把手上面は顕著に潰れており、使用方法を示唆する。

3134は、天地逆転して図示しているが独楽である。円錐形を呈しており、上面（図示した下側）には擂鉢状に抉りが入る。全体に縦方向の細かな整形痕が認め

られる点が特徴的である。

SKb250（図版291） 3135は刀形（竹光）である。刃部と柄が一本造りされており、鎬は反り返らずに直線的に延びる。刃部は、黒漆で塗り潰されて表現される。また刃部と柄との境には、黒漆の塗布が帯状に途切れることから、鍔が装着されていたと考えられる。柄部は、刃部より厚く削り出される。

SKb214（図版291） 3136はSKb214付近のトレンチから出土したもので、詳細な出土状況は不明である。長さ8.4ｍ・幅2.3ｍ・厚さ0.3cmの板材であり、上端中央に径0.2cmの穴がある。表面には「山田郡坂本／□□四（カ）人（カ）」、裏面には「升（カ）取□入」と書かれている。裏面の墨書が意味不明なため、表面の文意も明確ではないが、あるいは山田郡坂本（郷）から労働力を徴発したことを示すか。なお生駒期に山田郡坂本に知行地をもつ家臣のうち、当該地に近い場所に屋敷をもつ人物には、西嶋八兵衛がいる。

SKb255（図版291・292） 中層（3137・3140・3142・3143・3144～3147）、下層（3138）、最下層（3139・3141・3148）から出土した。

3137は、木簡である。長さ42.6cm・上端幅5.5cm・下端幅3.3cm・厚さ0.5cmを測る板材である。左側面下半を若干欠損するものの、ほぼ完形に遺存しているといえる。表裏両面に墨書が認められ、記載内容からみて表面は上下２段に分けて読むのが妥当であると考えられる。表面上段の墨書は「元和拾年三月六日出候舟ニ集候木ノ覚／一 七拾九荷内四拾荷 勘解由様へ上り／一 弐荷大工紀市ニ上遣候合四拾弐荷」とある。また表面下段の墨書は「同 一 とほまつ四荷半内弐荷半勘解由様へ上り／残而弐荷有／三月拾日ニ舟つき申候」と読める。裏面は「残而三拾七荷有来」とある。墨書の字体をみると、表面上段・同下段・裏面の３箇所にみられる「弐」「四」「荷」などの筆跡はよく似ており、また表面上段・同下段にみられる「勘解由様」の筆跡もよく似ている。したがって、この３箇所の記載が異なるタイミングで書かれたとしても、同一人物による可能性を考えるのが妥当であろう。

記載された語句をみてみる。表面上段１行目の「元和拾年」は西暦1624年にあたるが、２月30日に寛永に改元されている。つまり、木簡にみえる「元和拾年三月六日」は改元後であり、正確には寛永元年３月６日である。上段２行目の「勘解由様」は、西外曲輪に屋敷地を構えていた上坂勘解由のことである。また、表面下段１行目冒頭の「同」は、文脈から上段１行目の「元和拾年三月六日出候舟ニ集候木ノ覚」のことを指すと考えられる。

以上を踏まえて、全文の内容を整理すると、元和10年（寛永元年）３月６日に某所を出航し、３月10日に到着した（おそらく高松に）船に積載された材木の内訳が、以下のように分類・集計できる。

①79荷のうち40荷が上坂勘解由（屋敷）へ、２荷が大工紀市へ渡され、両者の合計が42荷である（表面上段）。差し引いた残りの荷は37荷ある（裏面）。材木の種別は不明。

②「とほまつ」（松材の一種か）４荷半のうち２荷半が上坂勘解由（屋敷）へ渡され、残り２荷がある（表面下段）。

つまりこの木簡の主題は、宛先（売買先か）の決まっていない材木の数量を控えることにあると考えられる。その内容から憶測すれば、荷札は残り荷に添付されていたか、材木の調達主に保管されていたとみるのが妥当であろうから、その最終的な廃棄場所は上坂勘解由屋敷ではなく、残り荷の宛先であると思われる。したがって、この木簡をもって上坂勘解由の屋敷地の範囲を想定することには、慎重であるべきと考える。

3138は、漆器皿である。腰部の器壁は分厚く、口縁部にかけて次第に薄くなる。内面赤漆・外面黒漆で、外面には楓が描かれる。

3139～3142は、漆器椀である。高台が高いが、内側の抉り込みは深く、高台断面が薄手で細身のものである（3140・3141・3142）。

3143は曲物の底板である。3144は連歯下駄で、胴張りの側面と丸味を帯びる前端、直線的に切り落とされた後端をもつことから、西山分類のⅠ－２ｅ類に該当する。前歯・後歯・後端の摩滅が顕著である。3145・3146は用途不明の加工木製品である。3145は斜め方向に抉りが入れられる。3147は木栓である。

3148は、傘の轆轤である。櫛歯状に多数の切り込みのみられる箇所が、傘の骨との接続部に当たる。その上側に突帯が１条削り出される。全体の形状から、握りであると考えられるので、図示した天地は逆である。

SKb252（図版292） 3150はかなり歪んでいるが、漆器椀の一部と考えられる。外面に草文状の文様断片が認められる。3151は漆器椀である。外面に黒漆による施文（文様不明）がみられる。

出土遺構不明（図版292） 取り上げ時とその後の保管時の混乱により、出土遺構が不明になったものを一括して図示した。漆器椀・皿に関しては、８Ｃ区の第６面検出遺構であるとみて大過なく、SXb14ないしSKb

152 出土の可能性があることを付記しておく。

3152 は木簡断片である。文字は２ないし３字認められるが、判読できない。3153 は荷札である。先端を尖らせ、中央部と上端に穿孔がみられ、ほぼ完存している。赤外線カメラで観察したが、墨書は認められなかった。

3154 ～ 3158 は、漆器椀である。3154 ～ 3156 は高い高台と、抉りの深い高台内をもつ。3158 は低い高台と大きく湾曲してよく張った腰部をもつ。外面に花文が描かれる。

3159 は漆器椀である。高台内には刻みによる２文字があるが、判読できない。外面には草文がみられる。

第４節　金属製品・骨角製品・石製品

1. 金属製品（図版 293・294）

銭貨（図版 293）　3160 は１銭銅貨で、大正十□年鋳造である。3161 ～ 3165 は寛永通宝である。3166･3167 は渡来銭で 3166 は天□元宝、3167 は□□元宝である。

煙管（図版 293）　第６面出土のものを図示した。3168･3169 は肩のない、連続的で滑らかに湾曲して火皿に接続する形態をもち、東京・溜池遺跡の分類（伊藤 1996）でⅢ－Ａ類に該当する。3168 は胴に沈線が巡る。3170 は肩付で火皿へ湾曲して繋がる胴をもつⅠ－Ａ類である。

仏花瓶（図版 293）　3171 は銅製の仏花瓶である。口縁部から底部まで滑らかに湾曲する器体をもち、頸部・肩部・体部下半・底部外縁にロクロ挽きの沈線ないし段が認められる。

鈴（図版 293）　3172 は銅製の鈴である。別作りの上半と下半を接合する。

蓋（図版 293）　3173 は銅製の蓋である。外面中央に擬宝珠状のツマミを、口縁部内面にカエリをもつ。

引手（図版 293）　3174 は横長のＣ字形を呈する銅製の引手である。両端に薄い留め具が巻き付けられている。箪笥など家具の引手であろう。3175 は方形の留め具に、環状の鉄製引手が挿入される。

錠前（図版 293）　3176 は鉄製の錠前である。上側に可動式の棒状製品がある。腐食が顕著で鍵穴の存在は明確でない。

金具（図版 293）　3177･3178 は用途不明の金具である。3177 は長方形を呈しており、長辺側が反対方向に折り曲げられており、折り曲げ面に３ないし２箇所の釘穴が認められる。中央部は五陽形に穿孔される。建具の一部か。3178 は円錐台形を呈し、外縁に円孔が巡る。襖の把手か。

灯明具（図版 293）　3179 は灯明台の受皿である。中央部が穿孔され、ここに錐状の金具が取り付けられる。3180 は薄手であるが、吊り灯明皿の可能性が考えられる。3181 は灯芯押さえである。やや幅広で平板な板を環状に巻いており、そこから連続して斜め方向に摘みが延びる。

卸金（図版 294）　3182 は銅製の卸金である。羽子板形を呈しており、把手先端は花弁状に膨らみ中央に三角形の孔が認められる。卸金本体には小突起による目が規則的に並び、使用痕とみられる縦方向の擦痕が認められる。

杓子（図版 294）　3183・3184 は銅製の杓子である。3183 は六角形の孔が規則的に 19 個配されており、柄は先端が細くなる。木製などの柄が装着されていた可能性もある。3184 は断面方形に加工された中空の柄をもつ。

匙（図版 294）　3185 は銅製の匙である。本体部は尖った先端をもち、別作りの柄に接合される。柄は断面円形で木芯を伴う。

留具（図版 294）　3186 はボタン状の銅製留具である。円筒形を呈し、花文が彫られる。

小柄（図版 294）　3187 は銅製の小柄である。刀身は遺存していない。片面に組紐文状の透かしが認められる。

簪（図版 294）　3188 は二股の脚をもつ銅製の簪である。ガラス製（？）の玉飾りが装着される。3189 は脚が１本の鉄製簪である。脚断面は方形で先端が明瞭に尖る。

2. 骨角製品（図版 294）

3190 は用途不明品である。方柱状の形態で各面に円孔が施される。図示した左側面では、界線で区画さ

れた内側にそれぞれ２個・６個・５個の小孔がみられる。

3191は簪か。

3. 石製品（図版295）

火打石　3192・3193は石英製の火打石である。3192は２側縁の潰れが顕著で、大きさも小振りな消耗の進んだものである。

碁石　3194はやや不整形であるが、円盤状の形態を呈することから碁石とみられる。

砥石　当該調査区では、砥石の出土量は少なかった。3195・3196は流紋岩製の砥石である。3195は台形で分厚い形態をもつ。円孔が認められるため、持砥と考えられる。3196は板状の薄い製品である。

石錘　3197は砂岩製の亜円礫の側面に溝を作り出しており、錘と考えられる。溝の付されない１側面には敲打痕が認められる。

石臼　3198～3200は花崗岩製の茶臼である。3198は上臼で側面に雲形の文様が浮き彫りされる。下面の臼の目は８分割である。3199は下臼で外縁上面には唐草状の文様が浮き彫りされる。3200は凝灰角礫岩製の臼で、幅広で粗雑な臼の目が彫り直されている。

用途不明品　3201・3202は凝灰角礫岩製で断面Ｌ字形に加工された板状製品である。縁石などの建築部材と考えられる。

第５章　自然科学的調査の成果

第１節　高松城跡における便所遺構の環境考古学分析

金原正明（奈良教育大学）

1. はじめに

便所遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示す。これらの特徴から他の堆積物と区別することができ、便所遺構を識別することができる。また、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることも可能である。高松城跡では、SKb88（7層、8層、9層）とSKb249の堆積物の寄生虫卵、花粉分析、種実同定を行い検討する。

なお、各分析は金原正子（古環境研究所）の助力と教示を願った。

2. 試料

試料はSKb88（18世紀中葉から後葉）およびSKb249（17世紀前半から中頃）より採取された堆積物４点である。SKb88は花崗岩を主体とした割石を積んだ長方形プランの土坑である。埋め戻し時の堆積と考えられる砂層の下位に黒色の粘土層が認められ、この粘土層７～９層の堆積物を分析の対象とした。７層は暗黒色粘質土（きめ細かな土質）、８層は暗灰黒色粗砂、９層は暗黒灰色粘土（きめ細かで粘質極めて強い）である。また、SKb249は直径1.5mを測る平面円形の素掘り土坑であり、埋土を分析の対象とした。

なお、SKb88、SKb249からそれぞれ植物遺体が採取されており、これらの種実同定もあわせて行う。

3. 寄生虫卵分析

（１）原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、便所遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができ便所遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究であり分析例も少ない。

（２）方法

微化石分析法を基本に次のように行った。サンプルを採量する。脱イオン水を加え撹拌する。篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。25％フッ化水素酸を加え30分放置（2・3度混和）。水洗後サンプルを２分する。２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（３）結果

出現した寄生虫卵は計３分類群である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、１㎤の花粉密度とともに寄生虫卵ダイアグラムに示す。なお、主要な分類群は写真に示した。

・SKb88（7層、8層、9層）

回虫卵、鞭虫卵がやや低密度に検出された。

・SKb249

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵が検出され、１㎤中の寄生虫卵密度も約500個のやや高い密度を示した。

4. 花粉分析

（１）原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

（2）方法

花粉粒の分離抽出は、試料に次の物理化学処理を施して行った。5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（3）出現した分類群

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉20、シダ植物胞子2形態の計46である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムに示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、エゴノキ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ユリ科、タデ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、キュウリ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（4）花粉群集の特徴

・SKb88（7層、8層、9層）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。イネ科、アブラナ科、イネ属型の出現率が高く、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が伴われる。また、低率であるがソバ属、キュウリ属、ベニバナが出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属の出現率が高く、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。

・SKb249

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。イネ科が多く、イネ属型、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属が伴われる。また、ソバ属が低率で出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が多く、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が出現する。

5. 種実同定

（1）原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

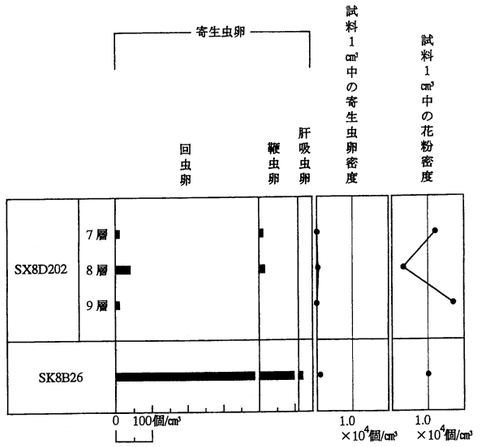
（2）方法

試料（堆積物）には次の物理処理を施して、抽出および同定を行った。試料30㎤に水を加え放置し、泥化を行う。攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。残渣および採取試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（3）出現した分類群

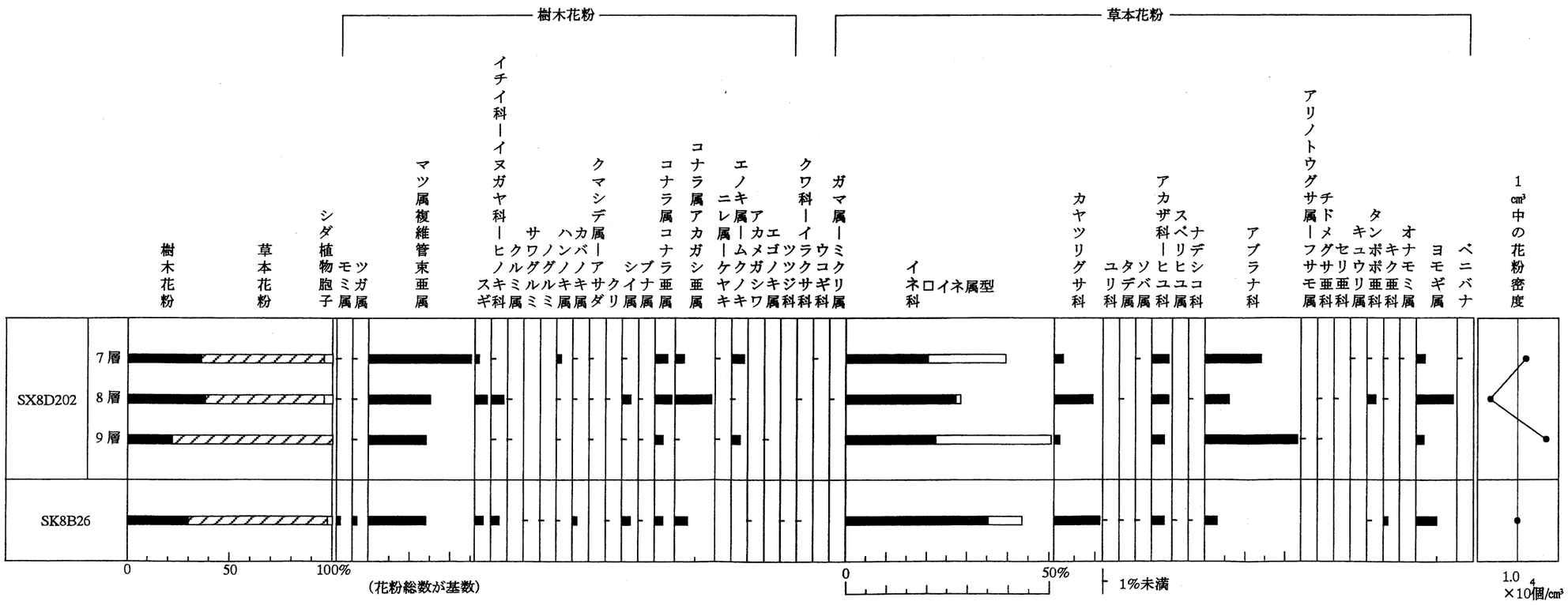
樹木4、草本15の計19が同定された。学名、和名



第６図　高松城跡における寄生虫卵ダイアグラム

分類群		SX8D202			SK8B26
学名	和名	7層	8層	9層	
Helminth eggs	寄生虫卵				
Ascaris	回虫卵	1	5	1	32
Trichuris	鞭虫卵	1	2		8
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵				1
Total	計	2	7	1	41
	試料1cm³中の寄生虫卵密度	1.6 ×10	5.6 ×10	0.8 ×10	3.3 ×10²
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
	試料1cm³中の花粉密度	1.2 ×10⁴	3.3 ×10³	1.7 ×10⁴	1.0 ×10⁴

第15表　高松城跡における寄生虫卵分析結果



第７図　高松城跡における花粉ダイアグラム

および粒数を表16に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

コナラ属　Quercus　堅果・幼果　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

ウメ　Prunus mume Sieb. et Zucc.　核　バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

モモ　Prunus persica Batsch　核　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サンショウ　Zanthoxylum piperitum DC. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。本試料は種子が皮に覆われている状態である。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L.　穎　イネ科

穎は扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状の突起がある。

オオムギ　Hordeum vulgare L.　果実　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実　カヤツリグサ科

黒褐色～黒色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

ソバ　Fagopyrum esculentum Moench　果実　タデ科

茶褐色で卵形を呈す。表面には縞状の模様がある。断面は三角形である。

タデ属　Polygonum　果実　タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。断面は三角形である。

アカザ属　Chenopodium　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝がはしる。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ヒルガオ科　Convolvulaceae　種子

広卵形を呈し、基部は切形、背面は卵形である。覆面の正中線は鈍綾をなす。へそはくぼんでいる。

ササゲ属　Vigna　種子　マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

ナス　Solanum melongera L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへソがある。表面には網目模様がある。

ナス科　Solanaceae　種子

黄褐色で円形を呈す。表面にはやや大きい網目模様がある。

ゴマ　Sesamum indicum L.　種子　ゴマ科

黒褐色で楕円形を呈し、上端がやや尖る。表面には微細な網目模様がある。

トウガン　Benincasa　cerifera　種子　ウリ科

卵倒形を呈し、扁平。周辺部は平行に一段高くなる。

ヒョウタン類　Lagenaria siceraria Standl.　種子　ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

ウリ類　Cucumis melo L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。

藤下（1992）によると6.0mm以下の小粒種子（雑草メロン型）、6.1?8.0mmの中粒種子（マクワウリ・シロウリ型）、8.1mm以上の大粒種子（モモルディカ型）がある。

（4）種実群集の特徴

・SKb88（７層、８層、９層、選別済み試料１～４）

７層はゴマ、ウリ類が検出された。８層は検出されなかった。９層ナデシコ科、ナス科、ゴマ、ウリ類が検出された。選別済み試料では、試料１からコナラ属、モモ、サンショウ、イネ、ヒルガオ科、ササゲ属、多量のウリ類、試料２からオオムギ、ヒョウタン類、多くのウリ類、試料３からトウガン、多量のウリ類、試料４からヒルガオ科が同定された。ウリ類は多量である。選別済み試料は、大型の種実のみが選別されている。

・SKb249（選別済み試料）

ウメ、モモ、イネ穎、ソバ、ナス、トウガン、ヒョウタン類、多量のウリ類などが同定され、ウリ類は極めて多量である。いずれも大型のみが選別されている。

分類群		SX8D202			SK8B26
学名	和名	7層	8層	9層	
Arboreal pollen	樹木花粉				
Abies	モミ属	1	1		5
Picea	トウヒ属				
Tsuga	ツガ属	2	3	1	5
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	84	55	50	56
Cryptomeria japonica	スギ	4	9		10
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	11	2	6
Juglans	クルミ属		1	1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ				1
Platycarya strobilacea	ノグルミ				1
Alnus	ハンノキ属	4	2	2	3
Betula	カバノキ属	1	3		5
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	3	1	
Castanea crenata	クリ		1		1
Castanopsis	シイ属	2	8	2	7
Fagus	ブナ属		2	1	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	10	11	6	7
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	7	32	2	14
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1		1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	10	3	7	
Mallotus japonicus	アカメガシワ				1
Styrax	エゴノキ属			1	
Ericaceae	ツツジ科				2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1		2
Araliaceae	ウコギ科	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属		1		
Gramineae	イネ科	68	99	80	143
Oryza type	イネ属型	64	3	100	32
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	32	5	44
Liliaceae	ユリ科				1
Polygonum	タデ属		1		1
Fagopyrum	ソバ属	1			1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	12	14	10	14
Portulaca oleracea	スベリヒユ属				1
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2		3
Cruciferae	アブラナ科	47	21	82	14
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属			1	
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科		1	1	
Apiodeae	セリ亜科		1		
Cucumis	キュウリ属	1			
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	7		2
Asteroideae	キク亜科	1	3		4
Xanthium	オナモミ属	1			
Artemisia	ヨモギ属	6	33	8	22
Carthamus tinctorius	ベニバナ	1			
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	2	3		1
Trilate type spore	三条溝胞子	10	9	3	8
Arboreal pollen	樹木花粉	130	145	77	125
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	1	0	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	211	218	287	282
Total pollen	花粉総数	342	364	364	409
	試料1cm³中の花粉密度	1.2 $\times 10^4$	3.3 $\times 10^3$	1.7 $\times 10^4$	1.0 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	0	2	3	3
Fern spore	シダ植物胞子	12	12	3	9

第 16 表　高松城跡における花粉分析結果

分類群			SX8D202							SK8B26
学名	和名	部位	7層	8層	9層	1	2	3	4	
Arbor	樹木									
Quercus	コナラ属	堅果				1				
Prunus mume S. et Z.	ウメ	核								1
Prunus persica Batsch	モモ	核				1				1
		1/2核								2
Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子				1				
Herb	草本									
Oryza sativa L.	イネ	穎				1				1
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実					1			
Cyperus	カヤツリグサ属	果実								1
Fagopyrum esculentum Moench	ソバ	果実								1
Polygonum	タデ属	果実								2
Chenopodium	アカザ属	種子								1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子			1					1
Convolvulaceae	ヒルガオ科	種子				1			1	1
Vigna	ササゲ属	種子				2				
Solanum melongena L.	ナス	種子								1
Solanaceae	ナス科	種子			1					
Sesamum indicum L.	ゴマ	種子	3		3					
Benincasa cerifera	トウガン	種子						3		7
Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子					1			3
Cucumis melo L.	ウリ類	種子	3		5	254	59	391		1143
Total	合計		6	0	10	261	61	394	1	1166
Unknown	不明植物遺体					15				
			堆積物30cm³中			選別済み試料				

第17表　高松城跡における種実同定結果

6. 考察

（1）便所遺構である可能性について

1）SKb88

寄生虫卵分析の結果、低密度ではあるが、回虫卵、鞭虫卵が検出された。花粉群集はイネ科、アブラナ科、イネ属型の出現率が高く、イネ科は雑穀類も含まれるが雑草類も含まれ特定できないが、アブラナ科は野菜、イネ属型はコメに起因するとみなされる。低率であるがソバ属、キュウリ属、ベニバナが出現し、これらも食用ないし薬用となる栽培植物である。樹木では風媒花植物のマツ属複維管束亜属を主にコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。種実はウリ類が多く、ゴマ、トウガン、ササゲ属、イネ、オオムギ、モモ、サンショウの食用となるもので占められる。

以上から、寄生虫卵密度は低いが、花粉群集も糞便の特徴を示し、種実は食用となるもので占められるため、SKb88の堆積物には糞便が含まれているとみなされる。よって、割石を積んだ長方形プランの土坑SKb88（18世紀中葉から後葉）が便所遺構である蓋然性が示唆される。

2）SKb249

寄生虫卵分析の結果、回虫卵がやや多く、鞭虫卵、肝吸虫卵が検出された。寄生虫卵密度は試料(堆積物)1㎤中約500個でやや高い値を示す。花粉群集はイネ科、マツ属複維管束亜属、カヤツリグサ科、イネ属型、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科の順に多く、イネ属型やアブラナ科の食用植物に起因する可能性のあるものもあるが、風媒花植物の人里植物や二次林性の樹木がほとんどを占める。種実はウリ類が極めて多く、トウガン、ナス、ソバ、イネ、モモ、ウメの食用となる種類で占められる。

以上から、寄生虫卵密度がやや高く、種実が食用となる種類で占められることから、SKb249の堆積物には糞便が含まれるとみなされる。円形の素掘り土坑SKb249（17世紀前半から中頃）が便所遺構である蓋然性が示唆される。

（2）周囲の植生と環境

花粉群集からみて、SKb88とSKb249の属する17世紀から18世紀の時期は、周囲にイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科の人里植物ないし耕地雑草が生育し、日当たりのよい環境が推定される。周辺地域にはマツ（マツ属複維管束亜属）を主とし、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）の樹木が分布し、生態上からアカマツ林を主とする二次林または人為性の高い状況であったと考えられる。

7. まとめ

高松城跡から検出された18世紀中葉から後葉の割石を積んだ長方形プランの土坑SKb88と17世紀前半から中頃の円形の素掘り土坑SKb249の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定の各分析を行った結果、２遺構とも糞便の堆積物が認められ、便所跡であると考えられた。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明（1999）寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

中村純（1973）花粉分析. 古今書院, p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

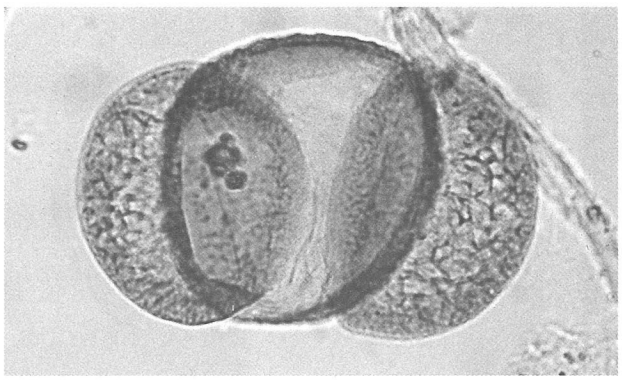
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

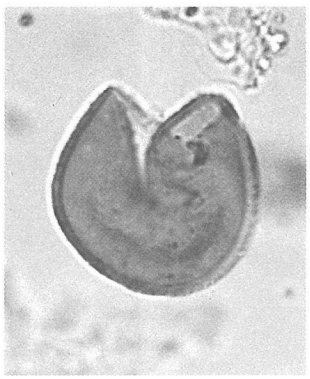
笠原安夫（1985）日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第２巻生業, 雄山閣　出版, p.131-139.

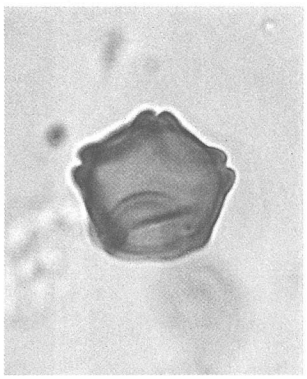
金原正明・松井章・金原正子（1994）便所堆積物から探る古代人の食生活. 助成研究報告（平成４年度）, 財団法人味の素文化センター, p.35-48.



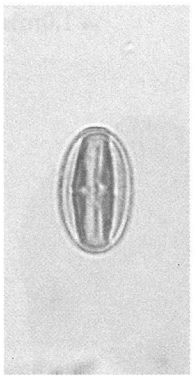
1　マツ属複維管束亜属



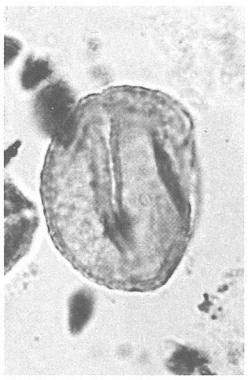
2　スギ



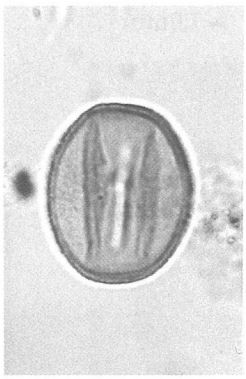
3　ハンノキ属



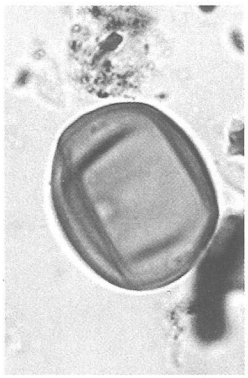
4　シイ属



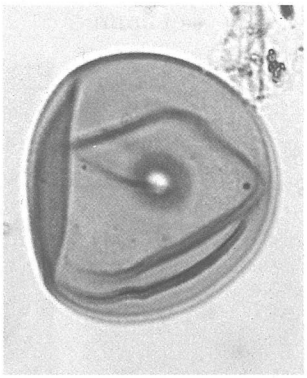
5　コナラ属
コナラ亜属



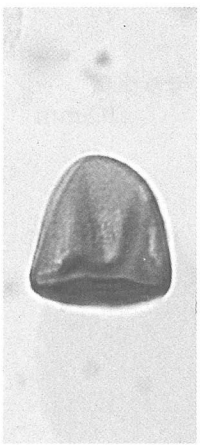
6　コナラ属
アカガシ亜属



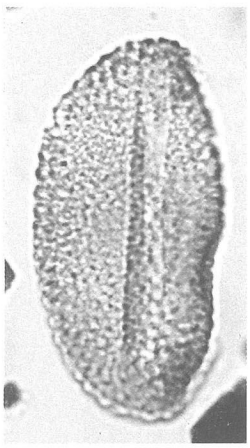
7　エノキ属－ムクノキ



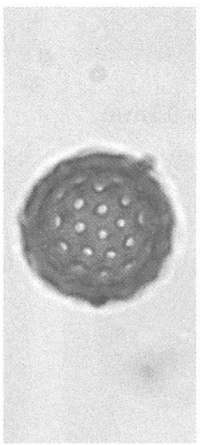
8　イネ属型



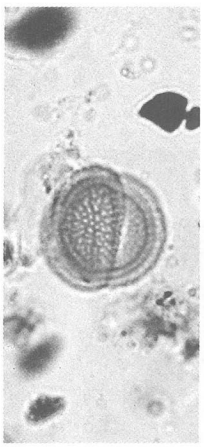
9　カヤツリグサ科



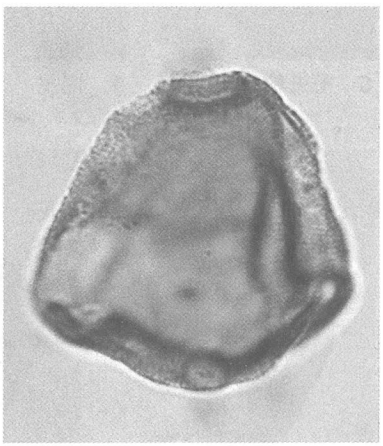
10　ソバ属



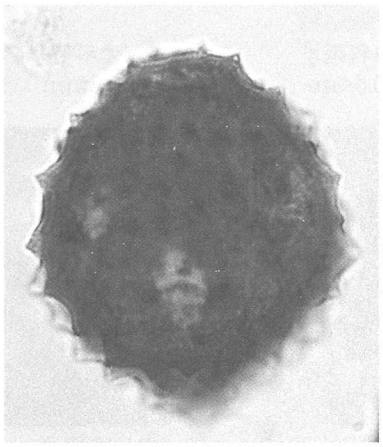
11　アカザ属－ヒユ科



12　アブラナ科

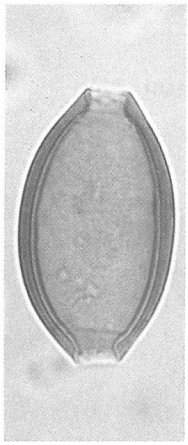


13　キュウリ属

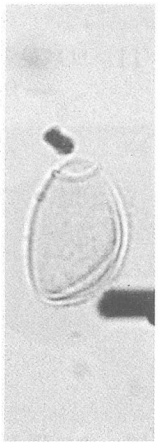


14　ベニバナ

15　回虫卵



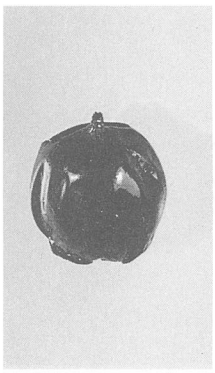
16　鞭虫卵



17　肝吸虫卵

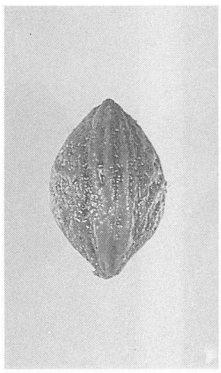
10μm

写真23　高松城跡の花粉・寄生虫卵

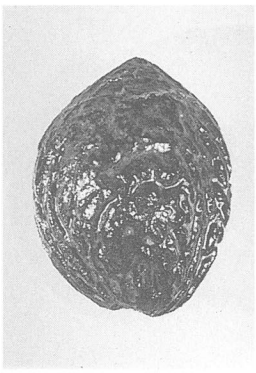


1　コナラ属堅果
— 1.0mm

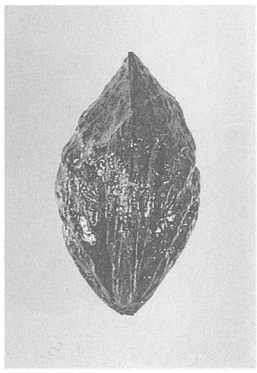
2　ウメ核
— 1.0mm



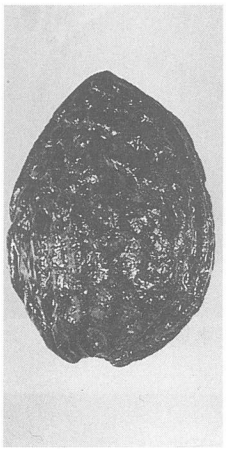
3　同左
— 1.0mm



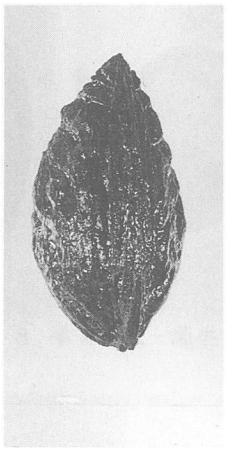
4　モモ核
— 1.0mm



5　モモ核
— 1.0mm

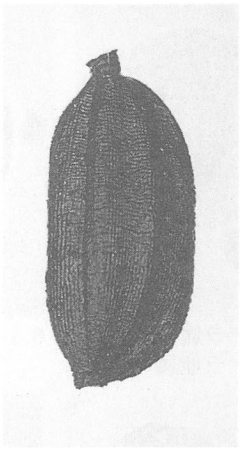


6　モモ核
— 1.0mm



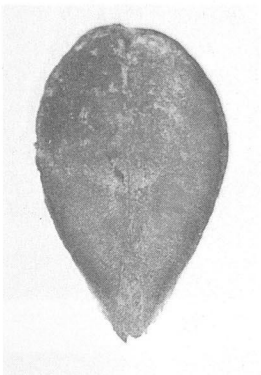
7　同左
— 1.0mm

8　イネ穎
— 0.5mm

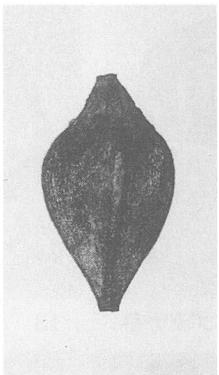


9　イネ穎
— 0.5mm

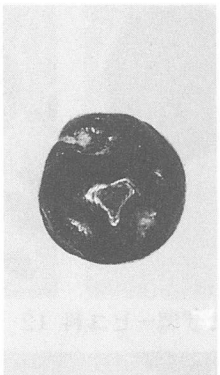
10　ササゲ属
0.5mm



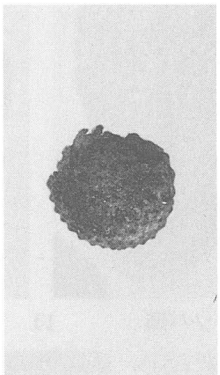
11　ソバ果実片
— 0.5mm



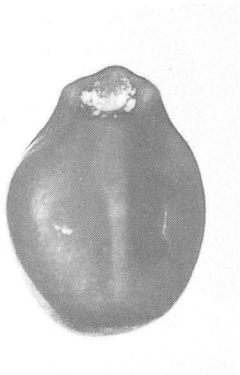
12　タデ属果実
— 0.5mm



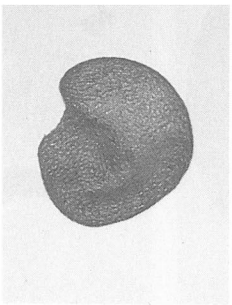
13　アカザ属種子
—— 0.5mm



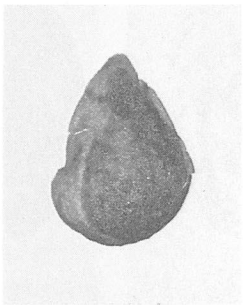
14　ナデシコ科種子
—— 0.5mm



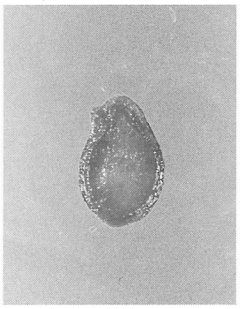
15　ヒルガオ科種子
— 0.5mm



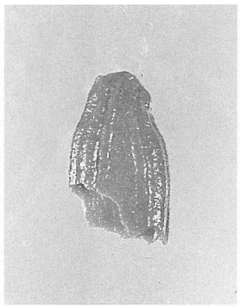
16　ナス種子
— 0.5mm



17　ゴマ種子
0.5mm



18　トウガン種子
—— 1.0mm



19　ヒョウタン類種子
—— 1.0mm

20　ウリ類種子
—— 1.0mm

写真24　高松城跡の種実

第２節　高松城城下町武家屋敷跡出土漆器資料の材質と製作技法

北野信彦（くらしき作陽大学）

1. はじめに

高松城城下町は、天正15年（1587）に生駒親正が讃岐入りして高松城築城に伴い整備が開始された。高松城城郭自体は、松平頼重が寛永19年（1642）に生駒家の後に入府したことに伴い三の丸および東の丸の郭の改修・整備を実施されて完成をみるが、それに先立つ寛永４年（1627）の「讃岐探索書」には内・中・外堀および郭内外の武家地や町屋敷の配置がみられる。このことから、本遺跡周辺地区はすでに近世初頭～江戸時代前期には上級武家地として機能していたことが推察されている。近年、高松市内の都市再開発に伴い高松城城下町遺跡の発掘調査が進み、江戸時代の高松城下町の人々の生活ぶりが直接的に理解される遺構や遺物が大量に検出されるようになってきた。このなかには漆器資料も多く含まれている。今回、香川県埋蔵文化財センターの御厚意により、これら高松城城下町遺跡から出土した漆器資料の材質・技法に関する文化財科学的な調査を行う機会を得たので、その結果を報告する。

2. 出土漆器資料の調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は、衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類の内、漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の材質や製作技法と、使用階層や使用状況との関連性が把握されれば、これらが出土した遺構・遺跡の性格、即ちそこで生活していた人々の暮らしぶりの一端がある程度推定されよう。ところが同じ飲食器である陶磁器資料に比較して漆器資料は、木胎・下地・漆塗膜面からなる脆弱な複合遺物であるため、検出・実測調査・保存や保管等の取り扱いに苦慮する場合が多い。加えて陶磁器資料における古窯跡に対応するような生産地遺跡も検出されにくいため、これまで一部の資料の肉眼観察に留まる調査が多かった。しかし、このような取り扱いが厄介と考えられる漆器資料も視点を変えてみてみると、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法を用いた調査で、より客観的にとらえ易い。このような漆器資料の材質・技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。

本報では、これらの調査の一環として、漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択、(2) 木取り方法、(3) 漆幕面の漆塗り構造、(4) 色漆や蒔絵加飾の使用顔料、等の項目別にわけた文化財科学的な調査を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す。

2. 1. 調査方法

2.1.1. 用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

2.1.2. 木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

2.1.3. 漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、実態顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に１㎜×３㎜程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトＧＹ1251J.P.，ハードナーＨＹ837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

2.1.4. 色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所Ｓ－415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所ＥＭＡＸ－2000エネルギー分散型電子線分析装置（ＥＰＭＡ・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

2.1.5. 分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な８つ（Ａタイプ）、もしくは９つ（Ｂタイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。

（Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で蒔絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキおよびシオジ材など優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキおよびシオジ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

（Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As_2S_3）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

2. 2. 調査結果

今回調査を行った出土漆器資料は、椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類を中心とした、いずれも日常で使用されて投棄された生活什器類の合計68点である。

これらの帰属年代は、出土資料の層位や共伴国産陶磁器の編年観からは、近世初頭頃～江戸時代前期頃の比較的初期段階の年代に比定されている。以下、出土漆器の材質・技法の項目別に調査結果を述べる（第18表）。

2.2.1. 用材選択

本漆器資料の内の挽き物類の樹種には、ブナ科ブナ属6点、同コナラ節5点、同シイノキ4点、同クリ3点、ニレ科ケヤキ8点、モクセイ科シオジ10点、トチノキ科トチノキ25点、カツラ科カツラ3点、の広葉樹8種類が、その他器物や塗り箸には針葉樹ヒノキ材およびタケ材がそれぞれ1点ずつ確認された。この挽き物類の用材の木材的組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて本漆器資料に用材の使用状況をみてみると、吟味された最優材であるケヤキ・シオジ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材などの2つのグループに分かれた。これらの占有率を総点数の中でみてみると、前者であるシオジ材が14.7%、同ケヤキ材が11.8%、後者のトチノキ材が36.8%、ブナ材が8.8%であり、本資料の場合基本的に後者の比率が高いものの前者の占有率も高かった（写真25）。筆者によるこれまでの全国115遺跡、合計16,009点の出土漆器資料の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種は、古い時期の資料に樹種の多様性が見られるが、江戸時代中期以降にはケヤキ（江戸時代前期段階ではシオジ材が多い）・トチノキ・ブナの3樹種の占有率が高く一般的となる。この結果を参考にして本資料の用材の使用状況をみてみると、シオジ・クリ・コナラ節など比較的近世の初期段階に出現がみられる樹種の占有率が高く、本遺跡出土漆器資料の基本的な年代観を考える上で参考となろう。

2.2.2. 木取り方法

本資料の内、挽き物類の木取り方法は、横木地と竪木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（第19表）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみてみると、トチノキ材は横木地板目取りが、ブナ材は横木地柾目取りがそれぞれ優勢であった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法（ブンギリ）が適しているという口承資料がある（注3）。この点からも、本資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

2.2.3. 漆塗膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地内外に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出されない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することで、前

No.	器型	樹種	木取	面塗り技法 内	面塗り技法 外	漆塗構造 文様	漆塗構造 内	漆塗構造 外	使用顔料 内	使用顔料 外	使用顔料 文様	備考
1	挽物破片	ケヤキ	B	赤	赤		V	V＋V	朱	朱		根来手
2	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			轆轤痕有
3	椀	クリ	A	赤	黒		I	I	朱			
4	挽物破片	広散孔材	B	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
5	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱・As+S	
6	椀破片	ブナ	A	赤	ー		I	ー	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
7	挽物破片	ケヤキ	B	赤	ー		V	ー	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ＋As+S			
8	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		As+S	
9	挽物破片	トチノキ	A	赤	赤	外ー絵ー黒	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		引っ掻き技法
10	挽物破片	トチノキ	A	赤	赤	外ー絵ー黒	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		
11	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー紋ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	
12	椀破片	ケヤキ	B	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
13	高台部破片	カツラ	B	ー	ー		ー	ー	ー	ー		
14	板物	ヒノキ	ー	赤	黒		V	V	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
15	高台部破片	シオジ	A	赤	赤	外ー絵ー黒	X	XI	朱	朱		内焼け
16	挽物破片	シオジ	B	赤	赤	外ー絵ー黒	X	XI	朱	朱		鶴亀文様
17	挽物破片	シオジ	B	赤	赤		V	V	朱	朱		
18	挽物破片	シオジ	B	赤	赤	外ー絵ー黒	X	XI	朱	朱		
19	挽物破片	コナラ節	B	赤	黒	外ー絵ー赤	X	XI	朱		朱	
20	挽物破片	ケヤキ	B	赤	黒		I	I	朱			
21	挽物破片	ケヤキ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱		朱	
22	高台部破片	コナラ節	A	赤	黒		I	I	朱	朱		
23	高台部破片	コナラ節	A	ー	黒		ー	I	ー			
24	挽物破片	カツラ	A	赤	ー		I	ー	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
25	高台部破片	シオジ	A	黒	黒		X	X				
26	高台部破片	ケヤキ	A	赤	赤		X	X	朱	朱		
27	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー紋ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	引っ掻き技法
28	椀破片	クリ	A	赤	黒	外ー紋ー赤	I	II	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	
29	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	轆轤痕有
30	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		ﾍﾞﾝｶﾞﾗ・As+S	
31	高台部破片	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			轆轤痕有
32	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
33	挽物破片	ブナ	A	黒	黒		I	I				
34	浅椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱			
35	椀	ブナ	ー	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
36	椀	コナラ節	A	赤	黒		I	I	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			内焼け
37	高台部破片	ブナ	A	赤	黒		I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
38	椀	ブナ	A	赤	赤	外ー紋ー黒・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	As+S	被熱痕
39	挽物破片	トチノキ	ー	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱・As+S	引っ掻き技法
40	椀	シオジ	ー	赤	黒	外ー絵ー赤	X	X	朱		朱	引っ掻き技法
41	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			内焼け
42	挽物破片	広散孔材	ー	ー	黒		ー	I				内焼け
43	挽物破片	膜面のみ	ー	赤	黒	外ー紋ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	
44	挽物破片	シイノキ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱		朱	鶴絵
45	椀破片	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱・As+S	鳥羽絵
46	椀	シイノキ	ー	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱		朱	
47	椀	シオジ	ー	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱		朱	
48	挽物破片	トチノキ	A	赤	黒		X	I	朱			
49	椀破片	トチノキ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			内焼け
50	椀	クリ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
51	椀	シイノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	
52	椀	シオジ	B	赤	赤		X	X	朱	朱		高台内黒記号
53	椀	トチノキ	ー	赤	黒	外ー紋ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱・As+S	
54	反端椀	ケヤキ	ー	赤	赤		V	V	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ＋As+S	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ＋As+S		根来手
55	椀	モクセイ科	ー	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	
56	椀	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	内焼け
57	椀	トチノキ	A	赤	黒	外ー紋ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱・As+S	内焼け
58	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		ﾍﾞﾝｶﾞﾗ・As+S	
59	椀	カツラ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
60	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			内焼け
61	椀	ブナ	B	赤	黒		I	I	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
62	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱			轆轤痕有
63	椀破片	シイノキ	B	赤	黒		I	I	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ			
64	椀	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		ﾍﾞﾝｶﾞﾗ	高台内刻印
65	椀	ケヤキ	ー	赤	黒		V	V	朱			内焼け
66	椀	コナラ節	A	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	朱＋ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	
67	椀	シオジ	ー	赤	赤	外ー絵ー黒	V	VI	朱	朱		鶴亀文様
68	椀	トチノキ	ー	赤	黒	外ー絵ー赤	I	II	ﾍﾞﾝｶﾞﾗ		朱	

第18表　試料一覧

者は炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者は細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した（注４）。次に、地の漆塗り層は、いずれも簡便な１層塗りから２～３層塗りの多層塗の資料まで見出され、基本的には炭粉下地に炭層塗の極めて簡素で一般的な日常漆器の塗り構造を持つ資料が中心であるものの、サビ下地に多層塗構造をもつ堅牢性を重視した優品資料も23.5％と比較的高い占有率であり、この点は本漆器資料の特徴の一つといえよう（注５）。なお金泥状や赤色系の色漆による家紋や漆絵の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（写真26）。

2.2.4. 赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄Fe_2O_3）、朱（水銀朱ＨｇＳ）、さらには両者を併用して用いる３種類の異なる赤色系漆であると理解した（図10）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、通常近世初頭～江戸時代前期頃の資料では、朱を多用する事例が多いが、その後江戸時代中期以降には幕府漆座を中心とした統制物資であった朱に比較して、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる（注６）。本漆器資料の場合、簡素で一般的な塗り構造をもつ資料にはベンガラを用いる事例が多いものの、全体的にみると朱の占有率が比較的高かった。この点も、本資料の帰属年代を考える上で参考となろう。

2.2.5. 蒔絵加飾材料の材質

表面観察において金粉もしくは金泥状による家紋や漆絵等の蒔絵状加飾部分を定性分析した結果、Ａｕ（金）が認められる資料は認められず、いずれもＡｓ＋Ｓ（石黄、二酸化二砒素）が見出だされた（図10）。

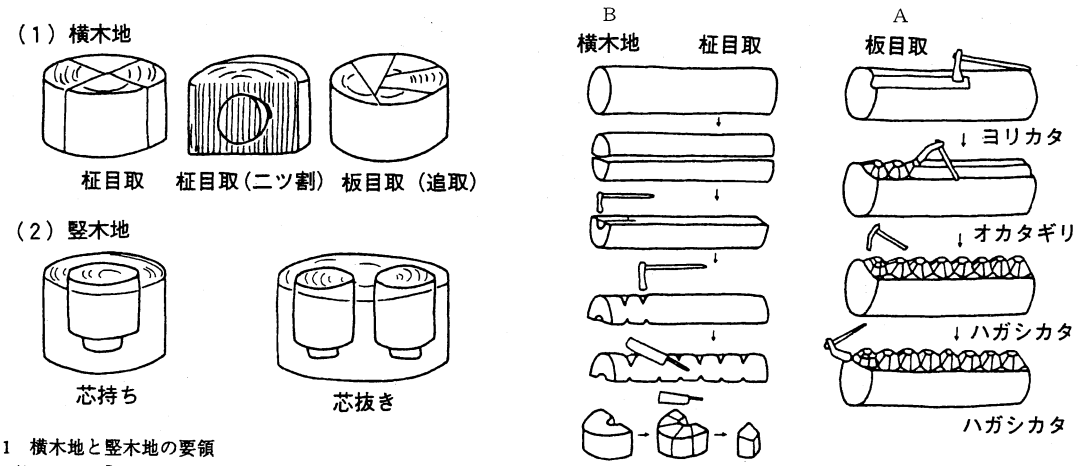
筆者のこれまでの出土蒔絵漆器の蒔絵状加飾材料の分析結果では、金（Ａｕ）自体を使用する資料は数％程度で少なく、大多数は銀・スズ・石黄等の代用金蒔絵材料であること、金粉以外の蒔絵粉の材質では、帰属年代がやや古い17世紀初･前期～中期頃の資料群では石黄粉が、17世紀後半の特に元禄年間以降の資料群では銀粉の比率が高くなる。そして江戸時代後期～幕末期にはスズ粉蒔絵が多く見出される（注７）。この点を考慮に入れて本資料を見てみると、金自体の使用は認められずいずれも石黄粉が使用されていた（図11）。そのため本漆器の材質・技法面でみた本資料の帰属年代は17世紀初頭～前期頃に求められよう。

3. 考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これらを使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう（注８）。とりわけ本漆器資料を構成する材質の傾向は、樹種・赤色系漆や金泥状加飾の使用顔料の構成要素には近世初頭～江戸時代前期頃の比較的初期段階の特徴が多くみられた。この点は、本資料の編年観を考える上で有力な調査結果と言えよう。

次に本報では、生産技術からみた一括出土漆器資料における組成の傾向を把握するため、本漆器資料ばかりでなく、比較資料として同じ四国の国元城下町における武家地関連遺跡である新蔵町一丁目遺跡・福島二丁目遺跡・旧動物園跡遺跡（いずれも阿波徳島城下町の武家地関連遺跡）、高知城下屋敷遺跡（土佐高知城下町の武家地関連遺跡）、江戸表の讃岐高松藩邸に比定されている丸の内三丁目遺跡出土漆器資料を一連のレーダーチャート方式による集計作業を行った。

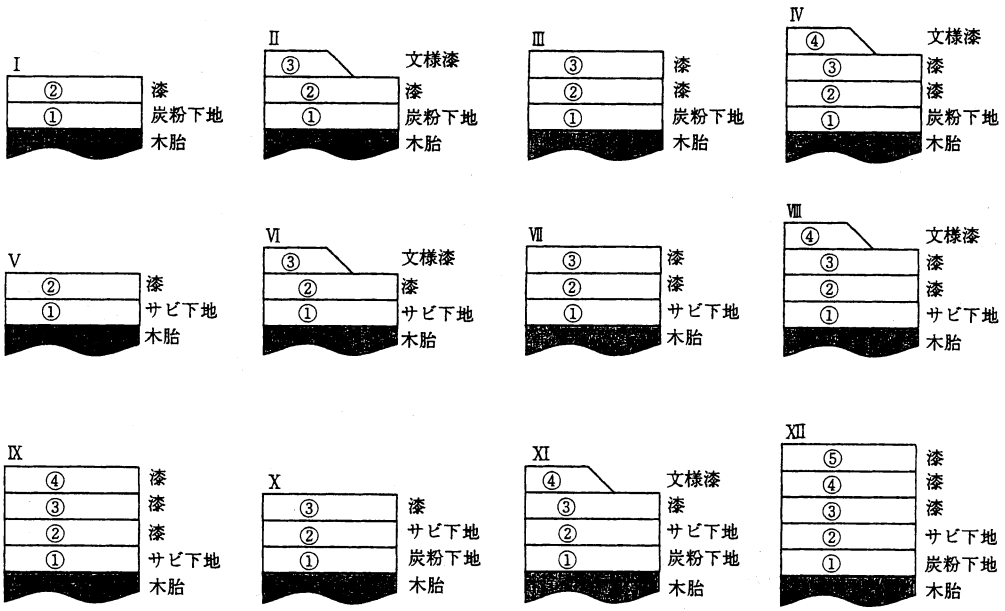
その結果、これらの基本的な材質・製作技法の組成の傾向はいずれも実用に即した生活什器類である飲食器を中心としていることが理解された（図12）。これは、これら遺跡出土の漆器資料の性格自体が、非日常のハレの食事に供されるような特別の什器類（伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い）とは異なり、普段の食生活で多用され、かつ割合簡単に廃棄されたであろう日常什器類が中心であることに由来しよう。その一方で本遺跡出土漆器資料をはじめとする国元城下町の武家私邸である武家地関連遺跡出土漆器資料は、他の一括資料とりわけ武家江戸参府江戸表の藩邸資料や高知城下屋敷跡遺跡等の公的空間のそれとは異なり、全体的にやや優品の占有率が高い傾向が見出された。この結果は本資料を使用し投棄した家自体の好み傾向や什器調達方法の特徴によるものなのか、単に出土資料の偏在性によるものなのかは、現時点では判明しないが、本資料の特徴の一つと言えよう。今後は、さらに調査事例を充実して高松城下町関連遺跡出土漆器資料の全体的な傾向を把握すること、同時に



1　横木地と竪木地の要領
（橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』-1979- より原図引用）

2　近世会津木地師の木取りの方法
（須藤護『日本人の生活と文化(木)
暮らしの中の木器』-1982- より原図引用）

第８図 近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法



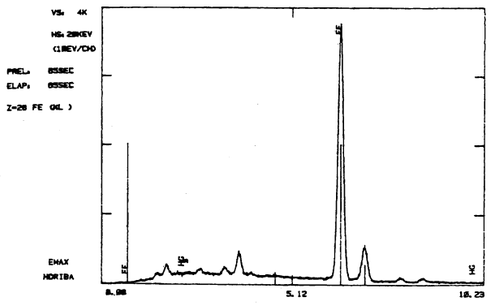
第９図　漆塗り構造の分類

A 環孔材	a.　ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b.サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c.ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d.エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

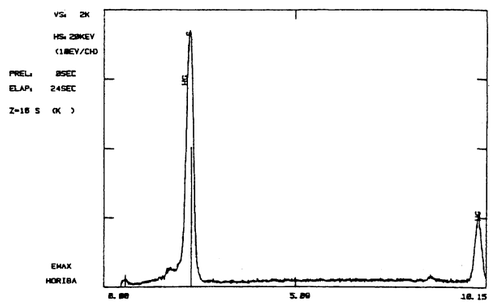
ろくろ挽き物の用材分類一覧表

橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』-1979- などを参考にして作成

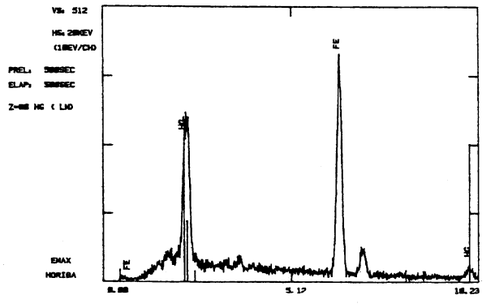
第19表　　ろくろ挽き物の用材分類一覧表



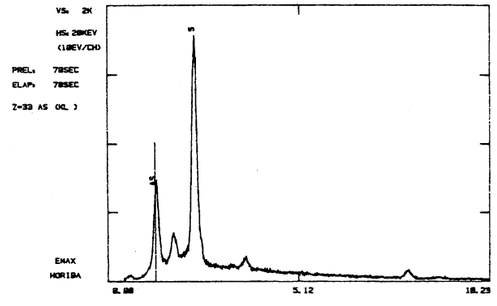
赤色系漆　ﾍﾞﾝｶﾞﾗ（Fe_2O_3）



赤色系漆　朱（HgS）

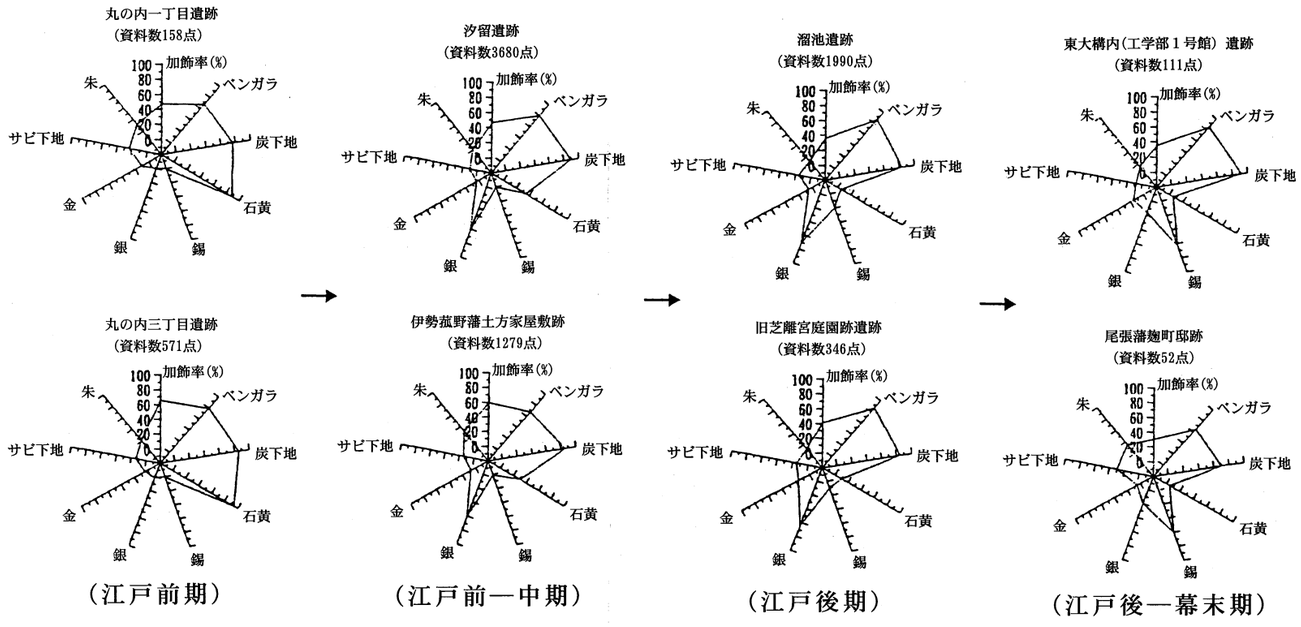


赤色系漆　朱+ﾍﾞﾝｶﾞﾗ（HgS+Fe）

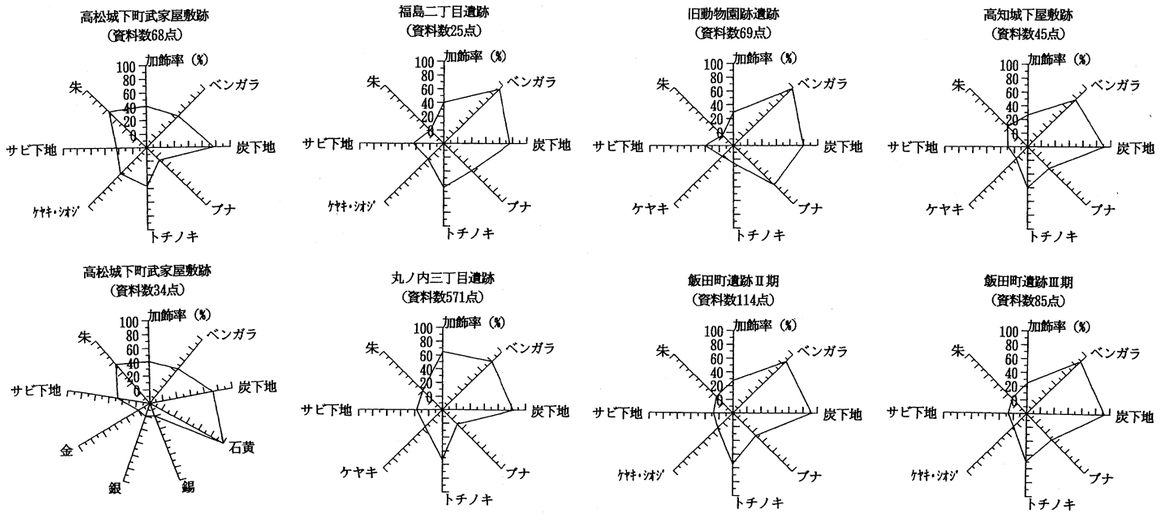


蒔絵加飾（金彩）　石黄（As_2S_3）

第10図　電子線マイクロアナライザー（ＥＲＭＡ）分析結果

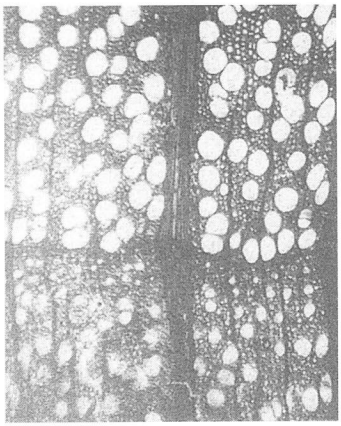


第11図　年代別の蒔絵粉材料の変遷(集計例)

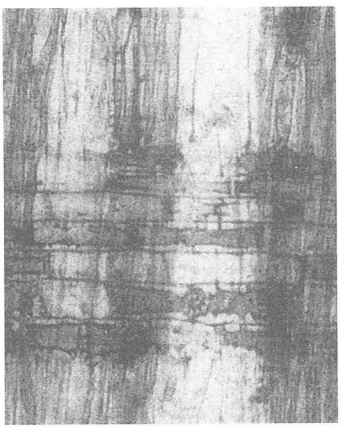


第12図　本資料をふくむ各遺跡出土漆器資料の組成（集計別）

ぶな科ブナ



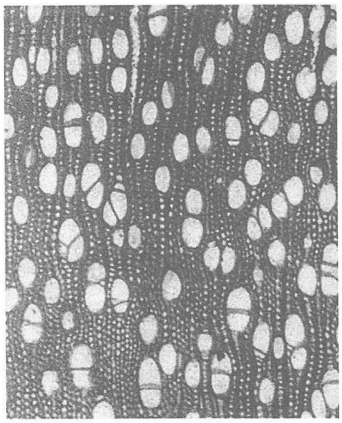
木口（30X）



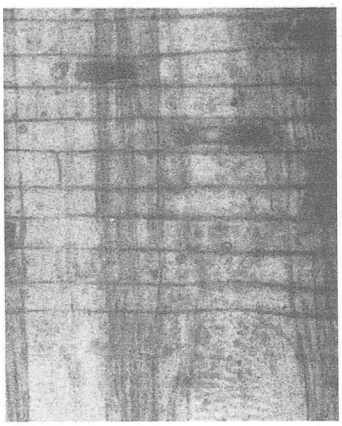
柾目（100X）

板目（50X）

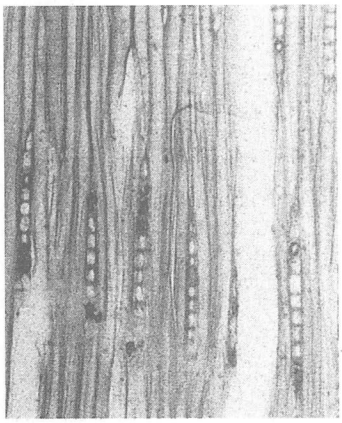
とちのき科トチノキ



木口（30X）

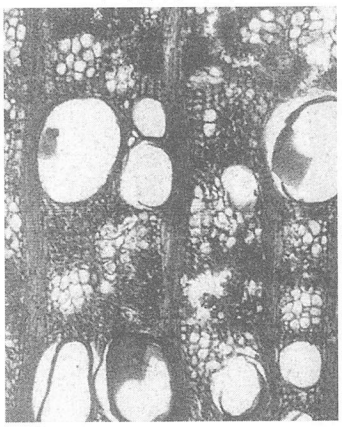


柾目（100X）



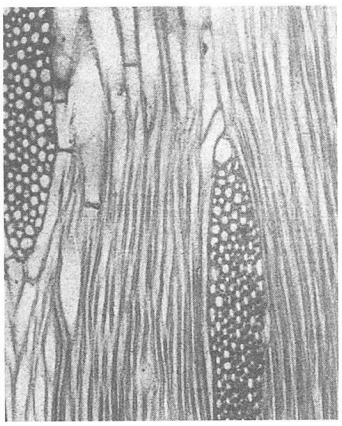
板目（50X）

にれ科ケヤキ



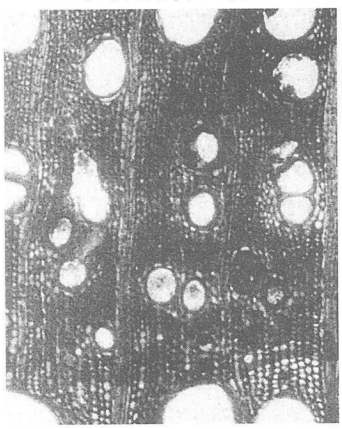
木口（30X）

柾目（100X）

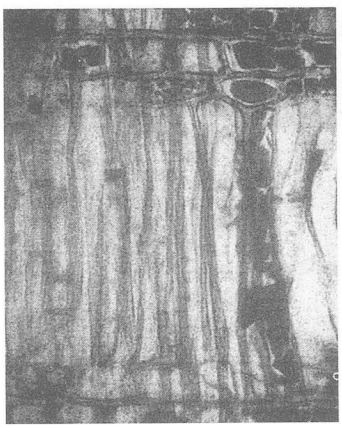


板目（50X）

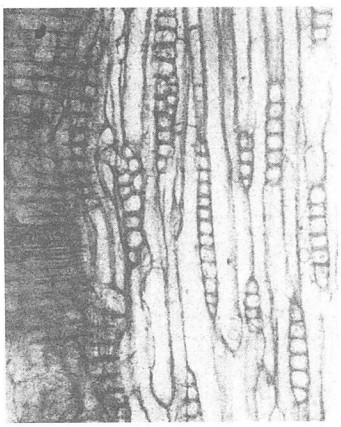
もくれん科シオジ



木口（30X）

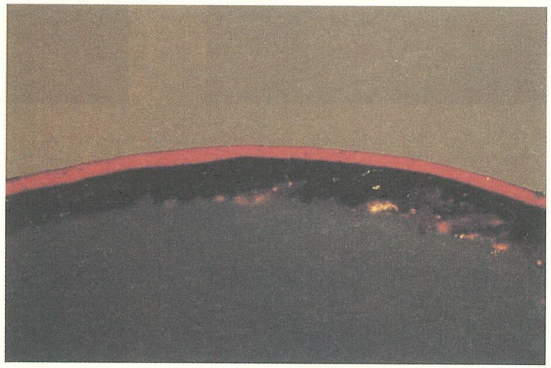


柾目（100X）

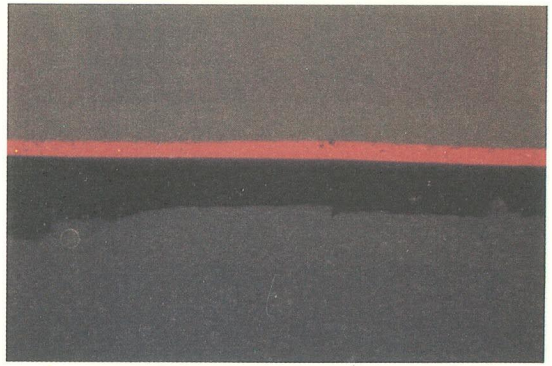


板目（50X）

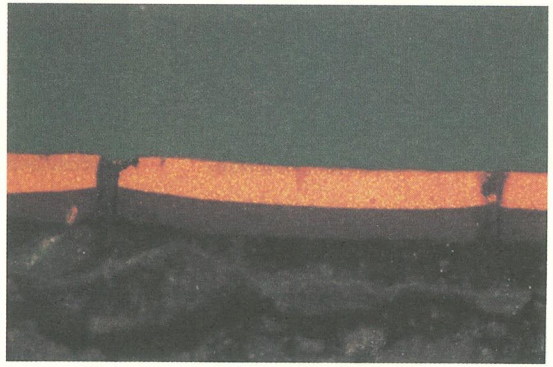
写真25　代表的な樹種の顕微鏡写真



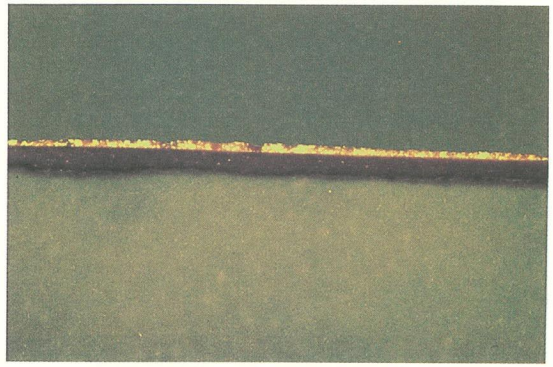
赤色系漆(ベンガラ漆)(Ⅰ)　(×100)



赤色系漆(黒漆～ベンガラ漆)(Ⅲ)　(×100)



赤色系漆(赤褐色系漆～朱漆)(Ⅶ)　(×300)



加飾漆器(石黄加飾)(Ⅱ)　(×100)

写真26　漆器塗膜面の塗り構造(断面観察写真)

陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが必要である。この一連の検討作業を行うことが、本資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

（謝辞）

本調査を行うにあたり、（財）香川県埋蔵文化財調査センターの佐藤竜馬氏をはじめ、高知県文化財団埋蔵文化財センター、（財）徳島県埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室、東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター、千代田区飯田町遺跡調査会など多くの諸機関や方々には資料調査の件では大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

なお本報は、平成11～13年度文部省科学研究費基盤研究（C）『近世蒔絵材料の劣化現象の把握とその保存に関する基礎的研究（研究代表者:北野信彦）』の成果の一部を含む。

（注）

(1) 北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』p. 81-101、日本民具学会編　雄山閣出版

北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学　第9号』p. 71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。

(2) 橋本（1979）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男（1979）『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局

北野信彦（2000）「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学　第38号』p. 47-66、日本文化財科学会

(3) 須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤　護（1982）『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

(4) なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦（1993）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ⅰ－文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として－」『古文化財の科学　第38号』p. 65-79、古文化財科学研究会

(5) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の一つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を渋柿に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集2』国土地理協会

(6) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（2000）「朱・ベンガラ項目」『日本民俗大辞典（下巻）』福田アジオ編、吉川弘文館

(7) 寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集、寛延四未年小買物諸色直段表』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：1と算定される。

また、伊勢菰野藩士方家菩提寺である見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18：6：1と算定される。いずれの事例からも生産技術面（ここでは材質や製作技法）の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解され

る。

北野信彦・肥塚隆保（2000）「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 第38号』p. 67-92、日本文化財科学会

(8) 北野信彦（1993）「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」『綜合郷土研究所紀要38巻』p. 115-134、愛知大学

北野信彦（1999）「出土漆器資料からみた近世初頭から前期頃の城下町居住者の一性格」『綜合郷土研究所紀要44巻』p. 113-132、愛知大学

北野信彦（2000）「出土漆器資料からみた江戸市中における武家地関連遺跡の一性格」『綜合郷土研究所紀要45号』p. 75-96、愛知大学

北野信彦（2002）「出土漆器資料からみた国元城下町における武家地関連遺跡の一性格」『綜合郷土研究所紀要47巻』p. 1-26、愛知大学

等を参照されたい。

（参考文献）

(1) 沢田吾一："日本漆工の研究"（1966）、美術出版社
(2) 灰野昭郎："漆工（近世編）日本の美術8　第231号"（1985）、至文堂
(3) 光芸出版社編："うるし工芸辞典"（1978）
(4) 北野信彦："近世出土漆器における材質・技法の把握に関する文化財科学的研究、京都工芸繊維大学博士（学術）論文" p. 1-230、（2001）

第6章　まとめ

第1節　近世遺構面の年代

第3・4章で述べてきたように、B地区では都合6面の近世遺構面を検出することができ、またそれぞれの遺構面の遺構ないし整地層から良好にまとまった出土資料を得ることができた。ところで当該地区は、第2節で既述したように近世前半期を中心に屋敷割が著しく変化した場所であり、検出遺構の歴史的位置付けを行うためには、各遺構面（整地層）の年代が明らかにされる必要がある。このため第3章第1節と若干重複するが、まずは各遺構面の年代を検討し提示しておきたい。なお伴出遺物については、既に整理作業の過程で提示した様相把握（松本・佐藤 2001、松本 2002a）にもとづく所見を示した。

1. 各遺構面の伴出遺物

1. 1. 第6面

様相1～3の土器・陶磁器が伴出している。様相1には、志野や胎土目積みの唐津が認められ、近世遺物としては最も遡る内容をもつ。ただし大坂城を始めとする関西地方での年代観を参考にすると、1600～1610年代と捉えておくのが最も妥当な年代観であろう。

様相2は、砂目積みの唐津と極少量の伊万里が指標になる。基準資料のSKb255では、中層より「元和拾年（1624:寛永元年）」銘の木簡（3137）が伴出している。木屑主体の中層の堆積状況と木簡の記載内容から、SKb255は屋敷内の作事に伴う塵芥処理土坑と考えてよく、1624年を上限としてこれより著しくは下降しない年代観が想定される。1620～1630年代の幅で捉えて大過なかろう。

様相3は、伊万里の普遍化と唐津溝縁皿の増加が指標となる。基準資料のSKb178は、埋土が上位の第5面造成土（V層）に連続しており、この様相をもって第6面が廃絶したことを示す。伊万里・唐津の年代観は1640～1650年代が中心である。

1. 2. 第5面

第5面の上限は、第6面との関係から様相3で押さえられるが、下限については明瞭さに欠く。しかし第5面では後出する層位にあるSBb30（SXb09）の出土遺物には、細片ながらII・III期からIV期初頭にかけての肥前系陶磁器が認められる（未報告）。また第5面を被覆する第4面構成土（IV層）では、やはりIV期前半の肥前系陶磁器が出土している（965～967）。このため、第5面の下限年代がIV期初頭ないし前半の肥前系陶磁器に求められることは確かであろう。資料数が僅少なため、高松城での様相設定には至らないが、概ね1680～1740年代の幅で捉えてよいものと推測する。

1. 3. 第4面

やはり遺構の伴出遺物が少なく、不明瞭の観は拭えないが、SKb95出土資料にはIV期前半の肥前系陶磁器が認められる。後述する様相5（第3面廃絶・第2面造成に伴う資料）と大差ない内容といえる。

1. 4. 第3面

遺構出土資料や第3面を被覆するII層は、いずれも様相5である。IV期前半の肥前系陶磁器や近世3期～4a期の備前産擂鉢、およびこれらとよく共伴する在地産（御厩系）焙烙I型式などから構成される。1680～1740年代の幅で捉えられるが、その中でも後半段階の所産と考えられる。

1. 5. 第2面

上限は第3面との関係から1680～1740年代の幅の後半段階と考えられる。下限については、8C区で認められた火災に伴う一括廃棄資料であるSXb06出土遺物から推測可能である。この資料は様相7の基準資料である。肥前系磁器には広東碗・腰張碗など、V期前半の特徴的な器種がある一方、小広東碗や青磁釉を施した朝顔形碗などIV期後半の器種もかなり認められる。また端反碗は、特殊な形態（467）を除けば1点も認められない。他遺構の出土遺物中にも端反碗は含まれない。このため、肥前系陶磁器の常識的な年代観に立てば、1780～1800年代が想定されるが、第1面でも初現期の端反碗は皆無といってよい。このことは、高松城（および讃岐）での初現期の端反碗を含む様相の欠如を意味しており、様相7の下限に若干下降する年代（1810～1820年代）も含む可能性を示唆する。肥前系磁器皿にみられる、型打ち成形の多用や山水楼閣文の出現、あるいは行平鍋の定量存在などは、上記可能性を視野に入れると理解し易い。

1. 6. 第1面

様相8・9が伴出する。第1面は撹乱・削平が顕著なため、出土遺物により第1面遺構と判断した場合も多く、その意味では第2面にみられた様相7が残存す

るか否かは、十分な検証を経ていない。しかしこのことを考慮しても、第２面との様相のギャップはかなり明瞭といわざるを得ない。肥前系磁器にみられる端反碗の普遍化や瀬戸美濃系磁器碗の出現、京・信楽系陶器での端反碗の普遍化、定型的な陶器行平鍋の普遍化、などが様相８の特徴である。これらは1840～1860年代を中心とした年代観を示していよう。

様相９は窯業生産遺物を主体とする資料であり、消費地における様相の素材としては必ずしも適切ではないが、肥前系（？）磁器での型紙刷りの出現、軟質陶器行平鍋・土瓶の普遍化、在地産（御厩系）焙烙における外型成形の採用、などが特徴である。SXb01では「明治廿六年（1893）」銘の木簡（3000）と共伴しており、これが刑罰（重禁錮）宣告の札であることから、著しくこれより下降する年代を想定する必要はないであろう。

2. 関連する可能性のある歴史事象

2. 1. 第６面

近世最古の遺構面であることから、当然ながら天正16年（1588）の高松城築城を念頭に置く必要がある。しかし遺構の切り合いでは最も先行する段階とみられるSKb192では、既に胎土目積みながら唐津が普遍化しており、これをストレートに築城期にまで遡上させるのは難しいといわざるを得ない。遺物の廃棄が築城後一定期間を経て顕在化したと理解するのか、あるいは築城・城下の本格的な建設が慶長期まで下ると理解できるのか、Ｂ地区にとどまらずより広域的な観点からの検証が必要である。

様相２の基準資料であるSKb255中層出土の「元和拾年」銘木簡には、「勘解由様」すなわち生駒騒動における藩邸派重臣である上坂勘解由の名がみえる。周辺に上坂勘解由の屋敷があったことを強く示唆する資料であるが、具体的な屋敷地の位置は第２節で検討する。

様相３に関連するのは、寛永17年（1640）の生駒騒動から翌年の生駒氏改易、さらに寛永19年（1642）の松平氏入部に至る藩主権力の交替である。様相３は、この劇的な変化期に併行する年代観をもつことから、第６面から第５面への整地が1642年前後に実施されたのかどうかが、問題点として提起される。様相３の伊万里は、Ⅱ－２期を主体としつつⅢ期も含まれており、Ⅱ期からⅢ期への過渡期的な様相と捉えることができる。したがって、第５面への更新は1650年代を中心に考える方が妥当であり、このことは既に『高松城下図屏風』（慶安４～承応３年：1651～1654頃成立）に描写された屋敷地に、生駒期の屋敷地を踏襲しつつこれを改変した形跡を指摘する藤村泉氏の見解（藤村1993）とよく整合するといえる。

2. 2. 第５面

第５面の下限に関連するとみられるのは、第４面構成土であるⅣａ層である。この層中には少量ながら炭化物と焼土粒が含まれており、同層が火災を契機に整地された可能性を示す。なお、土層の連続関係の検討から、Ⅳ層は西の丸町Ａ地区（古野2001）の第２面を被覆する灰層に対応しており、かなり広域な火災であったとみられる。既述のように第５面の下限は1680～1740年代の幅で捉えられるが、第３・４面も同じ年代幅であることから、その幅でもより相対的に前半段階に求めることが可能であろう。以上を踏まえると、第５面の廃絶をもたらした火災は、享保３年（1718）に外曲輪武家屋敷の大半が焼失した高松大火に求めるのが最も蓋然性が高い。

2. 3. 第３・４面

第４面は、第３章第５節で記述したように、第６面から第５面に踏襲されてきた地割（屋敷割）が解消され、より広域な範囲を単位とする地割へと変更されたことが指摘できた。これは享保年間後半（1720年代）や元文５年（1740）の絵図に描かれた、西外曲輪西半部を占有する大久保家屋敷の状況と一致する。したがって、第４面以降の遺構面は大久保家屋敷との関連を基軸に捉えてよい。

第３・４面ともに出土遺物の内容は近似しており、また火災などの形跡も認められないため、両者を区分する歴史事象の抽出は遺構理解だけでは難しい。第３面の下限は1680～1740年代の後半段階に求められるが、その時期で大久保家屋敷地と周辺が整地される契機としてまず想起されるのは、大久保家の代替わりや婚姻などであろう。

1720～1740年代の大久保家では、①享保17年（1732）の守羨から公敦への代替わり、②享保19年（1734）の藩主頼豊娘と公敦の婚姻、③延享元年（1744）公敦から新蔵への代替わり、④延享４年（1747）の新蔵の死去（大久保家直系の断絶）と藩主頼恭の庶子頼辰による継承、の４事象が注目される。中でも②・④は、大久保家と藩主松平家との緊密な結び付きを示す事象であり、半ば公的な性格を帯びる屋敷地の普請・作事の契機としては十分に相応しいといえよう。

以上から、第４面の下限は享保19年、第３面の下限は延享４年に求められる可能性がある。

2. 4. 第2面

第2面の下限に関連するとみられるのは、8C区で認められた火災の痕跡である。Ⅱb層は被災面で、その直上に灰層であるⅡa層が遺存することから、被災後は第2面の清掃・整備が行われることなく第1面へと更新された状況が想定される。この際の廃棄資料であるSXb06出土資料（様相7）の年代観は既述したが、1810～1820年代をも考慮に入れた年代で直近の火災を求めると、①宝暦12年（1762）の内町の火災、②文政4年(1821)の西通町の火災の2件が注目される。①は様相6に該当するとみられることから、②が該当する可能性がある。ただし、史料には被災範囲についての詳細な記述がなく、また今日知られる史料に漏れた火災の存在も否定できない。現状で最も可能性のある選択肢として、文政4年を考えておきたい。なお、この被災面が文政4年でないことが将来的に明確になったとしても、1. 5. で述べた理由から様相7の年代に1810～1820年代を含めることは妥当であると理解している。

2. 5. 第1面

様相8の基準資料であるSDb04では、石材の大半が抜き取られて埋め戻されていた。様相8の遺物はその際の廃棄遺物であり、明治5年（1872）に同地に懲役場（後に香川県監獄署）が造成された際に廃絶したと考えられる。

様相9の資料は、明治27～31年（1894～1898）に10代目理平が監獄内で行った窯業生産に関連するものである。

3. 各遺構面の想定年代

以上、不確定で今後も検討を要する要素も含むが、各遺構面の年代は、概ね以下のように想定できる。

第6面　(1588～) 1600年代～1650年代
第5面　1650年代～1718年
第4面　1718年～1734年頃
第3面　1734年頃～1747年頃
第2面　1747年頃～1821年
第1面　1821年～1898年

第2節　屋敷割の形態と空間構成

6面存在した近世遺構面の状況については、第3章第2～7節で既述しており、層位的把握に立脚した遺構群の区分を一応、行うことができた。各面では、屋敷地の地割線を反映すると考えられる石列（縁石）・柱穴列（柵列）・土塀基礎・溝（素掘り・石組）、あるいは地割に規制された可能性の高い大型土坑などが検出された。B地区（7区・8A～8D区）の4,539㎡という平面積は、必ずしも広い調査面積とはいえないが、武家屋敷の形態と内部の空間構成について、多くの材料をもたらしたといえる。

以下ではまず、地割関連遺構の位置関係から、大枠としての屋敷割の復元を行う。前提としては、屋敷割に関連する遺構（地割線）と、屋敷内の細分に関わる遺構（地割線）を区分することが必要であるが、その作業は近世の絵画史料（絵図・「城下図屏風」）を参考にしつつ行う。同時に遺構の形態ないし構造にも注意を払い、地割の性格（機能）についても考える。

次いで上記作業を踏まえて、屋敷地内の空間構成を検討・復元する。

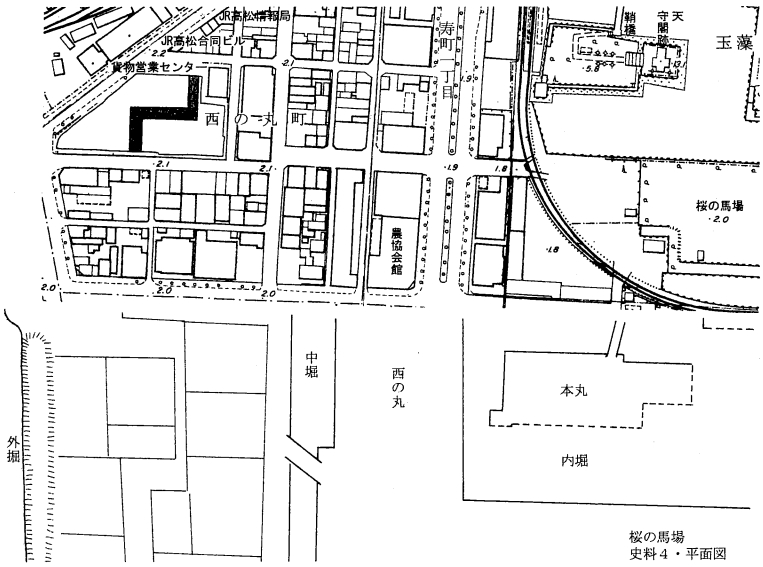
以上の作業を通じて、検出遺構の評価と、高松城下における武家屋敷地の成立・展開過程をまとめるのが、本節の目的である。なお記述は、第3章とは逆に古い時期から（第6面→第1面）行う。

1. 地割線の形態と画期

1. 1. 第6面

遺構の偏在傾向と区画　最も遡る第6面では、柱穴列や素掘り溝など、遺構面を掘り込む地割関連遺構が主体である。上層遺構による攪乱部分を除くと、第6面には遺構種別毎の明瞭な偏在傾向を指摘し得る。①素掘り溝と柱穴列は近接ないし重複すること、②柱穴列・素掘り溝と建物遺構（柱穴・礎石）には、ほとんど重複・切り合いが認められないこと、③井戸は柱穴列・素掘り溝には近接せず、建物（柱穴群・礎石）に近接すること、④大型土坑が柱穴列に近接し、かつ範囲が柱穴列に規制されていること、⑤調査区中央を一定の間隔で平行して鍵形に延びる南北主軸の柱穴列があり、その間はほとんど大型土坑主体の「空閑地」であること、の5点である。これらの現象は、①は踏襲された地割線の存在、②・③は地割線に区画された屋敷地の居住域（中心部）の存在、④は地割線に近接した非居住域の存在、さらに⑤は帯状に延びる非生活域＝「街路」の存在、として各々理解できよう。

以上の事象の中で、特に地割線に関わる①・⑤に注目すると、⑤の想定街路の両側に連なる区画の存在が認識できる。そこで以下、「街路」の西側を北から区画a～d、「街路」の東側を北から区画e・fと仮称する。「屋敷地」ではなく「区画」とするのは、遺構分布の単位である「区画」と、実態としての「屋敷地」が同一であるとは断定できないからである。



第 13 図　「街路」屈曲部と内堀との関係

「街路」に面した区画施設　まずは、「街路」に面した区画施設をみてみる。「街路」西側・北側の区画施設は、北から SAb22 － SAb31 － SBb33 － SAb23 という一重の柱穴列（一部礎石。門を含む）からなる。この柱穴列は柱間が不揃いな箇所が多く、間隔も狭いので、全てを単一時期の所産と考えることは難しく、複数時期の集積（補修）とみる方が妥当である。なお、これに関連して気になるのは、「街路」に掘削された大型土坑 SXb14 と、北側に開削された SKb152 との間にみられる遺構面の「掘り残し」の解釈である。この「掘り残し」は、連続的なＬ字プランを呈しており、南側の SXb14 が多回起的な掘削の集積であることを念頭に置くと、ここに掘削が及ばない条件（例えば可視的な構造物）が継続的に存在したことが考えられる。SKb152 は単一時期の掘削とみられ、埋土上面に SAb22 が構築される。したがって、「街路」北側の地割線は、「掘り残し」部→ SAb22・SAb31 へと変化した可能性が指摘できる。ただし「掘り残し」部では、SAb22 南端以外には柱穴列が全く検出できなかったため、区画施設の構造が問題として残る。

「街路」東側・南側の区画施設としては、２列の柱穴列と素掘り溝１条が検出された。柱穴列は、① SAb26 － SAb27、② SAb28 － SAb29、という組み合わせが確認できるが、７区の SAb24・25 との連続状況については明確でない。一応、①と②の位置関係を根拠に、「街路」により近い SAb24 を①に、SAb25 を②に対応するものとしておきたい。つまり、① SAb24 － SAb26 － SAb27 と、② SAb25 － SAb28 － SAb29 という組み合わせである。この連続関係を前提にすると、柱穴の切り合いで SAb25 → SAb24 という先後関係が確認できるため、②→①と変化したと考えられる。

では素掘り溝 SDb71 と、柱穴列との関係はどうであろうか。柱穴列①を構成する SAb26 は、SDb71 が完全に埋没した後に設置されているので、SDb71 →柱穴列①という先後関係は確実である。柱穴列①に先行する柱穴列②は、SDb71 と一定の距離を隔てて並列するため、直接先後関係を判断することはできない。したがって、SDb71 →柱穴列②→柱穴列①、あるいは SDb71・柱穴列②→柱穴列①という２つの可能性が想定される。

一方、SDb71 の南辺部西端は、「街路」を横断して北側に屈曲する西辺部へと連続しており、「街路」東側の柱穴列①・②とは異なる方向に延びている。同溝は、東・南・西の３方向で直線的に延びており、区画ａを囲繞するようなプランを呈するが、そのように捉えた場合、区画ａ・ｅ・ｆの間に「街路」が存在しない段階を想定しなければならない。その想定の問題点は、中堀に面した区画ｅ以北では中堀側（東側）の街路からの出入りが想定できるが、区画ａ・ｂ以北では西側が土居（土塁）であるために出入り口をどこに設定するか、ということにある。逆に SDb71 を「街路」南側および東側の側溝と捉えた場合、南辺部西端で「街路」と交差するにもかかわらず、暗渠構造の形跡が認められない点が問題である。「街路」を横断する露出した素掘り溝という形態は想定し難いので、遺構には表れない暗渠構造（例えば素掘りで木蓋ないし蓋石を乗せる）を想定しなければならなくなろう。

「街路」の幅員　「街路」の両側の区画施設は、以上のような変化が想定できる。東側と西側の区画施設の組み合わせを判断できる材料にも乏しいが、一応、以下のように想定しておきたい。

想定①

	西側区画施設	東側区画施設
古段階		SDb71
中段階	「掘り残し」部	柱穴列②
新段階	SAb22・31	柱穴列①

あるいは、

想定②

	西側区画施設	東側区画施設
古段階	「掘り残し」部	SDb71＋柱穴列②
新段階	SA03・SA8D205 ほか	柱穴列①

となる。想定①の場合は、調査区北半部で「街路」の存在しない段階(古段階)を考慮することになる。区画施設が整った新段階での「街路」の幅員は、北半部で6.2m、東西方向の屈折部で7.1～7.5m、南半部で7.5mを測る。

「街路」から分岐する区画施設　区画a・b間、区画b・c間、区画c・d間、区画e・f間の4箇所の区画境で、区画施設が認められた。遺構との対応関係は、以下のとおりである。

区画境	種別	遺構名
区画a・b間	素掘り溝	SDb71・SDb73・(75)
	柱穴列	SAb30
区画b・c間	素掘り溝	SDb72
区画c・d間	(素掘り溝)	(SDb78～80)
	柱穴列	SAb32
区画e・f間	柱穴列	SAb37・SAb36

これらの中で、区画c・d間のSDb78～80は、区画溝ではなく長方形プランの土坑の可能性があり、除外する方がよいかもしれない。いずれにしても、これら「街路」から分岐する区画施設も柱穴列が主体で、素掘り溝との併用がみられる箇所もある。柱穴列は、不揃いな柱間や切り合い関係から、複数時期の集積(補修)が指摘できるが、構築された地割線から大きく位置を変更しないことが特徴である。また、複数の区画施設に挟まれた「路地」的な通路は、区画a・b間でその可能性を指摘できるのみであり、基本的には区画の分割(分離)を主な機能としていたと考えられる。

絵画史料との比較　以上、検出遺構に依拠した区画施設の状況を検討してきたが、これを絵画史料と比較して「屋敷割」として実態化したい。

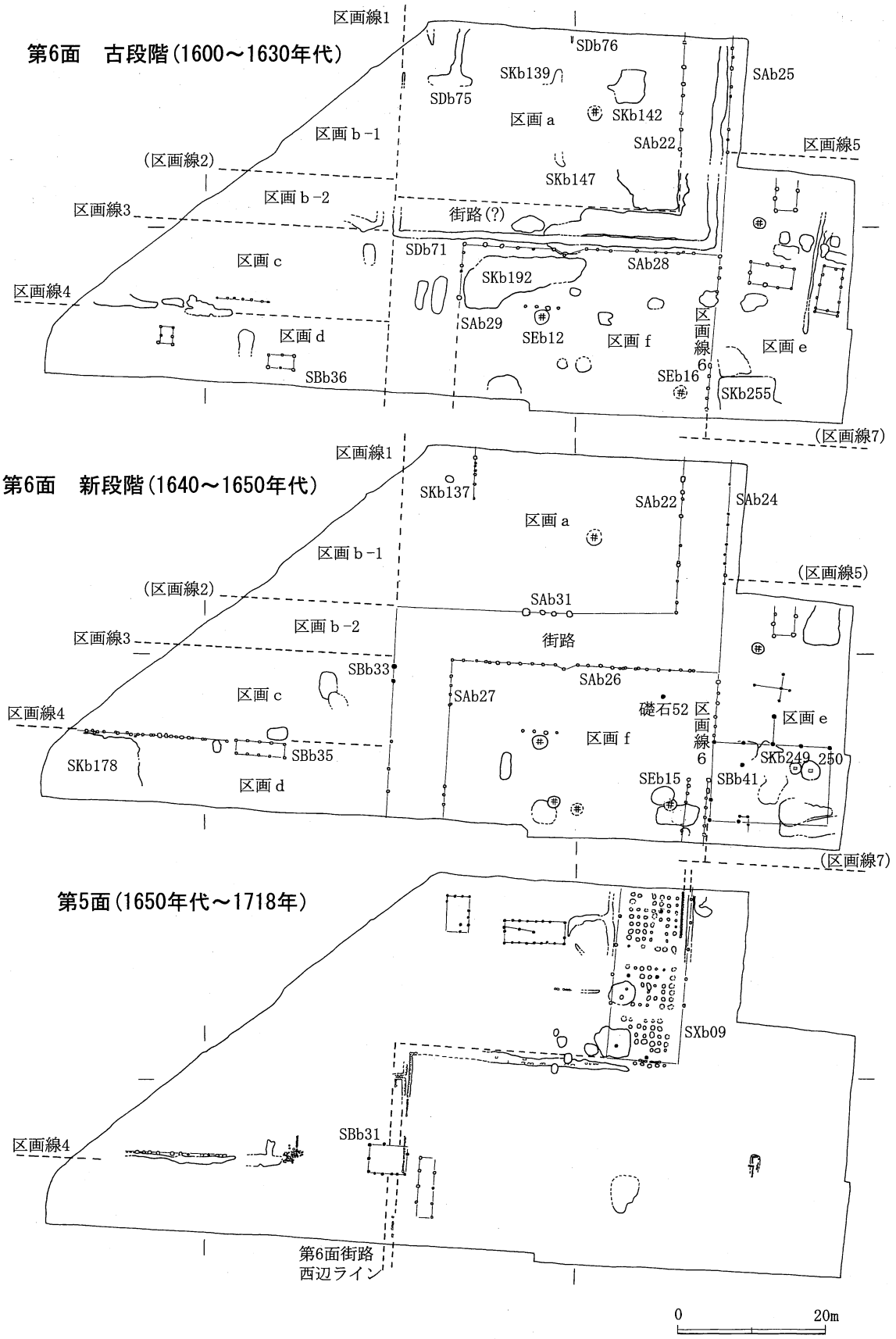
第6面の年代の下限は、既述のように1650年代と捉えている(第4章・第6章第2節参照)。1650年代以前の絵画史料としては、以下のものがある。

番号	史料名	成立年代
1	「讃岐探索書」所載絵図	寛永4：1627
2	「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」	寛永16：1639頃
3	「古城及古戦場図」	寛永16：1639頃か
4	「高松城下図屏風」	慶安4～承応3：1651～54頃
5	「讃岐高松丸亀両城図高松城図」	不明。1650年代以前か
6	「讃岐高松丸亀両城図高松城下図」	不明。1650年代以前か

記入内容から史料1～3は生駒期の、史料4は松平初期の状況を描写したものといえる。史料5・6は生駒・松平いずれの時期かは不明だが、1650年代以前と捉えても大きな齟齬はない史料である。これらの中で、史料3・6は街路を含めた屋敷割の形態を読み取るのに有意であり、史料2はそれらとの大枠での対応関係を検討できる。史料4は、屋敷割・区画施設の形態に細かな描写がみられ、また屋敷地内の構成についてもある程度実際の景観(ないし作成者の認識)を反映している可能性がある。

まず「街路」と史料との対応関係をみる。史料3・4・6では、西外曲輪の中央を南北に貫き、中程で鍵形に屈曲する街路が描かれている。この街路屈曲部の位置を確認するために、内堀南辺(桜の馬場北辺)との位置関係をみてみる(第13図)。史料3では、内堀南辺の西側延長ラインよりもやや南側、史料4・6ではやや北側に位置するように描かれている。このように、史料によって多少のばらつきはあるものの、西外曲輪街路の屈曲部は、概ね内堀南辺の西側延長ライン付近に存在することが指摘できる。現状では内堀南辺の西側延長ラインは、当調査区(B地区)のCラインにほぼ該当しており、想定「街路」の屈曲部はわずかにこれより北側に位置している。このことから、検出された「街路」が西外曲輪の中央を南北に貫く街路である蓋然性は極めて強いと判断できるので、以下では「街路」＝絵画史料に描かれた街路との理解に立つことにする。

次に街路屈曲部を定点にして、最も克明な史料4の屋敷割と、区画a～fとの対応関係を検討する。史料4では、街路の両側は土塀による区画として描写されている。一方、検出遺構によると街路の両側は、既述



第 14 図　第 6 面・古～第 5 面における主要遺構と地割の状況

のように柱穴列によって区画された段階（新段階）が指摘できた。これらの柱穴列は、地面に打設する杭列ではなく、掘り方を伴う掘立柱構造であることが明確で、土塀の芯材としても理解できる。また年代的にも第６面の中では最新であり、「城下図屏風」の景観年代とも整合する。以上から、第６面新段階における街路沿いの区画施設は、史料４（「城下図屏風」）に描かれた土塀とみても何ら矛盾ないといえよう。

同様に、街路から分岐する区画施設を、史料４と比較する。史料４で当該調査区（Ｂ地区）に相当すると思われる範囲の区画施設を、仮に区画線１～７と番号を付して対応関係をみたい。区画ａ・ｂ間のSDb71西辺部・SDb73・SAb30は、街路の西側屈曲部（北西隅）から北に分岐しており、位置関係としては区画線１に対応する。しかし史料４では、土塀として描かれており、SAb30に史料との共通性がみられるに過ぎない。これは、SDb71が第６面でも先行する古段階ないし中段階の遺構とみられ、史料４の景観年代よりも先行することと関係あるかもしれない。いずれにしても、これ以上の検討は遺構の遺存状況が悪いために困難である。

区画ｂ・ｃ間は、わずかにSDb72が検出されたのみであり、大半は上位遺構の攪乱で消滅していた。このためやはり比較が難しい。その東側延長は街路屈曲部南辺にあたるため、屋敷地内を細分する区画線３に対応すると考えられるが、史料４では土塀として描かれており、その形態については合致しない。

区画ｃ・ｄ間は、史料４では区画線４に対応する可能性をもつ。検出されたSAb32は、柱穴の重複が認められ、継続的な区画の維持・踏襲を反映するようである。また土居直近まで連続する。状況的には、史料４と一致している。

区画ｅ・ｆ間は、区画線６と一致する位置関係にある。土塀として描かれており、SAb37・SAb36とは矛盾しない。

区画ｅの北限はどこに設定できるだろうか。８Ｄ区の北側の９区（Ｃ地区）南端で東西方向の柱穴列が検出されており、概報ではSBb37の北辺部と捉えられている（北山・宮崎ほか1998）が、SBb37とは位置がずれており、別の遺構（柱穴列）と捉える方がよいであろう。井戸の分布なども踏まえると、この柱穴列が区画ｅの北限に相当する可能性がある。

区画ｅ・ｆの南限はどうであろうか。８Ｂ区南端部に大型土坑が集中し、それが東側の12Ｊ区まで連続していることを踏まえると、この大型土坑付近の東西ラインが南限にあたる可能性が高い。より具体的には土坑群の北側か南側であろうが、大型土坑SKb255埋め戻し後に主屋とみられるSBb41が構築されているため、土坑群は区画ｅの範囲内と捉えられる。したがって、大型土坑群の南側が区画ｅ・ｆの南限であると考えておきたい。

屋敷割の想定　以上の検討を踏まえると、区画ａ・ｃ～ｆは史料４との比較から、少なくとも松平初期（1640～50年代）には屋敷地と捉えてよいようである。区画ｂについては、攪乱が著しいため不明な点が多いが、史料４との対応関係をみると、街路屈曲部北辺の西側延長で地割線（史料４の区画線２）が入り、２つに分割される可能性がある。そこで区画ｂは、想定される区画線２を介してｂ－１・ｂ－２に細分する。

以下に、周辺地割も考慮して新段階の屋敷地の想定規模を記す。

区画	規模（m）	面積（坪）	生駒期住人	松平期住人
a	38×(21.5)		小池伝右衛門？	不明
b-1			橋本伝左衛門？	不明
c＋b-2	(19)×(50)	(287)	松山斎宮	不明
d	(50)×(95)	(1,436)	森 出雲	川南瀬兵衛
e	(45)×(50)	(680)	上坂丹波	間宮九郎右衛門
f	(28)×(35)	(296)	不明	不明
	(85)×(75)	(1,928)	上坂勘解由	牛窪勘兵衛

上記想定の場合に問題になるのが、上坂勘解由関係木簡（3137）の出土地点をどう理解するか、という点である。木簡は区画ｅ南端の大型土坑ＳＫｂ255より出土しているが、この土坑は既述したように建物との関係から区画ｅすなわち上坂丹波の屋敷地と見なすのが妥当であり、上坂勘解由屋敷地は、この地点よりも南側の調査区外であると捉えられる。逆にこの木簡の出土をもって、上坂勘解由の屋敷地の北限を調査区内に求める考え方もあろう。しかしその場合、上坂丹波の屋敷地の範囲（南限と北限）をかなり狭めて考える必要があるし、何よりも史料４と一致する屋敷の境界線を遺構中に見出すことが困難になる。区画関連遺構の状況から屋敷割を想定する上記の方法による限り、SKb255を上坂勘解由の屋敷内に含めて考えることは、極めて難しいといわざるを得ないのである。

したがって、木簡の出土地点に関する問題としては、上坂丹波の屋敷に上坂勘解由の名前の入った材木荷札が廃棄されている、という「事象」を出発点にするのが、妥当な議論の立て方といえる。そしてその「事象」

の解釈は本稿で示すことはできないが、隣接する同族屋敷の土地利用形態や、屋敷の作事に際しての資材調達の方法などを踏まえた議論が求められよう。

なお、これよりも遡る古段階の素掘り溝（SDb71）による区画ａの囲繞については、史料から当否を検証することはできない。ただし史料４での描写をみると、区画ａ・ｂを含む街路屈曲部北側の屋敷地は、東西に並列する２区画の境界（すなわち区画線１）が優先し、これに直交する東西の区画線は区画線１によって断続的に延びている。このことを重視すると、当初は区画線１によって分割された屋敷地が東西に並列していた可能性を考慮の内に入れてもよいように思われる。

1. 2. 第５面

遺構分布の変化　第５面での遺構分布は、一見して第６面とは異なる。第６面区画ａ～ｆ内の相当範囲では、建物関連遺構・土坑が比較的集中する箇所と、ほとんど分布しない箇所があり、個別に完結する「屋敷地」としての景観とは異なる様相を呈するようになる。

街路相当部の変化　区画（＝屋敷地）の分割基準にもなっていた街路にも、大きな変化が指摘できる。第６面新段階では街路の両側に柱穴列（土塀）が確認できたが、第５面では「街路」の西側ないし北側にのみ区画関連遺構が認められるようになる。ただし厳密には、これらの区画遺構も第６面のそれと全く同一ではなく、若干位置がずれている。８Ａ・８Ｃ区で検出された区画関連遺構は、以下のように細分できる。

	検出面	遺構名
	第５面・下位面	SDb67・SDb65
	第５面・上位面	SDb66
	同上	SDb66・SAb20・SAb21

一方７区でも、やはり薄い整地層を介在させてSAb16 → SDb62 という２段階の変化が認められた。遺構の形態は異なるものの、整地層の介在を重視すると、大別２段階の変遷が想定できよう。すなわち、

	検出面	遺構名	
古段階	第５面・下位面	SAb16・ SDb67・SDb65	
新段階	第５面・上位面	SDb62	SDb66
			SDb66・SAb20･21

となる。なお、これらの区画関連遺構と重複した位置関係の建物も存在するため、さらにこれらの区画遺構が機能しなくなった段階も想定可能である。また、古段階の SDb65 は東西方向の暗渠であり、この西端部で南北に延びる SAb19 が第６面の街路西辺とほぼ一致する場所にあたる。したがって SDb65 の検出長を幅員とする「路地」的な空間が存在した可能性があり、SDb67 はその東辺、SAb19 が西辺を画する可能性が指摘できる。SAb16 もやはり第６面街路の西辺にあたることを考慮すると、第５面での「路地」は調査区内では連続していたと考えられる。また、「路地」から分岐する区画境の遺構は、第６面の区画ｃ・ｄ間（区画線４）と重複する SDb64・SAb17 に認められるのみである。

幅員６ｍを超える「街路」から幅員 1.5ｍ程度の「路地」への変化は、既述した建物・土坑の偏在傾向とも相俟って、生駒期～松平初期の絵画史料で描かれたような屋敷割とは異質な景観を窺わせる。

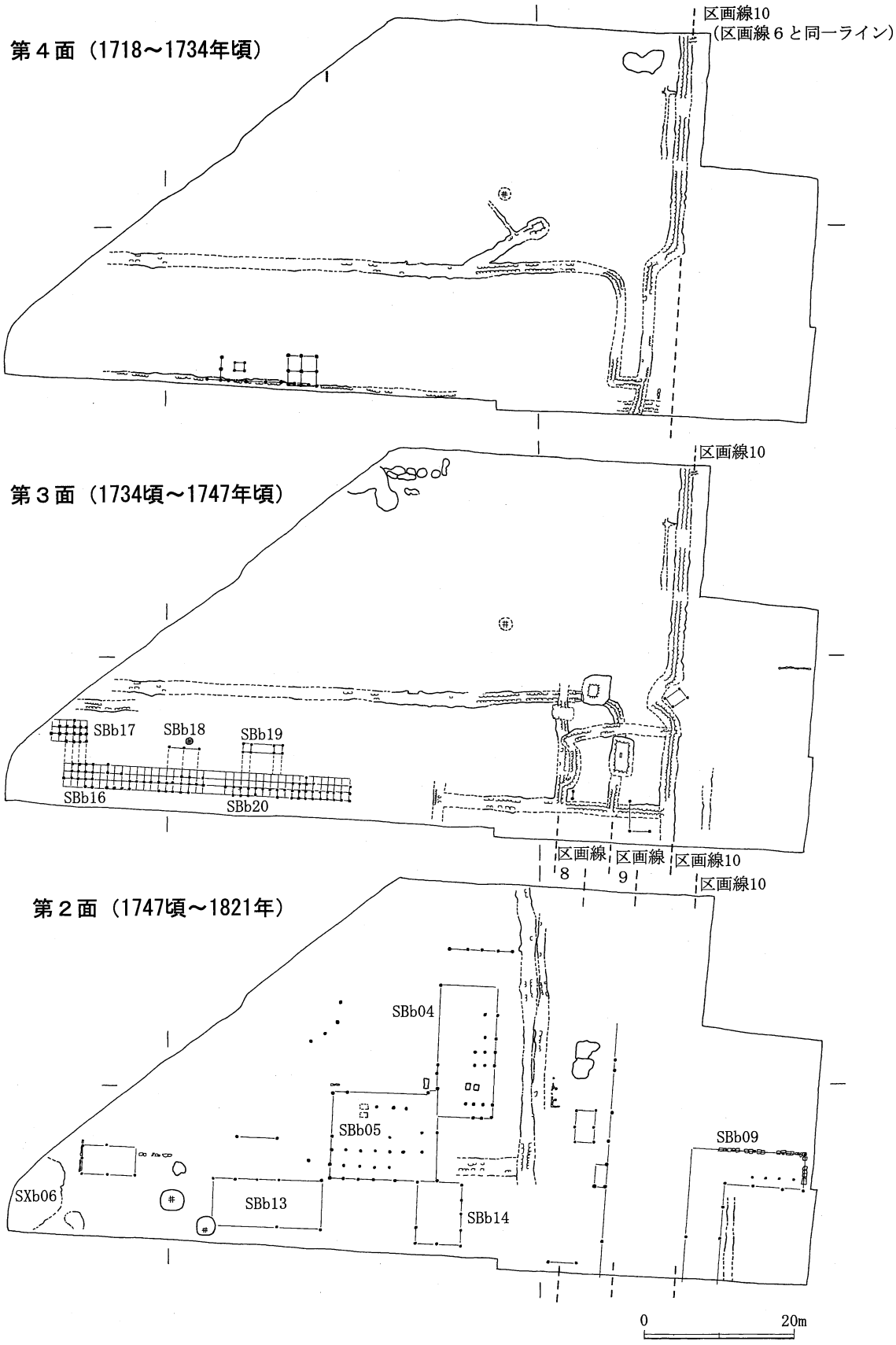
1. 3. 第３・ 4面

地割線の変化　第３・４面での遺構分布は、第５・６面のそれとは全く異なる。「街路から路地へ」とかろうじて踏襲されてきた地割線は消滅し、調査区東半部を南北に延びる石組溝が出現する。この石組溝は、第４面から第３面にかけて若干位置を変更しており、以下のようにまとめられる。

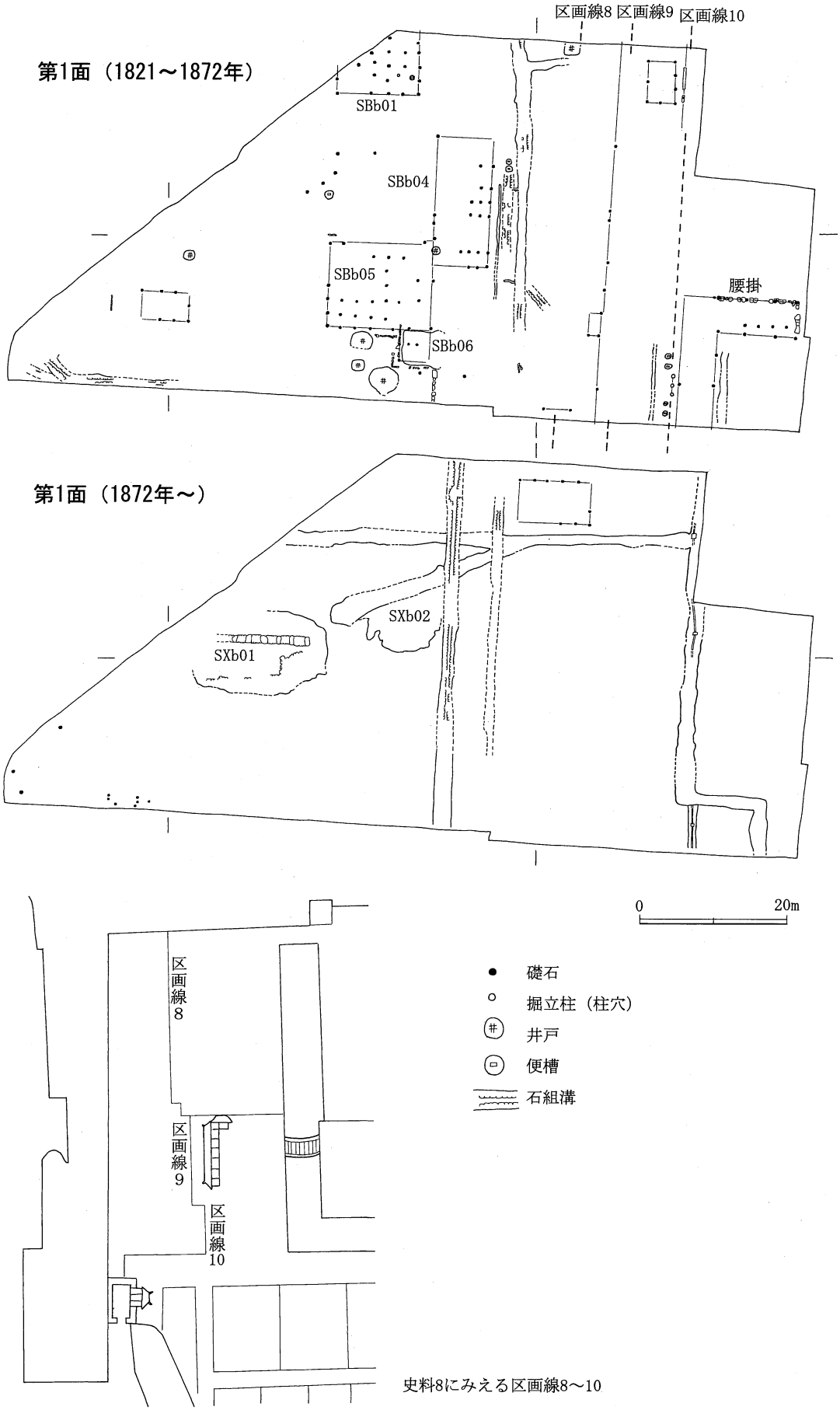
遺構面	遺構名
第４面	SDb51 → SDb49 → SDb28 北半部
第３面	SDb28 南半部→ SDb28 北半部

SDb28 北半部は７区と８Ｄ区北半部では、第６面の街路東辺部にほぼ該当するが、第５面の「路地」は街路西辺を基準としていたため、SDb28 北半部の位置が第６面から直接踏襲されたものではないことが注意される。この南北方向の石組溝は北側のＣ地区にも連続しており、最終的には西外曲輪北辺で海に注ぐ。西外曲輪全体に関わる、新たな広域的地割線と評価できよう。ところで何らかの地割に関わるとみられる遺構は全て石組溝であるが、併走して空閑地（街路）を形成するとみられるものがないこと、また暗渠構造のものが多いこと、などから屋敷割ないし屋敷内の分割線を厳密に反映するとは限らない。そこで、上記 SDb28 北半部から SDb51 まで連続する石組溝（暗渠）と絵画史料との対応関係を検討する。

絵画史料との比較　第４面の年代は、1718 年～1734 年頃、第３面の年代は 1734 ～ 1747 年頃で捉えられる。第３・４面については享保３年以降で延享年間以前の絵画史料との照合が必要になる。当該期の城下絵図としては、以下の４点が知られる。



第 15 図　第４面～第２面における主要遺構と地割線の状況



第 16 図　第 1 面における主要遺構と地割線の状況

番号	史料名	成立年代
7	上原氏蔵鎌田共済会写「高松城下図」	享保9～11頃:1724～1726頃
8	松平氏蔵神崎氏写「高松城下図」	享保10：1725以降
9	「享保年間高松城下図」	同上
10	「讃岐国高松地図」	元文5：1740

これらの絵図は正確な測量図ではないので、対象物の縦横比率などを検証する精度にはない。しかし、外曲輪周辺の相対的な位置関係については、大きな違いはない。そこで実寸ではなく、あくまで相対的な位置関係にもとづいて遺構との対応関係を検討する。

史料7～10では、西外曲輪を東西に2分する地割が存在することが読み取れる。すなわち、西半部の大久保飛騨の屋敷地と、東半部の会所ないし西御屋敷と西下馬である。この地割線は、西下馬から会所（西御屋敷）にかけて屈折しながら延びており、南北方向でみた場合に3本の異なる基準線として表れる。仮にこれを西から区画線8～10とする。SDb28北半部以南の石組溝は、これらのいずれかに対応する可能性が考えられよう。

手掛かりとなるのは、中堀より南側の外曲輪（南外曲輪と仮称）における地割との相対的な位置関係である。史料7・8・10で稲田求馬屋敷の西側を画する南北主軸の街路に注目したい。この街路の東辺を北側に延長したラインが、区画線10と腰掛西辺部にあたる、という点でいずれも一致する。ところでこの街路は、松平初期の「高松城下図屏風」（史料4）においても描かれており、その東辺の延長ラインは西外曲輪鍵形街路の屈曲部以北の東辺にあたる。つまり第6面遺構で換言すると、SAb24・25が南外曲輪街路の延長上（区画線10)にあるということになる。第3・4面SDb28北半部は、第6面SAb24・25とほぼ同じ位置にあることから、これらの石組溝は区画線10上に構築されたといえよう。

なお、調査区は西新御門の西側に位置しており、第1・2面ではC－14グリッド付近で腰掛とみられる建物SBb09も検出されている。この付近は史料7～10によれば、腰掛の西辺部以外には区画線10が可視的な状態の区画施設としては存在しなかったことが窺える。このことは、SDb28北半部が蓋石を伴う暗渠であったことと符号する事象といえる。また、腰掛の背後（西側）に会所（西御屋敷）に通じる街路（区画線9・10の間）が存在したことが描かれるが、第4面ならびに第3面①・②段階の石組溝の組み合わせ（第3章第4節4参照）から、SDb28南半部とSDb37の間の7.0m幅の箇所がこれに相当する可能性がある。つまり、SDb37が区画線9に乗るのではないか、という想定である。そのように捉えると、SDb48とSDb28南半部が平行して西側に屈曲するのは、会所の入り口付近で西側に街路が折れることとも合致するようにみえる。想定の上に想定を重ねることになるが、SDb34の位置に区画線8が求められるのではないだろうか。

大久保家屋敷の排水系統　以上のように、当該期の西外曲輪の地割線については、ほぼ確実な区画線10＝SDb28北半部にもとづき、実際の遺構で想定することができた。以下ではさらに、大久保家屋敷の内部に設定された石組溝の変遷から、屋敷内の排水系統についてまとめておきたい。

第3章第4節4で既述したように、屋敷内の排水系統は①地割線沿いに設定されたSDb51ないしSDb28南半部から屋敷内に分岐し、西側（おそらく堀川）に排水する段階（第4面～第3面①段階）から、②屋敷内を北東方向に流下して会所入り口付近でSDb28北半部に合流する段階（第3面②・③段階）へと変化する。つまり、当初は幹線水路から分岐・排水する系統であったものが、SDb28に集中する系統へと変化したことが指摘できる。

おそらく区画線10上の石組溝SDb28は、南外曲輪から連続する排水路であったと推測され、さほど大きくない規模からみても細かなピッチで排水路を分岐させた方が効率的であったと考えられる。しかし実際には、特定の水路に排水を集中させる方向で整備されている。その理由としては、①藩の大身家臣である大久保家の屋敷地を横断して排水することが憚られた、②堀川港に土砂が流入することを避けた、③土居を貫通する排水路では維持・管理が困難だった、などが考えられるが、①に関連して大久保家屋敷内の整備が進んだこととも関係するのかもしれない。

1. 4. 第2面

西下馬腰掛　地割線ではないものの、これに関連する遺構として西下馬に伴う腰掛がある。第2面から第1面に継続したSBb09は、第3・4面での区画線10よりも東側に位置していること、また逆L字プランに復元され史料の表現と一致すること、さらに想定される西新御門に対向する位置にあることから、腰掛の建物と判断できる。

石組溝の付け替え　第3・4面で区画線10上に構築されたSDb28は、第2面の造成によって埋め殺しされ、その際南半部では蓋石ならびに側石が撤去される（図

版44 j－j'断面参照)。しかしSDb28北半部では、攪乱による以外は蓋石がそのまま遺存しており、また第1面相当とみられる慶応頃の絵図(史料19)に外曲輪北辺護岸での排水口の表現がみられる。このため屈曲部以北は、南外曲輪からの排水系統は分断されつつも、限定的に幕末まで暗渠としての機能を維持していた可能性はある。

これとは別に、第2面で新規に南北主軸の石組溝SDb04が構築される。遺存状態からは開渠・暗渠の判断は難しいが、西側直近に存在する大型建物SBb04・05との関係を考えると暗渠の可能性も否定できない。SDb28に代わる幹線的な排水路と捉えられよう。なおSDb04と第4面の暗渠SDb30との交差部では、SDb30側の取り付き部を改修しており、再び屋敷内を横断する排水系統への改変が認められる。しかしSDb30は大型建物SBb05と重複した位置関係にあり、浚渫などの維持・管理が困難な状況にあり、また既に第2面造成時にB－12グリッド以西は蓋石・側石が撤去されているため、第2面段階でSDb30がどこまで有効に機能したかは疑問である。

絵画史料との比較　第2面の年代は、既述のように1747年頃～1821年と考えられる。この年代幅に収まる絵画史料としては、以下の3点がある。

番号	史料名	成立年代
11	「日本輿地南海道郡郷部讃州高松地図」	宝暦7：1757？
12	「讃州高松地図」	宝暦後期頃
13	「寛政元年巳酉年五月高松之図」	寛政元：1789

史料11～13の西外曲輪の描写は、第3・4面相当の史料7～10と同一である。しかし史料14では、会所(西御屋敷)と大久保家屋敷の間の街路が、会所前面で収束せずに、西外曲輪北端部まで延びるように表現されている。史料14の屋敷割は、細かな出入りまで表現されていないが、区画線7を西辺、区画線8ないし9を東辺とする街路状の空閑地が存在したことになろう。いずれにしても、かつて会所(西御屋敷)だった区画は明地的な地目「原」と表現されており、この空閑地がそこへ至るための街路とは考え難い。防火帯的な性格とみた方がよいであろう。

検出遺構との対応関係をみてみる。第2面では、想定される区画線7付近は火災に伴う大型土坑(SKb62・63ほか)が集中しており、史料14の描写と整合する。また、新たな幹線排水路であるSDb04は、区画線7からやや西側に位置しており、やはり新たな地割線を前提にして、そこに隣接した大久保家屋敷内に構築されたと捉えられる。

1. 5. 第1面

絵画史料との比較　第1面は、文政4年(1821)と推測される火災以後で、明治5年(1872)の懲役場(香川県監獄署)建設を一応の下限とする。この年代幅に収まる絵画史料としては、以下の5点がある。

番号	史料名	成立年代
14	「天保十五年高松之図」	天保15：1844
15	「天保十五年高松城下図」	天保15：1844
16	「高松市街古図」	天保7～弘化3頃：1836～1846頃
17	「東讃高松絵図」	弘化年間：1844～48
18	「安政四未年高松之図」	安政4：1857
19	「高松城全図」	慶応頃

史料18では18世紀代の屋敷割に近い描写であるが、史料17・18では史料16と共通した地割が描かれる。

検出遺構では、第2面で構築されたSDb04は東側石を改修して第1面まで踏襲されており、これより東側には建物をはじめとする遺構が希薄であることから、区画線8の存在の可能性がある。また、土塀SAb01が区画線10の位置に構築される。

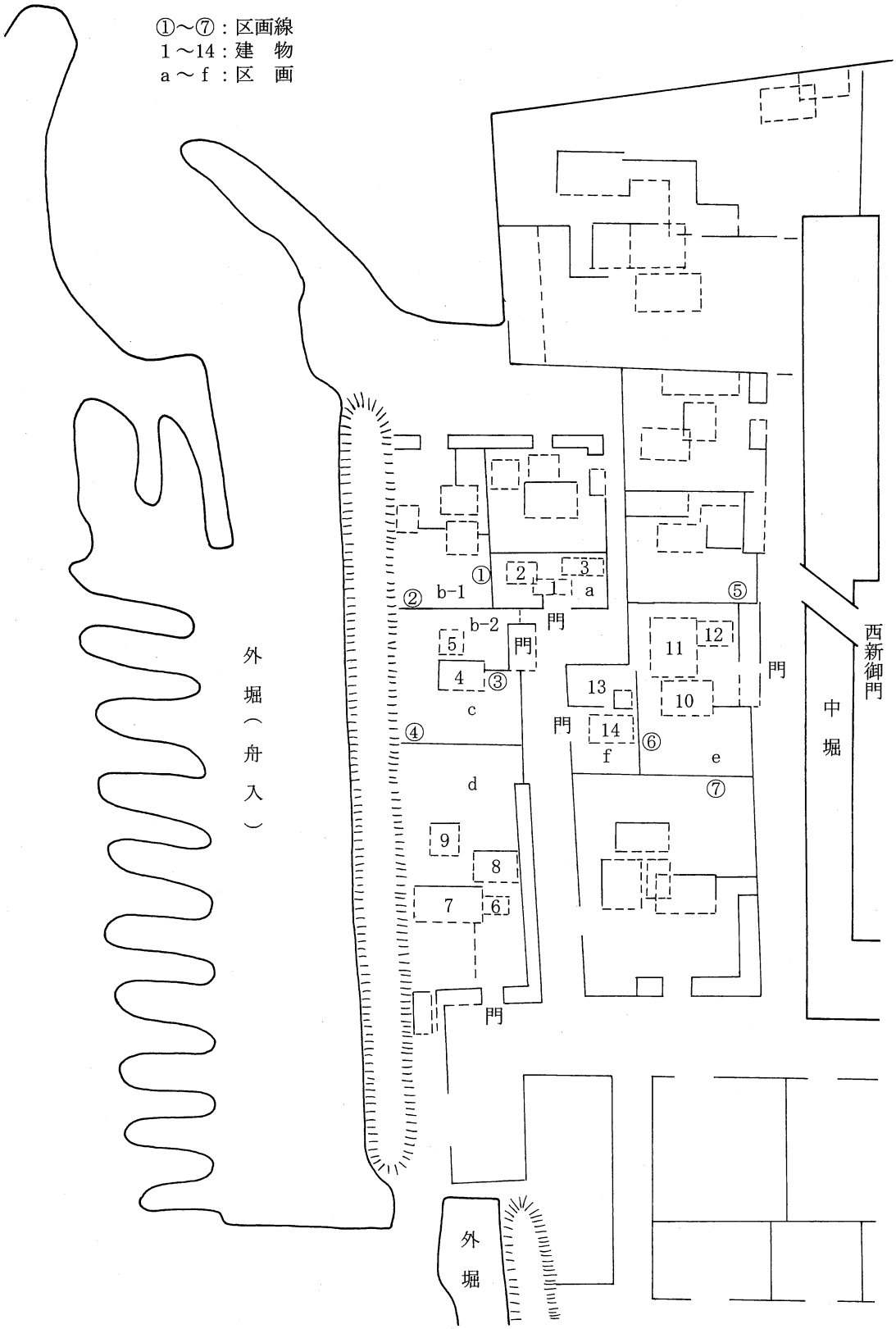
なお、明らかに明治～大正期に下る竹樋SDb03・18の埋設は、区画線10に規制された位置にある。明治14年(1881)の西外曲輪は「懲役場」であるが、近世の屋敷割を温存しつつ造営されたようである。

2. 屋敷地内の構成

2. 1. 第6面

区画a　史料4(「高松城下図屏風」)の描写(第17図)では、区画aは街路屈曲部側の南辺中央に門(棟門か)があり、門西端から北側に向かって塀が延びる。その先に板葺きの東西棟(建物1：玄関か)が1棟あり、その北側に板葺きないし檜皮葺きの東西棟(建物2・3)が並列する。

検出遺構の分布をみると、SDb76－SKb139－SKb146を境とした東西に並列する空間の存在が指摘でき、史料4に近似した状況を示す。東側にはピット・井戸・土坑が認められ、建物の復元にこそ至らないが、生活空間が東半部に重点を置いた構成であったことを窺わせる。なお、東半部の大型土坑SKb142からは、瓦質土器茶釜とともに関西系焙烙の施釉品(灰器か)が出土しており、茶の湯に関連する遺物の可能性もある。また、円盤状土製品の集中的な出土も注目される。



第 17 図　「高松城下図屏風」平面図

これに対し、西半部は区画遺構（溝・柵列）以外に遺構がほとんど認められず、対照的である。空閑地と考えるのが常識的であるが、西半部を取り囲むSDb75やSKb139は南側が屈曲しており、あたかも建物の雨落ち溝のような状況を示す。このことから、例えば痕跡を残さない礎石建物が存在した可能性も否定できない。その意味で、西半部西辺にあるSKb137から、油煙の付着しない土師質土器皿が17個体以上まとまって出土したことは、この空間の非日常的な性格を示唆するかもしれない。

区画南辺中央の街路沿いには、SAb31がある。街路沿いの柵列よりも柱穴掘り方や柱材の径が大きいため、柵ではなく門の可能性がある。とすれば史料４の描写と一致する。

区画ｂ－１　ほぼ全面が攪乱されており、史料４との比較はできない。史料４では、海（北）側の街路に面した屋敷地の南半部で植栽がわずかにある空閑地として描写されている。

区画ｂ－２・ｃ　史料４では、街路の西辺に面した門（棟門か）があり、門の南端から西に向かって塀が延び、その突き当たりに漆喰塗り壁で檜皮葺きの東西棟（主屋：建物４）が描かれる。建物４の北側には、板葺きの南北棟（建物５）があり、両者はＬ字形の配置をなす。建物４ならびに塀の南側は、植栽のある空閑地となっている。

検出遺構では、明確に復元できる建物遺構はなかった。区画ｃの南中央部では柱穴の集中箇所があり、やや大型の柱穴SPb537・539・554・568がＬ字プランに並ぶ。これを大型の掘立柱建物とみて、建物４に対応させる案もあるが、建物４は礎石建物の可能性も否定できない。なお、街路に面した箇所には、掘立柱構造の柱穴列（史料４では土塀）に連なるかたちで礎石立ちの棟門SBb33が検出された。細かくみると、史料４では門の位置は街路屈曲部にあり、検出遺構は若干南にずれることになるが、大まかな位置関係としては大型柱穴群と門の位置は史料４の描写に近いといえよう。

大型土坑は区画ｃの東部と西部、ならびに南端に集中しており、門から延びる塀との位置関係が問題になるものの、史料４と大きくは矛盾しない。ただし大型土坑の分布域を非建物空間と捉えると、史料４で広く描かれた南半の空閑地よりもかなり狭い空間とみなさざるを得ない。しかし街路を基準にすると、区画ｂ－２・ｃの間口は19ｍ前後に捉えるのが妥当であるため、空閑地が存在したとしても実際には狭い範囲にとどまらざるを得ない。

区画ｄ　西外曲輪南端まで続く、間口50ｍ・奥行き95ｍ前後の広大な屋敷地の一部と考えられる。史料４では、南側の街路（西御門から大手門に至る東西方向の筋）に面して長屋門があり、鍵の手状街路に面した東辺には、門と連続した大規模な長屋がある。長屋門西半から北側に向かって塀が延び、その北側正面に板葺きの小建物（建物６）があり、西側に隣接して檜皮葺きで漆喰塗りの主屋（建物７）が描かれる。建物７との位置関係からすると、建物６は式台（玄関）か。主屋の北側には、漆喰塗りで板葺きの東西棟（建物８）と、板葺きの南北棟（建物９）がＬ字形に並び、さらに北側は空閑地となっている。調査区はこの屋敷地の北端部であるため、いずれの建物も検討対象から除外される。

検出遺構をみると、大型土坑が西端部（SKb178）にあるのが目立ち、他にも散在している。このような在り方は、大局的には史料４での空閑地という所見に見合うようであるが、一方でかなりの数の柱穴があり、小規模ながら建物を構成する（SBb35・36）ことも看過できない。やや不定形なプランからみて、恒常的な建物群とは異なる、簡易な構造の掘立柱建物とみられる。屋敷内での諸作業の空間として、敷地奥の空閑地が用いられたことを示していようか。

区画ｅ　間口45ｍ・奥行き50ｍ前後とみられる屋敷地の西端部である。史料４では、中堀端（西側）の街路に門（長屋門）があり、門の南端から西側に延びる塀が描かれる。塀の正面には檜皮葺きで漆喰塗りの建物10があり、その北側に檜皮葺きの南北棟（建物11）と板葺きの東西棟（建物12）がＬ字プランに配置される。建物10・11はほぼ同規模に描かれ、屋根も檜皮葺きであることから、いずれかが主屋（主殿）であるとみられる。また塀と建物10の南側には、植栽だけの空閑地が描かれる。

検出遺構としてはまず、礎石建ちの大型建物SBb41の存在が注目される。面積200㎡以上に達しており、柱材も20㎝角前後の角材とみられることから、主屋（主殿）級の建物とみるのが妥当であろう。先行する大型土坑SKb255の年代観との関係から、この建物は様相３（1640～1650年代）に存在していた可能性が高く、史料４はその年代幅に収まる。史料４では、区画ｆとの境界に近い東西主軸の大型建物は、建物10に限定できる。一方、北側の建物11に相当する建物は、SBb41－10の存在を考えると、一応、SBb41から北に延びる別棟の存在が想定できるため、存在した可能性は指摘できる。なお、２連式の便槽とみられるSKb249

・250は、出土遺物からSBb41との併存関係が考えられ、主屋内の便所として捉えられる。

区画ｅ北半部には柱穴群が集中し、３棟の掘立柱建物の存在が復元できる。また、井戸も存在する。これらは周辺の土坑とは重複しておらず、土坑出土遺物の示す様相１・２に遡るとみてよいであろう。逆に南半部では大半が様相２～３の大型土坑で占められ、周辺にも柱穴が少ないため、SBb41以前には空閑地であった可能性が高い。いずれにしても、史料４に描かれたような屋敷地南半部の広い空閑地を想定することは難しく、区画ｂ－２・ｃ同様に空閑地の規模については史料と矛盾する。

区画ｆ　鍵形の街路に面した西辺に門（棟門）があり、門の北端から東へ向かって延びる塀の先（もしくは北側）に板葺きの南北棟（建物13）、塀の南側に檜皮葺きの東西棟（主屋：建物14）が描かれる。

建物遺構は不明瞭なので、土坑の分布をみてみる。土坑は、区画内の北西隅・南西部に集中（南東部のSKb229は第６面最末期の土坑なので除外）している。史料４では、この付近は空閑地として描かれているので、土地利用の大枠としては近似するともいえる。これを踏まえると、礎石52が土坑の集中しない区画ｆ北東部に位置することが注目でき、この周辺に建物が復元できれば建物13に相当する可能性がある。また井戸が３基検出されており、SEb12は塀より南側の空閑地、SEb15・16は建物14の南側直近に存在したとみられる。

史料の描写と検出遺構　以上、史料４での描写と検出遺構の対応関係を検討してきた。いずれの区画においても、建物空間・非建物空間という区分は史料４とさほど大きな矛盾はないことが指摘できた。ただし検出遺構をみる限り、個々の建物の位置・方向・規模などが、史料４と完全に一致するものは極めて少ない。多くが柱穴列・柱穴群などの存在から、「その付近に建物を想定しても矛盾はない」、という程度の共通性であり、積極的に史料との一致を見出せる状況にはない。唯一、区画ｅのSBb41の位置・規模については、史料４との一致をみた。しかし周辺の建物配置や、塀に仕切られた南側の空閑地の存在、など全体の空間構成という点では、史料４とむしろ整合しない要素が指摘できるのである。

そこで問題になるのは、果たして史料４（「高松城下図屏風」）が正確に（つまり写実的に）武家屋敷を描写しているのか、という点である。これは、歴史資料としての史料４の性格に関わる、史料論的な問題ではある。ここでそれに立ち入ることは困難だが、藤村泉氏が指摘するように、外曲輪で石高の高い家臣ほど、①建物の数が多く、②入母屋造で唐破風の玄関・中門を備える主屋をもち、③瓦葺き建物があり、④土塀に腰板張りを施す傾向に描かれるという（藤村1991）。このことは、屏風の製作者が実際の屋敷割と、そこに住む家臣の禄高についての情報を入手していた可能性を示している。屏風を平面図に起こす（第17図）と、同時期の史料１～３以上に克明かつ正確で、18世紀以降の絵図と共通する表現がみられることから、少なくとも屋敷割に関しては前提となる詳細な平面図（絵図）が存在したことは間違いなかろう。また藤村氏が指摘するように、「高松城下図屏風」での屋敷地には複数の長屋門をもつ事例があるが、その中には大老彦坂織部屋敷のように、複数の生駒家家臣の屋敷を統合したことが史料（『生駒家廃乱記』附録）から読み取れるものがある。長屋門を複数伴う屋敷地は、生駒期の屋敷割の再編を示すとみられ、その意味では屋敷地の区画施設や門についてもある程度実態に即して描かれているといえよう。

一方、区画ｂ－２・ｃと区画ｅで問題になった屋敷地内の表現については、屏風の描写方法のくせで説明できると考える。外曲輪内での位置、あるいは門と主屋との関係とにかかわらず、「高松城下図屏風」では屋敷内の南側（すなわち屏風の奥側）が空閑地状に描かれている。少なくとも外曲輪内の武家屋敷では、この描写方法に例外はない。これに関連して東外曲輪の町屋の描写表現をみると、町屋の宅地割を示す木柵の延長が、通りに面した町屋の基礎ではなく屋根に対応することが読み取れる。つまり作成者は、最も遠近法的な表現が表れる奥行きの描写については、必ずしも適切な描写を行っていないことが指摘できるのである。また、屋敷地輪郭部（土塀・門など）と屋敷内の建物とでは、明らかに俯瞰の角度が異なっており、このことも屋敷全体の描写に歪みを生じさせている要因と考えられる。「高松城下図屏風」自体は、近代的な遠近法で描かれていないため、このような歪みが生じるのは当然であり、実際の遺構との突き合わせを行う際にはこうした表現方法のくせを念頭に置く必要はあろう。

以上から、区画ｂ－２・ｃと区画ｅでみられた屋敷南半部の空閑地の規模については、実際の遺構から得られる解釈を優先する方が妥当であると考える。つまり２区画とも、屋敷南半に空閑地の存在は想定できるものの、その範囲は屏風の描写よりも狭いと捉えて問題ないということである。同時にこのことは、屏風そのものの史料的価値を規定すると捉えるよりも、むしろ屏風での描写のくせという「約束事」を通過して検

出遺構との対応関係をみる必要があることを示していよう。

これらを踏まえると、描かれた建物を一概に架空のものと断定することには躊躇を覚える。①城内（中堀より内側）・②外曲輪で中堀に近い武家屋敷（『生駒家廃乱記』附録にみえる「丸之内屋敷」に相当）・③外曲輪の他の武家屋敷（『生駒家廃乱記』附録の「大名町之裏之町」「南御門之内立横共」に相当）・④浜ノ丁付近の武家屋敷（『生駒家廃乱記』附録の「西濱屋鋪」）・⑤町屋・⑥寺社などのレベルに分解して、それぞれの描写内容について検討する必要があろう。指図や発掘資料などの検討材料に乏しいため、全くの予想でしかないが、史料の性質上①についてはかなり正確な描写が行われているとみて、まず大過ないであろう。②が当該調査地区に相当するが、建物配置を同じくする屋敷地はなく、また建物外観も微妙に異なっている。屏風の製作時期に、②には大老・家老（年寄）が居住しており、藩主以外にこの屏風を目にする機会があった可能性を考えると、製作者の「イメージ」の具象化とみるよりも、やはりある程度の写実的描写の材料（屋敷指図など）が存在したと考える方がよいのではあるまいか。細かな位置については、上記した歪みもあり検出遺構との対応関係は難しいが、遺構からみた相対的な位置関係については既述したように、「その付近に建物を想定しても矛盾はない」のである。

以上、まわりくどい記述になったが、「高松城下図屏風」と検出遺構の対応関係は、次の諸点において可能と考える。①屋敷を囲繞する区画施設の形態（土塀・長屋・門）とその相対的な位置。②屋敷内の建物空間とそれ以外の空間の相対的な位置関係。ただし、屏風では南側を広く描くくせがあるので、空閑地の広さは不正確である。区画ｅの状況を踏まえると、これに③中心的な建物（主殿）の相対的な位置、を加えることができるかもしれない。

大久保家屋敷の位置　ところで第６面の西外曲輪で問題になるのは、『小神野夜話』（寛政４年:1792 成立）にみえる「大久保主計屋敷」の記載との関連である。同様の記載が３箇所あり、それらを総合すると、次のような内容にまとめられる。

ａ）大久保主計屋敷は先代（生駒期）の船蔵であった。

ｂ）船蔵移転後、大森八左衛門を普請奉行に任じて跡地に屋敷を造成した。石井仁右衛門が通りかかり、誰の屋敷普請かといぶかる。

ｃ）「大屋鋪」がほぼ出来上がった時、藩主松平頼重が大老彦坂織部を連れて屋敷を巡見し、そこで大久保一学に屋敷を与えて大老にする相談をする。

ｄ）一学は、銀 20 枚４人扶持御小姓組であったが、大老に任じられ主計と改め、3000 石と船蔵跡地の屋敷を与えられた。

ｅ）以上のことは、「役所之留」と「林孫左衛門物語」に記されている。

上記内容は、単に大久保主計が屋敷を拝領したというだけでなく、小姓から大老へという大久保家の家格形成と不可分な関係にあるといえる。肝心の年代記載がないが、頼重・彦坂織部・大森八左衛門・石井仁右衛門が登場し、大久保主計（一学）が家老クラスに列せられる以前という設定を『高松藩記』記載の家老人事から求めると、頼重入部直後の寛永 20 年（1643）か正保元年（1644）10 月以前を想定せざるを得ない。しかしその前提に立脚した場合、『小神野夜話』の記載には、他史料との矛盾がいくつか指摘できる。

列挙すると、①『高松藩記』では、大久保主計の役職・禄高をみると正保元年に家老・1,300 石となり、正保２年に大老・2,000 石、さらに明暦元年（1655）に 3,000 石と推移しており、『小神野夜話』のいう小姓組・４人扶持から大老・3,000 石という直線的な変化ではない。また、②船蔵の位置についても、この時に生駒期の船蔵から無量寿院跡地と真行寺の旧地（浜ノ丁）へと移転したと読み取れるが、これより７～９年後の「高松城下図屏風」では浜ノ丁に船蔵はなく、堀川（西外堀）に描かれている。また「城下図屏風」での船蔵は、西側曲輪（堀川東岸）でなく堀川西岸である。さらに③船蔵造成に伴う真行寺の移転は、延宝４年（1676）のこととされており、その年代では彦坂織部・大森八左衛門・石井仁右衛門は死去しており、大久保家も既に大老・3,000 石の家格を確立している。④『高松藩御令條之内書抜』には、承応元年（1652）のこととして、「内町主計隣ニ而町屋之裏座敷ヲ取繕指置可申義ニ付」とあり、大久保主計屋敷が外曲輪内で町屋と隣接する場所にあったことが窺える。これに合致する場所は、内町５町に隣接した外曲輪東端部であり、西外曲輪ではない。以上４点である。

検出遺構からみても、船蔵に擬せられるような「船渠遺構」は検出されておらず、また第６面の中でそれまでの屋敷割とは異なる「大屋鋪」を造成した形跡も認められない。明らかに『小神野夜話』の記載と矛盾するといえよう。ｅのような付記があるが、現状では『小神野夜話』の記載内容は、頼重の時代に仮託された後世の創作と捉えるのが妥当であろう。

2. 2. 第５面

屋敷割の解消　1. 2. で検討したように、第５面で

は当初は第6面の街路を狭くした「路地」があり、屋敷割もある程度は踏襲されていた可能性がある。しかし次第に「路地」側溝（石組溝）は縁石に変わり、さらにSBb31やSXb09の建設により、区画施設そのものが否定されていく状況が見て取れる。第5面新段階では、屋敷割はほぼ完全に消滅したようである。

第5面最大の建物は、甕倉と推測されるSXb09である。甕を据えたとみられる土坑状の掘り込みが浅いため、甕本体は底部のみが固定され、大半が床面よりも高い位置にあったと想定できる。したがって、藍甕のような加工作業のための施設ではなく、何かを貯蔵するための施設と考えられる。ところで249㎡以上に達する床面積は、発掘で知られる甕倉としては最大規模である。このような大型貯蔵庫が、上級家臣とはいえ個別の屋敷内に存在する状況は想定し難く、やはり公的な施設と捉えた方がよいであろう。

以上まとめると、第5面では第6面での屋敷割が次第に解消され、甕倉をはじめとする公的な施設の空間として利用されていた可能性がある。

西御門外の家老屋敷　ところで『小神野夜話』では、「西御門外に家老屋敷二軒有之候処、引候て、壱軒之跡は下馬北御かこひに成申候、一軒の跡は、十本松有之候場所に相成申候」との記述がある。前後の文章から、松平頼重入部後の高松城普請に伴い、西外曲輪の家老屋敷が撤去されたことを示すと思われる。その位置は、西外曲輪の南東部と考えられ、西の丸町Ａ地区と当該調査区８Ｂ区、Ｃ地区12Ｊ区がこれに該当する。おそらく生駒期の上坂勘解由・上坂丹波両名の屋敷地であろうが、そこが1640～1670年代に撤去され、下馬空間として整備された、ということである。第5面の遺構分布をみると、第1・2面で腰掛SBb09が認められる８Ｂ区東半部では、全く遺構を検出できなかった。このことは、第6面から第5面への整地（1640～50年代）に際して、付近に新規の建物が構築されなかったことを示唆している。既述したように『小神野夜話』の記載には矛盾も多いため、第5面での遺構分布を直接対応させることには慎重でありたいが、状況的にはさほど矛盾しないことを指摘しておく。

2. 3. 第1～4面

SDb28北半部よりも東側の腰掛については既述したので、西側の大久保家屋敷内の建物配置を検討する。

長屋風建物　第3面のSBb20は、梁間3間・桁行33間を測る東西に細長い礎石建物である。梁間・桁行ともに1間＝1.0ｍで、北側延長上にSBb18・19が、また西側延長上にSBb16・17が同じ柱間・柱筋で検出された。SBb20北側に撹乱があり、SBb18･19と分離されているようにみえるが、実際には一連の建物を構成する可能性が指摘できよう。その場合、梁間5間・桁行39間前後の東西棟が想定される。ただし、SBb16はより北側に延びており、屈曲ないし雁行する平面形態をもつといえる。

このような長屋風プランをもつ建物の具体的な機能を想定することは、絵図が存在しないため困難である。ただ、屋敷地内のほぼ中央に位置するため、「長屋」とするよりも別の機能（例えば「表」の空間の役所・詰所的な機能）を想定した方がよいかもしれない。

主屋と式台　第2面には、新たに大型建物SBb04･05が建てられる。SBb04・05は第2面から第1面まで継続しており、連結して雁行する。また礎石が周辺建物よりも大振りであることから、屋敷地内の中心的な建物群を構成すると考えられる。

第2面では、SBb04・05の南側にSBb13・14が近接して検出された。SBb14は調査区内で完結しており、南側(調査区外)に延長していく形態ではない。SBb04･05とともに、雁行する建物群の南端を構成する棟と考えられる。SBb13は別棟であろう。

第1面では、SBb14のあった場所にSBb06が建てられる。この建物は、西辺と南辺に縁石状の石組溝を伴うが、それに囲繞されるSKb34は先行して化粧状に整地される。他地域での類例から、SBb14・SKb37は主屋の前面に取り付く「式台」（玄関）の可能性が考えられる。SAb05は、式台に至る通路縁石であろう。このことから類推すると、第2面のSBb14も玄関棟の可能性がある。

第1面で他に注目されるのは、SBb04･05よりも北側で建物群が充実することである。SBb01は、SBb04・05とは直接連結しない大型建物である。撹乱のためSBb04・05との関係は明確でないが、礎石01～05を含む建物（プラン不明）を介して、SBb04･05と繋がっていた可能性も考えられよう。

屋敷地内の構成　ところでこれらの中心建物群は、屋敷地全体からみるとかなり奥まった位置にある。城下の絵図による限り、大久保家屋敷の正門は南辺であり、第1面段階では正門から式台まで80ｍ前後の距離があることになり、江戸の旗本屋敷でみられる窮屈な建坪率とは、やや異質にみえる。この点を他の事例との比較で考える。

絵図と検出遺構との対応関係から、大久保家屋敷は東西約90ｍ･南北約230ｍと想定でき、敷地面積は約

6,260 坪となる。江戸の旗本屋敷としては規模の大きい大身旗本林述斎（3,500 石）屋敷が 2,180 坪、池田政和（3,000 石）屋敷が 1,307 坪である（平井 2000）ことを考えると、大久保家屋敷は禄高以上に大きな屋敷地を与えられたことになる。しかし一方で、主屋関連の建物遺構（SBb01・04・05 など）は 133 坪以上である。遺構からの想定は限界があるので、この坪数の評価は難しく、礎石 01 ～ 05 の評価や調査区外（特に北側）の建物分布如何では、さらに 300㎡ 程度は増加する可能性もある。しかしいずれにしても、1,000 ～ 1 万石クラスの旗本屋敷の主屋規模（150 ～ 400 坪）と同等程度と捉えておくのが妥当であろう。

このことから考えられるのは、大久保家屋敷は禄高以上の屋敷地を与えられてはいるが、屋敷の建坪自体は禄高に見合った標準的な規模である、ということである。加えて屋敷地自体が南北に細長いため、通常の雁行する建物配置をとろうとすれば、東西幅は一杯に使い、南北幅は大きく余ることになる。そこで、西御門と下馬に隣接した屋敷地の中程に中心建物群を配置した、という経緯が推測される。

なお、多度津藩陣屋（文政 10 年：1827 完成。敷地約 6,600 坪・建坪 230 坪。絵図では東西 100 間・南北 87 間）では、正門から式台までの距離は 39 間（70.2 m）である。屋敷面積や建坪が大久保家屋敷に近く、建築年代も第 1 面とほぼ同時期である。多度津陣屋が 1 万石の政庁としてのあるべき構成を満たすかどうか、不明である。しかし、1 万石の陣屋に比肩する規模をもつという点で、高松藩における大久保家の格付け、あるいは大久保家屋敷のもつ「政庁」的役割が窺い知れよう。

第 3 節　近世在地土器の検討

1. はじめに

高松城跡西の丸町地区では、既述したように 6 面の近世遺構面・整地土層から良好な状態で土器・陶磁器の出土をみた。このため、大枠としては層位的所見に依拠した資料操作が可能である。編年の前提をなす基準資料の様相の概略については、整理途上で既に公表した（松本・佐藤 2001、松本 2002a）。搬入品を主体とする陶磁器については、西の丸町 C 地区の正報告（松本 2003）において詳細が提示される予定である。ここではこれらの作業を踏まえつつ、在地土器の変遷をまとめる。既に土師質土器焙烙は、高松城以外の県内出土資料と併せて変遷案を提示している（佐藤 2001b）ので、以下では各様相で安定して存在する土師質土器皿について、型式組列（形式）を念頭に置いた分類を行う。その上で、他の指標的な器種とともに、各様相の内容を概観したい。

2. 土師質土器皿の分類と消長

2. 1. 分類

土師質土器皿の色調は、①橙色系、②やや暗い褐色系、③やや白味がかった褐色系、の 3 者に大別できる。この 3 者は常に橙色系が主体的で、それに暗い褐色系が加わる段階（様相 1 ～ 3）と、白味がかった褐色系が加わる段階（様相 3 ～ 5）、ほぼ橙色系で占められる段階（様相 6 ～ 8）に整理できる。こうした胎土の色調は、形態・技法にも一応対応しているから、大枠としては胎土の違いが生産集団の違いを反映する可能性が指摘できる。しかし橙色系は確実に複数の形態から構成されており、細分が可能である。また暗い褐色系には橙色系と区分が曖昧なものもあり、色調を前提にした截然とした区分は難しいということもある。したがって以下では、まず形態・技法上の特徴を指標とし、その上で胎土（含有物・色調）との対応関係を捉えることとしたい。

大別形式としては、回転台（ロクロ）成形のものをＡ形式、手捏ね成形のものをＢ形式とし、より細かな属性によって型式組列に相当する単位（形式）までを分類する。より細かな型式の設定は、後日を期したい。

2. 2. 各形式の特徴と消長

皿ＡⅠ形式　①底部回転ヘラ切り、②直線的に短く外傾する口縁部をもち、口縁端部は丸く収められるもので、中世後期の土師質土器皿に近い形態である。胎土色調はやや暗い褐色系を呈する。

様相 1 で認められる（SKb192、歴博地点第 4 遺構面上層など）。口径 8.0 ～ 9.0cm 前後であり、見込みを不定方向にナデ付け、外面に板目状圧痕を残すものがある。ヘラ切りはこの形式のみであるが、先行する高松平野の中世後期土器皿はヘラ切り主体であることから、直接的に中世土器の系譜を引く可能性が高い。

皿ＡⅡ形式　①底部静止糸切り、②体部が内弯し、口縁部は直線的に長く外傾、③体部下半～底部の器壁が厚手、口縁端部に向かって先細り、などの特徴をもつもの。胎土中には砂粒の混入が目立たず、比較的きめ細かいという特徴がある。また色調は、淡橙色や肌色を呈する。

この形式が認められるのは、様相 1 ～ 3 である。各様相ともに、土師質土器皿の中では主体的な存在であ

様相1
様相2
様相3
様相4
様相5
様相6
様相7
様相8

AⅠ
1399
AⅡ
1640
1840
1261
AⅢ
1167
1172
C979
歴博661
AⅣ
1806
1239
1398
1510
AⅤ
1251
1565
C982
C965
785
795
AⅥ
C763
歴博728
771
C767
548
AⅦ
C770
406
AⅧ
C765
546
AⅨ
551
54
AⅩ
1846
1243
歴博689
799
AⅩⅠ
929
554
AⅩⅡ
553
瀬戸・美濃系灯明皿
400
京・信楽系灯明皿
52
BⅠ
1606
BⅡ
1247
杯
1470
1888
備前灯明皿
768
769
備前灯明皿
761
763
C782
C779
C781
C783
541
543
544
538
539
50

第18図　近世土器の変遷(1)　(S＝1/4)

る。様相１（歴博地点第４遺構面上層）では、体部外面下端が垂下気味に内弯しているが、底部輪郭は明瞭で平高台状を呈する。またこれに対応して内面でも、体部と底部の境が弱い凹面状をなして明瞭である。底部外面の糸切り痕は、片側に偏る軌跡は描かず、直線的に平行している。法量は口径8.0～9.0cmと、口径10.0～11.0cmがあり、前者が主体である。

様相２（SKb255）では、底部外縁から体部下半にかけて、やや連続的で緩やかに突出するようになる。口縁部～体部が直線的に延びるものも認められる。糸切り痕は、片側の間隔が狭くなり、回転糸切りのようにみえる。法量は、口径10.0～11.0cmに集中する。

様相３（SKb171など）では、様相２と大差ない形態・法量をもつが、器壁の薄手なものも認められる。

皿ＡⅢ形式　①底部回転糸切り、②外反気味に延びる口縁部をもち、内面の底部と口縁部との境は明瞭に窪み、③口縁端部は外面側が丸く、先端が尖り気味になるものである。胎土は皿ＡⅡ形式に似た橙色系であるが、褐色粒（クサリ礫ないしシャモット）を含む点が特徴的である。

様相３・４にみられる。様相３（SKb137・178など）では、口縁部はやや直立気味で、外反傾向も明瞭である。また口縁端部外面側は丸いものの他に、凹線状にナデ残しを伴うものもある。いずれも中世後期の高松平野に普遍的な「口縁部→体部ナデ」手法によるものである。法量は、口径7.5～8.0cm前後と、口径10.0～10.5cmの２者があり、前者が多い。

様相４（SKc20・21、歴博地点SX20）では、口縁部の外反傾向が弱まり、直線的になる。また口縁端部先端も丸味をもつようになる。しかし依然として見込みと口縁部内面の屈曲は明瞭である。口径9.0～10.0cm。

皿ＡⅣ形式　①底部回転糸切り、②器壁が薄手で中位で明瞭に屈曲・外反する長い口縁部をもつものである。胎土の色調はやや暗い褐色系である。

様相２・３にみられるが、主体的な存在ではない。様相２では、口縁部内面に回転ナデによる明瞭な段（強いロクロ目）が形成される。口径9.5cm～10.0cmである。先行する様相１でも口縁部内面に段が認められるものがあり（1510）、やや器高が低い点が異なるが、これとの系譜関係が想定できる可能性もある。

様相３では、口縁部の外反傾向がより顕著になる。口径11.0cm前後。

皿ＡⅤ形式　①底部回転糸切り、②内弯気味の口縁部外面を２～３段回転ナデするため、中位に弱い稜線が生じる。③切り離し後、見込みを不定方向にナデ調整し、底体部の境が凹線状に窪む。底部外面には見込みナデに対応する板目状圧痕、といった特徴をもつ。胎土は砂粒をさほど含まず、きめ細かである。色調はやや白味がかった淡褐色系のものが多い。

この形式は、様相３～５にかなり普遍的に認められる。様相３では、やや口縁部が長く、深手である。法量は、口径10cm台前後が多い。

様相４では、口縁部中位の稜が次第に明瞭化してくるとともに、口縁部が若干短くなる。口径9.5～11.0cm前後が多い。

様相５では、口縁部長がさらに短くなり、中位の稜は明確化する。口径10.0～11.5cm前後、口径12.0～13.0cm前後の２者が一応あるが、法量はかなり漸移的である。

皿ＡⅥ形式　①底部回転糸切りで、底部外縁までは切り離しが及ばず、回転ナデが認められる、②内弯傾向が強く立ち上がる短い口縁・体部、③回転ナデによって見込み中央が明瞭に窪む、などの特徴をもつ。胎土は少量砂粒を含み、色調は褐色ないし橙色を呈する。

様相４～７にみられるが、主体的なのは様相４～６であり、様相７（SXb06）では少量存在する程度である。様相４（SKc20・21・歴博地点SX20）では、底部外縁と糸切りの範囲が一致するものと、一致しないものの２者が認められる。一致しないものの方が、口縁部の内弯傾向が明瞭であることから、①の現象は口縁部成形に起因すると考えられる。共伴する皿ＡⅢ形式と形態が近似する（口縁部の内弯傾向が異なる）ことから、ＡⅢ形式→ＡⅥ形式という系譜関係が想定できるかもしれない。口径は8.5～9.5cmに集中する。

様相５では、より内弯傾向が強く、口縁部長は短くなる。また器壁の薄いものもみられる。法量は、口径5.5～6.0cm、口径8.0～9.0cm、口径10.0～11.0cmの３者があり、口径8.0～9.0cmが多い。

様相６では、口縁部の内弯が弱くなり、外傾気味になる。口径7.0～8.0cmを測る。

様相７では、口縁部が短く太く外傾する。口径7.0cm前後。

皿ＡⅦ形式　①底部回転糸切りで、糸切り痕が底部外縁よりも内側で認められるものもあり、②見込み外縁から口縁部への屈曲が明瞭であり、③外反気味に伸びて端部先端が尖り気味に収まるものである。胎土は微細な砂粒（長石）を少量含むがきめ細かく、橙色に発色する。

様相６・７で主体的に認められる。様相６では、口縁部が外反気味に外傾しており、口縁端部は細身で先端が尖って収まる。口径 10.0 ～ 11.0cm。

様相７では、口縁部が若干立ち上がり気味になるものが多く、口縁端部外面直下が丸味をもち、外反傾向が弱まる。口径は 10.0 ～ 12.0cm の幅をもつ。

皿ＡⅧ形式　①底部回転糸切り、②比較的厚手で円盤状の底部から大きく外傾して延びる口縁部をもつものである。胎土はきめ細かで、橙色を呈する。

様相６・７で比較的多く認められる。形態に大きな変化を見いだすことはできないが、法量が様相６では口径 7.0cm 前後で、様相７では僅かに小振りになる傾向が見出せる。

皿ＡⅨ形式　①底部回転糸切り、②内弯して内面中位に回転ナデによる段（ロクロ目）を伴う、比較的長い口縁部をもつものである。胎土は比較的きめ細かく、橙色を呈する。

様相７・８で認められる。様相７では、口縁部下端外面（底部外縁）が丸味を帯び、端部が内弯気味である。口径 9.0cm 前後。

様相８では器壁が厚手になり、口縁部は直線的になる。口径 8.5cm 前後と 12.5cm 前後の２者がある。

皿ＡＸ形式　①底部回転糸切り、②やや内弯する口縁部下半と直線的に外傾する口縁端部、③口縁端部に切り落としたような外傾面を作出、④見込みを不定方向にナデ調整するもの。胎土・色調は、皿ＡＶ形式と同様である。

様相２～５で認められる。様相２では、13.0cm 前後と口径15cm 前後の２者があり、後者は口縁部がかなり長く延びて口縁端部は外反する。

様相３では、口縁部がより外傾気味になる。口径 12.0 ～ 13.0cm 前後で、様相２でみられた口径 15.0cm 前後の存否は不明。

様相４では、さらに浅手化が進むとともに、口径と底径が近くなる。口径は 15.0cm 前後。

様相５では、様相４とほぼ同じだが、口縁端部の外反傾向が弱くなり、全体として内弯するようになる。口径 15.0 ～ 17.0cm。

皿ＡⅪ形式　①底部切り離し後、回転ヘラ削り調整、②底部から体部にかけて連続的に立ち上がり、備前系灯明皿に近似した形態、である。胎土には極めて微細な砂粒しか含まれず、精良である。色調は淡褐色から橙色を呈する。

様相５・７で極少量認められる。

皿ＡⅫ形式　①外面を口縁部直下までヘラ削り調整し、底部を碁笥底状に削り込み 、②削り後に外面に丁寧な磨き調整を加えるもので、③内弯して立ち上がる口縁・体部をもち、④器壁が極めて薄手、という形態的特徴をもつものである。胎土は精良で黄白色に発色するもの（553）や、橙色を混ぜる交胎のもの（552）がある。

様相７で少量認められる。

皿ＢⅠ形式　①指頭圧痕が顕著に残り、やや突出気味の丸底、②端部が尖り気味になる口縁部をもつものである。胎土は褐色系を呈する。

様相３で極少量認められる。

皿ＢⅡ形式　①口縁部下半を２段に押圧し、内弯する口縁部～底部を作り、②薄手の器壁で口縁端部は丸く収まるものである。胎土は灰白色に発色する。

様相３で極少量みられる。

土師質土器杯　一般的な土師質土器皿よりも深手のコップ（酒杯）形の形態をもつものである。適切な名称でないかもしれないが、暫定的に「杯」と呼称しておく。底部は静止糸切りであり、胎土の特徴は皿ＡⅡ形式と共通する。

様相１・２で一定量認められる。先行する東山崎・水田遺跡Ｃ地区 SD21 でも同様な杯があり、中世土器の系譜を引く可能性がある。

3. 各様相の内容と評価

3. 1. 様相１

様相１の在地土器は、基本的には中世後期（15 ～ 16 世紀）からの系譜関係で理解できるものが多い。①底部回転ヘラ切りの土師質土器皿ＡⅠ、②深手の土師質土器杯、③口縁部が内弯する土師質土器擂鉢（第 19 図 1284）、④口縁部の外反が弱く、浅手化の進んだ「焙烙」形の土師質土器鍋（第 19 図 1282）、⑤羽釜形の器体に２個一対の把手を伴う特徴的な土師質土器鍋（外耳鍋：第 19 図 1204）、⑥小型で印花文・雷帯文を施す瓦質香炉（図版 151-1095）、⑦内弯する口縁と三脚を伴う土師質土器深鉢（図版 170-1630）、などが該当する。これの大半は中世後期の高松平野において、主体をなしていた器種である。実際、これらの器種には中世後期からの変化を認めることはできるが、個体単位で一見すると中世との識別が難しいものもある。ただ中には④の

ように、むしろ三豊平野（西讃地方）の中世後期土器で顕著なものがあり、高松平野の在地土器の流れだけでは捉えられない「広域性」が指摘できる。

一方、16世紀中葉頃まで存在し、近世初頭の在地土器に継承されなかったとみられる器種もある。⑧土師質土器足釜や、⑨16世紀中葉には生産が終了していた可能性が高いが、国分寺楠井遺跡産の瓦質（須恵質・土師質もある）擂鉢、も加えることができるかもしれない。さらに、土師質土器外耳鍋の底部が叩き成形ではない点は、中世とは明らかに違う技法的特徴である。

新出の形式もある。⑩土師質土器皿ＡⅡである。16世紀にも口縁部の長く外傾する形態の皿は存在する（東山崎・水田遺跡Ｃ地区SD20など）が、底部が全てヘラ切りであることが異なる。なお皿ＡⅡを特徴付ける静止糸切りは、既に中世後期の西讃（香川県西部）系統の大皿に認められ、高松平野にも搬入されている（蔵本1995・佐藤2000）が、形態は皿ＡⅡとは全く異なる。したがって、皿ＡⅡは様相１から出現した新しい形式であり、近世土器の指標の一つと評価できる。

以上のように、高松城跡・様相１の在地土器は、大枠としては中世後期土器様式をかなり色濃く引きずると評価できる。しかし一方で、近世に継承されない器種や、新たに出現する器種、あるいは中世後期の地域性を超えた器種の存在に注意する必要があり、この点に新たな領域支配に対応した土器生産・流通の在り方を看て取ることが可能である。

3. 2. 様相２・３

この様相においても、土師質土器擂鉢・鍋は中世的な形式が踏襲されており、やはり一見すると中世後期土器様式との区分は、必ずしも明瞭ではない。しかし土師質土器皿には、確実に新たな動きを指摘できる。①中世以来の皿ＡⅠの消滅、②皿ＡⅣ・ＡＸの出現（様相２）と、皿ＡⅢ・ＡⅤ・ＢⅠ・ＢⅡの出現（様相３）、である。新たな形式(系譜)が複数出現したことによって、土師質土器皿の組成は形態のみならず、法量的にも８～９cm・10～11cm・13cm・15cmの４者に分化し、多用化する。この他、③瓦同様の幅広の磨き調整を施す瓦質土器火鉢類（様相３：図版167-1573・172-1690）の出現もこの時期の変化と捉えられる。

擂鉢・鍋に中世的な系譜が残存することの意味は、まだよくわからないが、調理方法を含めた土器の使用形態に伝統的材質・器種の存立を許した基盤があった可能性があろう。擂鉢では、中世後期より備前擂鉢の普及が看取できるが、土師質土器擂鉢にはこれとは異なる用途（火にかける「擂鉢鍋」としての使用：荻野1991）が想定できる。

一方、土師質土器皿に新たな系譜が簇生する要因には、土器皿の主要な用途の変化を挙げることができよう。土師質土器皿には、かなりの比率で内外面に煤（油煙）が付着しているが、こうした形跡は中世後期の少なくとも農村部ではさほど多くはない。つまり、中・近世移行期に灯明具としての土器皿の使用頻度が増大し、このことが土器皿の新たな需要を喚起したと考えられるのである。なお、SKb137や歴博地点第３遺構面SX20（様相４）における皿ＡⅢやＡⅣの一括廃棄例には、油煙の付着が認められないことが注目される。これは油煙付着がむしろ一般的な状況からみて特異な現象であり、灯明具以外の用途（飲食具・祭祀具など）を想定できるかもしれない。

3. 3. 様相４・５

様相３まで擂鉢・鍋に色濃く認められた中世からの系譜は完全に払拭され、新たな形式が主体をなすようになる。近世土器様式の完成期ということができよう。①土師質土器皿ＡⅤの主流化と皿ＡⅥ・ＡＸⅠの出現、②土師質土器擂鉢・鍋の消滅、③土師質土器焙烙の出現、である。この他、高松城跡ではまだ良好な資料に欠けるが、④土師質土器羽釜の出現、も挙げられる。さらに混入かもしれないが、⑤角形の火鉢類や丸形で深手の火鉢類の出現、も当該期の動きの可能性がある。この他、⑥土師質土器甕の出現、もこの新たな動向として挙げられる。

①は使用痕からみて大半が灯明具であったと考えられる。様相５では土師質土器皿は依然多量に認められるが、それに加えて多くの備前灯明皿が存在する点が注目できる。主体的な法量（口径10～13cm）は、土師質土器皿も備前灯明皿も一致する。量的な増加を伴うこのような灯明具の多様化は、広大な面積を占める大久保家屋敷地内の整備に伴う現象と捉えることもでき、高松城内や武家屋敷での状況と比較・検討する必要がある。なお丁寧な調整の皿ＡＸⅠは、備前製品の模倣の可能性がある。

③・④は、様相１から一定量存在した亀山系土器の在地化という動きとして捉えることが可能である。亀山系土器鍋は、中世後期の讃岐地方にはほとんど搬入されていないが、高松城では様相１以降、在地産土器鍋に比肩する普遍的な存在である（図版164-1496・1505、170-1631、172-1678・1691、176-1822など）。つまり讃岐地方への亀山系土器鍋の流入は、中世後期からの伝統に立脚するのではなく、近世都市の成立を契機とする可能性が高く、讃岐では極めて「近世的」な土器ともいい得るのである。

様相３には、明らかに亀山系土器鍋よりも口径が大

きく、逆に器高の浅い形態のものが認められるようになる（第19図1271）。しかし特徴的な粗い、器面を掻き取るようなハケ目調整や、明瞭に直立する口縁端部平坦面は、亀山系土器鍋と共通しているため、1271は亀山系土器の範疇（すなわち「亀山系焙烙」）で捉えることが妥当であろう。また同じく様相3で、同様な粗いハケ目調整が顕著だが、口縁部器壁が薄くやや浅手な、焙烙に繋がる要素をもつ鍋が出現する（第19図1903）。これを焙烙と捉えるかどうかは微妙なところであるが、これに続く様相4ではハケ目がやや細かくなり、より浅手化した形態が出現する（第19図C 760）。現段階では、これを確実な在地産御厩系焙烙（ＡⅠ形式）の最古型式と位置付けることができよう。焙烙の出現については、岡山での状況（乗岡2001）との対比の他に、使用痕の観察などからより明確な追求が行われる必要がある。

⑥は、既に様相3に先駆的な事例が存在する（図版159-1369）が、農村部での事例（丸亀市郡家田代遺跡、観音寺市一の谷遺跡群など）を参考にすると、普遍化するのは様相5からと考えられる。

3. 4. 様相6・7

様相4・5で確立した枠組みが維持されていく時期である。土師質土器皿では、①前代に主流であった皿ＡⅤや、一定量存在した大口径の皿ＡⅩの消滅、②中口径の皿ＡⅦ、小口径の皿ＡⅧの出現、③陶器を想起させる精製品皿ＡⅩⅡの出現、といった新たな動きが指摘できる。①の事象は、大法量の欠落を意味すると同時に、様相2以来続いてきた白味を帯びた褐色系胎土の消滅でもある。これと入れ替わるような③の現象は、新たな土器生産集団の動向（生産者の再編ないし淘汰）を示す可能性があろう。また、④二重構造の瓦質土器涼炉の出現も、新たな動きとして評価できよう。

土師質土器甕は、口縁内端部が突出・肥厚し、体部は張りが微弱で直線的になる。

3. 5. 様相8

様相4以降の枠組みが大きく変容する時期である。①土師質土器皿ＡⅥ・ＡⅦ・ＡⅧ・ＡⅩⅠ・ＡⅩⅡの消滅と、皿ＡⅨの残存、②外型成形の涼炉や、五徳状製品（図版101-84）の出現、③小型の手焙烙（図版101-82・83）の出現、などである。また④土師質土器井戸側の出現・普及、も当様相での顕著な動きである。

①の事象は、土師質土器皿そのものの量が著しく減少したことを示す。一方陶器では、従来の備前系灯明皿に加え、京・信楽系灯明皿の出現・普及が指摘できる。しかし、このような陶器灯明皿の増加が、①の事象の直接の契機となったかどうかは、なお検討を要するであろう。なぜなら様相7から8にかけて、灯火具全体の出土比率が減少傾向を示すとみられ、既存の灯明皿（土器・備前系）の減少分が京・信楽系陶器灯明皿に置き換えられたわけではないからである。灯火具の構造や、灯火方式の変化に関わる問題かもしれない。

②・③は、竈とは異質な小型加熱器の定着・多様化と、それに組み合う新たな食器（調理器）の創出として捉えられる。④は遺構の変遷からも明瞭なように、井戸内構造物の専用器化である。頸部にはタガ状の突帯が付されており、第2面（様相7）以前に井戸側材として多用された桶の模倣と考えられる。また口縁部形態が土師質土器甕に近似しており、共通した生産集団の所産とみられる。

なお、様相8から素地を土師質焼成する軟質陶器の行平・土瓶・急須などが出現するが、これも単に陶器生産の多様化過程だけでなく、在地土器生産との関わりも検討する必要があろう。

3. 6. 様相9

高松監獄での生産関連遺物主体という偏った資料ではあるが、近世土器様式の崩壊した在り方を見出すことができる。①土師質土器皿の消滅、②焙烙における外型成形（焙烙ＡⅡ）の採用、③蛸壺生産における割型成形の採用、などである。これらの評価については、第6章第4節で行うが、西洋式技術の導入に先行する、自律的な近代化過程との評価も可能である。

4. 都市と農村の土器様相

4. 1. 農村部での様相の特徴

高松城跡での土器様相が把握できるにしたがい、従来から資料の蓄積が多かった農村部との差異も、少なからず見出せるようになってきた。以下、高松城跡出土土器と農村部出土土器との様相の差異・共通点を列挙する。なお農村部では、高松城跡の様相1～3の資料（東山崎・水田遺跡など）は中世後期の資料と連続するものが多く、明確に分離できるものは少ない。このため、主に様相5～8併行期とみられる資料を対象とした。

古い器種・加飾法の残存　様相5併行の郡家田代遺跡や一の谷遺跡群では、土師質土器擂鉢が一定量認められる。1遺構から複数個体出土しており、残存状況からみても古い遺物の「混入」とは捉え難い。口縁部の内弯傾向は、高松城跡様相3よりも不明瞭であり、一部には肥厚するものもみられる（郡家田代638・639）

様相1
様相2
様相3
様相4
様相5
様相6
様相7
様相8
様相9

1284
1855
1702
1504
擂鉢

1282
1364
1363
鍋

1204
1821
1528
把手付鍋

甕
939
C地区77
440

1271様相３
焙烙

1903鍋？

C970
835
C760
619
132
205
316

井戸側
99様相８

第19図　近世土器の変遷（２）（Ｓ＝1/4）

ことからも、農村部では様相５まで型式変化しつつ土師質土器擂鉢が残存すると理解できる。また資料が少ないため検討の余地を残すが、高松城跡では様相３まで認められる土師質土器深鉢の印花文は、郡家田代遺跡では様相５にも認められる。

灯火具の僅少さ　土師質土器皿や陶器灯明皿（備前系や京・信楽系）は農村部でも出土するが、その量はかなり少ない。破片数のカウントは行っていないものの、郡家田代遺跡出土資料では、備前系陶器と土師質土器皿が極少量認められるに過ぎない。これは、他の農村部集落でも概ね首肯し得る傾向である。また採集品ではあるが、大束川河口遺跡のような在郷町内の遺跡でも、灯明皿の出土は僅かである。したがって、こと土師質土器皿に限れば、在地流通の過半は高松城や城下の武家屋敷（町屋・寺町での様相は不明）で占められていたことになる。

焼塩壺　搬入土器として目立つのは、焼塩壺と関西系焙烙である。焼塩壺は、高松城跡では様相２～７に比較的多く認められるのに対し、農村部では空港跡地遺跡で18世紀に少量認められる程度であり、明らかに高松城（・城下）に集中する傾向が指摘できる。

焙烙の法量　関西においては、都市部では小型の焙烙、農村部では大型の焙烙の需要が高かったことが指摘されている（難波 1992・2001）。その背景としては、農村部では食品加工を大量に行うことや、竈の火口径との関係が想定されている。確かに農村部出土の焙烙ＡＩの法量は、「尺三」と呼ばれる 40cm 前後が最も多い。しかしこれは、高松城跡出土の焙烙ＡＩでも共通した傾向であり、「都市と農村」という前提での区分は難しい。また高松城跡では、小法量の焙烙は関西系焙烙（難波Ｄ類）によって賄われているが、関西系焙烙は農村部や在郷町でも出土・採集例を増加させつつあり、この点でも地域内の明瞭な区分は存在しなかったとみられる。搬入土器としての焼塩壺と焙烙の在り方の違いは、それがもつ機能に求められる可能性も考える必要があろう。特に様相１でみられる軟質施釉の関西系焙烙（難波Ａ類：図版 153-1148）の存在を考慮すると、特に古い様相における関西系焙烙は茶道具「灰器」としての機能を想定できるかもしれない。

4. 2.「近世土器様式」の構成要素

同一地域内での土器の組成差は、少なくとも中世段階では輸入磁器など搬入品レベルでは中世にも認められる可能性はある（佐藤 2000、片桐・陶山 2000）が、在地土器レベルではさほど顕在化していない。したがって、時期差以上の偏差が同一地域（高松平野あるいは讃岐地方）で生じている点に、近世の土器様式が内包する特徴がよく表れていると捉えることができよう。基本的な枠組みとしては、①灯火具に比重を大きく置いた土師質土器皿、②煮炊具の特化的な普遍化（土師質土器焙烙・羽釜）、③暖房・加熱具の多様化（火鉢・焜炉類）、④埋甕（便槽・肥溜・工業用）・井戸側など土師質大型品の普及、といった４点を讃岐地方における近世土器様式の構成要素として捉えておきたい。①の多寡という問題はあるが、概ね様相４から５にかけて城下でも農村でも急速に上記４項目は達成されていく（④の井戸側は都市・農村ともに様相８以降）。つまり、17 世紀後葉～ 18 世紀前葉が近世土器様式の完成期と見なせる。

ところで、高松城（・城下町）と農村部（在郷町も含まれるか）での土器様相の差異が、何によってもたらされたのか、という点は陶磁器と併せて追求していく必要がある。その際、近世社会の分節構造（吉田 2001）や地域内の序列関係（渡辺 1998）が、土器・陶磁器（あるいは瓦）の組成・流通とどのように関わるか、という視点が重要であろう。

第４節　出土瓦の検討

1. はじめに

第４章第２節で記述したように、高松城跡（西の丸町地区）出土の瓦は、量的にも分類し得た種類という点でも極めて多く、簡単な把握を許さない状況にある。近年では高松城東ノ丸跡歴博地区で出土瓦に関する若干の検討が行われている。しかし、①平・丸瓦に認められるコビキ法の出現時期、②軒平瓦の瓦当成形技法、の２点から近世初頭の様相に言及しているのにとどまり、その２点に対する検討も若干の問題を残している（北山 1999）。そして近世を通じての瓦の変遷や特徴については、安藤文良氏による先駆的な業績（安藤 1981）や、東ノ丸跡県民ホール地区での報告（真鍋 1987）以降、僅かに川畑聡氏による変遷案の提示（川畑 1999）が挙げられるのみである。

一方、畿内では森田克行氏の先駆的な分析（森田 1984）や、佐川正敏氏による法隆寺の中・近世瓦の検討（小林・佐川 1989、佐川 1992）が、文様にとどまらない技術的な属性とその変遷を明確に示した。また西日本では、岡山城跡出土瓦や寺社での現役瓦の検討によって、編年案の提示に至った乗岡実氏の成果がある（乗岡 1997・2001）。乗岡氏は、瓦の諸属性の分析と出土層位との対応関係から、岡山城１式～７式の設定を行い、さらにその背後にある瓦工人・生産地の動向も詳細に追求している。

ところで当該調査区に立ち戻ると、確かに出土瓦の量は膨大である。しかし、各分類毎に出土層位を押さえることができたため、層位毎の様相を把握することは可能である。出土層位・遺構に偏りがあるため、編年案の提示には程遠いが、①まとまった数量が出土した型式、②種別での出土点数が僅かでも一括性の認められる出土状況（土坑・瓦溜まりなど）にあるもの、③出土状況は不安定だが、既知の所見から層位への対応が可能なもの、の中から代表的な種別を選んで各層位での様相を概観することとしたい。検討対象は当該調査区出土瓦が主体であるが、併行して資料整理を行っている西の丸町Ｃ地区と、東ノ丸跡県民ホール地区・歴博地区の出土瓦も併せて対象としたい。出土瓦の層位毎の様相は、既に資料整理の中間報告で概観した（佐藤 2001a）が、出土遺構の帰属層位（遺構面）の検討・確定に伴い、若干の変更が生じた。このため、本稿をもって最終的な所見としたい。なお当該地区出土の個別の出土層位・遺構については、観察表を参照されたい。また、安藤氏が指摘したように高松には地域色の強い軒平瓦が存在しており、刻印との対応関係も認められるため、生産地の想定と流通状況も検討したい。

2. 軒瓦の変遷（第 20 ～ 23 図）

2. 1. 第６面・古（1588 年？～ 1610 年代）

当該調査区第６面と、それを被覆する整地土Ｖ層から出土した瓦が該当する。また他地区では、東ノ丸跡歴博地区第４遺構面とその直上の整地土・第４遺構面上層の出土瓦が良好な資料である。東ノ丸跡第４遺構面上層は、良好な遺存状況の土器・陶磁器が多量に含まれる整地層であり、層中には瓦溜まり（ＳＸ 15・16）も存在する（北山 1999）。土器・陶磁器は、1600 ～ 1610 年代と考えられる様相１である。これに対して西の丸町Ｂ地区第６面は、土器・陶磁器の様相１～３に相当する時期幅をもっており、また瓦の出土量も少量であることから、時期的な細別は容易ではない。したがって当面は、確実に様相１に押さえられる東ノ丸跡第４遺構面上層出土瓦にはない後出的な要素を第６面出土瓦に見出すことで、17 世紀初頭以前と以後を区分することが有効と考える。

軒丸瓦　全て三巴文系軒丸瓦である。東ノ丸跡第４遺構面・第４遺構面上層出土瓦は、いずれも巴尾部が細長く、外区に小振りな珠文 17 ～ 31 個と数多く伴うのが特徴である。①外区と内区の間に巴文から分離した圏線を伴うもの（第４章第１節でのⅢ類：歴博 288・530）、②巴尾部が連続して圏線状をなすもの（Ⅱ類：歴博 226・291・527・528・531）があり、圏線を伴わず巴尾部が分離したⅣ類はほとんど存在しない。多くは内区指数 0.63 ～ 0.8 であり、内区がかなり広い特徴をもつ。瓦当面径は 12 ～ 13cm 前後と 15cm 以上がある。丸瓦部凹面の切り離し痕は、歴博 288・527 が糸切り法であり、歴博 528 はコビキ法である。共伴した丸瓦・平瓦では糸切り法が圧倒的に多いことから、まだコビキ法は極めて少ないと考えられる。胎土は砂粒を多く含んだ中世的なものが多く、均質できめの細かな近世的な胎土の歴博 530 は、狭い内区指数（0.57）や三巴文の形状、珠文の数・大きさに後出的な要素が看取できる。

以上が東ノ丸跡歴博地区での特徴だが、当該調査区でこれに共通した要素をもつのは、軒丸瓦１・２・５・34・39 などである。軒丸瓦 39 は歴博 531 と同笵であり、当該調査区でも様相１の基準資料であるＳＫｂ 192 での共伴資料であるため、第６面・古に位置付けてよいであろう。軒丸瓦２は、様相３の SKb233 の共伴資料で、他はより上位層ないし撹乱からの出土であるが、

いずれもこれらを第６面・古に位置付けておきたい。両地区に認められる技法上の特徴としては、瓦当裏面調整は佐川氏分類のＢが少量でＣが主体である。また瓦当・丸瓦の接合は、佐川氏分類のＡ・Ｄが認められる。

一方、当該調査区で少量ながら様相１の土器・陶磁器と共伴する資料がある。軒丸瓦15は様相１の基準資料であるSKb192からの出土である。Ⅱ類に分類できるが、①珠文が比較的大きく数が少ない、②内区指数が小さくなっていること、など他者とは異なる要素が指摘できる。既述した東ノ丸跡歴博530（軒丸瓦30と同笵）と同様に新しい傾向といえよう。これらを「混入」として排除できる可能性は全くないわけではないが、現状では「混入」を積極的に主張するだけの根拠はなく、これらも第６面・古として捉えておく。1600～1610年代でもその後半期に、軒丸瓦15・30のような新しい要素をもつ一群が少数ながら出現した、と考えておきたい。

軒平瓦　東ノ丸跡第４遺構面・同上層では、宝珠文系・三葉文系（上向）・三葉文系（下向）・菊花文系などの文様系統が存在する。大半は３転する唐草文を伴う。上弦幅は23～24cm前後、弧深は2.0cm前後を測る。側区幅の狭いものが多いが、若干広いものも存在する（歴博537・538）。また、瓦当上角を面取りするものが多いが、乗岡氏分類による幅広の面取りＡと狭い面取りＣの２者が認められる。

宝珠文系軒平瓦は、火焔宝珠を中心飾りにもつものである。歴博534は、歴博地区第４遺構面で汎用された型式であり、同文例が引田城跡でも確認できる。引田城跡は遅くとも元和の一国一城令で廃絶したと考えられるため、年代的な矛盾はない。小振りな宝珠の両側に逆「ハ」字形の子葉が伴う歴博314も、第４遺構面で汎用されている。三葉文系（上向）には、葉脈を表現する歴博321や、葉を剣菱形に陽刻する歴博532などがある。

西の丸町Ｂ地区では、三葉文系（上向）の軒平瓦20・18が様相１の共伴資料であり、第６面・古に位置付けられる。いずれも瓦当上角を面取りする。ただし唐草が２転する点は、歴博地区第４遺構面・同上層では顕在化していない新しい要素といえる。軒平瓦10は、唐草の下側に棘のある蔓状の表現が認められ、歴博532と同笵である。この他、軒平瓦22は岡山城跡中の段57と同笵であり、岡山城３式（Ⅲ～Ⅳａ層：17世紀第１四半期）に位置付けられることから、第６面・古に相当する。岡山城中の段57では、平瓦部凹面に糸切り痕が認められる。

桐文系軒平瓦も、第６面・古に帰属させ得る資料である。軒平瓦２は、東ノ丸跡県民ホール地点Ⅰ期下層石垣背面石列瓦層出土例（県民ホール98-33）・同地区捨石上面出土例（県民ホール96-8）と同笵であり、岡山城中の段68とも同笵である。また軒平瓦１は、桐の中心葉と両側葉が垂直方向に延び、各葉の輪郭が交差するという特徴があり、これは高知城三ノ丸跡出土の桐文系軒丸瓦（（財）高知県埋蔵文化財センター2001）と同一意匠である。この他、軒平瓦４・７は第５面SKb130出土であるが、瓦当上角の面取りや、３転する唐草文からみて、第６面・古に位置付けられる可能性があろう。

2. 2. 第６面・新（1620年代～1650年代）

当該調査区第６面・整地土Ⅴ層と、東ノ丸跡歴博地区第４遺構面SD04出土瓦が該当する。他に東ノ丸跡県民ホール地区捨石上面・Ⅰ区下層石垣背面石列瓦層出土瓦も、東ノ丸造営（1660～70年代）以前の資料であり、当該期の資料を含むとみられる。糸切り法の明瞭な資料はなく、コビキ法のみで占められると推測される。

軒丸瓦　ほとんどが三巴文系である。第６面・古で少量認められた、新たな要素をもつ一群が普遍化する。また、文様が均整のとれていない歪なものが目立つようになる。

新たな要素を改めて記すと、①珠文の大型化（８～12㎜）と数の減少（12個主体）、②巴文径の総体的な縮小、すなわち内区指数の低下、③巴長の短小化傾向と、巴頭部の明瞭化（巴基部の括れ）、④瓦当周縁幅の相対的な増大傾向、などである。これらの要素がⅡ・Ⅲ類、そしてこの時期から多くなるⅣ類（巴尾部が分離し、圏線を伴わない）の全てに共通して見出せる。瓦当面径は13～15cm前後が多い。なお瓦当裏面調整はＣ１主体であるが、ごく少量瓦当裏面中央のナデ調整を省略ないしほとんどしないＣ３が出現する（軒丸瓦42）。また瓦当・丸瓦接合はＤと推測されるものが多い。

Ⅱ類では、圏線状の巴尾部が正円形をなす、均整のとれたものもある（軒丸瓦16）が、かなり不整形な軒丸瓦11のようなものもある。Ⅲ類では、軒丸瓦26が珠文は小振りだが既述した④の特徴を明瞭に備えるため、当該期と捉えた。

Ⅳ類では、巴尾部が相互に長く重複している（巴尾長59）が、巴全体としてはかなり歪であり、珠文数も11個と少ない。軒丸瓦38は、瓦当上半部で大振りな珠文と小振りな珠文が交互に配される。軒丸瓦64は、

巴尾部の中程が大きく外側に膨らんで巻き込む、特徴的な文様系譜である。軒丸瓦151は、瓦当面中央に瓦工（大工）とみられる文字陽刻「建宗」を伴う。巴頭部はかなり大きく、短めの巴尾部をもつことに新しい要素が明瞭である。なお同笵は、国分寺でも採集されている。

この他、巴文の変形した草文状の意匠をもつ事例がある（軒丸瓦277）。瓦当径は他者よりも小振りである。当該調査区ではかなり汎用されており、隣接調査区でも西の丸町D区SK12J03（様相3）で同笵が出土している。

軒平瓦　三葉文系・四葉文系がある。瓦当上角に面取りを施すものは少ない。上弦幅は21～24cm前後、弧深は1.0～2.0cmを測るものが多く、若干幅狭で弧深の浅い傾向がある。また、側区幅が相対的に広くなる。唐草は3転するものも依然あるが、2転するものが主体を占めると考えられる。

三葉文系（上向）は、陽刻線で三葉（花？）の輪郭を表現し、その両側から各3本の茎が延び、先端に蕾を伴う子葉をもつ軒平瓦11がある。三葉文系（下向）は、棘状の葉脈表現がみられる歴博173がある。三葉の間に子葉がみられ、中心飾りの幅が広いこと、また両側に延びる唐草が蔓が長く延びて1転のみするという特徴がある。軒平瓦21はこれと同一系譜であり、葉脈数の減少といった後出的な要素がある。四葉文系の軒平瓦28･29ならびに歴博160は、第4章第2節で検討したように、同じ瓦笵を彫り足したり切り落としたりしたものと考えられ、瓦当上角の面取りも省略傾向が明確に指摘できる。同じく四葉文系の軒平瓦43（歴博165と同笵ないし同文）は、陽刻の「十」字形の中心飾りをもち、左右で3転する唐草の巻きの方向が異なる。

以上の他、岡山城3～5式での類似意匠の存在から、軒平瓦14･15･25･26も第6面に相当する事例と考えられる。25は当初の瓦笵にあった第3唐草を切り落として、2転する唐草に改変されている。

2. 3. 第5面（1650年代～1718年）

当該調査区第5面とⅣ層、また西の丸町C区SKc20･21出土瓦が該当する。第5面SKb130は、瓦が多量に廃棄された土坑であり、撹乱による若干の混入を除けば、かなりまとまった内容の資料である。西の丸町C区SKc20･21は、出土した陶磁器が様相4の基準資料であり（松本2002）、第5面に併行する時期の所産といえよう。

軒丸瓦　全て三巴文系である。第6面・新からの特に大きな変化を見出すことは難しいが、①巴尾長が若干短く（25～30％台）、②珠文数が12個主体ながらさらにそれより少ないものもみられる、というより新たな傾向を指摘できる。瓦当面径は13～14cm前後と、若干縮小するとともにばらつきが少なくなる。瓦当・丸瓦接合はD主体と考えられ、瓦当裏面調整はC3がかなり認められる。

Ⅲ類には、西の丸町C地区SKc20･21伴出の同笵例の軒丸瓦31がある。第5面に位置付けられるⅢ類は少なく、あるいは軒丸瓦31もより古い第6面･新に位置付けられる可能性があろう。

Ⅳ類の軒丸瓦169は、巴尾基部が太く短いものであり、珠文数は9個と少ない。第3・4面で盛行する意匠の先駆けといえる。軒丸瓦28は、強く内側に屈曲する鉤形の巴頭部をもつ、第6面･古以来の文様系譜（軒丸瓦34－42･42－28）の最後に位置付けられるものである。軒丸瓦156は、第6面･新の軒丸瓦64の系譜か、第6面・古の軒丸瓦2の系譜から圏線が消失したものと思われるが、一応前者の可能性を考えておきたい。

軒平瓦　宝珠文系・三葉文系・五葉文系・四目文系などの他、幾何学的な中心飾りをもつものがある。上弦幅は22～24cm前後、弧深は1.0～2.0cmを測り、第6面・新同様の弯曲が少なく、側区幅の広い瓦当面である。

宝珠文系の軒平瓦101は、逆ハート形の小さな宝珠を中心飾りにもち、蔓が連続して小さく巻き込む特徴的な唐草を伴う。三葉文系（下向）は、剣先形の細身の陽刻三葉をもち、おそらく第6面･古の軒平瓦22の文様系譜を引くものと考えられる。ただし、第2唐草の輪郭が陽刻線で表現されていること、また内区下縁が波形を呈することが新たな要素として指摘できる。軒平瓦183でも同様な唐草文が認められる。三葉文系の軒平瓦44は、Y字形に延びる葉脈を伴う葉が表現される。

軒平瓦46は中心飾りにA字形の特異な意匠をもち、2転する唐草の外側に子葉を伴う。

菊丸瓦　明確な菊丸瓦の事例は、第5面から確認できる。菊丸瓦1･18は、ともに比較的大きな瓦当径に比して周縁幅が狭く、花弁に立体感がある。

2. 4. 第4面（1718年～1734年頃）

当該調査区第4面出土瓦が該当する。しかし第4面の遺構が少なく、また比較的短期間に第3面に整地されたと考えられるため、第3面出土瓦との厳密な峻別

は難しい。

軒丸瓦　全て三巴文系である。第５面出土瓦との差異は、当初瓦としては圏線を伴うⅡ類が認められなくなる点を挙げ得る。また第３面との違いは、①珠文数の少ない（10個以下）ものが存在するが顕在化していないこと、②瓦当面剥離材にキラコ（剥離材ｂ）使用のものがないこと、の２点にある。瓦当面径は13～13.5cm前後で、第５面よりも法量的なまとまりが指摘できる。瓦当・丸瓦接合はＤ主体（以後第１面までＤ主体）で、瓦当裏面調整はＣ３主体である。

軒丸瓦69は巴尾部が長いため、第５面まで遡る可能性も否定できないが、複数個体が第４面出土で珠文数が９個と少ないため、第４面に伴うものと捉えておく。軒丸瓦63・165は外膨らみに巻く巴文をもち、軒丸瓦64－軒平瓦61・156の文様系譜を引くものとみられる。軒丸瓦89は、第５面の軒丸瓦169の文様系譜を引くとみられ、珠文が若干大振りになっている。

軒平瓦　第４面を上限とする資料が少なく、実態不明の観があるが、巴文系軒平瓦が出現する。岡山城・城下では、岡山城６式（17世紀末葉～18世紀第３四半期頃）で定型的な「岡山系三巴文軒平瓦」が出現しているため、それとの関係も考慮に入れるべきであろう。ただし、岡山系とは唐草の反転方向が逆であり、直接的な系譜関係ではないようである。その他、中心飾りが特異な軒平瓦48(第５面軒平瓦46の文様系譜を引くか）があるが、いずれも軒丸瓦と同様、キラコ使用は認められない。

菊丸瓦　中房の輪郭がやや不明瞭で、花弁も立体感に乏しい菊丸瓦５がみられる。瓦当面径は小振りになり、相対的に周縁幅の比率が増大している。

2. 5. 第３面（1734年頃～1747年頃）

当該調査区第３面と、それを被覆する整地土Ⅱ層からの出土瓦である。第３面廃絶時に遺構内やⅡ層に多量の瓦の廃棄が行われていることから、資料は豊富である。ただし下位の第４面では、瓦の大量廃棄は認められなかったため、第４面からの継続使用が一定量含まれている可能性はある。

技法的な変化としては、瓦当面剥離材にキラコを使用するものがみられるようになる点が指摘できる。ただし、その存在はまだ少数にとどまっており、離れ砂ないし粘土粉が主体である。

軒丸瓦　全て三巴文系である。巴尾部は第５面と同様、30％台以下のものが多いが、その中でも25％未満の特に短いものが出現しているのが注目される（軒丸瓦67・154・172)。また珠文数10個以下のものが、図示したもの以外も含めて、かなり目立つようになる。さらに文様は、彫りが浅く平板なものが多い。瓦当面径は13cm前後が主体である。瓦当裏面調整はＣ３主体である。なお軒丸瓦10・168・204は、キラコ使用である。

軒丸瓦51は、かなり細長い巴尾部（巴長61％）を伴う均整のとれた意匠である。第６面軒丸瓦48－第５面軒丸瓦61の系譜を引くものか。軒丸瓦60も同様と考えられる。軒丸瓦78は若干巴尾の幅が広く、扁平な観のあるものである。軒丸瓦91・172もこれと同様であるが、珠文数が８個と少ない。軒丸瓦99は巴径が小さく(内区指数0.43)、同様の文様系譜は第３面主体と考えられる。

キラコ使用の軒丸瓦10は、瓦当径が若干小振りな上、周縁幅が広いという新しい要素をもつものである。巴は隣接する相互の尾部が連続するⅡ類である。また軒丸瓦204は、大振りな巴頭部から急角度で屈折して短く延びる、直線的な巴尾部をもつ。第４面以前には認められない新たな文様系譜である。

軒平瓦　三葉文系・宝珠文系・蔦葉文系・菊花文系・三巴文系・二巴文系・半裁花菱文系などがある。各遺構面中、最も多様な文様系譜がみられる。第４面あるいはより下位面から連続する文様系譜も多いが、半裁花菱文系はこの面を初現とする。また宝珠文系でも第４面以下とは異なる新たな文様系譜の出現がみられる。上弦幅22～25cm、弧深1.0～2.5cmを測り、第５・４面よりもかえって湾曲の強い、幅広のものも認められる。ただし側区幅は、4.0～7.0cm前後に広がる。技法的には、瓦当面剥離材にキラコ使用のものが出現するが、この面ではそれは半裁花菱文系に限定されるようである。

宝珠文系は、①逆ハート形の小振りな宝珠をもつ軒平瓦102、②火焔宝珠と蕨手状に立ち上がる唐草をもつ軒平瓦74が、それ以前からの文様系譜と考えられる。一方、③大振りな陽刻宝珠（一部火焔宝珠）＋宝珠の下側から上方に大きく巻き込む唐草をもつ文様系譜（軒平瓦77・78・80・81)、④陽刻宝珠＋宝珠の上端から下側に巻き込む唐草をもつ文様系譜（軒平瓦82・83)、⑤陽刻線による宝珠をもつ文様系譜(軒平瓦105)の３者は、第３面に出現する新たな文様系譜である。①・②は少量にとどまり、③・⑤が主体的な存在である。

三巴文系は、①内区下縁が波形を呈する第４面から

の文様系譜（軒平瓦61）の他に、②第1・2唐草の蔓が巴の下縁から平行して延びるもの(軒平瓦57)、③唐草が下・上に巻く文様系譜（軒平瓦66)、④中心飾りの両側に唐草ではなく一巴と子葉を配するもの（軒平瓦70）がある。①・③が主体的な存在である。この他、周囲に珠文を伴う二巴文を中心飾りとする軒平瓦71も、汎用されている。

半裁花菱文系は、レリーフ状の中心飾りと、輪郭を陽刻線で表現した唐草をもつ文様系譜がある。中心飾りの立体感や、唐草の巻き方などの要素では、軒平瓦120→軒平瓦121という変遷も考えられるが、両者とも第3面で出土している。同笵品もかなり多く、宝珠文系・三巴文系とともに汎用されたといえる。

軒桟瓦　軒桟瓦1は、撹乱出土だが軒平瓦66と同笵の可能性があるため、第3面に帰属させ得るものである。これより下位面では軒桟瓦は確認できないため、取り敢えず第3面を軒桟瓦の出現期と見なしたい。小丸瓦当が右側に貼り付けられる逆桟瓦である。接合関係にある小丸瓦当の文様は不明だが、珠文を伴わず尾部の比較的長い三巴文をもつ小丸瓦当の軒桟瓦14・16も第3面段階に認められる。

菊丸瓦　花弁輪郭を陽刻線で表すⅠ類（菊丸瓦2など)、花弁全体を陽刻するⅢ類（菊丸瓦26など）の2者が主体である。他に車輪状の軸線で花弁を表現するⅡ類（菊丸瓦15）や、三巴文のⅦ類（菊丸瓦36）がある。明確なキラコ使用例は、まだない。

2. 6. 第2面・古（1747年頃～1770年代）

当該調査区では良好な資料に恵まれないが、西の丸町C地区SXc13・14出土瓦（土器・陶磁器は様相6の基準資料）は当該調査区SXb06などに先行する資料であり、「第2面・古」に充てたい。

出土瓦には、第3面を初現とするものがかなりみられるため、新出の事例はさほど多くない。ただし新出事例に、キラコ使用がかなりの頻度で認められる点は注目できる。

軒丸瓦　全て三巴文系である。第3面でみられた内区指数が小さい文様系譜（軒丸瓦99など）や、珠文数が少ない文様系譜（軒丸瓦91・172など）は新出事例には見出せない。瓦当面径は第3面同様の13cm 前後の他に、14～15cmのやや大振りなものが認められる。

軒丸瓦138は、第3面の軒丸瓦78の文様系譜を引くものと考えられ、やや幅はあるが細長い巴尾部をもつ。巴断面は第3面同様に上面が平坦だが、彫りは深い。軒丸瓦46は巴頭部が鉤形に明確に屈折するもので、意匠としては第6面で盛行する文様系譜に近い。軒丸瓦202は第3面の軒丸瓦204と同一の文様系譜である。これらはいずれもキラコ使用で、粘土粉を剥離材とする軒丸瓦136は第3面まで遡る可能性があろう。

軒平瓦・軒桟瓦　SK08・09では第3面初現の宝珠文系③・⑤などが主体であり、より遡るものも少量認められる。新出事例とみられるのは軒平瓦122と、出土した軒桟瓦と同笵の軒平瓦51を挙げ得るに過ぎない。いずれもキラコ使用である。半裁花菱文系の軒平瓦122は、第3面出現の軒平瓦120・121と同一系譜である。半裁花菱は、全体が平板な陽刻表現となり、花弁の軸線も不明瞭である。また唐草も、先端の巻き込みが極めて弱い。したがって意匠としては、軒平瓦120→121→122という変遷が想定できよう。同文が軒桟瓦29であり、小丸瓦当は瓦当面右側の逆桟瓦である。

軒平瓦51は、中心飾りにC字形の子葉をもつものであり、第3面の軒平瓦49に近い系譜か。同笵が軒桟瓦C906で確認できるが、小丸瓦当の位置は瓦当面左側であり、半裁花菱文系とは逆である。

菊丸瓦ほか　菊丸瓦16が当該期に出現するものと考えられる。キラコ使用である。また土塀瓦3がみられる。キラコ使用で、土塀瓦としては初現例である。

2. 7. 第2面・新（1780年代～1821年頃）

当該調査区第2面のSXb06・SKb63出土瓦などが該当する。第3・4章で既述したように、これらの遺構は火災による第2面の廃絶を契機として掘削・埋没したものであり、出土瓦は第2面最終段階の様相を示しているといえる。共伴土器・陶磁器は様相7である。そこで、これらの資料を「第2面・新」としておきたい。

出土瓦には第3面を初現とするものも、無視できない程存在しており、出土状況の一括性を考慮すると継続的な使用と捉えるのが妥当であろう。一方で新出事例には、第2面・古で見出せなかった新たな特徴を備える文様系譜の出現が多く認められ、第2面・古とは明瞭に区分できる。

軒丸瓦　全て三巴文系である。新たな要素として指摘できるのは、①対向する巴頭部の間隔が広くなり、巴尾部先端が細長く延びる系譜の出現、②珠文数は12個主体だが、16個前後のものもかなり存在する、③文様の輪郭が明瞭で、全体に均整のとれた文様のものが多くなる、などの点である。いずれにしても、一見して第3面よりも整った観を与える型式が多い。またキラコ使用が一般的である。瓦当面径は12～12.5cm前後の縮小傾向が明瞭なものと、14～15cmの大振りな

ものがあり、第２面・古に始まる法量分化がより明確化する。

軒丸瓦178･190は、上記した３つの要素を典型的に備えたものである。軒丸瓦187も珠文数は12個であるが、他の要素はこれらと共通する。

また軒丸瓦174･197は、巴尾部が細いが短く（巴長30％前後）、第３面の軒丸瓦80・85などの系譜に連なる可能性もある。しかし珠文数は16個前後であり、確実に新たな要素が指摘できる。

軒平瓦　菊花文系・宝珠文系・半裁花菱文系がある。第３面で認められた多様な文様系譜は、当該期にはほぼ上記の３系譜に収斂されていく。上弦幅24～26cm･20～22cm、弧深1.0～1.5cm前後を測り、軒丸瓦の法量分化の明確化に対応する。当該面に帰属し得る事例は全てキラコ使用である。

菊花文系の軒平瓦35は、３転する唐草と第３唐草下側の子葉をもち、第６面に近い意匠をもつといえる。宝珠文系は、第３面でみられた文様系譜とは異なり、１転する唐草とその外側に延びる飛び唐草状の子葉をもつ、新たな系譜である。文様区幅が相対的に狭いが、軒平瓦91は唐草が大きく巻き込み宝珠も大振りなため、均整のとれた意匠にみえる。

半裁花菱文系でも、第３面と第２面・古とは異なる文様系譜が出現する。軒平瓦124は、花弁輪郭を肉厚な陽刻で表現しており、花弁内に彫りの深い明瞭な軸線が認められる。また第１唐草の外側に、蔓の繋がる子葉がみられる特徴的な唐草文を伴う。子葉を伴わない系譜もある（軒平瓦148）。また少数にとどまるが、下向の半裁花菱文を中心飾りにもつ軒平瓦154のような事例もある。

軒桟瓦　軒桟瓦は、当該期でも極めて少ない存在である。伴出遺物の下限は19世紀中葉まで下がるが、東ノ丸跡歴博地区第２遺構面出土の軒桟瓦1558は、軒平瓦124に近い意匠をもっており、第２面・新に位置付けてもよいと考える。逆桟瓦である点は、第２面・古の半裁花菱系と共通しており、注意されよう。またいずれもキラコ使用である。

菊丸瓦　Ⅰ類の菊丸瓦12はキラコ使用で、花弁輪郭の陽刻細線が明瞭である。菊丸瓦11･13も当該期と考えて大過ないであろう。

土塀瓦　土塀瓦の出土量もさほど多くはない。土塀瓦２は、軒平瓦124の系譜を上下逆転させたような文様をもち、当該期にまで遡る可能性がある。

2. 8. 第１面・古（1821年頃～1872年頃）

当該調査区第１面の中で、近世屋敷地に伴うとみられる土坑・石組溝の出土瓦（様相８の共伴瓦）を中心に充てた。遺構の大半は明治５（1872年）の高松監獄建設に伴う屋敷の解体によって廃絶・埋没したと考えられる。特に一括廃棄とみられるSKb52で、大半が当該期の新出型式であることは、火災による第２面の廃絶を承けて大半が新規瓦の調達で賄われたことを示唆していよう。

軒丸瓦　全て三巴文系である。新たな特徴として指摘できるのは、①相対的に巴尾の長いものも認められるが、文様区そのものは縮小傾向が明確である、②同時に巴尾部の短い一群（巴長25％未満）が出現し、逆に肥大化した巴頭部と相俟ってコンマ形（「,」形）を呈する、③上記①・②のいずれも珠文は第２面と同様ないし大粒化するものが多い、などである。この他、珠文数は12個主体で、それより多いものはほとんど存在しない、ということも第２面・新から変化として指摘できる。また瓦当周縁外側に面取りを施すものが目立つようになる。瓦当面径は、12.5～13.5cmと11.0～12.0cmの２者があり、第２面･新の分化した２法量が各々縮小したことが窺える。

軒丸瓦206･219は、巴頭部の間隔がまだ広いことから、第２面・新の軒丸瓦190の文様系譜を引く可能性がある。軒丸瓦140も巴径は小さいが、巴尾部はまだ相対的に細長いものである。一方、軒丸瓦141は巴長は長いものの、巴尾部の形状が不揃いで、崩れた文様構成となっている。また軒丸瓦143･251は、短い巴尾部が直線的に延びており、隣接する尾部同士が円形をなさず隅丸三角形を呈する。

この他、珠文を伴わない三巴文の系譜が認められるが、出土数がさほど多くないため、初現が第１面なのかより遡る時期なのかは明確でない。最古相の軒丸瓦267は、同笵品が香西寺土塀や志度寺土塀において軒平瓦132とセットで葺かれていることを考慮すると、第１面・古の初期に珠文のない三巴文系軒丸瓦が出現していた可能性がある。

軒平瓦・軒桟瓦　半裁花菱文系が圧倒的であり、他の文様系譜は宝珠文系・菊花文系が若干量存在した可能性があるのに過ぎない。大振りなものは上弦幅23～24cm、弧深2.0～2.5を測り、第２面・新よりもむしろ瓦当面の湾曲が強い傾向にある。小振りなものは上弦幅21cm、弧深1.0cm前後である。

半裁花菱文系（上向）には、第２面・新から継続す

る文様系譜（軒平瓦126・127）がある一方で、これらからの変容系譜とみられる、①唐草が雲形に肥厚し、「y」字形の棘状の子葉を伴う文様系譜（軒平瓦132・133）、②輪郭を2重の陽刻細線で表現する文様系譜（軒平瓦116）、③両側の半裁花弁の先端が棘状を呈し、2転する唐草を伴う文様系譜（軒平瓦144）、④唐草の雲形へのデフォルメがより顕著で、子葉を左右各2個伴う文様系譜（県民ホール101-82）、が新たに認められる。これら4系譜のうち、①～③には花弁内の軸線が認められるが、④には存在しない可能性が強い。①は御厩・檀紙村産、④は新瓦町産であることが、出土瓦ないしそれと同笵・同系譜の現役瓦刻印で確認できる（佐藤2002）。

下向の半裁花菱文系は、第1唐草が垂下して蕨手状に強く巻き込む軒平瓦156がある。第2面・新の軒平瓦154を祖形とするか。

軒桟瓦には、小振りな半裁花菱全体を平板な陽刻とし、1転する唐草と子葉を伴う軒桟瓦5がある。逆桟瓦のため、瓦当左端のみの軒平瓦153は軒桟瓦とすべきかもしれない。また、軒平瓦144と同笵の文様をもつ軒桟瓦3も、当該期の所産である。

2. 9. 第1面・新（1872年頃～1898年）

当該調査区第1面検出遺構の中で、明治31年（1898）を下限とする高松監獄（懲役場）に伴う遺構からの出土瓦を充てる。ＳＸｂ01・02には監獄内の授産の廃棄物が多量に廃棄されており、「明治廿六年」銘の木簡も出土していることから、監獄移転に伴う一括廃棄の可能性が考えられる。

軒丸瓦　全て三巴文系である。基本的には第1面・古と同じであるが、①巴尾部の比較的細長い文様系譜の消滅、②珠文数の少ない（10個以下）個体の再出現、③瓦当径の縮小と周縁幅の増大化傾向、などの変化を認め得る。なお、無文の文様区をもつものや、文様区そのものがないもの、などの現代的な系譜はこの時期にはまだ認められない。

軒平瓦・軒桟瓦　半裁花菱文系を主体として、少数の菊花文系・花菱文系が認められる。半裁花菱文系では、第1面・古の文様系譜④が主体をなし（軒平瓦137。花弁内の軸線はない）、第2面・新からの系譜（軒平瓦126など）は消滅するようである。この他、花弁内に軸線を伴い唐草先端が丸い雲形に肥厚する系譜（軒平瓦134・135）が出現する。また高松城跡と城下町では良好な資料に乏しいが、第1面・古の系譜①（御厩・檀紙村産）には、本来の第1唐草が省略され第2唐草と子葉が連続する系譜と、子葉が省略され文様区いっぱいに雲形の唐草が充満する系譜、の2者が認められるようである（佐藤2002）。さらに大町などの城下近郊部での新興生産地でも、半裁花菱文系が採用されていく。

軒桟瓦では、第2面・新での系譜④に連なる軒桟瓦4・7がある。軒桟瓦7には「高松／玉屋」刻印が捺される。小丸瓦当付近のみであるが、軒桟瓦19にも「高松／」刻印がみられ、同一系譜と考えられる。いずれも逆桟瓦である。この他、監獄期以降になるかもしれないが、蓮華文ないし菊花文を中心飾りにもつ軒桟瓦26があり、「ウタツ富」の刻印がある。また、無文の文様区をもつ軒桟瓦23～25や、文様区もない軒桟瓦28は、監獄期の遺構からは出土せず、それ以後の撹乱から出土していることから、20世紀に入ってからの製作と考えられる。

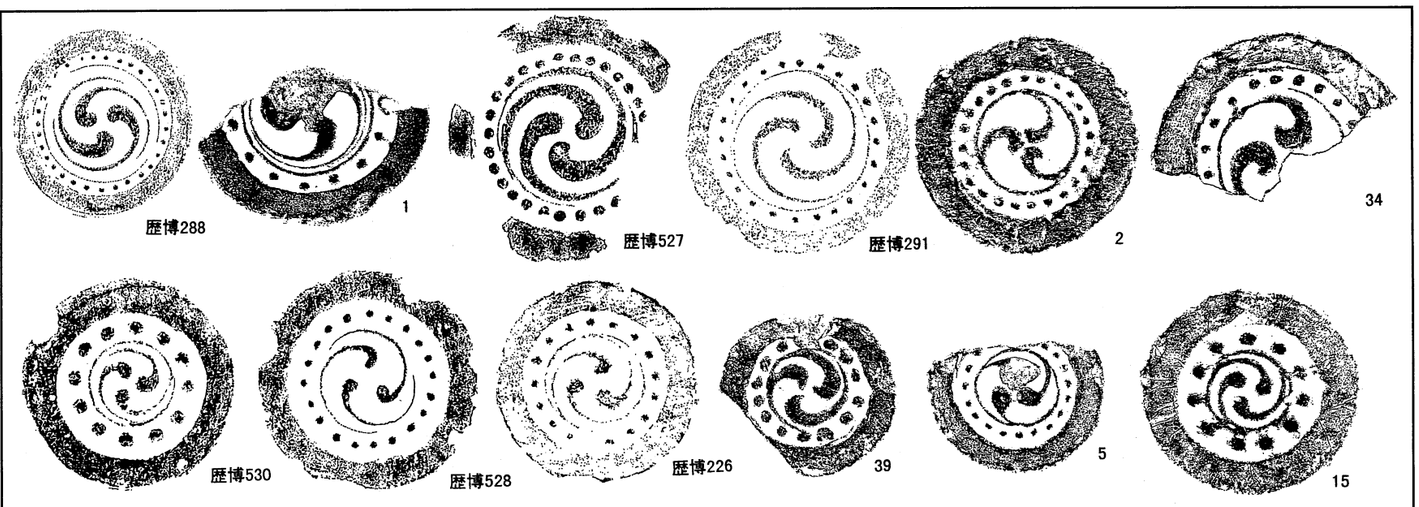
2. 10. 変化の特徴

以上概観してきた層位（遺構面）別の様相は、文様系譜と製作技法との対応関係を踏まえた上で、改めて型式組列を踏まえた様式としての提示がなされるべきと考える。これらは全く今後の課題とせざるを得ないが、取り敢えず現段階での諸要素の特徴的な変化要素のいくつかを列挙する。

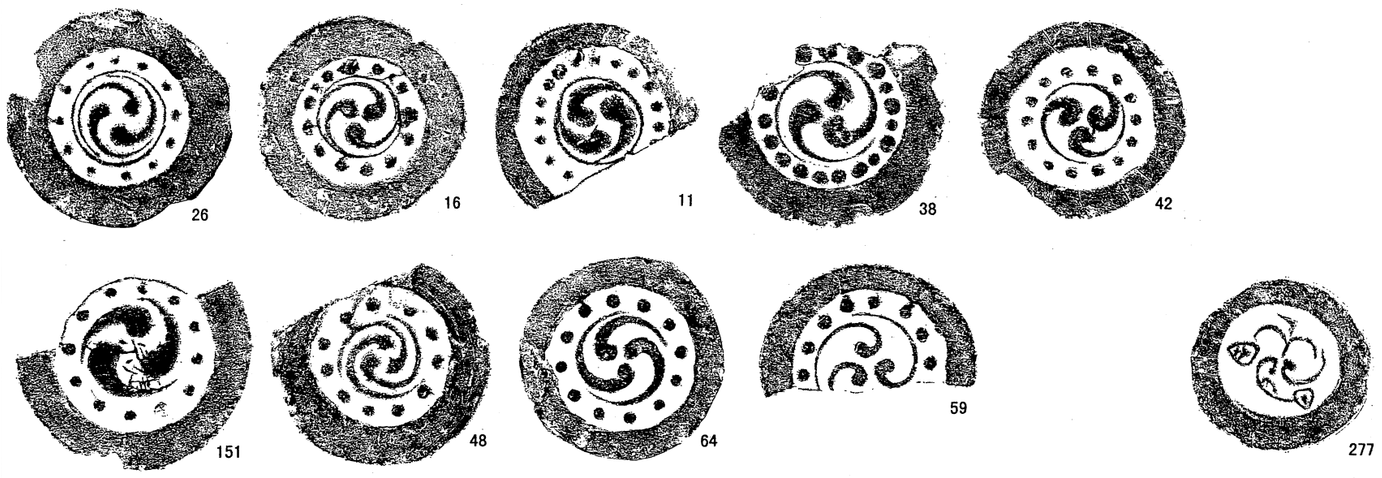
文様構成　三巴文系軒丸瓦の文様構成の変化は、大雑把にみて以下の3点にまとめられる。①巴頭部の相対的な肥大化と巴尾部の短小化、②瓦当面に占める巴文径の縮小化（内区指数の低下、巴頭部相互の間隔の狭小化）、③珠文の大型化と12個主体を基調とした珠文数の減少、である。第6面・古から第3面までは、概ね上記①～③の動きを首肯し得るが、第2面・新でこれに逆行する新たな動きが生じている。

すなわち④巴尾部の細長い長大化傾向、⑤内区指数の増加と巴頭部間隔の広がり、⑥12個基調ながら珠文数16個の事例の目立った増加、などである。復古調ともとれるこのような意匠の出現は、他地域でも認められる。大坂・堺では刻印表記の変わる文政2～4年（1819～21）頃を境に軒丸瓦の珠文数が12個から16個に増加する（嶋谷1999）。岡山城・城下でも岡山城7式（18世紀第3四半期～19世紀第3四半期）の後半期（19世紀前葉か）で、巴尾が長く珠文数16・18個の事例が出現する（乗岡2001）。高松城跡で上記④～⑥の動きが明確化する第2面・新は、年代的にも堺・岡山での動きと相前後するとみてよい。四国の他地域での動向は明らかではないが、地域を超えた「復古調」への動きの背景は今後の検討課題である。

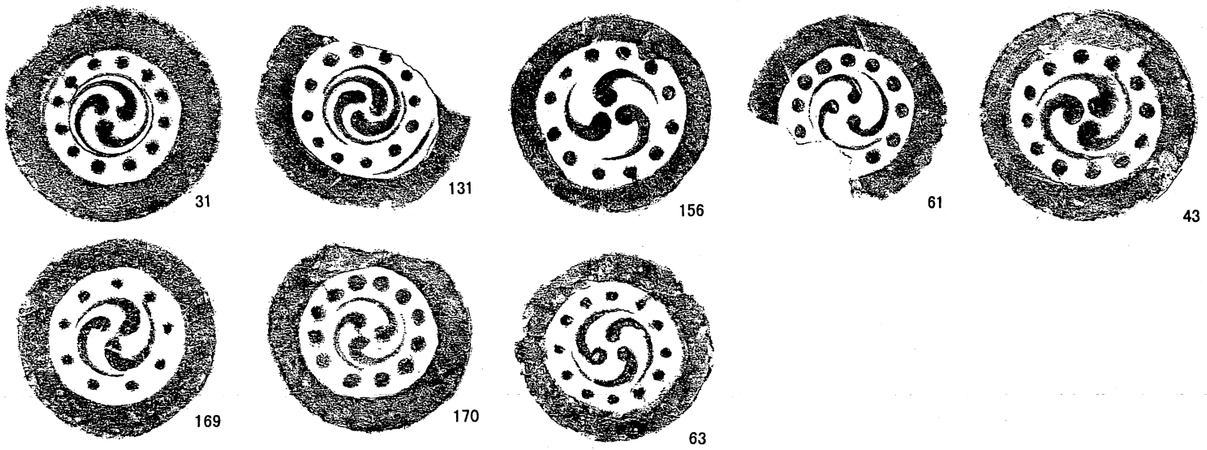
第6面・古（様相1）



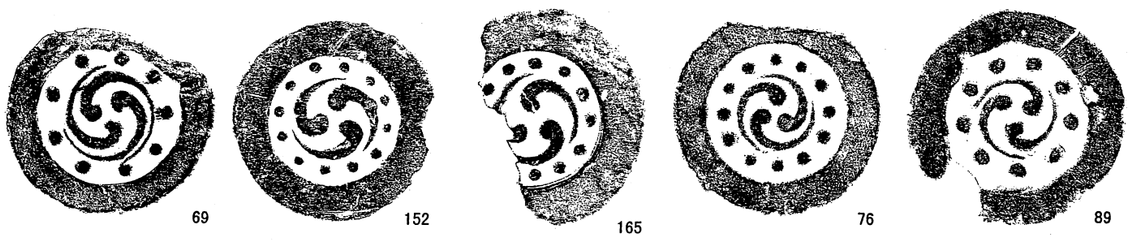
第6面・新（様相2・3）



第5面（様相4）

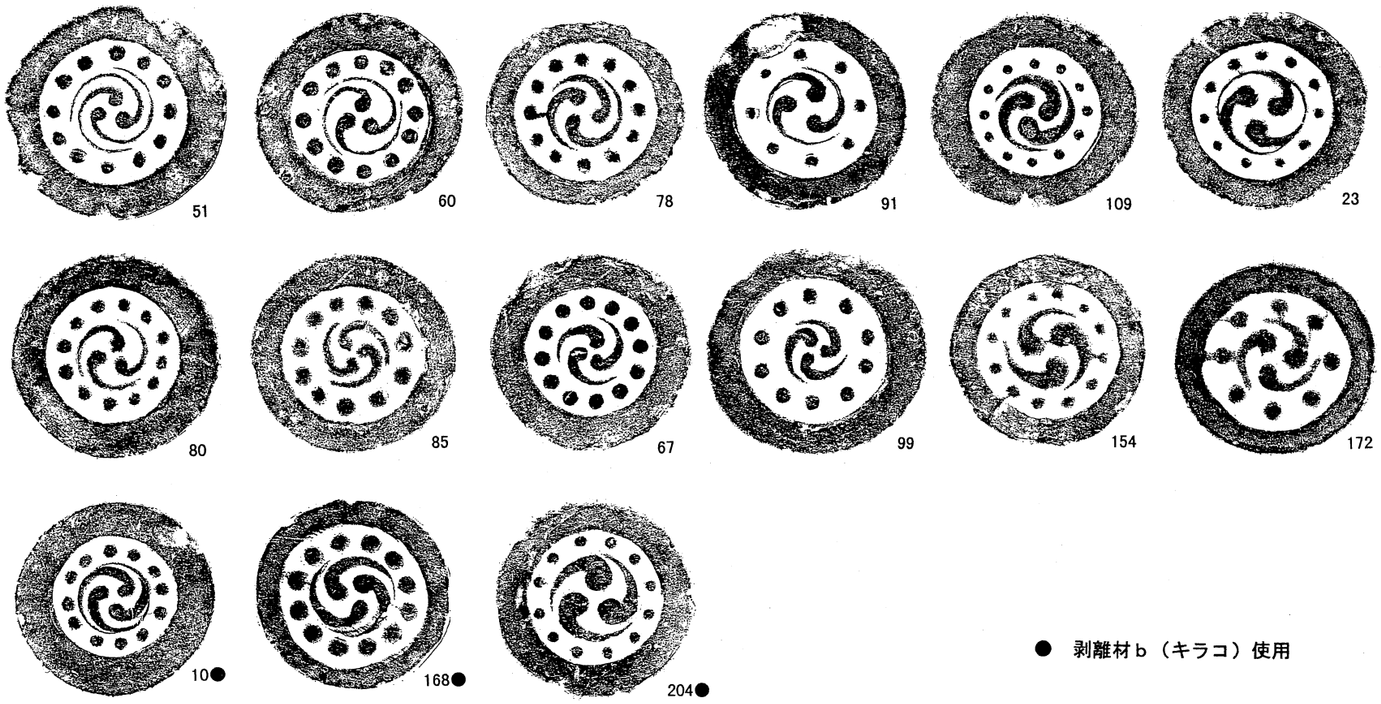


第4面（様相5）



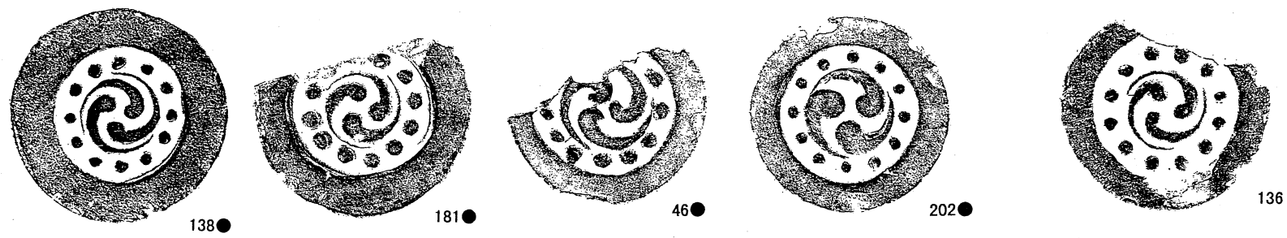
第20図　軒丸瓦の変遷(1)　（S＝1/4）

第3面（様相5）

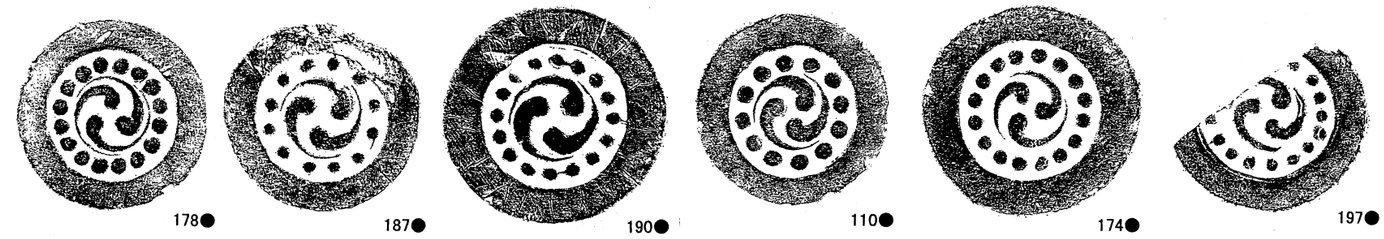


● 剥離材b（キラコ）使用

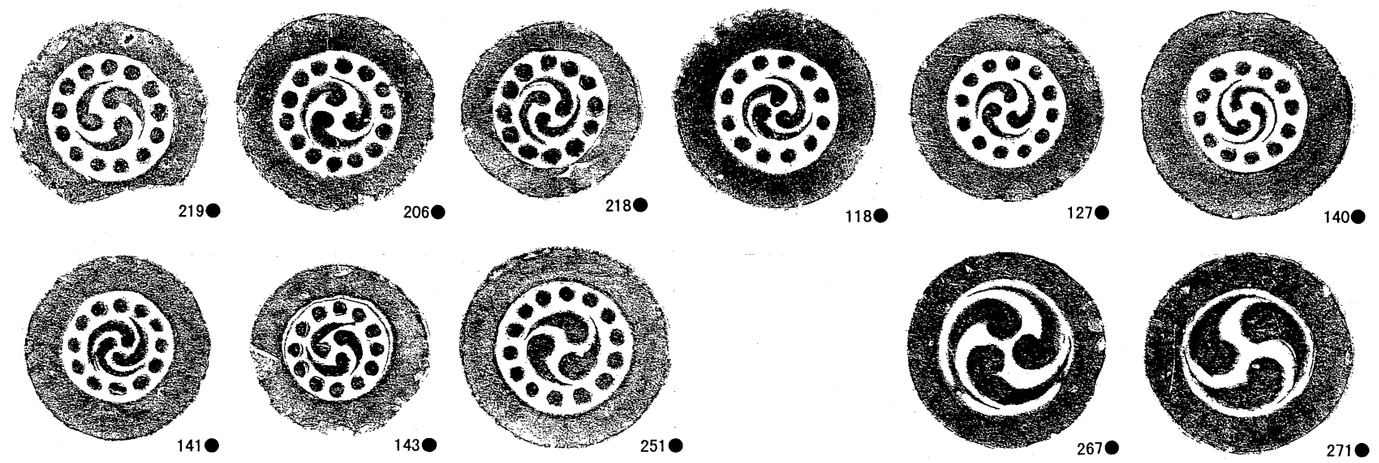
第2面・古（様相6）



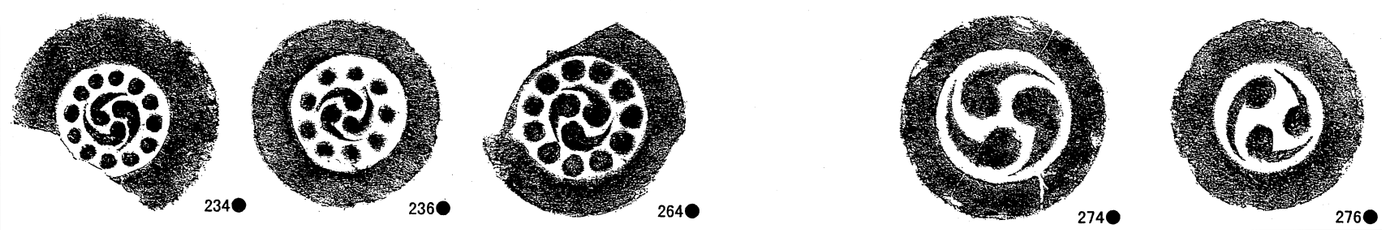
第2面・新（様相7）



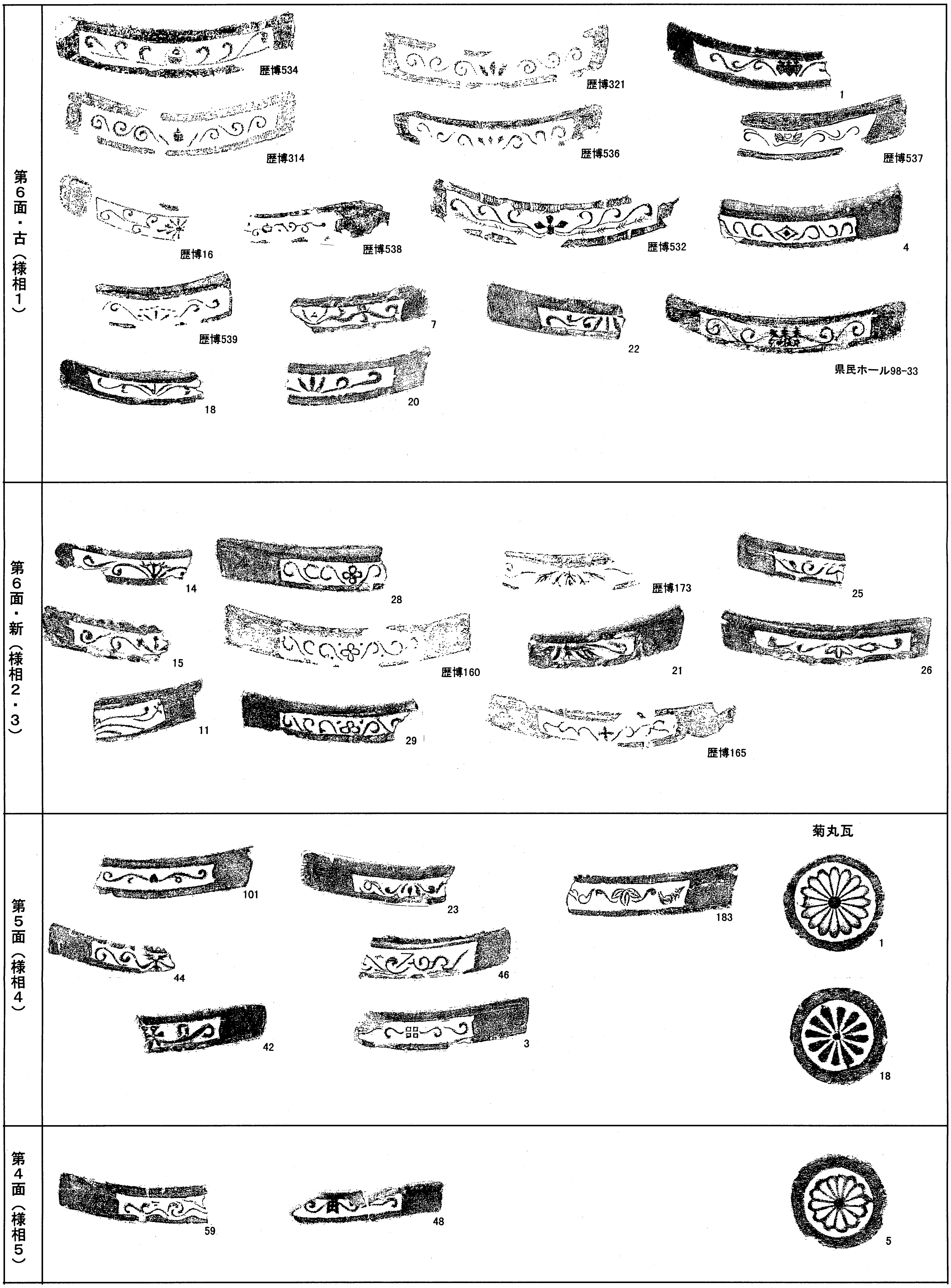
第1面・古（様相8）



第1面・新（様相9）

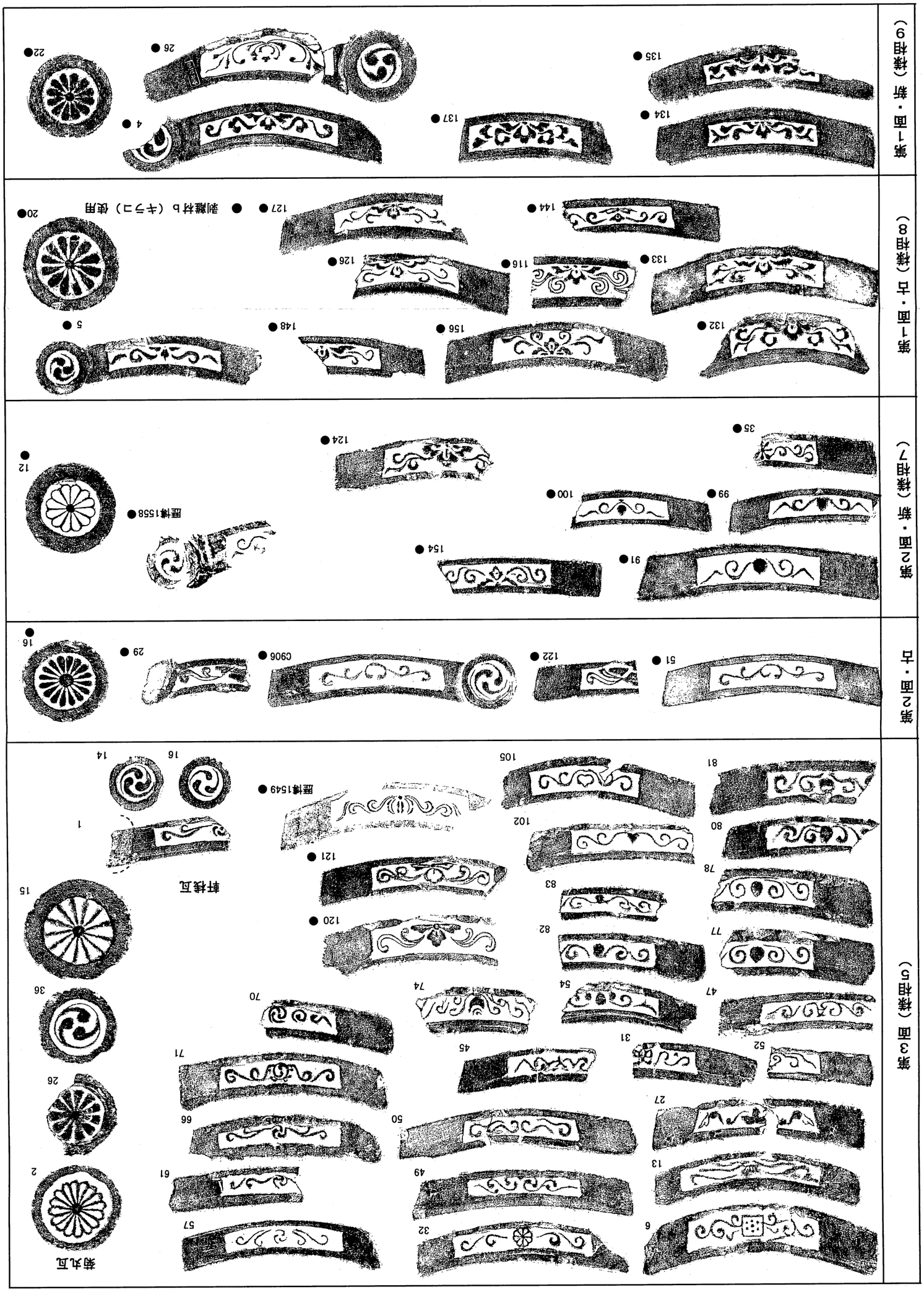


第21図　軒丸瓦の変遷(2)　（S＝1/4）



第22図　軒平瓦の変遷(1)　（S＝1/4）

第23図　軒平瓦の変遷(2)　(S＝1/4)



軒平瓦の文様構成の画期は、新たな系譜が複数出現する第３面段階と、半裁花菱文系主体となり、その系譜が多様化していく第１面段階に求められよう。軒丸瓦の動向と合致しないようにみえるが、半裁花菱文系としては第２面・新がそれ以前の系譜（軒平瓦 120 － 121 － 122）に代わる新たな系譜（軒平瓦 124 － 126 － 127）の出現期とみることができる。軒平瓦 124 の系譜では、それまでの２転する唐草の外側に子葉が加えられており、復古調の意匠ともいえる。また、軒平瓦 132 や軒平瓦 116、県民ホール 101-82 などの第１面で展開する系譜の祖形となった。さらに宝珠文系では斬新な意匠をもつ軒平瓦 91 の系譜が第２面･新に出現しており、第３面～第２面で主流をなす２つの意匠内で新たな系譜への転換が生じたのが第２面・新と評価できよう。その意味では、第２面・新も画期と捉えることが可能である。

瓦当面剥離材　キラコ使用は第３面で限定的に始まり、遅くとも第２面・新には普遍化した。普遍化する年代は岡山城･城下と大差ないが、初現が 18 世紀第２四半期頃にまで遡る点はやや異なるように見受けられる。岡山城下周辺でのキラコ使用例は、金山三重塔（天明８年：1788）や松琴寺瑜伽殿拝殿（寛政８年：1796）の当初瓦にみられ、大林寺（宝暦３年：1753）の当初瓦にはみられないという（乗岡 2001a）。岡山系三巴文軒平瓦の文様変化からみても、18 世紀中葉にはまだキラコ使用はないと捉えておくのが妥当と考えられる。とすれば、現在までの知見による限り、岡山と高松ではキラコ使用の開始年代に地域差が存在すると見なさざるを得ない。

第３面でキラコ使用をいち早く始めたのは、軒平瓦では半裁花菱文系である。第５面以来、軒平瓦の文様は均整さに欠け、細かな表現をしないものが多いようである。その中で軒平瓦 120 は、花弁の起伏や唐草輪郭の細線などに、均整が取れ、細かいが輪郭の明瞭な表現を見出すことができる。こうした傾向は、第２面以降の半裁花菱系軒平瓦や、復古調の軒丸瓦 178 などにも指摘できるが、その技術的前提としてキラコ使用による平滑（綺麗）で凹凸の少ない瓦当面の作出という、現象面での変化を挙げられるかもしれない。

なお北山健一郎氏は、17 世紀後半以降の軒丸瓦の丸瓦部凹面に布目やコビキ痕がほとんど認められないと指摘し、丸瓦成形の際にキラコを使用したと考えている（北山 1999）。しかし、当該調査区や東ノ丸跡出土瓦の観察による限り、キラコ使用が明瞭なのは軒瓦の瓦当面のみであり、丸瓦凹面や平瓦凹凸面にはそのような形跡は確認できないことを付記しておく。

桟瓦の普及過程　高松城跡では、桟瓦の存在が希薄である。桟瓦そのものは第３面に出現するものの、明治期の第１面・新に至っても本瓦葺きに取って替わることはなかった。また半裁花菱文系の軒桟瓦は、いずれも小丸瓦当が向かって右側にくる逆桟瓦であり、小丸瓦当のない鎌形軒桟瓦は第１面・新に至っても認められない。

以上のような特徴は、紺屋町遺跡のような町屋や、幕末～明治期とみられる現存民家においても、同様な傾向が指摘できる。これは、徳島城下出土瓦や後免（高知県南国市）･安芸（高知県安芸市）の町屋で想定される桟瓦へのスムーズな転換とは明らかに異質な現象である。明治期における本瓦葺き主流の傾向は、丸亀城下や多度津陣屋周辺でも認められ、讃岐地方の地域的特徴といえよう。

3. 丸瓦の変遷

3. 1. 丸瓦の群別

出現頻度が高く、軒丸瓦との対応関係が想定できる丸瓦を、法量・技法により６群に整理した。

１群　丸瓦１・３・４が該当する。糸切り法（コビキＡ）、大型（全長 30.5 ～ 31.8cm）・厚手、凹面の吊紐痕、凸面の縄叩き目などを特徴とする。

２群　丸瓦 12･13 が該当する。コビキ法(コビキＢ)、中型（全長 27.5cm）・薄手を特徴とする。

３群　丸瓦 17 が該当する。コビキ法、中型（全長 27.5cm)･厚手を特徴とする。２群とは異なる粘り気の乏しい胎土も特徴である。

４群　丸瓦 20・21・22・23・24 が該当する。コビキ法、小型（全長 20.5 ～ 24cm)･薄手、凹面刺子（ゴザ目）を特徴とする。

５群　丸瓦 30 が該当する。コビキ法、小型（全長 20.5cm)・薄手、凹面内叩きなどの特徴がある。

６群　丸瓦 26 が該当する。コビキ法、極小型（全長 19.5cm)・薄手、凹面刺子を特徴とする。

3. 2. 変遷の概要

上記丸瓦には、軒丸瓦との対応関係が推測できるものがあり、軒丸瓦の帰属層位に準拠して変遷を見通すことが可能である。以下概要を記す。

第６面　１群（丸瓦１）・２群（丸瓦 13）・３群（丸瓦 17）が認められる。このうち第６面･古まで遡るとみられるのは１群であり、３群も第６面・古の最終段階には出現していた可能性がある。東ノ丸跡歴博地区

	糸切り法	コビキ法										全体の傾向
	大型・厚手 吊り組痕	中型・厚手	中（～大）型・薄手		小型・薄手 凹面刺子痕					極少型・薄手 凹面刺子痕		
									凹面内叩き			
	丸瓦 1	丸瓦 17	丸瓦 13	丸瓦 12	丸瓦 20	丸瓦 21	丸瓦 23	丸瓦 24	丸瓦 22	丸瓦 30	丸瓦 26	
第６面	軒丸瓦 1	軒丸瓦 15	軒丸瓦 16 軒丸瓦 42 軒丸瓦 48 軒丸瓦 64 軒丸瓦 151									凹面吊り紐痕 胎土砂質からマーブル状へ 中（～大）型・薄手主体 漆黒色の瓦質焼成
第５面			軒丸瓦 31 軒丸瓦 43 軒丸瓦 61 軒丸瓦 63 軒丸瓦 98 軒丸瓦 131 軒丸瓦 169 軒丸瓦 170				軒丸瓦 65					
第４面			軒丸瓦 152			軒丸瓦 76	軒丸瓦 69					小型・薄手主体へ
第３面					軒丸瓦 74	軒丸瓦 10 軒丸瓦 23 軒丸瓦 51 軒丸瓦 57 軒丸瓦 67 軒丸瓦 85 軒丸瓦 154	軒 丸 瓦 78 軒丸瓦 109	軒丸瓦 80 軒丸瓦 91 軒丸瓦 204				
第２面								軒丸瓦 87 軒丸瓦 168 軒丸瓦 178 軒丸瓦 187 軒丸瓦 192 軒丸瓦 197	軒丸瓦 181 軒丸瓦 190	軒丸瓦 202	軒丸瓦 127	燻し銀色の瓦質焼成
第１面								軒丸瓦 219	軒丸瓦 140 軒丸瓦 206	軒丸瓦 129 軒丸瓦 142 軒丸瓦 251	軒丸瓦 141 軒丸瓦 143 軒丸瓦 218 軒丸瓦 221	凹面内叩き普遍化 極小型普遍化

第 20 表　主要丸瓦出土層位一覧

第４遺構面上層では、丸瓦は１群のみで占められており、少なくとも慶長期までは糸切り法が主体であったことを示している。これは、岡山城跡で指摘されている現象（乗岡 1997）と共通する。

第６面・新で多く認められる２群は、１群よりも全長が短い点もさることながら、薄手であることが重要である。切り離し技法が、糸切り法からコビキ法に転換したことを如実に示す特徴といえよう。また砂粒を多く含む胎土から、粘性に富むがよくこなれていないマーブル状の胎土への変化も注目される。

第５面　２群（丸瓦 12・13）で占められる。

第４面　２群（丸瓦 13）と、まだ少量であるが小型品の４群（丸瓦 21・23）が認められる。

第３面　４群（丸瓦 20・21・23・24）で占められる。

第２面　４群（丸瓦 21・22・24）と５群（丸瓦 30）がみられる。４群の丸瓦22では、内叩きを施すものと施さないものがある。これに対し、５群は１個体での叩き回数も多く、強く叩かれている。５群は４群より小型であるが、湾曲が弱くやや幅広にみえる。これは内叩きの有無と関連しよう。また全体に、焼成が銀化した瓦質（燻し銀色）を呈するものが増加する。

第１面　４群（丸瓦 22・24）・５群（丸瓦 30）・６群（丸瓦 26）がみられる。６群の丸瓦 26 は、４群の丸瓦 22 を縮小させたような形態をもつ。

4. 瓦の生産地と流通形態

4. 1. 文様構成からみた地域色

現・高松市域から多度津町付近における、19 世紀代の軒平瓦（出土瓦・現役瓦）の分布状況をみると、２つの地域区分が可能である。一つは高松市や周辺地域での半裁花菱文系、もう一つは丸亀市と周辺地域での蔦葉文系の分布である（第 24 図）。

両者は宇多津町・坂出市・国分寺町・綾南町・綾歌町など、綾歌郡域を混在地域とするが、中心的な分布域においては極めて排他的な在り方が明瞭である。蔦葉文系軒平瓦については、まだ十分な検討を行っていないが、18 世紀前葉頃を初現として 19 世紀前葉頃に新たな系譜が定着する、という見通しが立てられる。19 世紀代の系譜に属する事例は、高松城跡では当該調査区で僅か１点が確認できるに過ぎない（軒平瓦 191）。

一方、丸亀城下と周辺の現役瓦では、安楽寺（丸亀市垂水町）・多聞寺（宇多津町）などで、当該調査区の 124 に連なる系譜の半裁花菱文系を確認することができる。出土瓦としても、郡家一里屋遺跡Ⅱ区ＳＫ23出土例に同一系譜の半裁花菱系を見出すことが可能である（一里屋 1040）。まだ事例が少ないが、19 世紀前半頃の丸亀と周辺では、蔦葉文系の排他的分布域は非常に狭かった可能性がある。

以上のように、相互の分布状況には若干の相違が指摘できるが、大枠としては高松周辺の半裁花菱文系、丸亀周辺の蔦葉文系という分布状況を認めてよいであろう。

4. 2. 文様系譜と刻印との対応関係

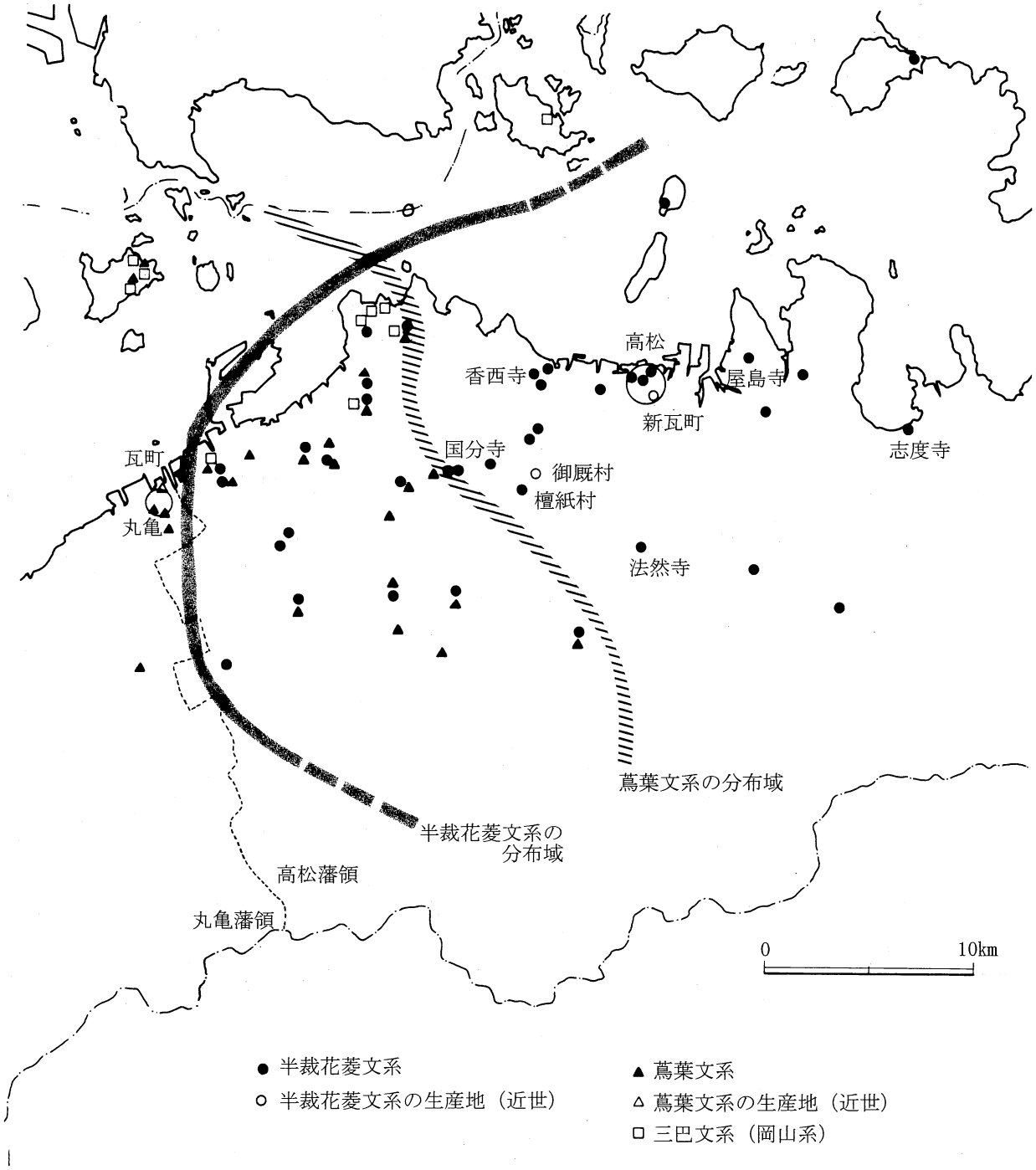
では19世紀代における２系譜を、分布状況に立脚して高松系（半裁花菱文系）・丸亀系（蔦葉文系）と呼称することは妥当であろうか。

半裁花菱文系軒平瓦については、2. 8. で既述したように系譜①が御厩・檀紙村産、系譜④が新瓦町産と推測可能である。佐藤2002で整理したように、系譜①には傳右衛門（「傳」「御厩村／多田／傳右衛門」）・辰蔵（「辰」、獅子口には「香川郡西／檀紙村辰蔵」）刻印・ヘラ書きがみられ、系譜④には水屋（「高杢／水谷」）・玉屋（「高杢／玉屋」）・岡の屋（「新瓦□（町ヵ）／□（岡ヵ）□」）の刻印が認められることから、少なくとも 19 世紀前半～後葉に主体をなす２系譜については、高松系（御厩・檀紙村産、新瓦町産）と呼称するのは妥当である。そして、これらと近縁関係にあり、分布域も概ね重なる他の半裁花菱文系軒平瓦についても、文様系譜上は「高松系」に包括してもよいと考える。ただし生産地・生産者についてはまだ明らかにし得ない。なお、近代以降に出現する牟礼町大町では、半裁花菱文系を採用するが、細かな文様構成は新瓦町とも御厩・檀紙村とも異なる系譜と捉えられる。

蔦葉文系軒平瓦の生産地の追求は、全く今後の課題である。ただし分布域内での近世瓦生産地は、丸亀城下の瓦町が知られる程度であり、大半が丸亀・瓦町産との見通しが得られる。同種の軒平瓦には、「三」刻印を捺した事例が散見されるが、これは現役瓦でのセット関係を考えると、丸亀の三木屋の略号の可能性があろう。

4. 3. 同笵・同文例の分布

西の丸町Ｂ地区以外の調査区も含め、高松城・城下、さらに近郊での同笵・同文例の分布状況を概観する。



第 24 図　讃岐地方における近世瓦の地域色

第６面・古　東ノ丸跡歴博地点で出土した宝珠文系軒平瓦（第22図歴博534）は、東ノ丸造営に先行する生駒期の上級家臣屋敷で汎用された瓦であるが、これと同文異笵例が引田城跡採集瓦で確認できる。引田城は高石垣を伴うことから、生駒氏による修築（新造）が指摘されており（東1997）、おそらく瓦も生駒期の所産であろう。高松城例よりも瓦当面の弯曲が弱く（弧深が浅い）、胎土も砂粒を含まず緻密な近世的なものであることから、高松城跡歴博534→引田城跡採集瓦という先後関係が想定される。歴博534とその同笵品が様相１の土器・陶磁器に共伴することから、引田城跡採集瓦は慶長期ないし慶長期後半の所産と考えられ、元和の一国一城令（元和元年:1615）まで引田城の維持・整備が行われていた可能性を示す。

一方、岡山城出土瓦と同笵ないし同文異笵の事例もかなり認められる。まず同笵例としては、①軒平瓦2・県民ホール96-8・98-33と岡山城中の段68・下の段108、②軒平瓦22と岡山城中の段57、③軒平瓦14・県民ホール99-47と岡山城中の段50・下の段82、④軒平瓦26と岡山城下の段92（同文か）、を挙げることができる（以上は乗岡氏の御厚意により実見・比較）。また実物を照合していないが、⑤歴博539・県民ホール98-40と岡山城下の段110・下津井城出土瓦も同笵の可能性がある。乗岡氏によれば、これらは岡山城では17世紀第１四半期の岡山城３・４式に該当するものであり、高松築城期までは遡らない可能性が高い。また同文異笵としては、⑥県民ホール97-24と岡山城下の段45、⑦県民ホール96-5と安住院Ⅰ類（1601年）、などがある。この他、同笵・同文は確認できないが、⑧宝珠の両側に「十」字形の陽刻細線を伴う県民ホール100-55も岡山城出土瓦に認められ、同一系譜と考えられる。

これらのうち、⑤・⑦・⑧は岡山周辺での生産を想定する方がよく、搬入品と捉えられる。しかし①～④は岡山・高松両地域で複数個体が確認できるため、いずれの地域産か判断は難しい。いずれにしても、岡山と高松で複数の文様系譜にまたがって同笵・同文関係が想定できる点は、地域色が顕在化する18世紀以降には認められず、管見の限り他の四国の城下との間にも確認できない緊密な関係といえる。そうした関係が、関ヶ原合戦の影響を直接被った国替え（岡山）や、藩主の交替（高松）が行われた時期に認められるのは、注目しておく必要があろう。

第６面・新～第４面　前代で指摘できたような、遠隔地との同笵・同文関係はほとんど認められなくなる。僅かに軒平瓦101や歴博963などに岡山に近似した意匠を見出すことができる程度である。第４面で出現する三巴文系軒平瓦に岡山との何らかの影響関係が想定できる可能性もあるが、岡山で定式化した唐草の巻きが高松では反対のものが多く、同笵・同文の範疇では捉えられない。同笵・同文例の分布は、より狭い地域すなわち高松城内・城下・近郊といったレベルで認められるものが大半である。以下、主なものを列挙する。①軒丸瓦151と内堀浚渫土採集例・国分寺、②軒丸瓦38と本丸地久櫓周辺・紺屋町遺跡出土例、③軒平瓦23と内堀浚渫土採集例。②は照合して同笵であることを確認したが、他の２者も同笵の可能性が高い。①は瓦当面に「建宗」と陽刻されており、瓦師名だとすれば特殊な事例ということになろう。本来は国分寺修復瓦として生産されたものが城内・城下にもたらされたのか。②は本丸－外曲輪（武家屋敷）－町屋という、異なる空間で出土が確認できる最古の事例（第６面・新）である。ただし紺屋町遺跡での用例は、瓦葺きの町屋としてはかなり遡る事例ということになるので、18～19世紀での再利用の可能性も考慮する必要があろう。

第３面～第２面　この時期になると、出土瓦にとどまらず現役瓦でも同笵・同文例を確認することができるようになる。前代同様、地域を大きく超えた同笵・同文例は認められない。個々の関係は第21表を参照されたい。城内（東ノ丸）－外曲輪（武家屋敷）での同笵・同文例はかなり高頻度で認められ、町屋（紺屋町遺跡）・農村部（木太中村遺跡）・寺社（法然寺）にも少数ながら事例が認められる。ことに軒平瓦47・49は城内－外曲輪－町屋・農村部で確認できる。これらから想定されるのは、天守や櫓などの特殊建物を除けば、城内－外曲輪－町屋（・一部の農村）で使用瓦の種類に相違点はない、ということである。

なお同笵例ではないが、東ノ丸跡で18世紀前半頃の所謂「江戸式」軒平瓦が出土している（第25図歴博1549）。瓦当上角・下角の狭い面取りや、右側区端の幅広の面取りなど、第３・４面の在地系軒平瓦では認められない技法をもち、胎土も在地産よりもきめ細かでよくこなれていることから、搬入品と考えられる。高松城・城下の出土・現役瓦で「江戸式」の事例は、本例が唯一である。近年、江戸屋敷における国元瓦搬入の事例が知られるようになってきた（内野2000・金子2000）が、江戸→国元という瓦の移動をどのように評価できるかは、事例が少なくまだ明確にし得ない。しかし注目されるのは、この「江戸式」軒平瓦は既にキラコ使用で、唐草を二重の陽刻細線で表現している、という点である。すなわち、文様系譜は異なるものの、第３面に出現する半裁花菱文系軒平瓦120・121と共通する要素があると考えられるのである。少なくとも軒

	西の丸町B地区	時期	本丸周辺	東ノ丸跡 県民ホール地区	東ノ丸跡歴博地区	城下	近郊	岡山城
1	軒平瓦1	第6面・古		101-71(同文)				
2	軒平瓦2	第6面・古		96-8、98-33				中の段68、下の段108
3	軒平瓦8・9	第6面・古	内堀採集(同文)	96-9・12(同文)				
4	軒平瓦10	第6面・古		97-29、98-32、99-44	532・533			
5	軒平瓦14	第6面・古		99-47				中の段50、下の段82
6	軒平瓦22	第6面・古						中の段57
7	軒平瓦26	第6面・古			575(同笵か同文)			下の段92(同笵か同文)
8	軒平瓦28	第6面・新		100-59	160～165・168～172(疵傷＋珠文付加)			
9	軒平瓦43	第6面・新		99-48、100-58、104-124	165～167・1358～1360・1554			
10	軒平瓦21	第6面・新		99-49、104-129(同文)	173(同文)			
11	軒平瓦11	第6面	内堀採集	100-63(同笵)、102-91、103-107(同文？)	794			
12	軒平瓦23	第5面	内堀採集(同笵?)					
13	軒平瓦44	第5面		(104-123)	1606			
14	軒平瓦46	第5面		101-73(同笵？)				
15	軒平瓦13	第3面		96-6(同文)	789・796・1172～1175・1177～1180			
16	軒平瓦39・40・41	第3面	旭門					
17	軒平瓦47	第3面	内堀採集(同笵？)・旭門		174・1607		木太中村遺跡54	
18	軒平瓦49	第3面			604			
19	軒平瓦52	第3面			1052・1364～1366			
20	軒平瓦53	第3面		103-106、104-128				
21	軒平瓦63	第3面			1369(同笵か同文)			
22	軒平瓦66	第3面		101-69(同笵？)	1547			
23	軒平瓦68	第3面			1790			
24	軒平瓦70	第3面	内堀採集(同笵？)					
25	軒平瓦79	第3面			1605			
26	軒平瓦113	第3面			1336・1342			
27	軒平瓦120	第3面	月見櫓・内堀採集		795・1042・1043		法然寺	
28	軒平瓦121	第3面		101-78	856・1041・1057・1058			
29	軒平瓦15	(第3面？)			1176・1185・1186・1479(同文)			
30	軒平瓦88	(第3面)			963・964			
31	軒平瓦104	(第3面)		100-64				
32	軒平瓦111	(第3面)			1355・1356・1357			
33	軒平瓦141	(第3面)			1478			
34	軒平瓦35	第2面		102-95・96、104-126		紺屋町遺跡		
35	軒平瓦38	第1・2面	旭門		1051・1060			
36	軒平瓦94	(第2面)			1039			
37	軒平瓦122	(第2面)	内堀採集		792・1345～1351・1367			
38	軒平瓦36	(第2面)	内堀採集					
39	軒平瓦37	第1面				紺屋町遺跡(同文)		
40	軒平瓦86	第1面		103-103、104-119	798			
41	軒平瓦132	(第1面)					香西寺・志度寺・国分寺(同笵)、屋島寺・滝宮天満宮(同文)	
42	軒平瓦134	(第1面)	旭門					
43	軒平瓦137	(第1面)	旭門	102-99				
44	軒平瓦145	第1面	旭門(同文？)					
45	軒平瓦146	第1面	内堀採集	102-97				
46	軒平瓦156	(第1面)		101-85				
47	軒平瓦189	第1面			1555	法泉寺・慈雲院	男木・豊玉姫神社	

第21表　西の丸町Ｂ地区出土瓦を中心とした同笵・同文関係

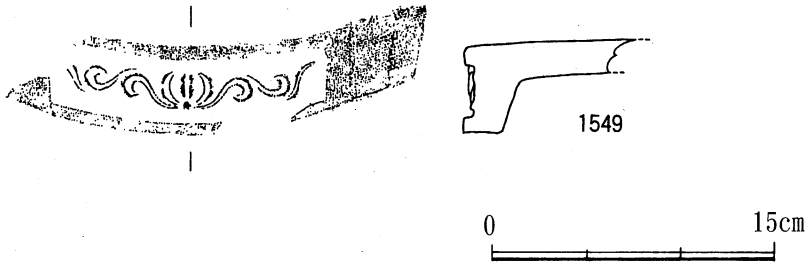
平瓦120の二重陽刻線による唐草表現は、第6～4面の軒平瓦では見出すことは困難であり、全く新しい意匠といえる。同時に、キラコ使用を他系譜に先駆けるという技術革新も伴うことから、半裁花菱文系軒平瓦120の出現には、単に在地工人の自律的な動向にとどまらない、他地域からの影響関係を想定する方が妥当な見方であろう。その意味においても、僅か1点ではあるが高松城での「江戸式」軒平瓦出土の意義を追求していくことが肝要である。

第1面　個々の関係は第21表を参照されたい。複数個体が城内－外曲輪－町屋・寺社・郊外で確認でき、使用場所に拘わらない瓦の共通性が、より一層明確になる。そのような共通性に立脚しつつも、生産地毎の分布には微妙な偏りが看取できるのが、当該期の特徴である。

御厩・檀紙村産軒平瓦は、当該調査区軒平瓦132・133や東ノ丸跡県民ホール101-81～83が該当し、東ノ丸旭門での現役瓦にも見出すことができる。つまり城内－外曲輪で確認できるが、城下の出土瓦や現役瓦としてはその存在は極めて希薄である。一方で郊外の宿場で、御厩・檀紙村に隣接する鬼無（高松市鬼無町）では、軒平瓦132の同文例が一定量確認可能である。また国分寺・香西寺・滝宮天満宮・屋島寺・志度寺など、高松松平氏と関わりをもつ有力寺社には、軒平瓦132の同笵ないし同文品が多量に葺かれている。したがって現在までの知見としては、御厩・檀紙村産瓦は城下近郊を主体としつつ、有力寺社への供給（大半が既存建物への葺き替え）にもかなりの比重を置いていたと推測される。

新瓦町産軒平瓦は、当該調査区以外に東ノ丸跡出土瓦や東ノ丸旭門でもかなり見出すことが可能であり、城下の寺社（法泉寺など）や近郊の寺社（鬼無薬師寺門前の地蔵堂・男木豊玉姫神社）でも存在する。城内－外曲輪－城下－近郊での分布が確認できるのだが、大半が明治期の所産である。したがって、御厩・檀紙村産瓦よりもやや遅れた時期を中心に①城下（高松市街）、②近郊の小規模寺社を主体として販路を確保したと推測される。

この他、明治期まで下る可能性もあるが、搬入とみられる事例に橘花文を中心飾りにする関西系（「大坂式」）の軒平瓦がある（県民ホール103-112～114）。関西系軒平瓦の生産は、丸亀産瓦で確認されており（乗岡1996）、近代には粟島（三豊郡詫間町）でも生産が確認できる。また高松市域の南側周辺部（香南町・綾上町）の現役瓦でも橘花文系、あるいは半裁花菱文と橘花文系の折衷意匠が確認できる。このため、遅くとも近代には高松の周辺地域では、関西系意匠の需要があったとみて間違いないが、新瓦町産瓦ならびに御厩・檀紙村産瓦で橘花文系を採用した確実な事例は確認できていない。



第25図　高松城跡出土の「江戸式」瓦

第５節　中世礫敷き遺構と野原郷

第３章第８節で報告したように、当該調査区の第７面から中世前期の礫敷き遺構（SXb16）が検出された。また伴出した中世土器・陶磁器には、高松平野での一般的事例とは異質な組成が看取できた。近年、周辺でも中世遺構が検出されるようになり、高松築城に先だつ野原郷の状況を考古学的に窺い知ることのできる材料が出揃い始めてきた。その中でもSXb16は、西の丸町Ｃ地区検出の同様の遺構とともに、当該地域の中世遺跡を特徴付ける内容をもつといえよう。そこでまず、以下では①中世の類例遺構との比較、②出土遺物組成の地域における把握、の２点を検討したい。次いで周辺での検出遺構・遺物との関連を検討して、中世前期を中心とした野原郷の考古学的知見を整理しておきたい。

1. 中世礫敷き遺構の構造

SXb16の構造的な特徴を再度まとめると、①傾斜の緩い自然地形上に礫敷きを施しており、大規模な人為的地形改変の形跡が見出せないこと。②斜面に貼り付けるように安山岩板石を並べており、土層との対応関係から最低２面の重複が認められること。③礫敷きが途切れた水域側に、杭と横木を組み合わせて南側に傾斜するスロープ状の施設を作ること。以上３点である。

①・②の特徴は、汀線を掘削して垂直方向に石を積み上げる形態の護岸とは、明らかに異なる要素である。また、扁平な板石を貼り付けて、あたかも平坦面を作り出すように並べることから、単なる捨て石とも異なる。ところで、中世段階に垂直な石積みによる護岸が技術的に不可能であったとは考え難い。また、東ノ丸跡県民ホール地区でも中世の海岸線は検出されたが、そこではSXb16のような礫敷き遺構は認められなかった。つまり、礫敷きは付近の海岸線全域に対して施されたのではなく、かなり限定的に行われたとみられるのである。これらから、汀線の護岸（汀線の崩壊・流失の防止）以外の機能に規制されて、SXb16の構造が採用された可能性が指摘できよう。以下、他地域の若干の事例と比較する。

海岸ないしは直近の後背湿地汀線に礫敷きを施した中世遺構としては、福岡市博多遺跡群第89次調査区第２期遺構護岸跡（16世紀：小林1998）、佐賀県唐津市徳蔵谷遺跡Ｄ区石列遺構と杭列（13世紀前半～15世紀前半：田島1994）、青森県市浦村十三湊遺跡121次調査区（15世紀前半：鈴木・工藤2000・鈴木2001）などが知られている。

博多遺跡群検出の護岸跡は、汀線沿いに大振りな割石を並べ基底部とし、その上に礫を「砂丘面に貼り付ける様にして」いた。報文や写真・断面図より判断すると、汀線そのものの形状を大きく変更するような大がかりな地形改変は認められないようであり、SXb16の特徴①と一致する。一方、基底部に大振りな石材を用いる点はSXb16とは異なる。しかし、垂直方向に石材を「積み上げる」のではなく、地形面に「貼り付ける」ように並べる点では共通する。

徳蔵谷遺跡Ｄ区石列は、唐津湾に向かって傾斜する丘陵先端斜面に、礫を「葺石状に」並べている。報文の写真をみると、石列設置箇所は緩傾斜であり、礫を「貼り付ける」ような状態で検出されている部分もある。これは、SXb16の特徴②と共通する。一方、前面に護岸の杭列が認められることや、「張り出し」部では石列背後の整地が想定されていることなどは、高松城跡とは異なる要素である。しかし、そのような人為的な整地にもかかわらず、汀線部には「石を積む」護岸という工法が採られていないことに注目すべきであろう。つまり、整地の有無が汀線部の施設の構造を規定するのではなく、むしろ逆に礫を「貼り付ける」という工法自体は共通しているのである。その意味でもSXb16の特徴②との共通性により注目すべきであろう。

十三湊遺跡では、前潟に面した緩斜面上に礫を敷き詰めた遺構が検出された。SXb16の特徴①・②と共通していよう。ただし礫の敷き詰め方は、SXb16ほど密ではなく、やや散漫な状況である。また部分的ではあるが、汀線付近に丸太材による護岸（砂留め）が認められる点は、SXb16とは異なる。しかし、想定されているような垂直方向に高く積まれた護岸施設かどうかは微妙なところと考える。この他、水域部分では桟橋状の杭列も検出されている。

以上のように事例は少ないが、３遺跡との比較によって明らかにできたのは、特徴②がかなり普遍性をもって認められるという点である。徳蔵谷・十三湊の２遺跡で礫敷き前面に杭列もしくは丸太材による護岸が認められたことを踏まえると、やはり礫敷きの主な機能を汀線の護岸以外に考える必要があろう。

これに関連して注目されるのが、博多遺跡群の151号石敷遺構、十三湊遺跡の杭列である。これらは構造・材質に差異が認められるものの、舟底を安定させるためのスロープ状の施設（博多遺跡群151石敷遺構）や、桟橋（十三湊遺跡）と想定されている。徳蔵谷遺跡の杭列も、石列との位置関係から全てが護岸と考えるよりも、十三湊遺跡同様の施設とみることも可能であろう。つまり汀線の礫敷き遺構は、何らかのかたちで舟を接岸ないし係留できる施設とセットをなすこと

が想定できるのである。

一方SXb16でも、特徴③が注目できる。これは、緩やかに南へ傾斜するように横木が並べられており、その北側には第7面落ち込み（あるいは礫敷きも）が張り出すような形態が想定できる。つまり材質こそ異なるが、博多遺跡群151号石敷遺構と護岸跡との関係と同様に捉えることが可能であり、SXb16木組は船着き場ないし小型の船蔵的な施設と捉えることができよう。

以上を踏まえて礫敷きの機能について考えると、いずれの事例でも礫敷きによって汀線に平坦面が作り出されていることに注意する必要があるだろう。十三湊では「浜地に造られた港の荷揚場の足場を固めることを目的として造られた」と捉えられている。確かに舟荷の積み降ろし作業を自然の砂浜の上で行うのは重労働であり、作業面を硬く整える方が効率的であろう。その意味では、近世以降に事例がみられる雁木と同様な機能をもつといえるが、雁木が港湾内の深い水深を前提とした階段状の構造を採ることは、上記した礫敷き遺構とは異なる特徴である。しかしこれは時期的な問題以上に、港湾施設の立地にも関連するものと思われる。博多・唐津・十三湊・高松のいずれもが、砂州の発達した遠浅の海浜部であり、港湾内の大規模浚渫を行わない限り、砂州汀線の形状に規定されるため、既述してきたような形態をとらざるを得ないと考えられる（『高松城下図屏風』の船蔵や、『安政三年奉納宇夫階神社絵馬』に描かれた船着き場の形状を参照）。讃岐地方において、このような自然条件を克服した港造りは、19世紀前半の新湊町（高松）・丸亀港・多度津港の造営・整備によってようやく達成されるのである。

2. 出土遺物の特徴

2. 1. 組成の特徴

SXb16出土遺物は、12世紀前半（中世Ⅰ－3期）を主体としながら前後に及ぶ時期幅をもつものである。その組成をみると、以下の特徴が指摘できる。①供膳具が全器種の8割を占めること、②在地土器椀に非西村（十瓶山窯）産製品が目立つこと、③供膳具に占める瓦器の比率が6割弱にも及ぶこと、④皿に畿内系土師器皿が一定量認められること、⑤非常に僅少な存在だが東海系無釉陶器碗（山茶碗）が認められること、⑥畿内系遺物の定量以上の存在に反して輸入磁器は1％前後にとどまること、などである。

中世Ⅰ－3期のまとまった比較資料に乏しいため、地域における当該資料の位置付けは今後の課題とせざるを得ない。取り敢えず11～13世紀の幅の中で比較を行い、現段階での見通しを提示する。

特徴①は、既に13世紀代の資料をもとに指摘した（佐藤2000ａ）が、通常の比率が5～6割にとどまるとみられるため、やや高い比率といえる。ただし、空港跡地遺跡Ｆ地区区画1中心部における9割には及ばない。空港跡地での供膳具の圧倒的多数の主要因は、土師質土器杯・小皿が多いことに求められ、自給的な土器生産体制に立脚した「使い捨て」が想定された。SXb16での特徴①では、これとは明らかに異なり、瓦器が多いという特徴③を主要因としている。数量的にみるならば、煮炊具の土師器甕は189個にも達しており、決して僅少な存在とはいえないであろう。SXb16における供膳具優位は、畿内系遺物の顕在化傾向という現象に起因するのであり、空港跡地区画1とは異なる背景が想定される。

特徴②は、生産地での動向（佐藤2000ｂ）を考慮すると、12世紀後半～13世紀代（中世Ⅱ期）では十瓶山窯産須恵器椀の存在に置き換えられる問題である。高松平野の中世Ⅱ期では、十瓶山窯産須恵器椀が在地産土器椀の主体であることは明確である。したがってSXb16での特徴は、在地産土器椀が十瓶山窯系製品によって占められる以前の状況を示すといえる。非西村系の土師質土器椀は、外面の回転ヘラ磨き調整を採用していないなど、製作技術においても明らかに十瓶山窯とは異系統である。そしてこのことが一般的な集落以上に意味をもつと思われるのは、港湾施設と考えられるSXb16においては、十瓶山窯系の椀は主要な「積み出し」の対象物ではなかったと目される点においてである。

特徴③は、讃岐地方においては極めて異例な現象といえる。SXb16に後続する礫敷き遺構であるＣ地区SX1100でも53％前後に達しており、瓦器の高比率傾向は、高松城跡周辺では11世紀後葉から13世紀中葉に至るまで継続していたと捉えられる。一方、空港跡地Ｆ地区区画1では、供膳具に占める瓦器椀の比率は0.5～2.0％前後であった。より海浜部に近い六条・上所遺跡SR02や、小山・南谷遺跡SD701（中世のみ）でも5.5～16％に達するに過ぎず、松並・中所遺跡Ⅲ区Ｂ・Ｃ SD01の24.4％がやや多い。13世紀代は、全県的にみても十瓶山窯産須恵器（西村型土器）椀の出土量が増加するため、空港跡地や六条・上所の比率はその点を考慮する必要があるが、いずれにしても讃岐地域における通常の瓦器／供膳具の比率としては、25％以下が標準的な数値と考えられる。

瓦器は大半が和泉型であるが、楠葉型瓦器椀も19点認められ、讃岐の既知の資料としてはまとまった内容といえる。ただし楠葉型瓦器椀が供膳具に占める比率は1％程度であり、小山・南谷遺跡や先行する10～

11世紀代の楠葉型黒色土器椀の出土例を勘案すると、出現頻度はむしろ標準的な在り方を示すと捉えた方がよいであろう。したがって特徴③の評価としては、「決して珍しくはないが、1遺跡の組成で主体を占めることはまずない」和泉型瓦器が、継続的に圧倒的多数を占めていることに重点を置くべきである。また時期的な問題を加味すると、讃岐における和泉型瓦器椀の本格的な流入期よりも若干先行することが注目される。

特徴④は、回転台（ロクロ）成形が普遍的な讃岐地方では、極めて希有な現象である。しかも後続するC地区SX1100では畿内系土師器皿がないことから、高松城跡付近でも12世紀前半（中世Ⅱ－1期）に限定的に認められることが指摘できる。なお、出土した畿内系土師器皿は、京都ではなく周辺地域での系譜と考えられる、との教示を複数の畿内の研究者から得た。

特徴⑤は、西打遺跡・下川津遺跡での出土を考慮すると、楠葉型瓦器椀と同様な評価が行える可能性がある。まだ類例が少ないため、現段階での評価としては少数でも存在することを重視すべきなのか、出土量を問題にすべきなのか、明確でない。

特徴⑥は、現在までに出土量のカウントが行われた、全ての中世前期遺跡で共通して認められる現象である。

2. 2. 遺跡間の偏差

高松平野における中世遺跡間の土器組成の偏差については、西の丸町C地区の集計も踏まえ既述した（佐藤2000ａ）。その後の成果や知見も踏まえ、上記特徴③・⑥を中心として高松平野を取り巻く流通関係を考える。

既に述べたように、供膳器種に占める瓦器、ことに和泉型瓦器椀の比率は、高松城跡西の丸町B・C地区－松並・中所遺跡－小山・南谷遺跡－六条・上所遺跡－空港跡地遺跡の順であり、概ね海浜部からの距離に比例するかたちで平野奥部ほど少ない、という傾向が指摘できる。ただしまだカウントを行っていないが、空港跡地遺跡に隣接する日暮・松林遺跡では和泉型瓦器椀の存在がかなり目立つようであり、物理的距離がそのまま和泉型瓦器の搬入量に反映されない場合もあると考えられる。より細かな年代幅と遺跡単位でのデータの蓄積が不可欠ではあるが、取り敢えずは和泉型瓦器椀の搬入形態は、荷揚げ地（港湾遺跡）を主要な中継地として、そこから市庭や振り売り商人へと再分配されていく、という想定されがちなイメージと矛盾はしない。また西の丸町B地区での出土状況が、荷揚げ場としての礫敷きに混入するかたちで出土したことは、付近での頻繁な大量消費にとどまらず、破損品などの選別・廃棄行為も反映しているのではなかろうか。その意味で高松城跡西の丸町地区は、和泉型瓦器椀に関しては「二次的集積地」（伊藤1999）として位置付けることが可能かもしれない。

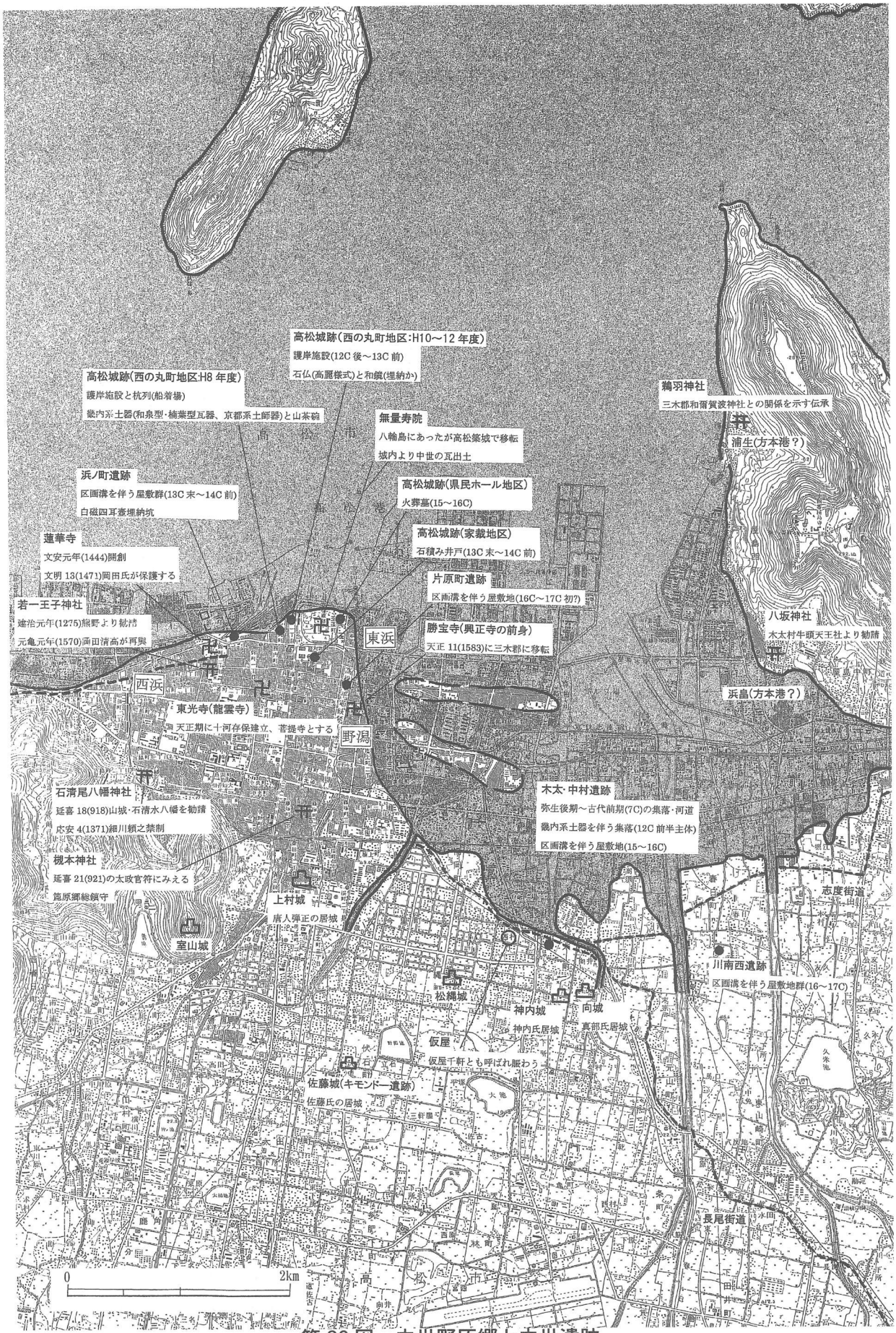
一方、輸入磁器の比率に関しては、高松城跡西の丸町地区が地域内の他の遺跡よりも卓越するという状況を見出せない。少なくとも、高松城跡西の丸町地区が他遺跡よりも和泉型瓦器椀を3～10倍も保有しているような状況を、輸入磁器に認めることは全くできず、より均質的な在り方を指摘できる。その背景には、讃岐に搬入された輸入磁器自体が僅少であるという絶対量の問題もあるが、高松城跡付近が「二次的集積地」の機能を全く担っていないということとも関わりがあると思われる。またこのことは同時に、輸入磁器が和泉型瓦器椀とはセットで動いていない可能性を示す。

これに対して、山間部の窯場である西村遺跡で輸入磁器の出土量（破片数）が格段に多い、という現象が注目される。なぜなら、十瓶山窯製品は畿内周辺の東部瀬戸内地域にも一定量搬出されていることは確実だが、伊予・豊前・筑前・肥前への流通も確実に認められるからである（吉岡1985・伊沢1987・片桐1992）。流通の担い手が生産者そのものとみるよりも、綾川で直結した松山津（国府津）に本拠を置く梶取などの運輸業者を介したと捉える方が妥当であるとすれば、彼らの流通活動の一環として輸入磁器が「大集荷地」である博多から直接もたらされたとみるのも、あながちあり得ないことではないだろう。その場合、松山津が「二次的集積地」となる可能性や、十瓶山窯製品とセットになった在地流通の可能性も考えられるが、ここでは高松平野での瓦器椀とは異質な動きを確認するのにとどめる。

3. 旧地形の想定と遺跡の消長（第26図）

巨視的には最も瀬戸内海側（北側）に突出したようにみえる高松城中心部（本丸から外曲輪に至る地域）が、実は中世前期（11～14世紀前半）にはかなり安定した土地条件にあったことが窺える。近世の干拓範囲（森下1992）や、地理学的所見（高橋1992）を参考に、雑駁ながら中世前期のイメージを示したのが第26図である。高松城下の基盤となった中世「野原郷」は、石清尾山塊から北西に派生した沖積地であり、SXb16などの船着き・荷揚げ場関連遺構は、その先端部近くに位置することになる。

やや子細に、中世礫敷き遺構の位置関係をみてみる。礫敷き遺構の基盤となった第7面の落ち込みは、東西方向に延びており、砂州状の形態が想定できる。



第 26 図　中世野原郷と中世遺跡